

---

# とある六位の無限重力&lt;ブラックホール&gt;

LARK

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある六位の無限重力>ブラックホール<

### 【Nコード】

N6696Y

### 【作者名】

LARK

### 【あらすじ】

学園都市LEVEL5序列第三位、御坂美琴には、兄がいる。名は御坂美影。彼もLEVEL5で序列は第六位。しかも彼は学園都市最強の唯一の「親友」である。

## 主人公設定（前書き）

初小説です

## 主人公設定

名前 御坂美影

身長 180cm

体重 60kg（操作可能）

能力 LEVEL5 無限重力＞ブラックホール＜ 序列六位  
書庫に載っている内容

- ・重力子による金属の爆発
- ・物体にかかる重力の操作
- ・<sup>バンク</sup>書庫に載っていない内容
- ・重力探知

美影がもつとも頻繁に使う能力。最大半径5km内を一度に視ることが可能。範囲が狭ければ原子サイズで探知できる。

・ブラックホール

ブラックホールにより、あらゆるものが吸い込める。威力が強すぎるので使うときは必ず威力を抑える。

・ワームホール

強力な重力により空間を捻じ曲げて穴を開け、それを通り移動できる。その気になれば地球の裏側に出口を作れる。

・????

## 備考

かなり顔は整っていて、ほんの少し美琴に似ている  
運動神経抜群

ハッキングはウィザード級

料理はプロ級

アクセラレータ

一方通行とは親友

かなりポーカークフェイスで動揺が顔に見られることはほとんどない  
(喜びなどは表情に出る)

自分が有名になること、目立つことを嫌う

イメージC V 鈴木健一 『bYゲイジさんの案』

## 主人公設定（後書き）

これは長い間、書こうか迷っていた小説です  
精一杯がんばります

## Prologue

### 学園都市

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。周囲が高さ5メートル・厚さ3メートルの壁で囲まれている上に、街全体を三機の監視衛星が常に監視している。

その名の通り学生が多く生活していて、その割合は全体の8割を占める。

この町では世界中探しても他にはないものが存在している。

それは、「超能力」。

学生たちの脳を研究し、一人につきひとつの能力を発現させている。

その種類は千差万別。多くの者に発現する能力もあれば、オンリーワンな能力もある。また、研究者がまったく理解できていないような能力も星の数<sup>レベル</sup>の度ある。

能力には階級<sup>レベル</sup>があり、0から5まで存在している。しかし、今だ該当するものはいないがLEVEL6（無敵）というものもあるといわれている。

季節は冬。第7学区のとあるファミレスにとある二人の少年がいた。

「お前よくそれで生きていられるな、アクセラレータ 一方通行」

アクセラレータ 片方の少年は向かいに座っている少年の光景を見て思う。

一方通行と呼ばれた少年は白い髪、白い肌、おまけにわずかに赤い眼をしていていわゆるアルビノの体質であり、また腕は年頃の少年とは思えないほど細い。

その体形から是不健康だと思われるが彼の目の前には大きなステーキとコーヒーの二つしかなく、健康を気にしているとはまったく思われない。

「うるせエなア、美影。好きなものを食って何が悪インだよ。お前なんて何にも食ってねエじゃねエか。」

アクセラレータ 一方通行が言うように美影と呼ばれた少年の前にはコーヒーしかない。

「俺はもう家で食べたんだよ。お前が『腹減ったから飯行こうぜ』なんて突然電話するから俺は仕方なくここにいるんだから。」

美影はいやそうな顔で言う。

彼の言うとおり、一方通行が研究所での用事が終わり、時間的にも気分的にも空腹であったため強引に呼び出したのだ。

アクセラレータ 一方通行の見た目以外、普通の少年たちのように見えるが実際は違う。

彼らはこの学園都市が誇るLEVEL5であり、研究者たちにとってのどこから手が出るほどの逸材である。



しかも一方通行はその中でも序列一位。つまり、この町の頂点である。

対する美影、フルネームは『御坂美影』で序列は六位。一方通行と比べるとその肩書は見劣りするがLEVEL5というものの自体7人しかいないので十分凄いと言える。

今この場にLEVEL5が二人もいるとわかったらいったい何人が驚くだろうか。そんなことを美影は思う。

「つつかお前が持ってきたその封筒は何なんだよ。」

一方通行は美影の脇においてある封筒について不思議に思いながらコーヒーが入ったカップを口につける。

「ああ、これ？ お前の入学申込書。ついでに持ってきた。」

さらっと言ったその言葉に驚き一方通行はコーヒーをふきだす。

「ゲホッ、ゲホッ、・・・はア？、なんの冗談ですかア！？この俺に学校に行けっていうのかてめえは。」

一方通行は息を整え言う。

そもそも一方通行にとつて学校とはあつてないものである。小学校には行つてなくて彼だけのためにある特別教室がかわりにあった。現在15歳であるが中学校にも行っていない。

「まあいいじゃん行っても。高校ぐらい行こうぜ。俺も行きたいし。」

実は美影も現在中学には行っていない。毎日能力の研究や、一方通

行のわがままを聞いたり、『仕事』をしたりしている。

「どこの学校なんだよ。」

一方通行はとりあえず詳細を聞く。

「18学区の長点上機学園」

「へエ、あのエリート高か。」

一方通行が言うとおり長点上機学園というのは能力開発において学園都市ナンバーワンを誇る高校であり、学園都市に所属する全学校が合同で行う超大規模な体育祭である大覇星祭において今年の優勝校である。

「興味持った？」

「ぜんぜん」

美影の質問にアクセラレータは無愛想に答える。

「いいじゃん高校生活。しかも来年は第二位と第七位も入学するらしいし。」

「へエ、そいつはおもしろそうだな。」

ようやくわづかながら興味を持つ一方通行。  
そんな彼に美影は最後の一手をかける。

「それにさ、俺が入学したらLEVEL5で学校行ってないのおま

えだけになるし。おまえだけ寂しくひとり家に引きこもっていいのか？」

「てめエ、ケンカ売ってんのか？」

「お前とケンカなんて二度としたくないよ。」

一方通行のことをばを美影は軽く受け流す。それに対しなんの反応もないところを見ると一方通行も本気ではないようだ。

「で、どうなの？」

「………まアいいぜ行っても。第二位つてのもおもしろそうだからなア。」

迷いながらも承諾する。美影はずっと脇においてあった資料の入った封筒を手渡す。

一方通行はそれをやぶり、中身を取り出し一枚一枚ペラペラとめくっていく。適当に眺めているようだが、驚くことに彼は一字一句逃さずすべて頭の中に入れていた。

「その一番下の紙、今月中に郵便局に書いてだしておけよ。」

一方通行が持つ紙の束を指差しながら言う。

一番下の紙だけは空欄が多くなっているようだ。

「へエへエ、わかりました。」

念を押すように言う美影にわざとらしく返事をする。  
だが、

(こづいつのもわるくねエか)

と内心面白そうに思っていた。

この物語は彼らの入学から始まる。

## **P r o l o g u e (後書き)**

評価をお願いします

幕間 - 巻き込まれのち解決 -

(あーあ、めんどくせえ・・・)

一方通行<sup>アクセラレータ</sup>への高校生活の勧誘があつた翌日、御坂美影<sup>みさかみかげ</sup>は歩きながら思う。彼の手には昨日一方通行に渡したものと同じ入学申込書がある。

なぜかというところ一方通行は昨日ファミレスで入学についての資料を読んだ後、各テーブルに一本ずつあるアンケート用のボールペンを使い願書を書き、『めんどくせえから出しとけ。』と強引に押し付けられたからである。

そのため、冷たい風が吹くなか、美影はグレーのロングコートと黒のマフラーを着ながら郵便局を目指しているのであつた。

(まあ、いいか。正直書いてくれるとは思わなかつたし。)

実は昨日の一方通行への勧誘は半ば駄目元のものであつた。彼のことをよく知っているぶん、学校には興味を示さず今までどおりの生活が続けるものだと思っていた。

そんなことを考えながら歩き続けること約15分、左手に郵便局が見えてきた。

(あれ？ 閉まっている。)

郵便局は定休日であるかのようにシャッターが下りていている。今日は休みではないことを知っていた美影は不思議に思う。

シャッターとにらめっこをしていると、彼の横にとある少女が突然現れた。

美影が郵便局にたどり着く少し前、第7学区の街角にとある二人の風紀委員ジャッジメントの姿があった。

「何か気になったことや聞きたいことはある？」

端末に巡回報告を打ち込みながら、眼鏡をかけた、二人のうち先輩である、固法美偉このりみいは後輩に問いかける。

「……では、少しお聞きしたいのですが」

「なに？」

固法に問い掛けられた後輩、白井黒子しろいこくろこは口を開く。

「風紀委員になって一年にもなりますのに、何でわたくしに任されるのは裏方や雑用、先輩同伴のパトロールばかりなんですの？」

日々抱いていた納得できない疑問を吐露した。

教職員で構成される警備員アンチスキルと呼ばれる組織と共に学園都市の治安

を守る機関である風紀委員。<sup>ジャッジメント</sup>白井はその一員となり、風紀委員第一七七支部に配属されたのはもう一年も前の話。

裏方や雑用も重要な仕事ではあることは彼女も十分わかっている。しかし、学園都市の平和を守るために風紀委員を志願した彼女にとって、仕事があればかりと言うのは不満以外の何ものでもなかった。

「成績優秀な自分が半人前扱いされるのが不満？」

固法は微笑みながらそう問い掛ける。

「そ、そういう訳ではありませんけど……やはり、わたくしが小学生だからかと……」

拗ねるように答えながら、顔を伏せる。固法はその伏せられた頭に優しく左手を置く。

「年齢だけが問題じゃないわ。あなたの場合、なまじポテンシャルが高い分、全てを一人で解決しようとするきらいがあるからね」

優しく固法は言葉を続ける。

「もう少し、周りの人間を頼るようにならないと危なっかしいのよ」

とは言いが、やはり今一納得がいかないらしい黒子はむう、と小さく唸る。

そんな少々意地っ張りな後輩の頭を固法は左手でよしよしと撫でた。

「そんな顔しないの。たくさん頑張ったご褒美に何か甘いもの奢ってあげる。お金下ろしてくるから少し待っていてね。」



そういつて、固法は郵便局へ入っていく。  
やっぱり子ども扱いされている、と黒子は不服を抱きつつ先輩の  
後を追った。

ATMの列に並ぶ固法を見ていた黒子は、他の利用者の邪魔にな  
らないように少し離れた位置で固法を待つことにした。

しかし、待っている間に特にすることも無いため、黒子は所在無  
げに局内を見回す。

時間的になのか郵便局の利用者は少ない。

「あ、白井さん！」

郵便局内を見回していた白井へ不意に聞き覚えのある声がかけら  
れた。

「偶然ですねー」

「初春<sup>うつはる</sup>？ 何故あなたが第七学区に？」

振り返った黒子寄ってきたのは、花の髪飾りが特徴の風紀委員志  
願生<sup>ういはるかざり</sup>、初春飾利であった。

少し前に行われた風紀委員志願生向けの秋季訓練。そこで白井と  
風紀委員志願生である初春は知り合った。

だが、とくに連絡をとっていないので、今日この場で遭遇したの  
は偶然だ。

「もうすぐ中学生だし、学校や寮の下見に来たんです」

「……中学生？ どなたがですか？」

初春の言葉を聞き、黒子は思わず首を傾げる。

「へ？ 私に決まってるじゃないですかー」

やだなー、と笑いながら初春は答える。

「へ、へー」

（……お、同じ年でしたの？）

自分よりも幼く見えていたのか、てっきり初春が自身より二、三歳年下とばかり思っていたようだ。

その心情をきずかれないように彼女は声を裏返させながらも相槌を打つ。

しかも彼女たちの年齢的に年のわずかな違いは見た目に現れにくい。

「ところで白井さんはもう何処の中学に行くか決まったんですか？」

それからは話題が変わった。

「え、ええ、常盤台中学というところに」

今だ初春が自分と同じ年であるということに動揺しつつ、自分が進む学校を言う。

「ええ！！」

その言葉に初春は過剰に反応し白井に尊敬のまなざしを向ける。  
その変わりぶりに白井は若干たじろぐ。

初春は常盤台中学に対して羨望的であったようだ。しかし白井は初春の憧憬とは180度逆のことを毒舌で言い、初春の幻想を殺しつつあった。

「そういえば、あなたは郵便局に何を……」

そう言いながら、お金を下ろしている固法のが気になる、視線を向けた白井は気がついた。

「どうしました？」

「ちょっと失礼」

白井の様子に気づき、初春が問い掛けるが、黒子は一言断り、目つきが変わっている先輩に近づく。

「どうなさいました？」

小声で固法に問いかける。それに対し固法は、静かに、と指を口に当てながら同じく小さく指で指しながら、

「あの男、さつきから職員の位置と視線ばかり気にしてる」

と、白井を郵便局の受付の近くに立つ肩にスポーツバッグをかけ、ニット帽をかぶった男に注意を引かせる。

その男は確かに挙動不審で周りをよく観察している。

「他人の持ち物を無断で透視するのは気が引けるけど」

と、言い、固法はその男を凝視する。

クレアボーアンス

彼女の能力透視能力である。これを使えば、鞆の中身などを相手に気づかれず見ることができる。この能力は風紀委員をやる上で便利な能力と言える。

（妙な物は持っていないようね……）

スポーツバッグ、ズボンのポケットなど次々と男を透視していき、最後に上着のポケットを透視する。

すると上着の右ポケットにはあってはならないものがあつた。

「！！……右ポケットに拳銃！」

「強盗ですよ！？」

固法の言葉に小さく驚きの声を上げる黒子。

ATMがある郵便局に拳銃を持つてくるなんてそれ以外に考えられない。

「局員に伝えてくるわ。あなたは万が一に備え、利用客の誘導準備を……」

「逮捕しませんの！？」

「馬鹿なこと考えちゃ駄目よ。犯人の確保は警備員に任せなさい」

固法は厳しい声で制すると、局員に知らせるためにカウンターへと向かう。

だが、白井は納得していなかった。

（そんな消極的な……！）

黒子が思ったその時、パンツ！という乾いた銃声が局内に響き渡った。

その音で郵便局内の人全員が黙る。その状況が理解できていないものもちらほらみられる。

「お、おかしな真似すんなよ。お、おお客もあまり騒がないでくれよな。」

声を震わせ、忠告する強盗犯。拳銃に慣れていないのか、強盗することに極度に緊張しているのかその手はいやな汗で濡れている。

（くそお・先に動かれた。）

固法はもう少し早く気がつき行動していれば、と後悔するがもう遅い。

次の対処法を考えている中、先ほど忠告した後輩が誰よりも早く行動した。

白井の独断専行により、郵便局内はさんざんな状況になってしまった。

先輩である固法は白井を庇い、怪我をして倒れてしまっている。

しかも初春がもう一人の強盗犯により人質となってしまった。

（わたくしのせいですの……なんて様ですの。……これでは半人前以下ではありませんか……。）

白井は深く、深く後悔していた。自分が作り出してしまった、その悲劇に。

固法の忠告にしたがっていたら結果は必ず変わっていたはずだ。

白井が予期していなかったもう一人の強盗犯はあきれた表情をしている。

「あのバカみてえにおれもやれると思ったのかよ。」

白井によつて倒された共犯をみてはき捨てるように言う。どうやら共に犯罪をしていたがそれほど協調性はなかったようだ。

強盗犯は白井の足を踏み行動を封じる。白井はその痛みに苦しむ。初春はそんな白井を見ていられなくなり、何とかしようとするが強盗犯に片手でさえぎれる。初春は強盗犯に叫ぶが聞いてもらえない。

そのとき、初春は足に圧迫感を感じる。見てみると白井が足をつかんでいた。

「……必ず、助けて見せますの……。」

白井は力を振り絞り、自分の能力である空間移動テレポートを使う。

(・・・突然現れたってことは空間移動か？)

テレポート

美影は初春を見ながら思う。その少女の様子からから郵便局内ではかなりの騒動になっていると窺える。

「・・・え？・・・外？・・・はっ白井さん！中に居るんですか！  
？ どうして私だけ！」

初春は自分の状況を理解し、ガシャガシャとシャッターとたたく。だが外にいる自分は何もできない。

美影は目の前の少女からだいたいの出来事を予想する。そして重力操作によりなかを視て、状況を把握する。

「お、お願いします！助けてください！中には強盗がいて、白井さんが！」

動揺のあまり呂律が回らないようで、涙でよく顔が見えないながらも何とかして近くにいた美影に伝えようとする。

誰でもいいから助けてほしいと。

「・・・うん、わかった。」

「え？」

美影に初春の気持ちがよく伝わったようで軽い口調で引き受けた。

「俺が助けるから、落ち着いて。」

美影は初春の頭を撫でながら言う。

そして自身の目の前にワームホールを展開し郵便局内と空間をつなげる。

初春は目の前の現象に疑問を持つがそれにかまわず、美影は前へと進んだ。

中に取り残された白井は一人強盗犯に対峙していた。

初春を逃がしたため人質はいない。あとは警護員が来るまで時間稼ぎをすればいい。

「おまえが何を考えているのか当ててやろうか？」

強盗犯は白井の思考を見透かしたように言う。

「警報が鳴って大分経つ。そろそろ警備員も来る。人質を取られないようにコイツ足止めできれば、こちらの勝ち……凶星だろ？」

言い当てられて、くっ、と言葉を詰まらせる。

「だがな。ここから出られないと決まった訳じゃあないんだぜ？」

強盗犯はずっとポケットに入れていた手をビー玉サイズの鉄球と共に取り出す。

そして、その鉄球を防犯シャッターにむけて軽く投げる。

「絶対等速。  
イコールスピード」

俺が投げたそれが壊れるか能力を解除するまで前に



何があっても進み続ける。．．これぐらいの壁、どうってこともねえんだよ。」

投げた鉄球は男の言うとおり落ちることなく進み、防犯シャッターの前にあるガラス窓の前に当たろうとしたとき、

「じゃあ、それ壊せばいいのか。」

二人が聞いたこともない声が不意にかけられ、鉄球が突然消えた。二人は驚き、その声がする方向へと目を向ける。そこにはいままです郵便局内にいなかったグレーのコートを着た少年、御坂美影がいた。

「ッ、なんだおまえは！！！」

「ただの通行人Aです。」

自分の能力が簡単に止められ、動揺した強盗犯が目の中の男に叫ぶ。

が、適当に返事され、余計に怒りが増す。

（この殿方、いったいどうやってここに？）

自分と同じ空間移動が能力かもしれないと考えるが、それでは鉄球を消し去ったことの説明がつかないと思い、疑問が増す。

「くっ、だが、一個ぐらい消したからって調子の乗るなあ！！！」

強盗犯は一気に10個ほどの鉄球を投げる。速度は低いが威力は

絶大だ。

「まったく、あぶねえなあ・・・」

美影は飽く迄冷静に向き合い、先ほどと同じように、ブラックホールでそれらを消し去る。

局内は薄暗く黒いブラックホールは見えにくい鉄球が確実に消えていくのは目視できる。

「くそお！！」

強盗犯はまたも能力が防がれて動揺する。

すると、能力では太刀打ちできないと思ったのか、美影のほうに走り、殴りかかろうとする。

が、美影は走ってくる強盗犯に手をかざし、男にかかる重力を操作し、壁に落とした。

男は頭を打ったせい、壁にぶつかって美影が重力を元に戻したら力なくずるずると床に落ちた。

## 幕間・反省のち約束・

白井黒子しろいくろこは目の前の光景に驚愕していた。

突然現れ、自分が初春を逃がすことしかできなかった相手を意図も簡単に倒してくれた  
その救世主ヒーローのような少年に。

「大丈夫か？」

美影が安否を問う声で白井は我に返る。

「は、はい・・・助けていただきありがとうございます。・・・ッ！！」

白井は立ち上がろうとするが強盗犯に踏まれた足が痛み顔をしかめる。

「あまり大丈夫じゃないだろ。早く医者にみてもらえよ。あそこに倒れている人も。」

壁の近くに倒れている固法美偉の方を見て言う。血を流しているがあまり深い傷ではなさそうで、すぐに治療してもらえば問題なさそうだ。

「今回のことはわたくしの独断専行が原因ですの。本当にありがとうございます。」

頭を下げ、再度感謝の気持ちを伝える白井。

真剣に感謝されることに慣れていないのか美影は少し困った表情をする。

「礼なら外にいる子に言えよ。君の事を本当に心配して助けを呼んでいた。」

「初春が？」

美影がここに来た経緯を話し、白井は自分が初春をテレポートさせた方向を見る。

「わたくしのせいで初春も危険な目にあわせてしまいましたの。責任はわたくしにあります。・・・これでは風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の風上にも置けませんの。」

白井は深く反省し、弱音を吐く。このままではいけない、と。

「いいんじゃないのか？これで。」

「なっ・・・どういうことですか！？」

白井は美影の無責任とも取れる発言に対し叫ぶ。このままではいけないと思っているのに真逆の発言されて過剰に反応している。

「そうやって反省できるってことは次から改められるってことだろ。人間生きてれば必ず失敗するけれどそこから何かを学べられるのやつは思いのほか少ない。」

でも君はそうやって自分に足りないことがちゃんと見つけれられたんだ。それは成功することより大切だと俺は思うよ。」

諭すような口調でやさしく微笑みながら美影は言う。不思議とその言葉は白井の心に染みた。

美影が話していると外からサイレンのような音が聞こえる。どうやら警備員が騒ぎをかぎつけ来たようだ。

「もう大丈夫そうだから行くね。」

美影はここに来た時と同じ方法で立ち去ろうとする。しかし、それをさせまいと白井は美影のコートをつかむ。

「ちょッ、離せ！」

「だめですよ、あなたは重要参考人！。ここで帰らせるわけにはいきません！」

美影は引き剥がそうとするが、いきなり風紀委員らしくなった白井に正論を言われながら止められる。

このままでは事情徴収などの面倒なことになってしまうのでなんとかこの場から離れようとする。

そこで能力を使い、白井にかかる重力を出鱈目に変化させ、バランスを崩させる。

突然目が回ったかのような感覚に陥り、思わずコートを握る手を離してしまった。すると、そのチャンスを逃さないようにすばやく走り出す。

「くっ、・・・あっ・・・せ、せめて名前を教えてほしいですよ！」

このままでは逃げられてしまうのでせめて恩人の名前だけでも聞こうとするが、

「お大事に~~~~。」

その問いに答えは返って来なかった。

美影はワームホールを展開し、そのまま走り抜けていった。薄暗いため白井にはワームホールがみえず、彼の移動手段に関しても疑問を抱いたままになってしまった。

それとほぼ同時に防犯用のシャッターが警備員によって開けられ、局内に光が射し込んだ。

警備員に一連のことを話し、目を覚ました固法美偉に怒られ、意図とおりのことが終わった後、白井は初春に足に包帯を巻いてもらいながら、名も知らない恩人について話をしていた。

「本当にあの人たすけてくれましたね。」

包帯を巻きながら初春は言う。今考えるとあのときはかなりの無茶振りをしていたと少し恥ずかしく思う。しかし彼は文句ひとつ言わず、完璧に助けてくれた。

「ええ、でも名前を教えて下さらなかったたのでお礼をすることができないですの……。」

名前さえ分かれば風紀委員の権限で書庫にアクセスし、調べることができののだが教えてくれなかったためそれはできない。しかもなぜか郵便局の監視カメラはレンズが挟えぐられているようになってい。なぜかという、美影がワームホールで局内に入る前に重力操作で監視カメラの位置を探知し、ブラックホールでレンズだけ吸い込んでしまったからだ。

そのため、顔認証システムを使い、書庫で検索をすることも出来なくなってしまった。

また、足が付かないよう彼は局内で何も触っていないため、指紋も残っていない。

白井が美影を探す方法を見つけようと思考している中、初春が口を開いた。

「私、約束します。」

「え？」

「『己の信念に従い、正しいと感じた行動をとるべし。』・・・私も、自分の信じた正義を曲げません。何があってもへこたれず、きつと、白井さんのような風紀委員になります。」

初春は微笑みながら言う。

そして白井も『約束』をする。

「その約束、わたくしにもさせてくださいな。・・・今までなんでも一人でできるつもりでいましたけど、それはとんだ思い違い。・・・ですから、これからは二人で、一緒に1人前になつてくれますか？」

白井は包帯が巻かれた手を差し出す。

あの人と言ったように自分は自分を見つめなおすことができた。なら一歩、どれだけ小さくても一歩前に進もうとする。目の前にいる仲間とともに。

「・・・はい!!」

初春は白井と同じように手を差し出し、手を握り合った。

近くで怪我を治療されている固法もその光景を微笑んで見ていた。

（あーあ、また違うところ探さないとな。）

思いがけない事件があったため、今だ一方通行に押し付けられた願書をもっている美影はひとり、新たな郵便局をさがし、日が降りてきて寒くなってきた中、歩いていた。



## 原作との相違点など（前書き）

この小説の説明です

## 原作との相違点など

### 各キャラクター設定

アクセラレータ

一方通行 能力：一方通行

アクセラレータ

・御坂美影を唯一の親友としている

・コーヒー好き

・美影に何かしらの弱み（恥ずかしいこと）を握られている

・長点上機学園高等部1年の生徒

・暗部組織『グループ』に所属（物語の最初から）

かきねていしく

垣根帝督 能力：未元物質

ダークマター

・高身長で顔は整っていて運動神経抜群でかなりもてる

・紅茶好き

・プレーボーイ

・麦野沈利とは幼馴染で・・・

・長点上機学園高等部1年の生徒

・暗部組織『スクール』に所属

みさかみこ

御坂美琴 能力：超電磁砲

レールガン

・ツンデレ

・とある高校生に好意を抱いている

・絶対能力進化、妹達については知っているが、知ったときには実験は凍結されて詳しく知らないため 一方通行には敵意を抱いていない

・美影のことは『美影』と呼ぶ それにはとある理由が・・・

・美影には何度も勝負を求めるがレベル5になってからは一度も戦っていない

- ・暗部とはまったく関係がない
- ・常盤台中学第2学年所属

麦野沈利 むぎのしずり 能力：原子崩し（メルトダウン）

- ・レベル5では1番年上（高校2年生）
- ・足が太いのを気にしている
- ・序列にコンプレックスを抱いている
- ・垣根帝督とは幼馴染で・・・
- ・暗部組織『アイテム』に所属

食蜂操祈 しょくほうみさき 能力：心理掌握 メンタルアウト

- ・常盤台中学第3学年所属で女王と呼ばれている
- ・よく能力で相手の思考を読み取るが、気に入った人や好きになつた人には能力を一切使わないように している

- ・実は
- ・暗部ともかかわりがあると思われる

御坂美影 みさかみかげ 能力：無限重力 ブラックホール

- ・この小説の主人公で御坂美琴の実の兄
- ・ハッキングや機械をいじるのが得意
- ・妹の美琴には自分のことは一切言わないように口止めしているため、彼を知っている者は少ない
- ・かなり冷静に物事に対応する
- ・親友の一方通行ですら、考えていることが読めないらしい
- ・自分のことをあまり周りに言わない
- ・長点上機学園高等部1年の生徒
- ・暗部組織『スペース』に所属

削板軍霸 そぎいたくんは 能力：不明（最大原石）

- ・よく『根性』という言葉を使う

- ・よく鉢巻を巻いている
- ・書庫には能力でおこる現象しか載っていない
- ・長点上機学園高等部1年の生徒
- ・頭はあまりよくない

## その他

- ・妹達は一〇〇〇一シスターズ体作られた
- ・暗部組織『スペース』の構成員は美影一人
- ・絶対能力進化（レベル6シフト）は第〇〇〇〇一実験で凍結
- ・原作ほど過激ではない・・・と思われる

## 原作との相違点など（後書き）

まあ気に入らないなら読まないで下さい

## 入学式（前書き）

ほとんど科学サイドの話を書くつもりです

## 入学式

春というのはさまざまなことの節目となる。

学生が人口の8割を占める『学園都市』では新たな学校に入学したり、新たな学年になり、気持ちが大きく変わる者が多くいる。

また、寒い冬を越え、暖かくなっていき、学園都市によって品種改良された桜はちょうどこの時期に満開になっており、あたり一面を鮮やかなピンク色に染め、見ているものの心を奪う。

そして今年の春からはレベル5が4人もしかかも同じ高校の生徒となり、その学校を、また周囲の学校を大きく変えることとなるだろう。

「おーい、一方通行〜。」

今日高校に入学する少年、御坂美影は共に同じ高校、長点上機学園に入学する『親友』、学園都市最強の一方通行の家でインタビューを押しながら彼を読んでいる。

長点上機学園は第十八学区にあるのだが二人とも引越すことはなく隣接する第七学区で暮らしている。

そのため彼らのこれからの朝は自然と早くなる。

「はいはい、朝っぱらからうるせエなァ〜。」

欠伸をしながら同じ制服を着た髪が白く、目が赤い少年、一方通行が部屋から出てきた。

早起きになれていないのか、かなり眠そうだ。

「んじゃ、行くか。」

「おう」

美影の声に様々な思いを抱きながら一方通行が返事をする。  
今日から今までとまったく違った生活が始まることだろう

今日はさまざまな高校の入学式がある。志望校に受かったもの、受からなかったものがあるが、彼らはどちらにも当てはまらない。

美影も長点上機学園に決めたのはなんとなくであり、正直どこでもよかったのかもしれない。

一方通行も他のレベル5に興味があっただけで学校がどこでもよかっただろう。

入試試験に関しては彼らは受けていない。なぜなら、先日、美影が願書を出したらレベル5ということがあってか試験についての資料ではなくそのまま合格通知が届いたからだ。

おそらく、他のレベル5や去年高校生になったレベル5も同じだっただろう。

これからのことを話しながら、徒歩や電車で移動し、学区を越え、二人は自分たちが入学する高校に着いた。

### 長点上機学園

能力開発において学園都市トップを誇る超エリート高である。



また、高位能力者でなくても一芸に秀でていれば入学は可能なため在学条件に強能力者（レベル3）以上がある常盤台中学とは違い、無能力者（レベル0）も多く在籍している。

これからのことを話しながら、電車や徒歩で移動すること約40分、二人はようやく長点上機学園にたどり着いた。

一言で言うところの学園は広い。

見渡すと様々な施設、競技場があり、出来ないことはないのではないかと思わせる。

二人は周りを見渡しながら、受付を済まし、入学式が行われる建物に入っていく。途中一方通行の奇妙な容姿にとまどい、目を向けるものがいたが、いつものことなので二人はまったく気にしていない。

まだクラスは発表されていなくて式での席は自由なため、二人は出来るだけ後ろのほうに座る。

そして、入学式が始まった。

『ええ、新入生の皆さん、入学おめでとうございます。』

学園長の話に入った。お約束で話はかなり長い。

緊張していてがちがちに固まっているものも見られるが美影と一方通行はまったく緊張せず、ただ早く終わらないか、と思っていた。また、目立つことが嫌いな美影はここでレベル5の話にならないことを願っていた。

そんな中、退屈そうな一方通行が美影に小声で話しかけていた。

「ンで、俺ら以外のレベル5ってのはどいつなんだ？」

一方通行はそればかり気になっていたようだ。だがそれについて調べようとしていなかったのか誰が同じレベル5なのか知らないらしい。

それに対し、美影はかなり詳細に調べていたらしく周りを見渡すとすぐに二人見つけた。

「あの最前列にいる茶髪のロングが第二位だね。」

小さく指を刺して他に聞こえないように小声で言う。

その先には彼らと同様かなり気楽に式に臨んでいる男がいた。

「あのチンピラみてエのが万年第二位か。」

第一印象が『チンピラ』になったらしく、本人が聞いたら怒りそうな台詞を口に出す。

「んで、あの鉢巻巻いているやつが第七位。」

白髪の一方通行ほどではないが、鉢巻をしているためかなり目立ってしまっている男に指を向ける。

こちらはかなり緊張していると顔からはつきりと読み取れる。

「二人とも能力が複雑すぎてお前と同じくらい研究所を転々としていたらしい。しかも第七位のほうは能力についてほとんど分かっていないらしい。」

「・・・なんでお前はそんなくわしィンだよ。」

一方通行は疑問に思ったことを言う。

確かに美影は二人に詳しく、二人が長点上機に入学することも知っていた。そのため、かなり奇妙に思えるといっても過言ではない。

「・・・まあ、俺の情報網のおかげかな。」

「あア、そう・・・」

どんな情報網をしているのだ、と普通なら思うのだが、一方通行は彼のことを知っているためその台詞は不思議に思わない。

どうせハッキングでもしたのだろう、と正解であることを予想した。

『新入生代表。新入生代表、平井正太郎君お願いします。』

校長先生の話が終わり、新入生代表である髪がきれいに整えられ、眼鏡をかけた見るからにまじめそうな少年がステージへと上る。

「なんだア、あの三下はア？」

一方通行はステージで昨日何とか覚えたスピーチをしている少年を見て思ったことが口に出る。

こんなことは面倒臭くてやりたくないのだが序列1位の自分を差し置いて堂々とステージに立っている男が気に食わないようだ。

「これは入試試験で1位を取ったやつがやるらしい。」

「そんなもん俺がやれば確実に満点じゃねエか。」

レベル5は全員推薦合格なため、これは出来ないのだと一方通行は理解したが、やはり気に食わないらしい。

「今はいい気になっているけどすぐに現実を見ることになるだろうね。」

「あア、たつぷり見せてやろうじゃねエか。格の違いを。」

まさかレベル5が4人も入学したとは夢にも思っていないらしく、平井正太郎はまるで、目の前にいるやつ全員が格下であるといった表情をしていて、優越感に浸っている。

そんな彼を見て一方通行は不敵な笑みを浮かべる。

入学式が終わり、クラスわけが発表された。その方法は新生用の玄関に各クラスごとに張り出されているというものであった。

美影と一方通行は近いクラスのものから見て行き、二人とも同時に同じ紙に名前を見つけた。

美影の名前はともかく、一方通行の名前はそのまま『一方通行』と書かれていて疑問に思った生徒も何人かいる。

「どオやら『四人とも』同じみてエだな。」

「みたいだね。」

二人が自分たちのクラスの名簿を見ていくと『垣根帝督』、『削板軍霸』の名前もあった。

おそらくレベル5をまとめて『監視』出来るほうが都合がいいのだろう。

「チツ、あの三下の名前は無えみてエだな。」

なにか企<sup>たくら</sup>んでいたらしいがそれが出来なくなったらしく舌打ちをした。

美影はそんな一方通行をみて高校生活に対し少し不安になった。

教室でもなぜか自由に席を選べるらしく、美影と一方通行は入学式と同じように一番後ろの席に座った。また、垣根帝督も同じように最前列に座り、削板軍霸においてはまだ緊張しているようだ。

しばらくして担任の教師と思われる30歳ぐらいの男が入ってきた。このとき皆が初めて担任の顔を見たことになる。

その男は教卓の前に立ちチョークを手に持ち、黒板に自身の名前であろう文字を書く。

「あー、俺がこのクラスの担任になった山口良平だ。一年間よろしく。」

クラスの何人かがよろしく願いします、とそろえていった。

美影と一方通行は面倒くさいのか言っていない。

生徒の返事を聞いて再度担任は口を開く。

第一印象は大切、といわれているだけあって生徒は彼が何を言うのか気になっている。

だが、その内容は自分に好感をもってもらうような台詞でも生徒の合格をとりあえず褒めるようなお決まりの台詞でもなかった。

「突然だが、皆にいつておかないといけないことがある。

このクラスにはあのレベル5がなんと4人もいる!!」

『えええ~~~~~!!!!!!』

(マジか……)

美影は他の生徒とは違う理由で、表情は変えず、あきれるように心の中で驚いていた。

## 入学式（後書き）

オリキャラの名前は適当です

## 大暴露大会

（あーあ、面倒くさいことになったなあ・・・）

担任の教師によるいきなりの爆弾発言により、教室中が大騒ぎになっっている。

あたりを見渡す者、だれだだれだ、と大声で言う者、あいつじやねえの、と友達と予想しあう者。

とにかく混沌カオスな空気となっている。

騒いでいないとすればそれはレベル5である者ぐらいである。と美影が思っていたら、

「なにー！！俺以外にも3人もいたのか！！？」

と大声で鉢巻オトコを巻いた漢、削板軍覇は大声で言う。どうやらこのことは美影のように知っていたわけではないようだ。

その台詞を聞き、まず1人、レベル5が誰であるのか皆にばれてしまった。偶然隣に座っていた少女は今まであこがれていたレベル5がすぐ横にいることに驚き、尊敬と羨望の眼差しを向けている。

当たり前だが、近くにいらなくても騒いでいるものがたくさん見られる。



(・・・俺もばれたらああなるのか?)

目立つことが大嫌いな少年、御坂美影は思う。また彼はちやほやされることも嫌いなため、今の削板の状況になると苦痛以外の何物でもない。

いつかは必ずばれるだろうが、今であっては欲しくない、と願っていた。

「じゃあ窓側の最前列のやつから一人ずつ自己紹介してくれ。」

この状況を作り出した張本人、担任の山口は今度こそお決まりの台詞を言う。レベル5を先に紹介したいのだろうが実は彼も4人もいると学園長に聞かされただけで顔までは知らないのだ。

その言葉通り1人ずつ自己紹介を言っていく。趣味や特技を言ったり、好きな異性のタイプを言ったりする者などが見られる。

そんな中、他とは違うことを言っている者がいた。

「俺の名前は垣根帝督、レベルは5だ。一年間よろしく!」

そういった途端、またしても教室内は騒ぎ立った。

超エリート高である長点上機において、レベルを紹介して驚かれる者なんてそういない、というより4人しかいないだろう。

しかも彼は顔がとても整っているため削板軍覇のときとは違う視線が女子から向けられる。

「趣味は何ですか?」

「好きな異性のタイプは何ですか?」

「好きな食べ物は何ですか?」

と、女子からマシンガンのような質問攻めに合ってしまった。  
垣根の表情を見ると満更でもなく、ひとつひとつ丁寧に答えていく。その状況を彼は心地よく感じているのだろう。

そんな垣根に対する美影の第一印象は『女たらし』となった。  
すると男子からは嫉妬され、にらみ殺されるのではないか、という視線を向けられるが、それによりますます優越感に浸る垣根。  
その質問攻めのなかに、垣根が無視できないものがあつた。

「垣根君の序列は何位ですか？」

とある少女が投げかけた疑問。

序列というものは7人のレベル5を順位付けしたものである。そして序列は戦闘力や演算力ではなく『能力研究の応用が生み出す利益』が基準で決定される。つまり、勘違いしているものが学園都市中にいるが決して『強ければ順位が上』というわけではない。

「俺の序列は残念ながらその白いやつで第二位なんだよ。」

ぱつと見白い少年、つまり一方通行を指差しながら言う。

これで一方通行がレベル5、しかも序列一位であることがばれてしまった。残るのは美影ただ一人。

「なァーに勝手にばらしてくれてンだよ、万年第二位。」

「なんだ、かつこよく自分で言いたかったのか？」

「てめェに言われるのがムカつくだけだ。」

笑いながら問う帝督に一方通行は不服そうに答える。

自分で自慢するのは気が引けるのだがさりとて言われたことは気に入らなかつたらしい。

一方通行はチツ、と舌打ちをし、それ以上はなにも言わなかつた。自己紹介のリレーが再開するが垣根のに比べればどれも見劣りする。

彼と同じぐらい驚かせるとしたら同じレベル5ぐらいだろう。もちろんレベルを紹介するような奴は他にはいない。

そして一方通行の番が来た。

「そのチンピラが言ったとおり学園都市一位の一方通行だ。」

堂々と自己紹介を言うが皆が気がかりなことがひとつ。クラスわけの名簿でも気になっていた名前についてだ。

「アクセラレータというのは本名ですか？」

一方通行や美影の予想通りの疑問が来た。誰でもその名前には不自然に思つたろう。

「いや、それは能力の名前でまア、ニックネームみてエなもんだ。あと本名は忘れた。」

その一言にクラス中が驚く。

いろいろと創造しているものがあるが、レベル5というのはそういうものなのか、と変に納得している者もいた。

そしてまた自己紹介レースが再開し、ついに美影の番がやってきた。

「御坂美影です。一年間よろしく願いします。」

彼が言ったことは最小限で、またそれ以上いう気もなかった。目立つのは嫌いなため変に下手にしゃべって気づかれ、騒がれないように座って次に回そうとしたとき、

「御坂クンのレベルは何ですかア？」

と一番聞かれたくない質問がピンポイントで飛んできた。質問の発信源は美影の隣、彼がよく知っている人物、一方通行であつた。

言うだけ言つて、一行通行はあたさまに顔を背ける。

(……………こんの白モヤシめえ。)

「…………一方通行、いやがらせか？」

「もういいだろ、ばらしちまえよ。」

軽くにらみながら言う美影に対し、笑いながら他人事のように言う一方通行。

二人が小声で会話している中、周囲ではまた騒ぎになっていた。

「そういえばあいつ、一方通行とずっといたぞ。」

「そういえばそうだな、隣に座っているし。」

「じゃあ彼もレベル5なのね！」

どうやら目立った容姿の一方通行といたせいで美影もわずかなが

ら目立っていたらしい。

美影は諦め、はあく、とため息をし

「俺もレベル5です。」

諦めた。

予想通り周りの空気が変わり、御影に対する視線が変わる。

幸い、『御坂』に反応する生徒はいなかったようだ。

あまり自分のことを好まない御影は垣根のように質問を受ける前に席に座り、前に座っている人に強引に自己紹介のバトンを渡す。

美影本人は自分の容姿をあまり気にしないが彼もかなり美形であるため美影を頬を赤らめて見つめている女子もいた。

そして4人目のレベル5の番になる。

「俺は削板軍覇！！　もうばれているみたいだが俺もレベル5で最<sup>ナ</sup>大原石と呼ばれている！！　根性入れていくから一年間ヨロシク！！」

と大声で、根性を入れて自己紹介した途端なぜか彼の机が、ドオーーン、と自然では見られないカラフルな炎を上げて弾け飛ぶ。幸い誰にも被害はなかったようだ。

その不可思議な光景に周囲は目を丸くしている。

が、彼は自己紹介を言い切ると普通に座り、あれ、机がねえ！？、と素っ頓狂なことを言っている。

どうやらわざとではないらしく、緊張のあまり動揺し起きてしまった現象のようである。

(・・・あれが最大原石<sup>ナンバーセブン</sup>の能力か。・・・重力探知で視てもまった

く原理がわかんねえな。」

そんな中、美影は冷静に軍覇を観察していたが入学前の下調べ（ハッキング）で見たように『不可解な能力としか分からなかった』ようだ。

担任の山口も驚いていたようだが、コホン、と一回咳払いし、最後に自己紹介をした。

内容は担当教科、専攻している能力などであった。

「ええー、今日はこのホームルームで終わりだ。皆、帰宅の準備をするように。」

この日は入学式の日でもあったせいか、学校は午前で終わり、午後は希望者は部活見学をすることが出来る。

削板以外は特に片付けるものもなく、すぐに挨拶をする。

「さーて、帰るか、一方通行。」

「腹も減ったし、飯に行くか。」

垣根は挨拶の後、すぐに大勢に囲まれていて、質問に答えたり、楽しく会話したりしている。

そうならないように、美影は一方通行を連れて、すぐさま教室を出て、玄関で靴に履き替え、学校から出ようとする。

「昼、何食う？」

「そオだな、今日は中華でもいくか。」

「おっ、いいね、そうするか。」

昼食のメニューが決まったらしく、美影は携帯を使い良さそうな中華料理屋を探す。

彼らが学校から出るため、玄関から出て、校門へ向かおうとしたとき、

「ちょっとまって!! その白いやつ!!!!」

不意に、後ろから知らない奴から大きな声で呼ばれた。

## 大暴露大会（後書き）

なかなか進みませんね。



## 大乱闘？

汚れひとつない高級ソファやテーブル、学生の汗と涙の結晶である光り輝く優勝旗がずらりと置かれた部屋、長点上機学園の一階にある学園長室には5、6人の男女が一人の男性と対面している。

「学園長は何をお考えなのですか？」

その中の一人、超能力者（レベル5）4人の担任となった教師、山口は目の前にいる60歳ぐらいの男性に問う。

彼の目は真剣そのものだ。

「全クラスホームルームで必ずレベル5の存在を知らせるなんて彼らに失礼ではありませんか？」

実は山口が第一声でレベル5の存在を告げたのは学園長の命令であつたからだ。  
ばらした

4人のクラスだけではなく学園内にいるもの全員が知らされているため今はその話題で持ちきりとなっている。

いずれ知れわたるとは重々承知だが、前触れもなければ必ず大騒ぎになってしまう。

「なにかトラブルになるのは目に見えています。」

山口が一方通行で話している。

学園長は何も言わず、彼の顔さえ見ず、ずっと窓からグラウンドの方を見ている。

が、山口が言うだけ言うと学園長はその重々しい口を開ける。

「それが私のねらいなのだよ。」

学園長室内では一人を除き、全員が首を傾げた。

「何だア？ てめエら。」

一方通行と美影は声がした方向に顔を向ける。

そこには静止の声をあげたものだけではなく闘争心むき出しの者が約10人いた。

「先輩に向かってなんだその言葉は！！」

その中のリーダー格のような男が一方通行の言葉遣いを注意する。さらに彼らの表情が強張る。

美影は彼らのネクタイの色を見ると自分のとは違っているのに気づき、またその色から彼らが3年生であることを悟る。

「はいはい、ンで、その先輩方が俺に何のようですかア？」

一方通行はいやみのように言う。

一向に態度を改めない一方通行を躰けるのは諦め、本題に入る。

「お前がレベル5の第一位だな？」

「・・・だったら何だってんだ？」

「調子に乗りやがって、・・・俺たちにお前に高校つてのを教えてやるよ。」

先輩Aは上から目線で言う。

一方通行は学園都市最強（自分）を倒し、高揚感に浸ろうとする馬鹿と捕らえた。

日々そう考える武装無能力集団スキルアウトに絡まれている彼は、こっぴつのは無視が一番、と知っているので何もいわず前方を向く。

「行くぞ、美影。」

「はいはい。」

美影も同じ気持ちで先輩を無視して共に歩き出す。

美影はレベル5とは分かっているらしく、彼には歯牙にもかけていない。

「おい逃げんのか！！」

「どうせ超能力者レベル5つてのはたいしたことないんだろ！！」

「一年のくせになまいきだぞ！！」

後ろからくる罵声には目もくれず、二人は空腹を満たすべく前進する。

だが1つの暴言に一方通行が反応した。

「怖いのか！？白モヤシ！！！」

一方通行は立ち止まる。となりの美影はその声をきき、あーあ、  
と言いながらその発信主に同情する。『モヤシ』というのは彼にと  
ってNGワードで以前その言葉を彼に言った武装無能力集団の一人  
が死にかけるとこれまで苛められたのを彼は知っている。

「・・・美影、・・・いいか？」

「・・・殺すなよ？・・・頼むから。」

こうなつては止められない、と美影は悟り、最悪のパターンにす  
ることだけはしないよう忠告する。

だが、保証はない。

一方通行は返事をせず、無謀な輩の方に体を向ける。

「おい、先輩ども。」

一方通行の声についさつきまで叫んでいた先輩たちが笑みを浮か  
べる。

彼らは超能力者<sup>レベル5</sup>と大能力者はレベル<sup>レベル4</sup>が1つしか変わらないからや  
り方次第では勝てるだろうという考えであった。

が、その『1』の差には計り知れないほどの大きな壁があると彼  
らは知ることになる。

「お前らにに格の違いをみせてやるよ。」

（あーあ、あの先輩たち可哀想に・・・。）

一方通行がグラウンドのど真ん中で戦闘いじめをしている中、空腹な美影はその戦闘を見ている野次馬の端で見ていた。すると、不意に後方から声がかかる。

「おーおー、すごいことになってんなあ。」

振り向くとそこには茶髪の髪でホスト風のイケメン、レベル5第二位の少年、垣根提督がいた。

「お前もあれくらい出来るだろ。」

「まあな。」

謙遜することなく答える垣根。

すると彼の興味は離れたところで戦っている一方通行から目の前の御坂美影へと向けられた。

「お前の名前、『御坂』ってことは第三位の兄かなにかか？」

どうやらホームルームで何も言わなかったが垣根は気づいていたらしい。

『御坂』という苗字に。

「実の兄だよ。」

美影の返答を聞くと、垣根は少し驚いたような顔をした。

「まさかレベル5で一番調べやすかったやつが一番近いところに6位がいたとはなあ。」

どうやら垣根には御坂美影の情報はまったくなかったようだ。

『一番調べやすかった』というのは、彼の妹である超能力者（レベル5）第三位の御坂美琴はレベル5の中では広告塔のような役割をしていて彼女の能力であり、異名『超電磁砲<sup>レベルガン</sup>』は学園都市の多くの生徒に知られている。

が、その兄、御坂美影は得意のハッキングを使い、『表』と『裏』の情報を巧みに操作したため垣根には情報が入らなかったのだ。

「<sup>バンク</sup>書庫には妹のところに家族構成でちゃんと“兄”って書いてあったろ？」

「ほとんどなにも書いてなかったから『外』にいたと思ったんだよ。そうだ、せつかくだしメアド交換しねえか？」

「いいよ、別に。」

特に断る理由もなく、レベル5同士だからなにかと都合がいいだろうと思い、美影は制服のズボンの左ポケットから黒色の携帯電話を取り出し、メールアドレスを交換する。

突然、美影は先ほどから気にかかっていたことを言う。

「なんかこっちも視線が多い気がするが。」

美影は垣根に話しかけられてから一方通行だけではなく自分たちにも視線が集まっていることに気づいていた。だが彼は正直鬱陶しく思っていた。

「そりゃ俺たちがレベル5でかつこいいからだろ。」

「よくそんな台詞が言えるな。」

「お前ももう少し自覚したらどうだ。」

「なんだそれ。」

垣根のナルシスト発言に若干顔が引き攣る。

自分の容姿をあまり気にしない美影ではあるが、彼は垣根に負けないくらいの容姿をしている。

そんな二人を見ていた二人と同じクラスの生徒は全員同じことを思っていた。

（（（（（超能力者（レベル5）のレベルが高い！！）））））

二人が話していると一方通行と同じように声がかけられた。

「おい！ その奴！！ お前がレベル5の第二位だろ！」

また違う先輩たちに今度は垣根が呼ばれた。

そして同じように宣戦布告され、

「いいね、すこし遊んでやるよ。先輩たち」

と垣根が乗り気になり、グラウンドへと歩いていき、新たな戦闘いじめが始まった。

（・・・・・・変だな・・・）

残された美影は現在の状況を不思議に思う。

その不思議に思う対象は自分が宣戦布告されない、ということではない。むしろそのことは彼にとってありがたい……思っている。

彼が不思議に思っていることは、教師が誰も止めようとし……ないということ。

あれだけ目立つところで、しかもレベル5というだけあって派手にやっついていて、ギャラリーがたくさんいるのにそれを止めようとする教師がいない。

普通なら止めるはずだ、と思い美影はあたりを見渡す。

すると、彼の視線は一箇所に向けられた。

一階からグラウンドを観察している老人、入学式で長い話をしていたこの学園の学園長だ。

止めようとする身振りを見せず、この状況を楽しんでいるようにも見える。

(……そういうことか。)

美影の顔はすこしにやっっていた顔になった。

学園長をまじまじと見ていると、視線に気がついたのか目が合った。

「彼は誰かね？」

学園長が突然後ろの教師たちに質問する。

その声に反応して教師たちが学園長の視線をたどる。

それに答えられたのはその人物の担任、山口だけだった。



「彼は超能力者の序列第六位、御坂美影です。」

「ほお、彼が唯一居場所が分からなかった第六位か。顔を見たのは初めてだよ。」

レベル5というにも関わらず本人の情報操作により学園長にも今まで情報が入ってはこなかった。

彼が入学申し込み書を送ったことでやっと彼の存在を知りえたようだ。

（・・・この第六位、なかなか侮れんな。おそらく気づいただろう。）

こちらを不敵な笑みで見てくる第六位を見て思う。

彼だけは自分の考えを読み取った、と。

学園長も同じような笑みを浮かべていた。

「学園長、どうかなさいましたか？」

山口の隣にいた女性教師が学園長の表情の変化を訝り、たずねる。  
学園長はついにグラウンドから目を離し、教師たちを見る。

「君はこの学園についてどう思う？」

突然学園長から諮問され戸惑うが、正直に普段から思っていたことを言う。

「他にはないほど、優秀な学園だと思います。」

「そう、去年大覇星祭で優勝したのがその証とも言えよう。わが学園ながら私も誇りに思うよ。」

学園長は共感する。そこに、だか、と付け加え、

「極めて優秀だからこそ彼らは自身が1番と考え、競争意識が低下する。人はそうなれば退化していくのだよ。だからこそ一度彼らにレベル5と戦わせるように仕向け、自分たちが頂点でなく、上がいることを身をもって知らせる必要があるのだ。」

学園長は自信の企みを説明する。

教師たちは学園長の考えは理解する。が、やはり心配な点がある。

「ですが、レベル5に打ち負かされ大怪我を負わされてはまずいのでは？」

「それは少々心配であつたがどうやら大丈夫そうだ。」

学園長は教師たちの不安を払拭させる。

「なぜ分かるのですか？」

「あの野次馬たちを見てみなさい。あの第六位もおそらく分かっているだろう。」

学園長の言葉に煽られ野次馬の生徒たちを見る。  
だが何も分らない。

「特に何も無いと思いますが。」

「そう、なにもないからこそだよ。」

そこで教師たちも初めて気づく。

「あれだけ大きな力を使っているにも関わらず他の生徒には流れ弾が飛んできていない。それはつまり彼らは場を弁え、能力を調節しているということだ。しかも戦っている上級生も目立った怪我をしていない。」

学園長の言うとおり一方通行や垣根帝督と戦っている先輩たちは擦り傷や浅い切り傷はあっても致命傷と呼べるようなものは1つもない。

教師たちは多少安心した。

（どうやら心配はなさそうだな。）

美影は二人、とくに一方通行を見ながら思う。

万が一、一方通行が衝動的に暴れたら彼は止めに行くつもりだったからだ。

精神的に折れてしまったらさすがに手の施しようがないのだが。

戦闘開始から約10分、二人とも終わったようでグラウンドから出てきた。

先輩たちは倒れてはいるが大事無いようだ。

先輩からも歓声が上がっているとところをみると宣戦布告した先輩

「たちは評判が悪いようだ。」

「あーア、余計に腹へっちまったなア。」

「どうだった、先輩たちは？」

不機嫌ながらやり遂げたような顔をしている一方通行に聞く。

「武装無能力者集団よりはマシだが俺には物足りねエなア。おまえくらいじゃねエと『勝負』にもなんねエ。」

彼の能力のベクトル操作で全て反射してしまえば何か工夫しない限り彼に傷をひとつつけることどころか戦いと呼ぶことさえ出来ないだろう。

「んじゃ俺と戦るか？第一位。」

第二位、垣根帝督が茶化すように言う。彼は一度は一方通行と戦ってみたいのだろう。

だが、空腹のせいか興味を持たず、

「めんどくせエからパスだ、万年第二位。」

「いつかお前を越えて一位になってやるよ。」

「一生言ってる、チンピラが。」

美影は二人がここで『戦争』を始めるのではないか、と少しひやひやしたが大丈夫そうだ。

もし二人が本気で戦い合ったら学園なんて消し飛ぶだろう。

「じゃあ、今度こそ飯行くか、いい店みつけたし。」

美影は二人が遊んでいるとき携帯で良さそうな中華料理屋を見つけたようだ。

「俺も言っていいか？」

「いいよ。中華で良ければ。」

垣根が同行を求めたが美影はすぐに受容した。

一方通行が文句を言っていたが3人で第四学区の高級中華料理屋に向かった。

（口の中油でベタベタするな・・・気持ちわりイ・・・。）

中華料理屋では一方通行と垣根が何の対抗意識か、悪乗りし、必要以上に注文したため美影も巻き込まれて大量に食べるはめになってしまった。

しかも油が多く使われていたため彼の口の中のいたるところに油がこびりついている。

まともに動けなくなるほど暴食した二人と別れた美影は、口の不快感を取り除くため自動販売機を探していた。

余談だが、代金は6桁に達したが、現金で一括払いし、定員が驚いていた。

これも超能力者（レベル5）の財力チカラといえよう。

重力探知で最寄りのものを見つけ、今はそこに向かい歩いている。  
自動販売機が目に見えるとその前にひとりのとある少女が立っ  
ているのが見えた。

気にせずその自動販売機に近づいている途中、その少女は、

目の前の自動販売機を、豪快に蹴った。

## 秘密

（ あー気持ち悪い。）

御坂美影は口の中のどろどろの液体（油）を除去すべく、自動販売機へ向かっている。

目的地が見えると、そこには一人の少女がいるのが見える。美影はそれに構わず自販機に近づく。

その少女のことは気にしていなかったのだが、一歩進めば中学生ぐらいだと分かり、また一歩進めば名門、常盤台中学の制服を着ていると分かり、また一歩進めばその少女の顔が分かり、約30メートルぐらいの距離でその少女は自分がよく知っている人物だと気づく。

見ているとその少女はお金を入れていないのか自販機のボタンが光っていない。

その怪しいとも取れる状況を美影はしばらく観察してみることにした。

「さーで、今日もジュースをもらっわよ。」

とある少女が自動販売機の前に立ち、それに向かい、独り言う。  
どうやら彼女はこの自動販売機の常連のようだ。  
だが彼女はいままでで一度しかお金をその自販機に入れていない。  
それにも関わらず、彼女に罪悪感など微塵もない。

その少女は自販機を眺めている。  
その中には自身がお気に入りのものであればそうでないものもある。

自分が求める飲み物が見つかったようなのだが、これに決めた、  
とは言わず、

「今日はこれを飲んでみたいわね。」

と、普通とは少しずれた言葉を発する。まるで、これからくじでも引くように。

その少女は、トン、トン、トン、となぜか自販機の前で軽快にステップを踏む。

集中し、自分のタイミングを見計らい、今だ、と意気込み、

渾身の蹴りを自販機のわき腹にぶつけた。

ゴオーン、とすさまじい音が鳴り、その衝撃で一瞬自販機は体をそらせ、上半身が左右に揺れる。

その音と共に自販機の下半身では、ガシャン、とその体にふさわしい音をたて、ジュースが下に落ちる。

その少女はスカートを履いているがその下にはなぜか短パンを履いているようなので男を興奮させるようなものは見えない。

尤も、現在進行形で彼女を見ている者はそれが見えても何の感慨



も覚えないだろうが。

少女はまるで普通にお金をいれ、ボタンを押して買うような、正規の方法で手にするかのようにプラスチックの透明の板をあげて、ジューズを取り出す。

「あちゃー、これが出たか……。」

どうやら希望のものとは違うものが出てきたらしく、眉を顰める。その缶には、『黒豆サイダー』と書かれている。

出てきてしまったからには仕方がない、と言わんばかりにしぶしぶ缶を開け、中の液体を飲む。

ジューズを飲むために顔を上に傾けたため、視界が少し広がり、いままで見えなかった人影が目の端で捕らえた。

一連の動作を見られたことに驚倒し、ブウーーーー、と盛大に吹き出した。

「ケホッ、ケホッ、・・・アンタ、もしかして今の　　!!」

見た!?!、という前に、目の前の人物が誰なのか気づき、落ち着く。

「なんだ、美影じゃないの。」

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

御坂美影は目の前の想像を絶する光景に衝撃を受けていた。  
無理もない。昼間から目の前で、女子中学生が堂々と犯罪行為を  
しているのだから。

彼女の蹴りは、ゲームセンターであと少しで落ちそうなものを思  
わず叩いてしまう時のような生半可な衝撃ではなく、明らかに本気  
であつた。

その少女はジュースを飲むとこちらに気づいたようだ。

「ケホッ、ケホッ、・・アンタ、もしかして今の　　!!!!・・..  
なんだ、美影じゃない。」

「なんだ、はないだろ、美琴。」

「いつから見ていたのよ。」

「『さーて、今日もジュースをもらうわよ。』、から。」

「それって初めからじゃない!」

二人は血のつながった正真正銘の兄妹。

姓は『御坂』、兄の名前は『美影』、妹の名前は『美琴』。

二人ともこの学園都市が誇る、7人しかいない超能力者(レベル  
5)だ。

「つーか、何物騒なことやってんだよ、お前は。」

兄、美影は一応妹の破天荒な行動を注意する。  
妹、美琴はそれに構わずジュース（盗品）を飲む。

「仕方ないでしょ、去年これに万札飲まれちゃったんだから。」

どこが『仕方ない』なのか、激しく突っ込みたくなったが、何を言っても無駄だろう、と思い、ジュースを買うべく攻撃を受けた自販機の前に立つ。

「それ、お金を吸うだけで買えないわよ。」

美琴の言うとおり、試しに千円札を入れてみるが入っただけで何の反応もない。

「あらら・・・。」

「言ったとおりでしょ。あとこの自販機、どこか故障しているらしいから、さっきの方法で取れるわよ。」

お前が壊したんじゃないのか？とか、どうやってその方法にたどり着いたんだ？とか聞きたいことが次々に浮かんできたのが、やはり何を言っても仕方ないと思い、前の自動販売機を見る。

直ぐに口の中を洗いたいのでジュースを取り出すべく、ボタンを押さず、豪快に蹴ることもせず、自販機に手をあてる。

重力探知で内部のジュースの正確な位置をつかみ、重力操作でジュースを動かすことでジュースを下に落とすことに成功した。

犯罪にも見えるが、実際に入れた金額は手に入れたものより遥かに多いので、むしろ供給者にとってはありがたいことだろう、と美影は思う。

缶を見ると、『ヤシの実サイダー』と書かれている。

今の美影にとって炭酸飲料の方が望ましかったため、顔には表れないが喜んでそれを飲む。

「で、どうなのよ？」

「ジュースのことか？」

「違うわよ。学校のこと。」

突然の美琴の質問に適当に答える美影。本当は聞きたいことは分かっていたようだ。

美琴は美影が今まで学校に行っていなかったことを知っている。もちろんなぜそうしているのか何回か質問したことがあったが、はつきりとした答えは一度も返ってこなかった。

一応、妹として兄のことを心配していたようだ。

「まだ1日目だからわかんねえけど、まあ、面白そうだな。」

「そう。」

「そっちはどうなんだ、先輩になってみて。」

今度は逆に今日から常盤台中学第二学年の生徒となった美琴に質問する美影。

やはり彼も兄として妹のことを心配している。

「特に変わったことはないけど、なんか妙に気に入られた後輩がいるのよねえ。」

「へえ、それはよかったな。」

「少し度が過ぎている感じがするけどね。」

話していると美影の携帯が鳴った。

それを取り出し、画面を見る。そこには『非通知』と表示されていた。

「はい。」

『私だ、悪いがすぐにこちらに来てくれ。』

電話に出ると無機質な声が聞こえてきた。その声は美影が知っている声だった。

「はいはい、わかりました。」

特に不審に思うことなく返事をする美影。

彼を見て美琴はなにか予定ができたのだろうと推測する。

「なんか知り合いに呼ばれたから行くわ。」

そう言って歩き出す美影。

だが美琴は彼に言っておかないといけない事があるようだ。

「言っておくけど、さっきのこと！、誰にも言わないでね。」

先ほどの犯罪行為を黙秘するように言う美琴  
それに対し、美影は少し微笑み、言う。

「俺も言わなかったら秘密にしておいてやるよ。」

飲み干したヤシの実サイダーの缶を見せながら言う。そういった後、美影はその缶をゴミ箱に見事な放物線を描き、投げ入れた。

その言葉に美琴は安心する。

彼女は兄が約束は絶対に守ると知っているからだ。

美影が見えなくなり、これからどうしようかな、と考えていると、

「おねーーーーーさまーーーーー!!!!!!」

と大声で叫びながら同じ常盤台中学の制服を着た少女が美琴に抱きついて来た。

美琴はいきなりのことに驚き、その少女を何とか引き剥がそうとする。

「いきなり抱きついてくるんじゃないわよ!! ていうかその『お姉様』って言うのは何なのよ、黒子。」

黒子、と呼ばれた少女は白井黒子といい、茶髪をツインテールジャッジメントにしていて、その腕には盾をモチーフにした、風紀委員の腕章がついている。

「お姉さまはお姉さまですの。風紀委員としてのパトロール中に偶然お姉さまを見つけたということこれはこれも運命なのですね!! しかし、このようなところでお姉さまは何をいったい何を? まさかどこかの殿方と密会を!? いけませんお姉さま!! お姉さまは黒子と結ばれる運命ですの!!!!!!」

運命、という言葉を強調し、一方的に興奮しながら言う白井。彼女は他でもない、先ほど美琴が言った、『妙に気に入られた後輩』

である。

どこをどう間違えてこうなってしまったのかは分からない美琴だが、とにかく白井は美琴に心酔しているようだ。

「何分けわかんないこと言ってるのよ、アンタは。ていうかい加減に離れなさい!!」

最終手段の電撃を使い、何とか白井を引き剥がす。  
しびれているが、めくるめく喜びを感じているようにも見える。

「ただのスキンシップですのに。 って、待ってくださいお姉さま  
~~~~~!」

白井は言葉を見捨て歩き出した美琴の背中を駆け足で追いかけた。

このときの白井はまだ知らない。

美琴がついさっきまで共にいた者が自分の恩人であることを。

あと数秒早く美琴を見つけていれば自分を励まし、勇気付けてくれた人に会えたことを。

妹と別れた後、御坂美影は人気のない、路地裏にいた。

その場所に用があるわけではないのだが彼はそのような場所を求めて先ほどから歩いている。

重力探知で自分の半径100メートルに人が一人もないことを

確認し、目の前にワームホールを作り出す。

彼がそこを通るとき、彼の顔は美琴に向けていたものとは違い、  
厳粛な表情をしていた。

彼がワームホールの出口を作ったのは入り口と同じ第七学区にある、

カリキュレイト・フォートレス  
演算型衝撃拡散性複合素材という世界一硬いともいわれる素材で作られた建造物、『窓のないビル』と呼ばれるところである。

そのなかにいるのは、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも凶人にも見える『人間』、学園都市の最大権力者、学園都市総括理事長、『アレイスター・クロウリー』。

美影にとって、対面するのに最も油断できない相手である。

彼に会う、すなわち窓のないビルに入るためには『案内人』と呼ばれる空間移動能力者による送迎が必要だが、ワームホールを使う御坂美影にとって、それは不要である。

「で、何の用なんですか？」

美影は先ほど自分呼んだ当人に用件を尋ねる。

「『スペース』に依頼だ。この研究所をつぶしてもらいたい。」

電話のときと同じ無機質な声でその人物は言う。

その言葉と同時に何もないような空間にモニターがいくつか現れ、そこには地図などの研究所の詳細が書かれている。

美影はそれらを一度見ただけで全て暗記する。

一通り見終わったら再度質問する。



「で、なんでわざわざここに呼んだんですか？」

美影の言うとおり、いつもは仕事の依頼、情報は全て携帯に送られてくる。

そのため、電話がかかってきたときから不審に思っていた。

「少し君と話がしたくてな。」

「それは珍しいですね。」

らしくないことをいうアレイスターにさらに首を傾げる。  
だが、心当たりがないわけではない。

「新しい学校はどうだ？」

「まだ一日なんでわかんないですよ。っていうか全部見ていたくせに。」

「見るだけでは君の気持ちは分らんよ。」

美影の言うとおりアレイスターは学園都市中に5000万機ほど散布されている70ナノメートルのシリコン塊、アンダーライン滞空回線によって、学園都市中を常に監視している。

もちろん、一般の学園都市住人はその存在を知らず、仮に存在の情報を掴んでもその小ささから電子顕微鏡を用いねば確認すらできない代物ではあるが、重力探知によって周辺を原子レベルで観察できる美影はとうの昔にその存在を知っている。

本来なら滞空回線の存在を一般人が知ってしまったら学園都市上層部によって始末されるが彼はレベル5であるため、それとは対象

外である。

「まだ言えることは少ないですけど、これから楽しくなりそうですね。」

「いずれ君の予期していたようになるだろうな。」

「・・・それは覚悟していますが。」

美影は隠微な表情をしているが、アレイスターは彼の心情をつかみ取れているような表情だ。

これ以上このこと話すのは無意味だと感じた美影は口を開く。

「もういいですか？」

「ああ、時間をとらせてすまなかったね。先ほどの研究所は今晚消してくれたまえ。」

美影はワームホールを展開し、その中に入る。  
やはりアレイスターと直接話すのは避けたかったと思う。

彼が引き受けた仕事はアレイスターにとって不要になった研究所の解体。

そしてその研究者の『処分』、つまりこの世から『消し去る』こと。

彼が最初に引き受けたのもたしか研究所の解体であつたはずだ。

美影は明らかに人道に反することを咎めることなく引き受けた。  
それを知られれば確実に人々から非難され、まともな生活なんて出来なくなるだろう。

まして、学校なんて、以ての外。

彼が精神崩壊を起こさず、『人間』としていられるのが不思議なくらいだ。

そうした穢れた仕事を引き受けるのが『暗部』

闇で活動し、人々のために動く組織

決して世間に知られてはいけないこの街の秘密

もちろん妹である美琴にも決して知られてはならない……

## 背徳

(さてと・・・)

アレイスターからの依頼を受けた日の晩、御坂美影は依頼を実行すべく、自分の家から出かけた。

制服だと何かあったとき足がついてしまったため、もちろん私服に着替えてからだ。

研究所の場所は昼間に窓のないビルで見たものを完全に覚えていたため迷わず進む。

場所は第7学区の端。

第7学区は多くの学生が居住、通学しているが、広大な面積のため死角と呼べるところも数多く存在している。

今回の目的地である研究所は違法行為をしているため、目立たず研究を行うためそのような場所に建てられる必要があったようだ。

研究所にたどり着くためには人気のない路地裏を通らないといけないためビルとビルの間にある誰も使わないような細い道に美影は入ろうとする。

が、入ろうと右折した途端多くの目が向けられた。

むさ苦しい数人の男の目と黒い髪を伸ばした中学生の女の子の目だ。

(・・・ナンパか?)

と一瞬思ったがその状況を見るとあからさまに女の子が嫌がっているように見えた。

どうしようか、と悩んでいると男の一人が口を開けた。

「なんだ、テメエ？」

「何だつて言われてもなあ……。とりあえず邪魔だからどいてくれない？」

「ああ！？なにふざけた事いつてんだよ。」

正直に答えたら、邪魔、という言葉が気に食わなかったのかにらみながら美影に近づいてきた。

髪を金髪に染め、鼻にピアスをしていて、背丈は美影と同じくらいだかなり鍛えられていて腕は太い。

美影は、はあ、とため息をつき、

「とにかく邪魔なんだけど……。」

「なめたこといつてんじゃねえ！！！」

どこまでも冷静な美影に対し、頭に血が上った男は美影に殴りかかる。

しかしそのパンチを美影は少しかがむだけで交わし、男の懐に入り、腹に拳を打ち込む。

「ガハッ、！！」

鳩尾に入ったのか、白目を向いて崩れるように鼻ピアスは倒れた。美影は運動神経がかなり良く、反射神経も良いので能力を使わなくても十分強い。

「てめえ、よくも！」

「やっちまうぞ、おめえら！！！」

「泣いてもゆるさねえぞコラア！！！」

仲間が倒されて激情した不良たちが一気に美影に襲い掛かる。

「あ、危ない！！」

不良たちにナンパされていた少女が美影の身を案じ、叫ぶ。

ケンカ慣れしている不良たちに一人の少年が勝てるわけないと思  
い、見ていられなくなる。

しかし美影は恐れることなく不良たちの飛び交う攻撃を紙一重で  
かわし、体勢を崩した不良たちの腹を拳でついたり、首元に手刀を  
打つなりして、全員をほとんど一撃ずつで気絶させた。

「・・・え？・・・」

その少女は美影の流れるような動きに目を見張る。

それに対し美影は何事もなかったかのように路地裏へと入ってい  
く。

「あ、あの！」

「ん？」

「あ、ありがとうございます！ 私、さっきこの人たちに囲まれて。」

その少女は助けってくれた美影にお礼を言う。

当の本人は助けるつもりはなく、どちらかというと正当防衛のもりだ。

「ああ、そう。ま、気をつけてね。」

気にせず進んでいく美影。

そんな彼の背中を助けてもらった少女、佐天<sup>さてん</sup>涙子<sup>なみこ</sup>は呆然と見ていた。

（ここか・・・。）

人助けをしたことをまったく気にしていない美影はこれから壊す研究所の前にたどり着いた。

先ほどとは違う、冷たい目になり、研究所全体を重力探知で視る。

（ひどいな、これは・・・。）

その研究所は学園都市における社会問題のひとつ、置き去り（チャイルドエラー）を実験動物として扱い、非人道実験を繰り返していた。

それに目をつけられ、こうして御坂美影（超能力者）が送り込まれたのだ。

重力探知で視えたものは子供たちの死体。

生きている子供たちも十分に食事を与えられず、実験を繰り返されたのか、かなり弱っているのが分かる。

美影はこのような研究所はいくつも見（壊し）てきた。

（いゝか……。）

美影は嚴重なバリケード、分厚い壁をブラックホールで全て壊し、研究所に入っていた。

「はあ、 はあ、 ・ ・ ・ くそお！！ どうしてこうなった！！！」

白衣を着たとある研究者は逃げ惑っていた。突然やってきた、名も知らない少年から。

その少年は研究所に入ってくると、この研究所を潰しにきた、といい、機器や防犯装置などを容赦なく壊し、抵抗する研究者たちも迷わず能力を使い殺していった。

そのときの少年はとても冷たい目をしていた。

「なんなんだ！！ あいつは！！！」

その研究者は自分が危険な目に合いそうになるとすぐさま逃げようとした。

が、出口が壊され、その行く手を阻まんとするかのようになどに瓦礫によって塞がれていた。

言わずもがな、それは美影が誰も逃がさないように仕組んだことである。

「くそっ！ くそおっ！！！」



なんとかして瓦礫を動かそうとしたがびくもしない。

次の逃げる手立てを考えていると後ろから、コツ、コツ、と足音が聞こえる。

(・・・!!!)

足音に一瞬怯えるが居場所が気づかれないうになんとか声を出さないようし、物陰に隠れ、逃げるときにとりについた拳銃を音を立てないようにし、構える。

(・・・来るなら来い!! 撃ち殺してやる!!)

足音が近づくにつれ、大きくなっていく。

それに伴い、拳銃を握る手に汗が出てくる。

突然、足音が止まった。

最後の足音の大きさからして相手は遠くはない。

今、飛び出すと同時に撃てば確実に殺せると思い、勢い良く物陰から出る。

「・・・あ、あれ!? いない・・・。」

そこには足音を出していたであろう少年の姿はない。

少し気を緩めたその瞬間、

「誰がだ?」

前方ではなく後方から声が聞こえる。

それに反応して拳銃を構えるが気づくのが遅く、拳銃を持つ腕が謎の黒い物体に飲み込まれる。

「う、うわああああアアアあああ!!!!!!!!!!!!!!」

あまりの痛みに大声で叫ぶ研究者。

その腕からはどす黒く、鉄くさい液体が流れる。

「やめてくれ!! 何でもするから!! 頼む!!!!!!」

必死に命乞いをする研究者。

だがその言葉は届いていないかのように美影は表情をまったく変えない。

「うるさい。」

一言だけいい、研究者の体を全てブラックホールで飲み込む。後に残ったのは赤い、赤い、研究者の血、のみだ。

美影は軽蔑するかのようにその液体を見る。

いつからだろうか、

人を殺すのに躊躇しなくなったのは。

研究者を全員消し去った後、美影は置き去り（チャイルドエラー）たちが幽閉されている建物の扉を開けた。

ドアを開ける音に怯える弱った子供たち。またつらい研究がはじまると思ったのだろうか。

「大丈夫だよ。俺は皆を助けに来たんだ。」

優しく微笑み、子供たちに言う美影。

そんな彼を見て、子供たちは少し顔を緩める。

「もう、じっけんしなくてもいいの？」

「ああ、もう大丈夫。研究者はもういないから皆ここから出られるよ。」

優しく頭を撫でながら言う美影。

一気に緊張の糸が切れたのか、喜びのあまり、泣き出す子供たち。そんな子供たちを見て、再度微笑む美影。

いつからだろうか、

人を殺した後でも微笑むことができるようになってしまったのは

置き去りたちは、その後、アンチスキル警備員によって、保護され、病院で治療を受け、養護施設へと預けられた。

その中には、すでに帰らぬものとなった子供も数多くいた。

## 背徳（後書き）

評価 宜しく願います

( 2 + 6 ) + 4 (前書き)

ちよつと時間飛びます



( 2 + 6 ) + 4

6月

季節の変わり目であり、緑が生い茂げ、各学校で衣替えが行われることで景色は、がらりと変わる。

また、梅雨になり、雨の日や湿気が多くなり、心地悪く感じる者も少なくないだろう。

ジュンブライド

June brideというものがあるが、それは西洋での文化であり、

学生が8割を占める学園都市ではほとんどの者が関係ない。

しかし年頃の高校生にとって、恋愛は一年を通してのイベントであり、日々あの手この手で意中の異性に近づこうとしているものも多い。

「わたしと・・・付き合ってください!!」

6月の第一金曜日。

学園都市の第18学区、長点上機学園の屋上、ここにも恋愛に夢中の女子生徒がひとりいた。

目の前にいるのは思いを寄せている男子生徒。

身長180センチメートル、顔が整っていてさわやかな印象がある少年、御坂美影だ。

4月の入学式から2ヶ月、超能力者（レベル5）は超エリート高である長点上機学園でも希少な存在であるため彼らに興味を持つ者も多いため、今では学園内のほとんどの生徒に顔が知れ渡っている。今もなお勝負を挑んでくる者もいるが、誰一人としてレベル5には勝てない。

だが美影は一度も勝負を引き受けていないため、彼が能力を使うところを見たものは無に等しい。

そのため、もしかしたら第六位は弱いのではないか、と考えるものも出てきた。

「え〜と、…………ごめんなさい。」

「…………そう、…………残念ね…………。」

誘いを断る美影に落ち込む女子生徒。  
制服から2年生だと分かる。

「やっぱり、無能力者（レベル0）だからかな。」

「いや、レベルは関係ないし、知らなかったんですけど。」

断る理由がレベルの差だと決め込み、落ち込んだ顔になるが、念頭がない美影はすぐさま否定する。

彼はもともと人に対してレベルを判断材料としていない。

それは能力が全てであるとは考えていないことや、その卑小な考えが自分を小人物としてしまうと考えているからだ。

尤も、レベルにこだわり過ぎたあまり、人間関係を壊してしまったものは学園都市には多くいる。

「じゃあ、なんで私じゃだめなの？」

「ん〜、なんていうか・・・自分に余裕がないって言うか・・・。」

恋愛に興味がないわけではないが、今告白した人は恋愛対象に入っていないかったようだ。

うまくは言えない美影ではあるがとにかく付き合えないことが伝わったのか、その先輩は諦めた。

「・・・わかったわ、時間をとらせてごめんね。」

そういつて手を振り、校舎内に入っていく女子生徒。

美影は別に悪いとは思っていない。

だが、何か気に入らないことがあったようだ。

美影は意識を別の方向に向け、口を開く。

「いつまでそこにいるんだよ、帝督。」

屋上の給水タンクの陰に隠れていたのは、美影と同じレベル5の垣根帝督。

一連の状況を見ていたようだ。

「なんだ、気づいていたのか。」

「屋上に来たときからな。」

彼らは入学式の日知り合い、交流していき、今では下の名前で呼び合っている。

「あの先輩の何がだめだったんだ？ 顔はいいと思うが。」

「顔はともかく、性格かな？」

「今の先輩のこと知っていたのか？ レベルは知らなかったみたいだが。」

「いや、全然。初めて会った。」

「じゃ、なんで？」

首を傾げる垣根。

まさか今のわずかな会話だけで分かったとは到底思えない。  
精神系能力者なら話が別だが、その系統の超能力者<sup>レベル5</sup>は別にいる。

「あの人一昨日お前に告っていたろ。」

「・・・ああ、そういうことか。」

垣根はその一言で納得した。

告白した人がすぐ別の人に告白するというほど移り変わりが激しい、ということが美影は気に食わないようだ。

「聞いた話ではあの方は一度付き合った人の金を搾り取れるだけ搾り取ってポイ、だそうだ。」

「ふーん、断ってよかったなあ。」

レベル5とレベル0との奨学金の差には天と地ほどの差がある。  
レベルを気にしていたのはむしろ彼女だったようだ。  
もしかしたら一方通行や削板にも手を出しかねない、いろいろな意味で美影は心配になる。

「ていうかそんなこと誰に聞いたんだよ？」

素朴な疑問だが、やはり、気になる。

美影自身、人には言えない情報網があるが、垣根にもなにかあるのだろうと思う。

「俺のファンの女の子に聞いた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その言葉に呆れたような表情を浮かべる。

女子との交流に積極的な垣根はレベル5の中でも取り分け人気が高い。

すでに垣根帝督ファンクラブなるものが出来ているらしい。しかもそれは他校にも広がりつつある。

実は美影にも出来つつあるのだが、本人はまだ知らない。

「んで、なんでお前はあの先輩を振ったんだよ。告白されてから聞いたんだろ？、それ。」

タラシな帝督に若干引きつつ逆に聞く美影。

垣根も顔はいい、と言っていたからだ。

「胸が小さかったから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・聞かなきゃよかった。」

予想を遥かに上回るほどくだらない理由だったため、さらに顔が引きつる。

何も言つ氣がなくなつたのか彼も校舎の中に入つていった。

「分かってないなあ、美影。胸つていうのはなあ、男のロマン・・・・・・・・つていない・・。」

変態持論を熱弁し始めようとしたが美影がいなくなったことに氣づき、口を閉じる。

もしここにファンがいたらどうなつていただろうか。

変態のレッテルを貼られる可能性もあるが、垣根の期待にこたえようとする物好きももしかしたらいるかもしれない。

（・・・・相変わらず話していても考えていることが読めねえやつだ。ある意味一方通行よりも厄介かも知れねえ。・・・・・・・・そうだ、いい事思いついた。）

今だ情報が少ない美影を探ろうとした垣根はとある事を思いついた。

それはもちろん美影にとって迷惑な事に他ならない。

「ふう~~~~~。」

その日の夜10時、美影は風呂から上がり、バスタオルで頭を拭きながらテレビをつける。

その時間は美影が毎週見ているドラマが始まる時間だ。

美影は一人暮らしのため、だれの目を気にすることなくすごしている為、上半身裸で脱衣所から出てくる事もある。この日もそうだ。彼は体は細いが付くべき筋肉はしっかりと付いている。いわゆる細マッチョだ。

(ん?・・・)

美影がパジャマを着終わったとき、彼の携帯になる。着信音から察するに電話だ。

携帯電話を取り、画面を見ると『垣根帝督』と映し出されている。こんな時間に電話される事は初めてだったため、不思議に思い、通話ボタンを押し、耳に当てる。

「なんだ、帝督。」

『あーもしもし、美影か? お前明日なんか用事あるか?』

突然予定を聞かれるが、明日は土曜日。

今週は仕事も入っていなかったため、適当にパソコンでもいじっているつもりだった。

そのため美影は暇という事になる。

「いや、何もなかったはずだが。」

『それはよかった。 ちょっと明日付き合ってくれないか。』

「別に良いけど、何すんの？」

『それは明日のお楽しみだ。』

怪しい、としかいいようがないのだがあれこれと聞くのが面倒になり、美影はそれ以上何も聞かなかった。

その後、時間や集合場所を聞き、携帯を閉じ、美影はドラマに集中した。

その翌日、美影は垣根と集合場所で会い、垣根がとりあえずファミレスに誘うので仕方なく入る。

帝督は第18学区に住んでいるのだが、なぜか集合場所は第7学区だ。

そのため入ったファミレスは美影がよく知っているところで、一方通行に入学を進めたところでもある。

昼時だが、食事をする訳ではないので二人は席に着き、ドリンクバーだけを注文した。

「なにすんの？、これから。」

美影は紅茶を飲んでいる垣根に尋ねる。

電話では教えてくれなかったため、先ほどからきになっていたのだ。

「俺とお前のふたりでナンパしようかって。」



「はあ？ 何言ってるの？」

わけが分からない、といった表情になる美影。

正直彼はそんな事で異性と付き合おうとは思わない。

「せっかくいいナリしてんだから、使わないともったいねえじゃん。」

「意味わかんねえ。」

帝督が言つとおり、美影も十分イケメンの部類に入る。

本人は意識していないがその気取らない性格も異性をひきつける要因となっている。

そこを利用しようとしているのだ。

「いいから外でも見ていろよ。きっとお前の好みの女もいるだろうしさ。」

「好みの女ねえ。」

美影の異性のタイプは美影自身も実は良く分かっていない。

普通が一番、とは思っているが普通、というのも曖昧で説明しにくく、また仮に普通の女がいたとしてもそれではつまらないかもしれない、という気持ちもある。

また逆に完璧と呼べるような人も面白みがないかもしれない。

外を見ようと顔を向けようとするがその向ける途中である一点に視線が行く。

店内にいるウェイトレスの女性。

決して、彼女が気に入ったわけではない。

「どうした？」

美影の異変に気づき、尋ねる垣根。

彼も美影の視線の先を見る。

「あの店員、なんかおかしくないか？」

「なんか困っているみたいだな。」

二人が言っており、そのウェイトレスは見るからに困っている。  
ある方向をずっと見ながら、その方向へ足を一歩踏み出そうか出  
さまいか、視線の状況について店長か誰かに相談しようかしまいか  
迷っている。

見方によつては怯えているようにも見える。

彼女の視線の先を見ようとする二人。だが、そこには座ったまま  
では一見することの妨げとなる仕切りがあるため、何も見えない。  
二人は同時に立ち上がり、見る。

そこには4人の女子がいた。

昼時ではあるが、テーブル席を陣取っている麦野沈理むきのしずの前にある  
ものはファミレスで注文したものではなく、コンビニで購入したシ  
ヤケ弁当。

それを彼女は堂々と、遠慮なく食べている。

「あれ？ 今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど。あれー？」

ストッキングに覆われた足を組み直しながら、そんなことをつづやいては首を傾げる。

同じテーブルに座っている連中はどいつもこいつも変人ばかりだ。

「結局さ、サバの缶詰がキてるわけよ、カレーね、カレーが最高。」

麦野の隣にいるフрендаという金髪碧眼の女子高生はそんな事を言って缶詰をいじり回していたが、缶きりが上手く使えないのか、何かビニールテープのようなものを缶詰にぐるりと貼り付けると、電気信管を取り付けて爆薬で焼ききった。

本来はドアをこじ開けるのに使うツールだったと思う。

一方、フрендаの向かいに座っている絹旗最愛きぬはたさいあいという、ふわふわしたニットのワンピースを着た、12歳ぐらいの大人しそうな少女は、そうした変人たちの行動を一切気に留めず（良識があるとか心が広いとかではなく、そういう種類の変人なのだ。）、映画のパンフレットに目を通しながら、

「香港赤龍電影カンパニーが送るC級ウルトラ問題作……様々な意味で手に汗握りそうで、逆に超気になります。」

と、共感できる者がいそうにないことを言いながら、ひとりパンフレットに集中している。

彼女の隣にいるのは脱力系の少女、滝壺理后たきつぼりこう。

彼女は食事に手をつけず、ソファ状の席にだらつと手足を投げ出したまま、どことも取れないところに視線をさまよわせ、

「……南南東から強い信号がきてる……。。」

彼女たちは『アイテム』。

表では普通の生徒のように学校に通っているが『裏』では学園都市の非公式組織で、主な業務は『上層部』の暴走の阻止。

御坂美影の『スペース』、垣根帝督の『スクール』と同等の機密レベルで扱われる集団だ。

(……………)

御坂美影はそんな変人たちの行動に絶句していた。

彼女たちのことは自身の情報操作により、大体のことは調べ上げられていた。

特に4人のなかで、リーダーを勤める麦野沈理は美影と同じ超能力者『レベル5』の一人で、序列は彼より二つ上の第4位。

十分要注意人物ではあるが、データにはない奇矯な行動を見せ付けられ、彼女たちに対する印象が変わりつつある。

そして、こいつらに関わりたくない、という考えに達した。

だが、隣にいる垣根帝督はそれらの行動に気に留めず、

「あれ、麦野じゃねえか。」

「あら、帝督。」

美影は垣根の方を向き、知っているの？、と聞くと、幼馴染、と返事が来た。

その意外なレベル5間の関係のことも美影は知らなかったようだ。美影にとって、十分変人と呼べる垣根が変人たちに近づいていくので、ひとり、取り残されないように彼もしぶしぶ付いていく。

アイテムの4人は垣根と面識があったため、特に不審に思うことはないのだが、後についてきた者の顔は見たことない。そのため麦野は若干無愛想に尋ねる。

「そいつ誰？ 帝督。」

「しがない、第6位です。」

返事が返ってきたのは初めて顔を見た美影自身。

彼女たちも今まで第6位のことはまったくといっていいほど情報が入ってきておらず、今年、長点上機学園に入学したという噂しか聞いていなかったので4人とも驚いた顔をする。

「あんたが第6位……。」

「あれ？、帝督、言っ てなかったの？」

「そういえば言っ てなかったな。」

彼女たちの驚きように気づき、彼女たちのテーブル席の隣にある二人用の席に垣根と座った後、おそらく全員と知り合いである垣根に聞く。

だが彼は忘れていたかのように答えた。

「で、あんた、名前は何なの？」

数秒前までノーマークだった美影に興味をもち、尋ねる。その質問の答えも彼女たちにとって驚くべきものだった。

「御坂美影だよ。」

「御坂！？・・・てことは第三位の親戚？」

「実の兄だよ。」

入学式の日には垣根としたものとまったく同じ展開になり、再度驚くアイテムの4人。

やはり、知っているものにとつて、この事実は思いがけない事実だ。垣根はそんな彼女たちを見ながらニヤニヤしている。

麦野は何か思考しているようだが、美影は口を開き、

「俺のこともいいが、そっちも自己紹介しろよ。」

と、軽い口調で言う。

彼女たちのことは調べあげているが、そのことを話せば彼女たちと同じく変人扱いされてしまう、と思い、一応名前をきく。

「絹旗最愛です。」

「フrendaってわけよ。」

「滝壺理后。」

「私が超能力者第4位、<sup>レベル5</sup>麦野沈利よ。」

一人ひとり名前をいい、最後に序列を強調しながら麦野沈利が言う。

「どうやら、その数字を気にしているようだ。」

「で、あんた達何でここにいたの？」

「ああ、それは帝督がこれからナ

」

事のあらましを話そうとした美影だが、不意に帝督に首をつかまれ、体の向きを強引に後ろに変えられ、肩を組まれる事で遮られる。垣根は何か慌てているようだ。

「（なにすんだよ。）」

垣根の様子を見て、後ろの麦野たちに聞こえないように小声で言う。

「（頼むから、麦野にナンパのことを言わないでくれ。・・・あいつ俺の女付き合いのこととなるとうるさいんだよ。）」

早口で口止めを要求する垣根。

だが美影はそのことに対して何も言わず、

（あ、おもしろいこと聞いちゃったな。）

と、心の中でいたずら心を働かせ、悪巧みをしていた。そんな彼らの行動を不審に思った麦野は、

「で、なんでここにいたの？」

今度は少し声に力をこめて言う。

垣根が手を離し、二人は振り向く。垣根は無理して笑顔を作り、美影に指差し、

「なん、なんとなくこいつと第7学区で遊ぼうかなって話だったんだよ。」

明らかに焦りを表情に浮かべながら何とかして美影の言葉につなげようとした。

麦野はやはり不審におもいつつも尋問する気にならなかったのか話題を変える。

「あ、そうだ。第6位、あんたメールアドレスよこしなさいよ。」

「ん、いいよ。帝督送つといて。」

第4位にアドレス交換を要求されたので、レベル5のつながりを増やしといて損はないと思い、この場で二人のアドレスを知っている垣根に二人にそれぞれアドレスを送るよう注文する。

「やだよメンドクサイ、自分たちでやれよ。」

「そういえばこのあと、お前の予定通りナ」

「よし、少し待ってる。すぐ送る。」

美影にわざとつかりばらせそうになったのでまた言葉を遮り、急いで携帯を取り出し、アドレスを転送する。

その狼狽した垣根の行動をみて、美影は心の中で思う。



(・・・これ、使えるな。)

「そういえば、お前ら『アイテム』はこんなとこで何やってたんだよ。」

麦野に感ずかれる前に話題を待つたく別の方向に向ける垣根。

正直さっきまでの彼女たちの状況は食事以外のなんでもないように見えたのだが、本当は違う目的があった。

「実はこの後、仕事があつてね。その打ち合わせだったのよ。」

『仕事』という単語に美影は疑問を持たないように見えたので、麦野は彼もなにかやっているのだと予想する。

それ以前に『裏』と何のかかわりもなかったら例えレベル5といつても情報がほとんど出回らない、なんて事にはならないのだが。美影と帝督は適当に相槌を打つが、麦野はとあることを思いつく。

「そつだ、あんた達も手伝いなさいよ。」

「はあ、なんでこんなことになったんだ？」

「まあそんな風に超落ち込まないでくださいよ。」

「結局、御坂と私たちはは麦野に上手いこと使われたってわけね。」

「大丈夫。私はそんな利用されたみさかを応援してる。」

（うれしくねえよ。）

美影の近くに居るのは『アイテム』の麦野を除く絹旗、フレンド、滝壺の3人が彼の後に続けて言う。

彼女たちの依頼は先日の実影と同じ、研究所の殲滅。場所は第10学区。

その研究所は大きく二つに分けられ、主に研究者が研究をするための施設と実験用の置き去りたちが隔離されている施設。

そのため、二手に分かれよう、となったのだが、麦野と垣根の二人がが研究施設、その他が収容施設というようになった。

「で、あの二人の関係についてどう思うってわけよ、御坂は。」

金髪碧眼のフレンドが楽しそうに言う。

彼女たちも気づいているようだ。

「両思いだけど互いになかなか気持ち伝えられずにただ時間だけが過ぎ去ってしまう幼馴染って言う恋愛ものに使い古されたようなパターン。」

「超同感ですね。麦野って意外と子供っぽいところがありますからなかなか思い切ることが出来ないんですよ。」

アイテムで最年少の絹旗に子ども扱いされてしまう。

もし本人がこの場所にいたら何が起きていたであろうか。

「そんなに子供ってわけでもないだろ。レベル5でも最年長なんだから。」

「むぎのはゲームで一度失敗したらエンディングを見ても納得しない。」

「それに寝るときはボロボロのぬいぐるみを抱いてないと寝れないってわけなんだからほんと笑えるよね。」

「・・・まじかよ。」

意外な事実が次々と発覚していき、ここでも面白いネタがつかめた、と思う美影。

もう研究所のことなんてどうでもいいとも思ってしまうほどの驚きだ。

「そんなこと俺に言っただ丈夫なのかよ。」

一応心配しているように見せるため問う。

「御坂が何も言わなければ超問題ありません。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「無言!?!」

絹旗の言葉に何も返事がないので一気に心配になり、フレンドが声をあげる。

他の二人も慌てているようだ。

「超言わないで下さいよ。」

「……あ、なんか来た。」

「第6位~~~~~。」

まるで殺されるかもしれない、といった表情になる3人。  
だが美影は目の前のものに警戒していた。

「……<sup>パワードスーツ</sup>駆動鎧か。」

<sup>パワードスーツ</sup>  
駆動鎧

服のように着込むことで、人間の身体能力や動作を外側から強化する機械の総称だ。

タイプは様々だが、彼らの目の前にあるのは研究所内でも動きやすい小型のものだ。

おそらく守衛用に研究所に所有されているのだろう。

『なんだお前たちは。』

駆動鎧につけられたスピーカーから中に入っているおそらく男性の声が聞こえる。

監視カメラに写った怪しい集団を排除するために出てきたのだ。

「あー、ここ潰しに来ました。」

シリアスな雰囲気などまったくない声でどうでも良さそうに答える美影。

その駆動鎧の中の男はそんな彼の態度に激怒する。

『なら、今すぐ消えろー！！』

腕を前に出し、そこにはマシンガンのような銃口が出てくる。  
だが彼よりも早く一人の少女が動く。

「これくらい私だけで超十分です。」

絹旗の能力はレベル4の『オフエンスアーマー室素装甲』、空気中の『室素』を自在に操ることができ、その力は極めて強大で、圧縮した室素の塊を制御することにより、自動車を持ち上げ、弾丸を受け止めることができる。

そのため彼女は恐れず突き進み、駆動鎧に一発殴る。  
その威力は絶大で、それだけで駆動鎧は二つに割れた。

「おおー！ー！。」

「これくらい超朝飯前です。」

美影は彼女の行動と能力に賞賛し、声をあげる。その声を聞き、絹旗はうれしそうだ。

「・・・つ、くそ、このままではすまんぞ！ー！」

駆動鎧から出てきた男は這うようにして動き、壁にあるスイッチをたたく。

そこにあるシャッターが開き、出てきたのは大きなバズーカのようなものだ。

「絹旗、あれ止めれる？」

「ちょっと超無理です。」

（……とにかく無理なのか。）

絹旗のどこがおかしな表現に不思議に思うがとりあえず自分がやるしかない、と思ったので一步前にでる美影。

彼を見て、能力が見れる、と思ったアイテムは後ろに下がり、観察を始める

「これでもくらえ!!!」

男によって放たれたバズーカは御影に一直線に向かう。  
だが彼が作り出したブラックホールによって跡形もなく吸い込まれた。

驚き、逃げようをする男。

美影は走り出した男にかかる重力を操作し、男の体を壁に打ち付け、その衝撃で気絶した。

「「「おおー……。」「」」

今度はアイテムの3人が初めてみる美影の能力に声をあげた。

見張りは一人だったのか、垣根と麦野が始末したのか、そのあと誰も4人の前に立ちふさがる者はいなかった。

無事、幽閉されていた子供たちを助け、研究所を出る。

そのあと、麦野となぜか腰を押さえている垣根と合流する。

後で話を聞くと、女って怖いな、としか返ってこなかった。  
何があったかは知らないがとにかくそれで女癖が直ればいい、と  
美影は思ったがそれはないだろう、とも同時に思った。

垣根と『アイテム』の4人と別れたあと、美影は小腹が空き、コンビニに立ち寄っていた。適当にチキンを買い、店を出ようとしたとき、ポケットの携帯のバイブ機能が働く。  
見ると、メールで、差出人は今日帝督からアドレスをもらった麦野沈利からだ。

メールを見ると、書いてあったことは、

f r o m    麦野沈利  
s u b      無題

明日、今日と同じ時間に同じファミレスに来ること。

必ず一人だよ。

E N D

と、一方的な内容であるが、明日は日曜日で、特に用事もなかったので、適当に返事のメールを打つ。

コンビニから出ながら、送信ボタンを押したその瞬間、

横から猛スピードで走ってきたツンツンした短めの黒髪の少年とぶつかった。



( 2 + 6 ) + 4 (後書き)

評価 お願いします

## 内幕

「あー、くそ、なんだこれ、とにかく不幸ーだー！ー！ー！ー！」

「まちやがれ、逃げ足大王！ー！」

第7学区に住む少年、上条当麻<sup>かみじょうとつまま</sup>は大声を張り上げながら全速力で逃走している。

彼一人に対して追いかけているのは7人。

なぜこんなことになったかというゴミ箱に投げ入れようとした空き缶が風のせいなのか、手がすべたのか、大きく起動がずれ、近くにいた不良の頭に当たった、という普通ではありえないともいえることが起こったからだ。

彼は生まれつき、極度の不幸体質で、こういうことはよくあるのだから驚きだ。

「へっへーん！ 誰が待つものですか！」

足に自信があるのか、余裕があるのか、そんなことを後ろに向かっている。

だが、その軽率な行動をしたために、前方のコンビニから誰かが出てきたのに気づかず、そのまま直進してしまう。

「うわっ！　ちょっ、そげぶー！」

「ん？　おっとっと。」

コンビニから出てきた少年は横から走ってくるものがあることに気づき、とっさに回避しようとするが、避けきれず、肩があたってしまったため、自分は転ぶことはなかったが、逃走中の上条当麻はその衝突でバランスを崩し、盛大に倒れてしまった。

「いたたた、あー不幸だ。」

「おーい、大丈夫か？　・・・ん？」

安否を尋ねるが、その少年を追いかけていた不良に自分も囲まれていることに気づく。

「へっへっへ、馬鹿め、誰かにぶつかってやんの・・・って、デメエはー！」

上条の足が止まり、下品な笑いをする不良の一人。  
だが彼は上条に肩をぶつけられた少年、御坂美影に見覚えがあった。

「ん？　あーあ、またお前か。」

美影の目の前にいるのは、以前、少女を取り囲んでいた金髪に鼻ピアスの不良だった。

その不良の周りにいたのは彼と同じ、以前、美影に伸された不良たちばかりだ。

「デメエ、ここで会ったら百年目、今度こそぶっ飛ばしてやる!!」

不良たちの痛めつける対象が缶をぶつけた者から美影に変わり、  
今にも飛び掛りそうだ。

（はぁ・・・面倒だなぁ・・・  
・・・物騒なもの持ってるし・・・  
ん？）

重力探知で不良たちの所有物を探っていると、とあるところが気になった。

不良たちは容赦なくナイフやスタンガンなどを美影に向けながら襲い掛かる、が、また美影に全て躲され、またほとんど一撃ずつで気絶に追い込まれた。

彼は無闇に能力を使うことを嫌い、また体は鍛えられているため、不良への対処はこのようなパターンが多い。

「ははは、どこの誰かは知りませんが、ありがとうございます。」

その一瞬の出来事に驚いていた上条はお礼を言う。  
ぶつかったのが美影だったのは不幸中の幸いだったようだ。

「大丈夫か？」

右手を差し出し、地べたに座っている上条を立ち上がらせようとする。

上条は彼の手を掴むが、掴んだ瞬間、パシン、という音が鳴り、  
美影の重力探知がかき消された。

「・・・え？」

「・・・おもしろい右手だね。」

うまく状況が飲み込めていない上条に対し、美影はどこか納得したようだ。

「なにをしたんでせう？」

「いやー、さっき俺の能力に反応しなかったから気になってね。」

美影が先ほど不良たちの持ち物検査をしていたとき、後ろにいた上条の右手だけはなぜか見えなくて、まるでそこだけ何も無い空間のようになっていたのだ。

重力を読み取る美影が探知できなかったので、まさか重力が右手だけにかかっていない、とは思わないので、もしかしたら能力に反応しない能力か何かか、と思い、能力を発動しながらそれに触れてみたのだ。

「まさか本当に能力を打ち消すとは。」

「ははは、なんでも俺の右手は幻想殺<sup>イマジンプレイカー</sup>し<sup>イ</sup>って言うらしく、異能の力なら打ち消すんだよ。」

（異能の力なら、ねえ。）

美影は彼の右手に興味をもち、後で書庫<sup>バンク</sup>で検索<sup>ハッキング</sup>してみようかな、と考えていた。

「あ、名前がまだだったな。俺は上条当麻、高1だ。」

「御坂美影、同じく高1だ、宜しく上条。」

二人は再度、右手で握手を交わした。

（イマジンプレーカー  
幻想殺し、か……。）

美影は上条と別れてから、帰宅し、パソコンの前で思索していた。  
目の前の画面に現れているのは、

上条当麻      l e v e l      0

（……アレイスターが隠そうとしているのか？ 現に俺の能力を打ち消したのにレベルが0なんてありえない。もしかしてあれも……）

美影は目にも止まらぬ速さでキーボードを弾き、次々とあらゆるデータに潜り込むが、彼の右手に関する記述は何もない。

幻想殺しの実験を行われていないのか、意図的に行われないうにされているのか、はたまた知る者がいないのか。

美影はハッキングをやめ、ふう〜、とため息をつく。

彼が調べようとして、調べることが出来なかったのは今まで片手の指ほど数はない。そのため、もやもやとしたものが彼の心に残る。あきらめ、違うサイトでも見ようかな、と思ったが、やはり気になっってしまう。

そこで、ある手段をとることにした。

靴も履き、玄関から出て、鍵を閉め、周りに誰もいないことを重力探知で確認したあと、ワームホールを目の前に作り出し、その中へ入っていった。

「おや、招待はしていないはずだが。」

「そう堅いこといわないですよ、アレイスター。 用件は分かっているでしょう？」

美影がワームホールで移動した先は、アレイスター＝クロウリーがいる窓のないビルの中。

この人なら確実に何か知っているだろう、という結論にしか達しなかったからだ。

「上条当麻、幻想殺しのことか？」

「ええ。」

やはり、あの握手を滞空回線アンダーラインで見ていたようだ。  
そしておそらく美影がここに来ることも予想していただろう。

「君といえど詳しくはいえない、が、彼は私の『プラン』に大きく関わっているとは言っておこう。」

「・・・やつぱりねえ。　もしかして『魔術師』とも接触させるつもりですか？」

「いずれな、君の手をかしてもらうつ時も来るだろう。」

「・・・いやですよ『魔術』とこれ以上関わるなんて。　土御門つちみかどがいるでしょう。」

「彼はまた違うところで働いてもらうことになっているのだよ。」

先ほどから出ている『魔術』という単語。

世界一『科学』が発達している学園都市にとってそれはオカルトと呼ばれ、空想のものでしかない。だが、それは実際に存在している。

土御門、というのは魔術サイドの人間で学園都市・イギリス清教などから依頼を請けている多角スパイで、一方通行も所属している『グループ』や魔術サイドの『必要悪の教会』にも所属している。また上条と同じ学校に通っていることを美影は先ほどのハッキングで知った。

彼がイギリスと日本を行き来する際にあたって、足が付かないためにも美影のワームホールが利用されることもたびある。

そのため、美影は『魔術』の存在を知ってしまっているのだが、詳しくは知らない。

「学園都市の外で何かする気はないんですけど。」

「なら君には学園都市内で動いてもらうとしよう。」

美影の反論は想定内であつたらしく、それ以上アレイスターは何も言わなかった。



だが、確実に今までなかったことで動かされることになるだろう、と美影は思った。

「はいはい。わかりましたー。」

適当に返事をした後、美影は元の場所に戻った。

（あ、そういえば明日麦野に呼ばれていたっけ。）

別れて10分くらいで来たメールのことを不意に思い出す。

やたら一人で来ることを強調していたみたいだ。

用件は垣根のときと同じく聞いていないが、こちらのことは大体の予想が付いていたため、不審に思うことはなかった。

内幕（後書き）

評価 お願いします

上条当麻、幻想殺しについて、アレイスターからわざわざ話が聞いた日の翌日。

御坂美影は昨日と同じファミレスへと歩いていた。

(梅雨だというのにここ2、3日雨が降らないなあ)

空を見ながら思う。

水溜りはあちこち見られるが、どれも新しいものではない。

学園都市の天気予報は人工衛星『おりひめ1号』に入れられた高性能並列コンピューター、

ツリーダイアグラム  
樹形図の設計者によって、秒刻みで未来予測が行われるため、予報というよりは予言というほうが正しいだろう。

そのため、この日曜日にも雨が降らないとテレビで言っていたので、念のため傘を持ち歩く、なんて者は学園都市にはいないだろう。

美影がファミレスに入るとすぐに麦野沈利が軽く手を振っているのが見えた。

待ち合わせということを定員にいったのか、彼女は一人でテーブル席に座っていて、その上には昨日と同じ様なシャケ弁は置いてなく、紅茶だけがある。

(.....)

美影が麦野を見つけたあと、ふと視線を右に向けると違うテーブル席に昨日少しの間、行動を共にした3人を見つけてしまった。麦野を尾行してきたのか、サイズが合っていない大きな帽子や派手なサングラスをしている。

どうやらあれだけ目立つ格好をしているのに彼女にはばれていないようだ。

何も言わず、麦野の前に座る美影。  
すると麦野から話しかけられた。

「ちゃんと一人で来たわよね？」

念を押すように言う麦野。

彼女に対し、美影は、ふう、と小さくため息をつき、

「俺はな。」

と、麦野の後方の席を指差しながら一言言う。

麦野が疑問に思い、後ろを見ると、そこには美影に指差されて慌てる、『アイテム』の3人がいた。

「あんたたち、変なこといたら承知しないからね。」

「はい」「

美影の両隣に移動した絹旗とフレンドが同時に返事をする。

滝壺は麦野の隣で昨日と同じくだらつと手足を投げ出しているが、興味を持っているような顔をしている。

3人は麦野の不審な動きを偶然見つけ、付いてきたのだ。

美影は、俺も何か気に食わないことをいったら何かされるのか、と少々不安になる。

麦野は3人に口止めはしたあと、3人がいるせいなのか、もともとすぐに言えるようなことではないのか、何も言わず、紅茶が入ったカップに口をつける。

そんな麦野に見兼ねたのか、御影がはぁー、とまたため息をし、

「・・・帝督の事か？」

昨日はこの場にいて、今日いない唯一の人物の名前を言う。

それが図星だったので、麦野は紅茶をのどに詰まらせ、むせる。

「ななな、なんでそれを!？」

動揺し、声のトーンをずらしながら大声を出す。

それをみた4人はリレー方式で次々と言う。

「見ていれはいやでも分かる。」

「やっぱり超その通りだったんですね。」

「結局、麦野は第二位にゾッコンってわけよ。」

「大丈夫だよ、むぎの。私はそんなゾッコンなむぎのを応援して

る。」

直接3人に言ったことはなかったのだが、自分の気持ちが全員にばれてしまっていることにショックを受ける麦野。

「コホン、と息を整え、なんとか冷静な表情を取り戻そうとするが、すぐには出来ない。」

「ま、そういうこと。で、学校ではどうなの、あいつは。」

頬を少し赤く染め、テレながら何とか本題に入った。

学校での事は帝督は幼馴染の麦野には何も言っていないようだ。

「まあ、なんていうか、とにかく女タラシだね、あいつ。昨日もナンパしようぜ、なんてここで言われたし。」

実際、言葉では言い表せないほど帝督はあらゆる女子に好意を持たれていて、最近では週4回は告白される。

その分、男子からの別の意味での熱い視線が耐えないのだが。

「はあ、やっぱりね。昔からそうなのよねえ。」

さらっと、昨日帝督が言わせまいとしていたことを言ってしまったのだが、特に気にかけず、どこか遠いところを見て、物思いにふけながら言う麦野。

彼女を見て、どういつて励ませばいいのか分からなくなった美影はとりあえずコーヒーを一口すすする。

「あいつのファンクラブ、うちの高校にもできているのよねえ。」

麦野が通っているのは長点上機学園と同じ、学園都市の五本指の

一つに入る名門校。

そんなところにも広がっているのか、と美影は呆れた顔になる。

「私も入ったほうがいいのかなあ……。」

すっかり顔が暗くなり、弱音を吐くように言う麦野。  
だが美影はその考えを否定する。

「んなもん、駄目に決まってるだろ。」

「なんで？」

当たり前のことのように即答されたので、聞き返す。

「ファンクラブってのは少しはそいつに近づけるだろうけど所詮ファン止まり。彼女になることなんてまずないだろ。」

美影の言うとおり、アイドルのファンクラブに入っただからといって特別その人に近づけるわけではない。

一瞬振り向いてもらったときに全力で手を振ることや、偶然近くに来たときに手に触れてもらうことや、なんとかしてサインを入手することしか出来ない。

「だいたいアンタは幼馴染っていうほかにはない特典があるんだから、もう少し堂々としたほうがいいんじゃないの？」

美影の言葉に勇気をもらったような顔になる麦野。

さらに美影は言葉を付け加える。

「あと、帝督は何度も告られているけど、一度もそれを受け入れた

ことがないね。何度も適当に女を捕まえているけど本気になったことは一度もないみたいだし。」

これも嘘ではなく真実だ。

美影からは帝督は麦野以上に自分にあつた女がいないことを確かめているように見えているのだが、それはあえてこの場では言わない。

「……………そうね、なんだか自信がでてきたわ。」

「それはなにより。」

ニツ、つと微笑む麦野と美影。

美影は二人を応援しているように見えるのだが、実際には面白そうだからいろいろ言っている、というなんとも失礼な心情だった。だが、少なからずハッピーエンドを望んでいるだろう。アイテムの三人も笑顔で何か話している。

すると、麦野が突然話題を変える。

「実はね、今日あんたを呼び出したのはもうひとつ理由があったのよ。」

これは予想できなかったのか、なんだろう？、と首を傾げている。

「あんたって超電磁砲レールガンの兄だったわよね。」

「そうだけど？」

突然、美琴のことが話しにあげられ、やはり疑問に思う美影だが、



まさか、と、とあることが心に浮かんた。

「あんた、私と勝負しなさい。」

そのとき、美影は麦野の顔が自分が一番良く知っている少女の顔を重なつて見えた。

「おーい、もういーかー？」

「はあ、はあ、はあ、．．そうね、これくらいにしましょ。」

美影は15メートル前方で息を荒くしながら立っている麦野に声をかけ、彼女は諦めたようにそれを了承した。

二人がいるのはとある河川敷。

いつもは平穏な場であり、カップルや登校する生徒が見られるのだが、今さっきまでは超能力者同士の戦場と化してしまったため、ところどころの地面は吹き飛んできたり焼き焦げてしまっている。

その河川敷の土手の階段に『アイテム』の3人は座っていて、その戦闘を見ていたため、驚いている。

自分たちが良く知る麦野<sup>レベル5</sup>沈利がまったく歯が立たなかったことに。

「で、どうなのよ。」

なぜこういう状況になったかという<sup>レベルガン</sup>と第3位を誰よりも知っているであろう御坂美影に第4位と戦うこと<sup>自分</sup>でどちらが上かを見比べて

もらおうということになったからだ。

「超電磁砲と私、どっちが強いよ。」

麦野の質問に、うーん、と頭を抱える美影。

そこで、ひとつの結論に達した。

「万が一、二人が戦ったとしたら、おそらく・・・引き分けかな。」

「どうして？」

その答えに不満があるのか、眉を顰める。

そして、美影は仮説を言い出した。

「お前の原子崩しは確かに強力だ。威力だけなら美琴の超電磁砲レールガンより遙かに上だ。だが強力すぎるためわずかながらタイムロスが生じていて、そこが少し穴になっているかな。あと超電磁砲に比べて応用が少なすぎる。」

「・・・・・・・・・・。」

麦野はそれについてなにも言い返すことが出来なかった。まさしくその通りなのだから。

そこに美影は、これは確証はないけど、と前置きして付け加える。

「超電磁砲も原子崩しも能力の原理は全く違うけど元々は両方とも電子を操作する能力だから、お互いの能力に干渉して攻撃を逸らすことができるんじゃないかなあ。」

麦野沈利の能力、メルトダウナー原子崩しは本来『粒子』又は『波形』のどちら

かの性質を状況に応じて示す電子を、その二つの中間である『曖昧なまま』の状態に固定し、強制的に操る、という能力だ。

そのため、電撃使用の頂点に君臨する超電磁砲とは根源は同じた<sup>あなが</sup>め、美影の仮説は強ち間違っていないといえる。

「・・・やっぱり、気に入らないけど仕方ないわね。」

「そんなに序列が気になるのか？」

不服そうな麦野に尋ねる。

美影は麦野が序列を気にしていることは気づいていた。

「年下のくせに序列が上つてのが気に入らないのよ。」

一番年上のくせに、と思ったが、そんなこと言ったらまた原子崩<sup>ビー</sup>しが飛んでくるかもしれないので控える。

「十人十色なんだからいいだろ。」

それくらいのことしか言えなかったが、麦野はそのことについて何も訴えなくなり、

「まあ、いいわ。大覇星祭にでも決着をつけようかしら。」

「・・・殺すなよ、俺の妹を。」

捕らえ方によっては物騒なことをいう麦野にそうなるとは思わないが、一応忠告しておく。

そこで話しは終わり、

「今日はありがとね、無理言つて。」

本当にそう思っているのかは疑わしいが、先ほどよりも顔色が良くなっているように見える。

だが、麦野は美琴に敵対心を持っているのと同時に先ほどまったくかなわなかった美影に齒がゆい気持ちを抱いていた。

それに気づかない美影ではないのだが、そこに触れないほうがいいと判断した。

その後、『アイテム』の4人は立ち去り、美影だけが河川敷に残された。

「……序列、か……。」

最後に美影が口にした言葉は誰にも届かなかった。

( 2 × 4 )

6 (後書き)

評価 お願いします

偶然（前書き）

週間アクセス200000以上！

とてもうれしいです

偶然

|          |      |             |
|----------|------|-------------|
| 『ブラックホール | 発動時間 | 0・1156秒     |
|          | 体積   | 152立方メートル   |
|          | 制御率  | 99・278パーセント |
|          | 総合評価 | 5           |

』

研究所内に機械音が流れる。

この日は美影の身体検査システムスキャンが行われている。

彼の能力が強力であることや、本人の希望もあつて、学校では行われず、美影専用の研究所で行われるため、平日なので学校は午後から早退だ。

彼の研究所は能力が重力の操作ということもあつてか、航空・宇宙開発分野のために占有させている第23学区にある。

第23学区というのは、一般学生立入禁止の特殊な学区ではあるのだが、彼は特別扱いされている。

「おつかれさん。 今日もいいデータが取れたよ。」

美影の担当研究者が身体検査を終えた美影に笑顔で声をかける。彼の後ろには美影が知らない女性が立っていた。

「その方は？」

その女性に気づいた美影は担当研究者に尋ねる。その女性は白衣を着て、顔は整っているのだが、目の下に隈が出

来ており、見る人に残念美人という印象を与える。

「始めまして、きやまはるみ木山春生です。今日はとても興味深いものを見させてもらったよ。」

白衣のポケットから手を出し、握手を求めたので美影は、どうもと言言ってその手を握り、うしろにいる担当研究者を小さくにらむ。

美影は無関係者に能力を見られるのは嫌っているからだ。

「ああ、彼女は私の知り合いでね、十分信用できる人だ。」

美影の心情を察し、弁明する。その言葉で美影は了承したようだ。彼の研究所の職員は一人ひとり美影自身が見定めているため、彼が信用できない人物はここにはいないからだ。

「超能力者の能力を間近で見るのは初めてでね。いろいろと参考になったよ。」

「お役に立てて光栄です。木山さんの専攻は何なんですか？」

自身の担当研究者が連れてきた木山にわずかながら興味を持ち、尋ねる。

「私の専攻はAIM拡散力場だ。」

「俺たち能力者が無自覚に発している微弱な力のフィールドのことですか？」

「ああ、そうだ。よく知っているね。」



木山は少し驚いた顔をする。

大抵の学生は自分の能力については調べようとするが超能力そのものについて知ろうとする者は思いのほか少ない。

それに引き換え美影は自分の能力以外に関する資料を読み漁るため、そんじょそこらの研究者より博学多識である。

だが、レベル5の頭脳をもってしても専門家には敵わないため、謙遜し、

「いや、それほど知っているわけではありませんが。」

「君が研究に協力してくれれば私としてはうれしいのだがね。」

「はは、出来れば避けたいですね。あまり脳を弄られたくないですから。」

「そうか、それは残念だね。」

具体的に木山がどのような実験をしているのかはわからないが、この研究所以外で実験をしたくはないため、愛想笑いを浮かべ、断る。

「なら、一つだけ私の質問に答えてくれないか？」

隈がある瞳に力が入ったようになり、木山は諮問する。  
彼女の表情の変化に気づき、美影は気持ちを切り替え、

「いいですよ。」

「君は超能力者として学園都市をどう思う？」

この上なくシンプルな問いかけではあるが、いざ聞かれると難渋してしまう。

しかも美影は学園都市の『裏』とも関わっているため、普通の学生よりも『知って』しまっている。

美影は窓からみえる景色を眺め、木山の眼を見て、口を開く。

「とても魅力的なところですが、・・・時には残酷な現実を見せ付けられますね。」

「・・・ほう、そう思っかね。」

「・・・それに、・・・学園都市いんがくとしには、知らないほうがいいことが多すぎますね。」

「・・・!」

木山は息をのむ。美影に、より正確には美影の眼に。

彼の眼はとても学生とは思えないほどの事を語っているように見えた。

レベル5だから誰よりも恵まれている、と今まで思っていたのがそれは大違い。

この街の頂点だからこそ、他の学生が知り得ない現実を見せ付けられ、苦悩しているのだと今までの浅薄な考えを改める。

「・・・そうか、とても参考になったよ。　ありがとう。　今日はここで帰らせてもらうとしよう。」

「もついいのかね?」

後ろにいた研究員が木山に尋ねる。

この後もお互いの研究成果について話し合うつもりだったのだ。

「ええ、私にはやるべきことがあるので。」

彼女はそう言い、研究所から出て行った。

そのときの彼女の顔は意味深な微笑を浮かべているように見えた。

「今回の身体検査は今日で終わりだ。 また今度も頼むよ。」

「はい、では、また。」

美影も研究所を後にした。

（・・・そういえば、彼の名前を聞いていなかったな。 第6位とは聞いたのだが。）

木山春生は先ほどの印象深かった少年の名前を知らないことに気づいた。

美影は研究所を出た後、食料品をスーパーで買おうとしたのだが、財布の中には英世さんが二人しかいないことに気付いたため、お金

をおろそうと近くの銀行へと足を運んだ。

彼は他のレベル5のように金銭感覚は麻痺していないのだが、何  
度も銀行に来るのも煩わしく思うため、いつも必要以上おろしてい  
る。

（今日、なに食べようかな。）

彼は自炊派で、ジャンルを問わず、大抵の料理は出来、しかもか  
なり上手い。

無事、おろしたお金を財布に入れ、夕飯の献立を考えながら銀行  
から出ようとしたその時、

パン、と一発の銃声が銀行内に響いた。

『白井さん、犯人は拳銃を持っています！ 気を付けてください！』

「わかりましたの、初春！」

とある銀行に強盗が入ったと情報が入り、ジャッジメント風紀委員である少女、  
白井黒子しろいくろこは相方である初春飾利ついはるかざりから電話で情報を得ながら天を駆け  
る。

天を駆ける、というのは彼女は空間移動能力者の大能力者（レベ  
ル4）であるため、自分の体を転移させ、いち早く現場に駆け付け  
る。

尤も、彼女がテレポート出来る最長距離は81・5mのため、何  
度も演算する必要がある。

「風紀委員ですの！！ おとなし・・・く・・・。」

銀行内に空間移動し、拳銃を右手に持ち、左手で人質を逃がさないようにしている強盗犯に

決め台詞を言い、降伏を呼びかけようとしたのだが、途中で言葉を止めてしまった。

（・・・どうしてこうなった。）

美影は意気消沈していた。

彼の顔のすぐ横には物騒な鉄の塊があり、彼は男の左手で行動を制限されている。

つまり美影は今、人質となってしまうているのだ。

本来人質とは力が弱い小さな子供や女性が適宜であるのだが、美影は十分力があり、体も小さくない。

だが、美影は銀行強盗がした威嚇射撃を無視し、銀行から出て行くとしたため、強盗犯に目を付けられ、このような状態に至ってしまったのだ。

おそらく強盗犯も人質のミスチョイスには気づいているだろう。

そこに学園都市の事件には欠かせないキャスト、風紀委員が参入してきた。

（おつ、風紀委員が来たか。）

美影はその新来者に気付く。

その気になればいつでも抜け出せるのだが、彼は椿事ちんじを楽しむ癖があるため、観察しようとする。

だがその風紀委員を見ると、見覚えがあつた。

「風紀委員ですの！！ おとなし・・・く・・・。」

彼女も人質に見覚えがあつたため、言葉を詰まらせる。  
無言の時間が流れ、

「あ、あなたは！！」

（・・・なんでこいつなんだ・・・。）

二人は思わぬ状況で再会した。

立場を忘れ、声を上げる白井。だがその言葉の客体こと美影は全力で萎えていた。

「あなたはあの時の！！」

「人違いです。 トニカク、タスケテクダサイ。」

「間違いなくあの強盗の」

「何だテメエら！！ この状況分かってんのか！！」

二人で勝手に会話？、をし始めてしまったので激怒する強盗犯。  
今にも撃ちかねない状態になり、白井は焦るがその拳銃に最も近

くにいる美影には恐怖などなく、このあとどうやって逃げようか、というその場面に不相応なことを考えていた。

強盗犯は目の前の風紀委員を始末しようと拳銃をむける。

白井は焦ることなく、その状況を打破すべく、太もものホルダーに仕込んだ金属矢を拳銃がある座標に転移させ、使用不可にさせる。

「あ、ああ！？ なんじゃこらあ！！？」

突然自分の手にある拳銃に金属矢が生えたことに、戸惑い、引き金を力チ力チ、と何度も引くが、一向に弾は出てこない。

使えない、と判断し、その拳銃を投げ捨てる。

「くそお！！」

彼はそれ以外の武器を所有していなかったのか、逃亡という行動を選択し、人質の美影を押しつけ、風紀委員を撃退しようとする。

相手は能力者といえど、中学生の少女。喧嘩が日常茶飯事の武装キルアウト無能力集団である自分ならなんとかなると感じていた。

だがそれは驕りでしかなかった。

その少女に拳を振るった瞬間、少女は消え、拳は空を切る。

「ああ？」

どこにいった、と困惑している中、後頭部に強い衝撃が走り、倒れる。

彼女は上方に転移し、ドロップキックを繰り出したのだ。小柄とはいえ、一点へ全体重をかければその衝撃は凄まじい。

そして倒れた強盗犯に追い打ちをかけるように衣服に先ほど同

じ金属矢が突き刺さり、礫にされてしまう。

「これ以上抵抗するのなら、これを体内に直接……ですよ？」  
そこで彼は戦意を喪失した。

「あーあ、やっと放してもらった。」

呑気な声で人質であった少年、御坂美影が歩いてきた。  
白井は風紀委員に支給されている手錠を取り出し、かける

「……え？」

美影の手に。

「……何してんの？」

自分はかけられる対象ではないと主張するが、

「今度は逃がしませんの。おとなしく連行されて下さい。」

（あーどうしようかなあ。）

その気になれば手錠の一つや二つ、簡単に壊せるのだが、ふと、  
自分の服装を見る。

名門、長点上機学園の制服だ。

今逃げてでも風紀委員なら学園の個人写真つきの名簿を見れるため、  
今逃げてもしずれ捕まる。ハッキング操作もしていなかったため美影のもしっかり  
と。

しかも今回は監視カメラにしっかりと映ってしまったため、調べ



る手段はいくつかある。

無駄な抵抗は止め、おとなしく、

（まあ、いいや）

白旗を上げた。

「まさかあのような形であなたと会うなんて思いもしませんでしたの。」

「まったく、ホントだよ。」

風紀委員第177支部

第7学区にあり、白井の所属先である。

白井は調書にペンを走らせながら言う。

その場にいるのは二人だけではなく、あの事件で人質となっていた少女、初春飾利も白井の隣に座っている。

彼女は白井と共に支部に來た少年があの時自分たちを文句ひとつ言わず助けてくれた者だとわかると目をキラキラと輝かせながら見ている。

その視線は美影には少し痛く感じられていることは言うまでもない。

「それで、」

白井は突然真剣な顔つきになり、

「あなたの名前を覚えてほしいですの。」

美影はあの事件と同じくいまだ名乗っていない。

そのため、白井の調書には一つだけ空欄ができてしまっている。

「・・・言わなきゃダメ？」

「当たり前ですよ！」

なぜ美影が名前を言わないのかというと目の前の少女が常盤台中学の制服を着ているからだ。

名前を出せばおそらく、というよりほぼ確実に『あの少女』が話題に上がる。白井が知り合いなのかは知らないが彼女が知っていることは間違いないだろう。

いま騒がれるよりあとで勝手に調べてもらえばいいと思うのだが、そうはいかないようだ。

仕方なく観念し、

「名前は、」

言おうとしたその時、

「黒子ー、暇だから遊びに来たわよー。」

思わぬ訪問者が来た。



偶然（後書き）

評価　お願いします

## 発覚

第7学区、 とある通り

日も沈み始め、ほぼ全ての学校が放課後となった現在は多くの人で賑わっている。

7月となったため、緑が映える景色となり、蝉の声があたりに響き、夏の風情を感じさせる。

だが夏の暑さに苛まれ、クーラーを求めてコンビニや、デパートなどに入っていく学生もちらほらと見える。

その中に、とあるコンビニから出てくる少女がいた。

（もう暑くなったきたわね。）

人は涼しい空間から出てくると通常より暑さを感じやすくなるものだ。

暑い空間へと出てきた少女、御坂美琴も例外ではなく、手をパタパタと仰いでいる。

（これからどうしようかな。）

彼女は毎週コンビニで立ち読みをすることが日課となっていたのだがこの日は発売日ではなかったため、コンビニにはなんとなく立ち寄ったというだけであった。

このあとの予定を考えながら進んでいると進行方向に見覚えのある顔があった。

「あ、 固法さん！」

「御坂さん、 こんにちは。」

前にいたのは腕に風紀委員のトレードマークである盾をモチーフとした腕章をつけた女子校生、このりみい 固法美偉。  
先日後輩を通じて知り合ったのだ。

「バトロール 巡回ですか？」

「ええ、でももう終わったから支部に戻るところなの。 よかったら御坂さんもどう？」

「いいんですか？」

打って付けの暇つぶしが見つかり、笑顔になる美琴。

「ええ、白井さんもきつと喜ぶわ。 さっき通報があったけどもう支部に戻っていると思うから。」

喜びを通り越してなにが起こるか分からないのだが、それはいつも通り対処（撃退）すればいいだろうと見通しを立てる。

美琴は固法と御喋りをしながら付いて行き、ビルの一室にある風紀委員第177支部に到着する。

「さあ、どうぞ。」

律義な固法は扉を開け、客人である美琴を先に入るように薦める。  
一言お礼を言つて、中へと入り、

「黒子ー、暇だから遊びに来たわよー。」

中にいるであろう後輩に自分の往訪を告げる。

「名前は」

「この声は、お姉さまー!」

美影が仕方なく名乗ろうとしたのだが白井は尋問の答えより突然  
やってきたつやのある声を優先し、席から飛び上がる。

(ん?・・・この声・・・)

発言を制止させられた美影ではあつたが、その声には彼も聞き覚えがあつた。

「お姉様! まさか黒子に会・・・い・・・に?」

己の衝動に従い、美琴に抱きつこうとした白井だが、ふと美琴の表情が固まり、ある一点を見ていることに気が付き、立休らう。視線を辿ると、そこにいたのは先ほどまで対面していた少年だ。

「なんでアンタがここにいるのよ!??」

「あら、お客さん？」

後ろから美琴に続き、固法も入ってきて、見慣れない顔があることに気づく。

「なんでって言われても・・・捕まったから。」

間違っではない。決して間違っではないのだが、足りないことが多すぎたため、美琴は盛大に勘違いする。

「捕まった！？ アンタまさか何か悪いことを?!」

「お姉様！？ その殿方と知り合いなんですの！？ まさかお姉様その方と」

美琴の異変に戸惑い、声を上げる白井。

だが、その二人の関係性は彼女が思うものとはまったく違うものだった。

「ちがうわよ！ だってそいつは・・・私の・・・兄なのよ・・・」

「・・・ええ~~~~~!!」

思いがけない事実を知らされ、吃驚の声を上げる白井、初春、固法の三人。

いきなり大声を上げられ、美琴が思わず耳をふさぐほどの威力だ。だがその中で唯一、先ほど気づかれるであろうことを暴露された美影は無表情に平然と座ったままであった。



「お兄様でしたの！！」

「なんだそれ。」

白井の言葉に美影は首をかしげる。

「あの時白井さんと初春さんを助けてくれた人、御坂さんのお兄さんだったのね。」

「ええ、まあ。」

固法が納得したように発する言葉に美影は適当に相槌を打つ。

衝撃発言の後、美影がこの場にいた経緯、約半年前の事件の話をし、あらゆる誤解がとけたようだ。

白井に至っては明らかに美影に向ける視線が明らかに変わり、『お兄様』と呼ぶようになってしまった。

もちろん美影はそれを止めようとしたのだが、「お姉様のお兄様はわたくしの『お兄様』ですの」、とわけのわからないことをかなり得手勝手に言われたため、反論する気が失せてしまったのだ。

さらに美影も美琴と同じく一超能力者（レベル5）であるとはれた時は「さすがお兄様！！」となぜか激しく納得されてしまった。初春と固法は目を点にしていたが。

それに対し美影は困り果てるを通り越してあきれ果ててしまった。

「でもどうしてお姉様は今までお兄様のことをおっしゃらなかった

のですの？」

本来ならレベル5同士が兄妹であるなんて学園都市中に知れ渡っていても何ら不思議ではないのに今の今まで噂も聞いたこともなかったことはかなり可笑しい。

それに兄がいることを一言も口に出さないのも不自然だ。普通なら世間話のひとつに家族についての話題が上がり、何気なく知られていくものだ。

「美影に自分のことを誰にも絶対に言わないように口止めされていたのよ。」

「なぜお兄様はそのようなことを？」

呑気に初春が入れてくれた紅茶を飲んでいる美影に尋ねる。

正直その質問は美影にとって聞かれたくない。

「あー、まあ、あれだ。目立つのが嫌だから。」

「そんなことで知られないものなんですか！？」

初春が声を上げる。

理由になっていないとはいわないがそのような単純なことで隠せるとは到底思えない。

たとえ知る人全てに口裏を合わせたとしても。

しかも、初春は頭に花を乗せたぱつと見花瓶である少女なのだが、巷のハッカー達の間では「ゴールキーパー守護神」と呼ばれる超一流のハッカーであり、半ば伝説と化しているのだ。

そんな彼女でさえも第6位の情報は一つも入手できていなかった

のだ。

それは美影の誰にも気づかれ<sup>レ</sup>ないほどのハッキング能力によるもの<sup>レ</sup>のだが。

「6位なんて誰も気にしないものなんだよ。」

さすがにハッキングによる情報操作ものとは言えないため、適当に言い訳をする。

だが、その台詞には肯定も否定もできない。

「ところでお兄様。」

白井が突然かしこまった表情で呼ぶ。

「もしよければメールアドレスを交換しませんか？」

表情とはかけ離れた質問。

だがこの短期間に美影は白井の分析的思考<sup>プロフィール</sup>はできているため、その意味は理解している。

「・・・何がほしいんだ？」

「写真はもちろん、できれば動画もほしいですの。」

以前白井は美琴の盗撮写真のアルバムの存在がとある経緯で本人に知られて、そのすべてが灰と化してしまったため、ストックが切れてしまっているのだ。

美琴信者である白井にとってそのままでは耐えられないようだ。

「っちょ、ちよつと待った〜！！ 美影！アンタ黒子になんか送ったら許さないわよ！！」

ビシツと人差し指を向け、白井の変態的行動に美影が悪乗りしそのなので全力で阻止しようとする美琴。

懲りない後輩と妹を売るような行為をする兄を睨む。

「はいはい、とりあえずアドレスだけでも交換するか。」

「そうですね。」

「よかつたら私もお願いします。」

美琴の制止に全く動じず、表情を変えず、携帯を近づけ、赤外線通信を行うふたり。

それを見て、初春も美影のアドレスをもらう。

彼らを見て、美琴は頭を抱え、それがとりあえずだけで終わることを願う。

「そついえば、御坂さん。」

「なに？」

初春が名前を呼ぶがそれに呼応すべき人物はこの場には二人いるため、当然の現象がおこる。

もちろん初春が声をかけたのは片方だ。

「あ、お兄さんのほうで。」

「初春、苗字で呼ぶからそうなるんですの。ここはやはり『お兄

様』と。」

「それは絶対やめろ。頼むから。」

白井の提案を阻止しようとし、ていつか白井もやめろ、と言つがスルーされてしまう。

おそらくずっとお兄様呼ばわりされるであろうと思い、小さく、あきれるように溜息をつく。

初春は少し考え、呼び方を変える。

「では、美影さん。その制服って長点上機学園のものですよね？」

「ん、そうだけど。」

学園都市の五本指のひとつ、長点上機学園は有名であり、初春が風紀委員ということもあり、美影の制服にある校章から判断できるようだ。

「長点上機学園って第18学区にあるのに、どうして第7学区の銀行にいたんですか？」

そういえばそうですわね、と白井も共感する。

それにより、こうして偶然発見し、あらゆることが発覚したのだが。

「あー、俺は第7学区に住んでいるから。」

「どうしてですか？」

「とくに理由はないかな。なんとなく引越さなかった。」

本当は一方通行が引越すのが面倒、といったから美影はそれに釣られ、第7学区に留まったのだが、他の長点上機が獲得したレベル5、垣根や削板は第18学区に住居を構えているらしい。

そもそも第18学区は能力開発関連のトップ学校が集う学区であるため、能力開発に関連する施設は多く存在しているが、学生が好むような娯楽施設は第7学区に比べ、かなり少ない。

実はゲームセンター好きな一方通行はそれが理由で留まったのだろう、と美影は適当に解釈していた。

「ていうか、もう帰っていいか？ 用事あるし。」

もともと買い物のためにお金を下ろしたときに巻き込まれてしまったため、美影の予定はかなり狂っている。

特に意識しているわけではないのだが、今日は特売日のため、早いほうがいい。

時間は午後5時。空腹にもなってくる頃だ。

「そうですね。報告書も埋まりましたし、欲しいものもいただき  
ましたし。」

「あ、そうだ白井、俺のことは学校では話さないでくれよ。 面倒  
なことになり兼ねないから。」

「ですが、いずれ知られることかと。」

去年までとは違い、普通に学校に通っていればレベル5はあらゆる経路をたどって知られてしまう。

その中にはもちろん美影が操作できないものも多くある。

「それでもだ。　そうしてくれたら・・・ね。」

携帯を見せながら伝える。

白井は直接的には言われなくても理解し、

「わかりましたの、お兄様。」

何の迷いもなく即答した。

「ちよつと、美影!!」

「さよなら〜。」

美琴も理解し、止めようとするが美影は何か言われる前にドアを開け、支部から出て行かれてしまった。

なぜか今日は大きな声を何度も出していると美琴は思う。  
原因はすべてたった今いなくなった美影ののだが。

「そつえば、御坂さん。」

固法が何か気付いたように呼ぶ。

今度はその名前のものは一人しかいないため、誤解はない。

「どうして御坂さんは、お兄さんのことを名前で呼ぶの?」

美影は第177支部からでて、外の通りに立つと、先ほどまでい

たところの窓を見る。

その表情には自然と笑みがこぼれている。

(・・・白井黒子・・・か・・・)

行き過ぎているかもしれないが妹と仲良くしてくれていることは兄である美影にとってもうれしいようだ。

レベル5はその力から自然と人から距離を置かれてしまうことは能力開発ですぐレベル5になった美影はよく知っている。

それは低能力者<sup>レベル1</sup>から努力のみで超能力者<sup>レベル5</sup>になった美琴でも例外ではない。

常盤台中学に入学したころはそれで悩んでいる美琴を美影は何度も見ていたため、気にしていたがもう心配はいらないようだ。

安心した美影は歩み始めた。

(・・・今日何食べようかな？。)

彼の今日の献立はまだ決まっていない。



発覚（後書き）

評価 お願いします

## 容疑と信頼と憎悪

とある日の昼下がり、第7学区にあるGREEN MARTというコンビニにはとても静かな空気が流れている。  
だがその平穏は突然壊された。

「ジャッジメント風紀委員です。この場から早急に避難してください!!」

突然大声が響きわたる。

大声の持ち主は体を覆えるほどの大きさの盾を持った女学生の風紀委員だ。ジャッジメント

彼女の後ろには、男学生の風紀委員がいて、彼は店を見渡し、行動に移る。

治安維持のために行動する風紀委員が装備をしてやってきたのだ。当然何かよからぬことが起こると思い、店内の客も職員も驚く。

そんな中、気が弱そうな男性のコンビニの店員が風紀委員に近づき、説明を求める。

「あ……あのウチの店で何か……?」

「この付近で重力子の加速が観測されました」

「・・・ジ、ジュウ？」

聞きなれない単語を返され、分らずに聞き返す。  
その答えは分かりやすいが、只事ではなかった。

「・・・この店に爆弾が仕掛けられた可能性があります。」

「ば、爆弾?!」

危険が迫っているという意味を理解し、店内にいた客は慌てて逃げ出す。

男の風紀委員は、それに構わず店内にあるであろう爆弾を探し続ける。

「クソ 一体どこに・・・」

商品をかき分け、棚を一つずつ隅から隅まで探していくがそれらしいものはなく、苛立ちと戸惑いが声に出る。

「きゃっ」

そんなとき男の風紀委員の前方から女の声が聞こえた。

かがんでいたを態勢戻し、上から見ると女学生が床に座り込んでいた。

男の風紀委員はすぐに女学生に駆け寄る。

「どうしました!？」

「すみません足を・・・」

どうやらその女学生はあわてて避難をしようとしたため、足を捻っ

てしまっていたようだ。

「急いで、避難を……。」

「は、はい。」

風紀委員は女学生の腕を自分の肩に回し、避難しようとした時、彼の目の端に商品棚の下にあったウサギの人形が入る。

その人形は不自然にひとりで揺れ動き始め、ギョルン、という奇妙な音が響いた。

ウサギの人形は音を放った後、人形の胴体の中央部分に発生した球状のエネルギーに吸い込まれるように歪み、縮んでいく。

男の風紀委員の顔の焦りがさらに増す。

「まさか！！　これが　」

次の瞬間、人形を凝縮したエネルギーが、一気に外へと放たれ、爆発した。

ドゴオオオンという凄まじい音と共に衝撃と黒い煙がコンビニを埋め尽くす。

爆弾の置いてあった所の棚は熱と衝撃により曲がり、中のものは原型がわからない。

コンビニの店員は、女の風紀委員が彼を守るため所持していた盾の後ろに押し込み、伏せていたため、けがはない。

それと同時に彼女は自分の身も守った。

爆発による煙がはれ始めると女の風紀委員は奥にいた女生徒と同僚の方へ駆け寄る。

「大丈夫！？　怪我は？」

「・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

女生徒は煤がいたるところについてはいるが、ほとんど怪我はしていないかった。

なぜなら男の風紀委員が自分の体を盾にし、間一髪のところ、女生徒をかばったからだ。

彼の制服は所々吹き飛び、皮膚が飛び、出血も少くない。

早く応急処置でもしなければ命の危険に関わるかもしれない。

「また例の事件？」

「ええ、これで6件目ですの。」

とある公園の自動販売機の前。

ガン、という音と共にジュースが下から出てきた。

その音は通常の自販機からは出ない音で、例によって美琴が自販機に蹴りを打ち込んだのだ。

それを見て、白井は、はあ、とため息をするが、美琴から以前万札を飲まれたから、と理由を聞いたため、本来なら風紀委員である彼女はそれ相応の処置をとらなければ場いけないのだが、目を瞑っているのだ。

「で、犯人の目星は？」

「昨日、ようやく手掛かりがつかめましたの。お姉様、グラビトンってご存知ですか？」

「グラビトン・・・て重力子のことだっけ。」

白井の問いに答えるべく、頭の中で検索し、一つのワードが出てきた。

白井の反応を見ると、どうやら正解のようだ。

「どのケースも、爆発の直前に重力子による急激な加速が衛星によって観測されていましたの。アルミを起点に重力子の速度を爆発的に加速させ、一気に周囲にまき散らす、・・・つまりアルミを爆弾に変えていた、ということですね。」

美琴が手に持っているアルミ缶を指さしながら説明する。  
ふうん、とその専門的ともいえる説明を理解できているのはさすがレベル5、とでもいえるべきだろうか。

「何でアルミなの？」

だが一つ、アルミに限定されていることに疑問を持つ。

白井の返事が、さあ？、というところを見ると風紀委員でも分かっているようだ。

「まあでも、それってつまり、能力者の仕業ってことでしょう？ だったら学園都市の書庫<sup>バンク</sup>を検索すれば一発じゃない。全ての学生の能力データが登録されているんだから。」

美琴は尤もの提案をするが、それくらいのことを風紀委員が気づかないわけではない。

白井は、はあ、とため息をつき、

「もちろん検索しましたわ。　というより、その結果が問題ですの。」

美琴はその言葉に疑問を持つが、白井は調査の結果を述べ始める。

「被害の規模からみて、該当するものは2名。　そのうちの一人は<sup>レベル4</sup>大能力者で能力名は量子変速、<sup>シンクロトロン</sup>名前は釧路帷子。・・・なんですが、その方はずっと入院されていて一連の事件を起こすのは不可能なんですの。」

「だったら、もう一人が犯人なんじゃないの？」

消去法による、またも尤もな発言をするが、白井はなぜか途端に険しくなる。

そしてその口をゆっくりと開け、

「もう一人の該当者は<sup>レベル5</sup>超能力者で能力は<sup>ブラックホール</sup>無限重力、つまり・・・・・・  
・お兄様ですの。」

第18学区にある長点上機学園の内部にあるとある部屋に一人の教師と一人の生徒が<sup>マンツーマン</sup>一対一で話をしていた。

その部屋の入口にある札には『生徒指導室』と書かれている。

「　わかりました。　もういいですよ。」

「失礼します。」

生徒は一言いい、生徒指導室から出てきた。先ほど対面していた教師は警備員アンチスキルの一員で、その生徒にとある容疑がかつていたので放課後に呼び出したのだ。

「おつ、一方通行。アクセラレータ」

「美影、お前なンかしたのかア？」

生徒指導室から出てきた少年、御坂美影は白い髪に赤い瞳をした少年、一方通行が部屋の近くにすることに気づく。

「お前みたいに暴れたりしねえよ。なーんか俺と同じ能力で事件が起きているから俺は容疑者って奴らしい。」

「虚空爆破事件のことか？」

「ああ、それぞれ。」

虚空爆破事件は全て第7学区で起きているため、そこに住む一方通行も知っているようだ。

「お前ならもつと派手にやらかしそオだな。」

「派手にも隠密にもやらねえよ。」

先輩たちとの決闘をすべて受ける一方通行とは違い、全て断るような美影が能力を使って事件を起こすなんてありえないことは一方



通行も十分わかっている。

だが一つ気にかかることがあった。

「だが、なんで教師どもが美影の能力をしってんだア？ お前妨害工作してなかったのか？」

「ああ、少しぐらいは書庫で検索できるようにしておいたんだよ。  
6位のくせになにも分らない、じゃ怪しまれて面倒なことになるから。」

以前までは美影の書庫は本人によりかなり厳重なロックがかけていたため、守護神でさえも閲覧することはできなかったのだが、美影は自身の入学と共にロックを他のレベル5と同等のものにしたのだ。

そのため、風紀委員の検索でもヒットしたのだ。  
書庫に入っている無限重力のデータはほんの一部に過ぎないのだが。

「・・・相変わらず、用意周到だなア、てめエは。」

「そりゃどうも。で、この後どうする？」

一方通行の皮肉を込めた台詞をあしらい、今後の予定を尋ねる。

「そオだな、ゲーセンでもいくか。」

「またかよ。」

美影があきれるほど一方通行はゲームセンターに頻繁に訪れ、あらゆるゲームでベクトルの解析により凄まじいテクニックが駆使さ

れ、ハイスコアを連発しては次のゲームセンターへと回る、という流れが続いている。

ただ一つ、クレインゲームに関しては、商品がいらなかったため、一方通行は興味を示さないのだが。

「お前とは格ゲーで勝率が五分五分だっただろオが。」

「そうだったか？」

一方通行の言うとおり、能力を駆使しても彼は美影に勝てないことがある。

学園都市の技術力により、かなり正確に、一方通行の演算式に限りなく近く、現実の肉弾戦とほぼ変わらないところまでゲームは精巧に出来ているのだが、ほんのわずかに誤差が生じてしまい、演算式から外れてしまうことがあるため、その隙を美影は付き、勝利とまではいかなくても引き分けには持ち込んでいるのだ。

もちろん、そんなことが出来る美影のゲームの技術はもはや人間業とは思えないところまで達しているといえるかもしれない。

「今日こそはぶち殺してやるぜエ。」

「なに物騒なこといつてんだよお前は。」

「黒子、美影が容疑者だってホントなの？」

「ええ、信じたくはありませんが今のところこの事件を起こせる可

能性があるのはお兄様だけです。」

やはり美琴は美影が犯人だとは信じたくない。  
何を考えているかは読めないのだが、少なくとも能力を使って、  
人に危害を加えるようなことはしないとわかっている。

だが、可能性として、最有力候補は美影であることは確かだ。

「あいつのアリバイは？」

「それはまだ調べていませんの。」

それを聞いて美琴は少し安心した。  
まだ希望はある、と。

「じゃあ、美影が事件が起こったとき、なにかアリバイがあれば、」

「疑いは晴れますの。」

美琴の言葉に白井が続いて言う。  
どうやら、彼女たちがすべきことが決まったようだ。

「じゃあ、早速、」

美琴が美影のもとへ歩き出そうとしたとき、後ろから声が聞こえてきた。

「んで、今日はどこのゲーセンにすんの？」

「まア、近いとこで良いだろ。」

噂をすれば何とやら、というのはまさにこの状況を言うのだろうか。

二人が声のする方法を向くと、そこには二人が心配していることを露知らず、ゲームセンターに向かおうとしている美影の姿があった。

「・・・あれ、美琴と白井じゃん。・・・どうした？、そんな顔して。」

美影は二人の存在に気づき、立ち止まる。  
呑気な彼と違って、二人はどこか慌てている。

「美影、ちよつと来なさい！」

「お兄様、話がありますの。」

「おい、なんだ？ いきなり。」

二人は美影の気持ちなど構わず、腕を引っ張り、どこかへ連れて行くこうとする。

そこへ、美影といった少年が口を挟む。

「オイオイ、なんなんですかア？ 人のダチを勝手にひっぱりやがって。」

「ああ、一方通行、こいつ俺の妹。」

「・・・！」

一方通行は美影に指差されている少女を見ると、その顔に見覚えがあることに気づく。

彼が美琴に会うことは初めてだが、それとまったく同じ顔を見たことが以前あるのだ。

だが、そのことは、今は口が裂けてもいえない。言いたくない。

「美影、誰なのよそいつ。」

対する美琴は一方通行の顔を一度も見たことがない。

一方通行の異様な容姿は気になるが少しもしり込みすることなく、年上だというのに言葉遣いにまったく気にせず、尋ねる。

もちろん白井も彼を見たことがない。

「こいつは一方通行だよ。」

「……！」

顔は見たことがないのだが、その名前は二人とも聞いたことがあるようだ。

ある方面では有名な名が突然出たため、二人は驚く。

「こいつが第1位……。」

「ああそうだ、第3位。」

掴んでいる美影のことを忘れ、目の前にいる最強に興味がいく。彼の目はその名に恥じないものを表している。

そして、少し顔に笑みが出てきて、美琴は口を開ける。

「……第1位、アンタ私と勝負しなさい！」

「・・・上等だ、格の違いを見せてやる。」

「やめとけ、美琴。」

第1位に宣戦布告するが、美影に止められる。  
気に入らない、とばかりに美影をにらみ、

「なんでよ?」

「お前じゃ勝負にもならないからだよ。」

はつきりと言われ、反論しようとする美琴だが、美影の表情を見ると、放縦でも諧謔でもなく、本気でそう思い、告げているのだと分かり、素直に引いた。

「で、一方通行。俺なんかこれから誘拐されるみたいだけど、お前どうする?」

「ああ、俺は帰るわ。一緒にいると面倒なことになりそだからな。」

「んじゃ、また明日。」

ここで一方通行は別れ、残ったのは美影、美琴、白井の三人だ。  
美影が二人の顔を見て、

「で、何の用なの?」

「とりあえず、ゆっくりと話が出来るところへ行きますの。」

「お兄様、虚空爆破事件、というのをご存知ですか？」

「ああ、ニュースで見たよ。」

（・・・やっぱりそれか）

三人は近くのファミレスに訪れ、窓側のテーブル席の片方に美影が座り、反対側に美琴と白井が座るという形になった。

適当に飲み物を注文した後、白井は真剣な顔つきになり、二人が議論していたことを持ちかける。

だがそれは美影予想していた内容だった。

「それはアルミを起点に重力子の速度を爆発的に加速させ、一気に周囲にまき散らす、つまりアルミを爆弾に変えていた、ということですよ。」

白井は先ほど美琴にしたものと同じ説明を美影にする。

だがそれは彼にはじれったく感じたため、彼女たちが言わんとすることを代わりに言う。

「・・・まわりくどいな、要するに俺がやったかどうかってことですよ？」

「知っていましたの？」

「ああ、ちょうど今日学校の先生にも尋問されたよ。」

「で、どうなの?」

美琴は美影を問い詰めようとしたが、急に美影は窓側を指差し、

「どうでもいいけど、あれ、どうするの?」

指の先には窓ガラスに張り付き、美影を凝視する少女と、その少し奥には頭にお花をのせた少女いた。

その窓ガラスに張り付いている少女は三人には聞こえないが何か騒いでいるようだ。

「あ!、あの人は!!」

「え、佐天さん、美影さんのこと知っているんですか?」

初春飾利はクラスメイトである佐天涙子さてなみこと登下校中に話しながらふと、ファミレスの中を見ると、知っている顔があることに気づき、立ち止まる。

それにつられて佐天もファミレス内を見ると、美琴、白井を見つけたあと、彼女たちの前に座っている少年を見ると、その顔も見覚えがあったため、声をあげる。

「あの人、この前話した、私を助けてくれた人だよ!! ていうか初春知っているの!？」

「はい、あの御坂さんのお兄さんですよ!」



「ええ〜！ 御坂さん、お兄さんなんていたんだ！」

「しかも美影さんもなんとあの超能力者《レベル5》なんですよ！」

「うそお！！ 兄妹でレベル5！？」

次々と事実が発覚し、驚きが絶えない佐天。

好奇心から彼らの中に行こうと、初春と共にそのファミレスへと入っていった。

(・・・・・・・・・・、)

美影はしばらくの間、ガラス越しでなにやら大声を上げているであろう二人を見ていた。

学園都市製のガラスは無駄に性能がいいのか、外の声はまったく聞こえない。が、美影は彼女たちの視線と少しかじった程度の読唇術により、どうやら自身のことで騒いでいるのだと分かった。

あまり外で自分のことで騒がれたくはない美影ではあったが、どうすることも出来ない。

呆然としていると、二人が中へと入ってきた。

「佐天さん、初春さん、こんにちは。」

「御坂さん、こんにちは。」

「こんにちは。」

美琴の挨拶に、佐天、初春が応える。

だが、佐天の興味は美琴の前にいる少年に向けられていた。

「あ、あの時はありがとうございました！」

「・・・え？、ああ、あの時の子か。」

美影は窓越しでは分からなかったが近くでよくその少女の顔を見ると以前不良たちに絡まれていた子だと気付いた。

あの時は自分に殴りかかってきたから何となく倒したただけで彼にとつては助けたつもりは全くといっていいほどなかった。

「佐天さん、美影のこと知ってるの？」

「はい、以前私を怖い人たちから助けてくれたんです！」

「ところで白井さんたちはどうしてここに？」

初春は佐天と美琴を差し置いて、この状況について白井について尋ねる。

知っている中とは言え、こうして三人でいることは不自然といえよう。

「ええ、実は」

「

白井は事の成り行きを初春と佐天に話した。

「つまり、美影さんが虚空爆破事件の容疑者ってことですね!？」

(・・・なんでこんなにテンション高いんだ？ こいつは。)

佐天がテーブルに手をつき、立ち上がりながら言う。

彼女も紛らわしくないよう美影のことは初春と同じように『美影さん』と呼ぶようになった。お約束通り、白井が『お兄様』を薦めたが、美影が全力で阻止し、佐天にとっても抵抗があったので、そうはならなかったのだが。

「で、お兄様どうなんですか？」

気持ちを切り替え、再度尋ねる。

それに伴い、彼女たちの表情も自然と強張るが、8個の眼が向けられている美影は漫然としているようだ。

「・・・まあ、証拠はないが、俺じゃあないな。」

事件を起こしていないのは事実だが、その証拠がないのもまた事実。

虚空爆破事件が起こった時間には全て美影のアリバイとなるものはなかった。というより彼には明確なアリバイというものが作れない。ワームホールによって一瞬で長距離を移動できる彼にとってこのような事件を誰にも知られずに起こすことは容易い。

もちろんそのことはこの場では言わないが。

「で、白井と美琴は俺が犯人である証拠を探しに来たんだろ？」

「いいえ、違いますわお兄様。」

白井は美影の言葉を瞬時に否定する。  
彼女たちの目的は違う。

「わたくしたちはお兄様が犯人でないという証拠を見つけに来たのです。」

「・・・ふーん、そりやどうも。」

平然とした表情をしているが、内心少しうれしく感じている。  
彼の学園の教師は彼を疑う一方で信じようとする気はないように思えたのだ。学園内では目立つ行動をせず、ある意味レベル5、4人の中では一番謎が多いと言え、第18学区の学生であるにもかかわらず、第7学区に在住しているため、無理はないのだが。

「で、どうやってそれを証明すんの？」

断言したが彼女たちは何をすべきかは分からない。  
そのため、しばらく頭を抱える4人であった。

そこで、白井がとある提案をする。

「では、こういふのはどうでしょう？ この後、私たちと共に行動し、その中で虚空爆破による事件が起きればお兄様が犯人でないことが判明しますの。ここ最近、事件が多発しているため、今日起こる可能性は十分ありますの。」

「・・・まあ、何でもいいけどもし起こらなかつたらどうすんの？」

「その時はその時ですの。」

「……………」

いい案だと思っていたようだが、どうやら剗切とは言い難いようだ。

だがそれ以上にいい案は思いつかないため、それに決まる。

「で、このあと何すんの？」

「はいはい！！」

ここで、佐天が大きく手を上げ、提案する。

「私服とか買いにいきたいです！」

「まあ、今日はそうしますの。いいですね？お兄様。」

「いいよ、なんでも。」

佐天の提案に異議はないようだ。

予定が決まり、5人はファミレスから出ていく。

余談だが、ファミレスで注文された飲み物や初春の巨大パフェの代金は美琴により美影が奢らされる羽目となった。

第7学区のとある学校の放課後、

少年、かいたびはつや 介旅初矢は下校しようとげた箱を開け、靴を取り出した瞬間、同学校の不良たちに絡まれていた。

「よオ、また悪いんだけど金かしてくんね？」

その声色と表情には遺憾の意は表れていない。  
私利私欲のための発言だ。

「あ、でも・・・この間貸した分を返してもらって・・・ない・・・よね？」

言うまでもなく、彼の気が弱いところに付け込まれ、このように至ってしまったのだ。

「はあ？ 何言ってるの？ 払うって言ってるだろう、出世払いでさ。」

「だいたいさ、『無期限無利息無制限』ってのがお前の売りだろう？」

「なあ〜んだ、これっぽっちだよ、」

このようなことが今まで何回あっただろうか、数も覚えていない。

「さあーで、風紀委員が来る前に行こうぜ。」

「楽勝、楽勝。だってあいつらが来るの、事件が起きてからだろう？」

不良たちは介旅の財布を空にしたのち、何事もなかったかのように立ち去る。

彼らにとって、このことは取るに足らないことなのだろう。風紀委員についても。

（くそがあー！！）

残った介旅は壁を強く殴る。

（なにが風紀委員だ、お前らが無能だからこんな目に合った。）

不良に虐げられ、強く憎む。

だがその対象は自分を傷つける不良たちではない。自分を助けてくれない風紀委員だ。

（……見てろお！）

憎悪の火種により、彼は自身の野望をかなえるべく、行動へと移す。

容疑と信頼と憎悪（後書き）

評価　お願いします



## また解決

セブンスミスト  
Seventh mistというのは第7学区にある服屋の一つである。  
フティック

学生が多く在住する第7学区で数多くの競合企業に勝つため、より低価格で豊富な品揃えを提供している。

そのため、おしゃれに敏感だがお金がない、という学生には人気が高く、今日も多くの学生によって賑わっている。

そこに、4人の少女と一人の少年が訪れようとしていた。

「あ！ あそこだよ、初春！」

「待ってください！ 佐天さん！」

「まったく、子供じゃないんですから。 お姉様は何をご覧になります？」

「そうね、私はパジャマとかかな。」

佐天、初春、白井、美琴の4人は本来の目的を忘れ、目の先にあるアパレルショップに夢中だ。

4人は駆け足でSeventh mistへと入って行った。  
そんな彼女たちの後ろにはひとり、ゆっくりと歩いている少年、

御坂美影の姿があつた。

（あーあ、何のために来たんだか、）

美影は自身の容疑を晴らすために来たはずなのに、そのことを忘れ、年頃の少女の本能に従う彼女たちにため息をする。

（・・・ん？）

彼女たちの後を追おうとしたとき、ひとりの少女が目に入った。

携帯音楽プレイヤーのイヤホンを耳に付けていたメガネの少年、  
かいたひはつや  
介旅初矢はとある二人の少女を見ていた。より正確には彼女たちの  
右腕。

そこにあつたのは風紀委員の象徴たる緑と白の腕章。  
そこで彼は決心する。今度はあいつらだ、と。

「ククク・・・、」

彼女たちを店内へと見送った彼の顔に笑みが浮かぶ。

先ほどクレーンゲームで入手したカエルの人形を手袋をした手で  
強く握りしめ、歩みだした。

（・・・僕が僕を救う。・・・僕を救わなかった風紀委員は、いらな  
い！）

「どうしたの？」

美影はあちこちを見ていた花柄のついたピンク色の小さなカバンを肩から下げている少女に話しかける。

その少女はこのあたりに来るのは初めてで、手にしている地図では目的地にはたどり着けない中、ひとりの少年に話しかけられたのだ。

もしその少年が怖い顔をしていたり、いやらしい目線で彼女を見ていたらその少女は逃げ出したり、周りの人が不審に思い、下手したら警備員アンチスキルを呼ぶかもしれない。

だが、話しかけた少年である美影は優しい顔をしていて本当に心配そうに見ていたため、その少女は警戒することなく心中を吐露する。

「あのね、ふくやさんにいきたいんだけど、わからなくなっちゃって。」

「服屋？」

美影は少女が手にしている紙を見る。そこには『セブンスミスト』と書かれていた。

ちょうど、美影の目的地でもある。

どうやらその少女は迷っていたが、間違えずに歩いてきていたようだ。

「うん、すぐそこだから案内するよ。」

「ほんと！ おにいちゃんありがとう！」

美影の言葉で明るい表情になり、共に行動することになった。

髪飾りを付けた少女、御坂美琴の目はとあるものにくぎ付けとなっていた。

その先にあるものは彼女が探していたパジャマがある。  
ピンクをベースとし、カラフルな水玉模様があしらわれ、裾にはかわいらしいフリルが付いている。

その少女趣味のど真ん中をつくようなものが、お嬢様学校、常盤台中学に在籍する学生の心をつかんでいたのだ。

見る人によっては驚かせる光景となっているだろう。

「ねえねえ、これすっごく可愛」

近くにいた佐天と初春にこの素晴らしさ（自論）を共有しようとしたのだが、

「うわぁ・・・見てよ初春、このパジャマ。こんな子供っぽいの今時着る人居ないよねー。」

「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけど、流石に今は・・・、」

彼女と共感できるものはこの場にいなかったため、美琴のハート

は打ち碎かれることになった。

パジャマを指していた指を泣く泣くおろし、顔をひきつらせながら腕を組み、

「そ、そうよね！ 中学生にもなってこれは無いわよね！ うん！  
無い無い！」

「・・・？」

強引に気持ちを抑え、二人と同じ見解を持っているように見せた。  
佐天と初春は彼女の妙な振る舞いに疑問を持つがそれ以上それについて話すことはなかった。

「あ、私ちよつと水着見てきます。」

「ああ、水着ならあつちにありましたよ。」

「ホント？」

佐天が美琴に一言断り、初春の案内に従い、次なる目的地へと駆け足で向かった。

（……いいんだもん。どうせパジャマなんだから、他人に見せる訳じゃないし）

話を合わせた美琴ではあるが、もちろん彼女がそれで満足しているわけではなく、そのパジャマをあきらめきれないでいる。

批判されようがそれは彼女の趣味のど真ん中であつたため、せめて試着だけでもしてみたいと思う。

横目で佐天と初春が見えなくなつたことを確かめ、

（よし、今のうち・・・瞬合わせてみるだけなんだから。）

適当に心になかで言い訳を作り、ピンクのパジャマが並べられていた内の一つを素早く手に取り、鏡の前へと行動する。鏡に映っていたのは自分の姿と体に合わせたパジャマ、

そしてその後ろにひとりの少年がいた。

「なに、挙動不審になっっているんだ？ 美琴。」

「なっ、ななな!!」

おそらく今の行動を見られたと思い一気に顔を赤くする美琴。たとえ兄であつてもこの状況は見られたくない。

「ていうか俺の監視はどうなってるんだ？ 好き勝手やってるみたいけど。」

「あ、アンタ、もしかして今の」

「おにーちゃんーん！」

顔を赤くしながら一連の動作を見ていたのか尋ねようとした美琴であつたが、美影の方に駆け寄ってくる小学生低学年くらいの少女によって遮られた。

その少女は美琴にも見覚えがある少女だった。

「あ、トキワダイのおねえちゃんだ！」

「ああ、鞆の、」

「なんだ美琴、この子知っているのか？」

「ええ、ちよつとね。　ていうかアンタはなにしてるのよ？」

その少女との一件については全く触れずに尋ねる。

彼女は先日、白井とケンカになり、偽風紀委員として活動した際に知り合ったのだが、そのことについては恥ずかしいことが盛沢山のため、口が裂けても言えない。

「ああ、店の外で困っているところをね、」

「あのね、おにいちゃんたちにつれてきてもらっただ。わたしもテレビのヒトみたいに、おようふくでオシャレするんだもん！」

美影の言葉に純真な笑みをして少女は言う。

美琴はほほ笑みながら彼女の頭をやさしくなで、

「そつなんだ。今でも十分お洒落で可愛いわよ」

美影は二人を親のような温かい目で見ていた。

「ねえねえ、おにいちゃん、あっちみたい！」

「よし、いくか。　美琴もそれ買いたいなら買えよ。」

「な！、やっぱアンタ！」

先ほどの奇行が見られていたと確信し、再度顔を赤くするが、美

影はその女の子に引つ張られながら、走っていった。

傍から見れば本当の兄妹のようだ。

そんな二人を美影の本当の妹である美琴は複雑な心境になり、思う。

美影のことを最後に『お兄ちゃん』と呼んだのはいつだっただろうか、と。

「はぁ・・・依然として捜査に進展はなしね・・・」

「そうですねえ。」

風紀委員第177支部、固法美偉このみいは同支部の風紀委員と共に頭を抱えていた。

焼き焦げた空き缶、折れたスプーン、ほとんど燃え尽きたぬいぐるみ。

虚空爆破事件の数少ない残骸だ。

だが、重力子の増大から事前に爆発物の大まかな位置は特定できるものの、爆弾の爆破する時間や場所に法則性が無いため犯人の特定にすら至っていないのだ。

分かっていることはアルミが使われていることと、御坂美影が怪しいということだ。

「唯一の容疑者となっている御坂美影は今日、白井さんが行動を共にするって連絡がきたし、」

固法も彼が犯人とは思ってはいない。



先日この支部に白井が連れてきたときに少しだけだが会話をしたとき、掴めない人物とは思ったのだが、能力を私利私欲に使い、人を傷つけるような人物には見えなかったのだ。

もちろん、犯人ではないという根拠はないため、蔑ろにはできない。

「せめて手掛かりでもつかまないと、同僚が9人も負傷していますから、これ以上犠牲者を出さないようにしないといけませんし。」

「そうね。」

共に話していた風紀委員の言葉に固法は頷く。

焦ってはいけけないと思いつつも連続虚空爆破事件に巻き込まれ、負傷した風紀委員が九人もいるため、落ち着いてはいられない。固法は手にしていたマグカップを傾け、中の紅茶を飲む。

「ん？・・・9人？」

「固法は負傷者の数が引つかかった。」

「どうかしましたか？」

「いくらなんでも多すぎない？」

彼女の言うとおり、多すぎるのだ、負傷者の数が。

連続虚空爆破事件が発生したのはほんの1週間前。

そこから不自然なほど急激に規模と威力を伸ばし、今に至る。たしか負傷者は風紀委員だけで、一般人はいなかったはずだ。

「！！ まさか、ターゲットは！」

全てのピースが組み合わさったような気がしたその瞬間、目の前のノートパソコンが警報を鳴らす。

彼女たちにとってそれは聞き慣れてしまった音であるため、反射的にパソコンの画面を見る。

「衛星が重力子の加速を確認！」

ここ最近何度も映し出された情報、虚空爆破の情報だ。とりあえず白井と初春を呼び戻そうと固法は携帯電話を手にとった。

「あれ、白井さん携帯鳴っているよ。」

佐天が美琴と初春と白井と衣服を見ている中、白井の携帯電話がコールしていることに気づく。

何度かコール音がした後、白井はポケットから使い勝手が悪そうな、現代的な形をした携帯電話を取り出し、耳に当てる。

『白井さん、虚空爆破事件の続報よ！』

そこから聞こえてきた固法の声はとても大きく、思わず顔をしかめるほどだ。

『学園都市の監視衛星が、重力子の爆発的加速を確認したのよ！』

「か、観測地点は・・・」

『今、近くの警備員を急行させるよう手配しているから、貴方は初春さんと速やかにこちらに戻りなさい!』

「ですから、観測地点は!？」

一方的な言葉に質問を遮られた白井だが、なんとか観測地点を聞き出そうとする。

テレポーター  
空間能力者である彼女はいち早く現場に駆けつけるからだ。

『第七学区の洋服店、「セブンスミスト」よ!』

「! ! ! ! ! 今、わたくし達はちょうどそこにいます。すぐに避難誘導を開始しますの!」

『ちょっと、白井さん!？』

固法の呼びかけに返事は返ってこなかった。

勢いで電話を切ったのだろう。

だが彼女は『セブンスミスト』にいたと言ったということは御坂美影も現場にいるということ。ますます彼が犯人という線が濃くなる。

「・・・落ち着いて聞いてほしいです。犯人の次の標的が分かりました。・・・この店で、重力子の加速が衛星によって観測されました。」

「それって、・・・」

美琴だけでなく、他の二人もその言葉に驚きを顔に表す。

この建物に美影がいるということは3人もよく知っている。つまり、彼がやったとしか今のところ考えられないのだ。

「とにかく、初春とわたくしは避難誘導をしますの。お姉様と佐天さんは外へ。」

「わ、私も！」

「お姉様、いけませんわ。ここはわたくしたち風紀委員に任せてほしいですの。」

美琴は齒を食いしばる。

超能力者《レベル5》であつてもなにも出来ない自分の無力さに唯一、彼女ができることは願うことだけだ。

（アンタじゃないんでしょうね、美影！）

「あ、美琴、なんなんだこの状況は？」

人が心配していることを知らず、先に避難誘導に従い、外に出て呑気に店の前に立っていた美影の姿が見えた。

見えたと同時に美琴は駆けだし、美影の襟元をつかむ。

「ちょ、ちよつと何？」

「どういうことよ！？　ここで虚空爆破の事件が起こるなんて！？」

「御坂さん、落ち着いて！」

佐天の抑止の言葉で手は話すが、表情は変わらない。  
美影は今の言葉で状況を理解する。

「つまり、ここで重力子の加速があったってこと？」

「そうよ！ アンタじゃないの！？」

「あのなあ、お前何のために俺を連れだしたんだよ。」

「そ、それは・・・、」

4人の目的は他でもない、『美影の無実の証明』だ。  
これでは美影が犯人だと疑っていることになるため、美琴は自分を抑える。

「あれ、あの女の子は？」

「あんと一緒にいなかったの？」

突然美影が迷子になりかけていた少女のことを聞き出す。  
が、その子は美影を連れていった後に美琴は見えていない。

「トイレにいくつていったあとに避難誘導があったから、てっきり  
お前と出てくるかと。」

小さな子でもトイレと一緒に行くことは女の子として恥ずかしかったため、一緒に来ないように美影に忠告しておいたのだ。

そのため、美影はその子の行方を知らない。

「まさか！」

あたりを見渡してもその少女の姿は見られない。

つまりまだ爆弾があるであろう『セブンスミスト』の中にいることになる。

美影と美琴は佐天にここにいるよう言い、走り出す。それと同時に美影は重力探知で広大な『セブンスミスト』全体を一度に視渡し、あの少女の位置を確認し、迷うことなく進む。

「もうほとんど避難は終わりましたね。」

「ええ、」

初春が白井に現状を言う。あたりに人は見られない。それを報告しようと白井は先ほど電話をかけてきた固法に今度はこちらからかける。

「固法さん、避難誘導終わりましたの。」

『二人とも、すぐにその場から離れなさい！ 過去の事件の被害は風紀委員だけよ。』

犯人の狙いは現場に駆け付けた風紀委員、つまり今回の犯人のターゲットはあなたたち二人ということよ！」

「え!？」

彼女の言葉に驚愕をあらわにする。  
驚きのあまり、声が出ない。早く隣にいる初春にこの事実を伝えようとしたとき、

「おねーちゃんーん！」

笑顔でぱたぱたと走りながら後ろから小さな少女がカエルの人形を両手で持ちながら近づいてきた。

まだ避難していない人がいることに驚いたが、見ると無事と分かり、安心した。

「めがねをかけたおにいちちゃんがおねえちゃんにわたしてって。」

その子がそういって、人形を初春に渡したときに美琴と美影がその場に辿りつく。

美琴はその子が何事もなくいるようなので安心するが美影は違う。その子が持っていた人形をみて気づく。その中に爆弾がある、と。

重力子というものは質量が0なため、美影の重力探知には反応しない。

だがその系統の頂点に君臨する美影は目視するだけで重力子の有無やそれがもたらす被害の規模は分かるのだ。

そのため、目の前のカエルの人形はかなり危険だと直感する。

「初春！ それが爆弾だ！」

「え!？」

見ると、受け取った人形はその中心に現れたエネルギー体のようなものに吸い込まれるように歪み、自然界では決して聞けないような音を出す。

見るのは初めてだが、それが爆発の前兆だと直感し、人形を出来るだけ遠くに投げだし、少女を抱きしめ、自分の体を盾にする。

（超電磁砲<sup>レールガン</sup>で爆弾ごと――！）

音速の3倍の速度で放つ美琴の一八番、超電磁砲なら爆弾を外にはじき出すことができるかと確信し、ポケットからコインを取り出そうとする。

が、なぜこの状況で起こったのか、コインが手から滑り落ち、床へと落ちてしまった。

コインを拾おうとしても新しいコインを取り出そうとしても間に合わない。

（しまっ　　）

（まったく、世話の焼ける妹だ）

ドゴオオオーン、という大きな音と共に今までの事件の中で最大の威力で爆発が起こった。

「キヤー――！！」



「なんだ！？ 爆発したぞ！！」

「例の爆破テロじゃない？」

「まだ中に人がいるんじゃない？」

（初春、白井さん、御坂さん、美影さん・・・）

外からその爆発をみている者は騒ぎだす。

そのなかにいる佐天はただ、皆の無事を祈るしかできない。

外にいた者の中でただひとり、メガネをかけ、ヘッドフォンをした少年、介旅初矢だけは笑みを浮かべていた。

少年は人気のない路地裏へと足を運ばせ、その笑みを声に漏らす。

「ククク、いいぞ、もう少しだ。」

達成感、その三文字が彼の胸中にあつた。

自分の能力に溺れ、陶酔感チカラに浸る。

そのせいで後ろにいるひとりの少女には気が付かなかった。

「もう少し数をこなせば、無能な風紀委員も、あの不良共も、皆まとめて吹き飛、ば」

次の瞬間、後ろから見事な回し蹴りが炸裂され、介旅の体は2、3メートル吹き飛び、奥にあつたゴミ箱に盛大に衝突する。

「・・・いつたい、何が・・・？」

状況がつかめていない介旅に蹴り飛ばしたのから声がかかる。

「はぁーい？ 用件は言わなくても分かるわよね、爆弾魔さん？」

そこには素晴らしい笑みを浮かべた、知る人ぞ知る少女、御坂美琴の姿があった。

「はい、はい、皆無事ですの。」

セブンスミスト内にいる白井は固法に現状を報告していた。  
電話を切り、改めて被害状況をみて思う、

（・・・また助けられてしまいましたの。）

爆発により周囲は惨憺たるじょうきょうではあるのだが、白井の足元のあたりから別次元のように爆発による焦げ目は途切れている。  
あるとき、皆を救ったのは風紀委員の白井でも超電磁砲を構えた美琴でもなく、先ほどまで容疑がかけられていた美影だ。  
彼が作り出したブラックホールにより爆風も飛んでくる瓦礫を全て吸い込み、皆を守ったのだ。

（少しは近づけたと思っていましたのに・・・。）

目の前で爆発したのを白井はただただ見ていることしか出来なかったのに対し、美影は皆の前に立ち、顔色ひとつ変えずに解決したのだ。

ちょうど、半年前のように。

「どうした？、白井。　ボーとして。」

たった今頭の中を埋め尽くしていた者から呼びかけられ、我に返る。

白井は悄然として言う。

「わたくしは風紀委員というのに何も出来ず、またお兄様に助けられたことが恥ずかしく思ひまして、」

「・・・なにいつてんだ？、お前は。」

「え？」

真剣に己の無力さに恥じているのに美影はなぜか呆れたように言う。

そんな彼の態度に白井は首を傾げる。

「あんな、白井。　人ひとりが出来ることなんてほんの小さなことだ。　それは風紀委員であるお前にとっても、レベル5である俺や美琴にとっても。　だから人は協力し合っているんだ。」

半年前と同じように諭すように言う。

「今回はたまたま俺の力が役に立っただけ、白井は何も恥じることなんてないよ。」

「で、ですが、わたくしが今回も何も出来なかったことに変わりはありませんの。」

美影は白井を励まそうとするが、白井は納得がいかない。

彼が言つとおりかもしれないのだがこれで2度も助けられたのだから。

「・・・白井、出来なかったことを数えるな、自分に出来ることを数えろ。」

「!」

「そうやって消極的に考えていたら出来ることの数も減っちゃうぞ。それじゃあ半年前と何も変わっていないと俺は思うぞ。」

そこで改めて白井は反省する。

過去の失敗を悔やんでいるよりも未来に成功できることをより確実にすべきだと。

そして白井は思う。

美影と共にいると学べるが多く、自分が成長することが出来る、と。

彼は自分より遙か先へと進んでいるがいつか必ず追いついてみる、と。

「・・・また、教えてもらいましたの。大切なことを。」

「お節介だったか？」

「いえ、とても感謝しています。・・・いつかわたくしがお兄様を助けて見せますの。」

「・・・そうか、楽しみにしてるよ。」

そこで白井は笑顔になり、美影も笑顔で答える。

だが、白井はひとつ疑問に思うことがあった。

「そつえばお兄様、どうして犯人の下へはお姉さまだけを行かせましたの？ お兄様も行けばよろしかったのでは？」

実は介旅初矢のもとへ美琴だけを行かせたのは美影だったのだ。白井も行こうとしたのだが美影によって止められてしまったから今だセブンスミストないにいたるのだが、白井にはその意図が分かっていない。

「俺じゃだめなんだよ。」

「どういうことですか？」

美影の言葉に白井は首を傾げる。

「俺は『分かっている』けど『知ってはいない』。でも低能力者<sup>レベル1</sup>から超能力者<sup>レベル5</sup>になったあいつは『知っている』。その違いだよ。」

「どういうことですか？」

説明を聞いても白井には理解できなかった。再度尋ねるがその答えは返ってこなかった。

「んじゃ、俺はもう用無しだから、帰るわ。」

「え？ 待ってください、お兄様！」

帰ろうと階段への入り口へと入っていく美影を追った白井だが、彼女が階段にたどり着いたときにはすでに美影はいなかった。

ワームホールをつかつて、その場から離れたのだが、白井はその能力を知らなかったため分からなかった。

（・・・本当に、不思議な方ですよ。）

白井は美琴が犯人といるところへと空間移動した。

その日の夜、美影は自身の家でパソコンと向かい合っていた。美影のパソコンには携帯音楽プレーヤーがつながれている。

その画面には波線が映し出されていて、一見、ボリグラフ嘘発見器のようにも見えるが実際には全く違うものだ。

（・・・レベルアップ、ねえ・・・、）

高速のタイピングを繰り返して、次々とセキュリティランクAのネットワークに侵入し、情報を入力し、USBメモリに読み込んでハッキングは関連するネットワークに潜り込むという犯罪行為をネット上の誰も気づかれずに行っていた。

彼は画面に映る情報を興味深そうに笑みを浮かべてみていた。

そして最後に表示されたのはひとりの女性の写真だった。

（・・・この人が、）



また解決（後書き）

評価お願いします



## 新たな事件

虚空爆破事件が解決した翌日、美影は学園の教師に、「やはり君ではないと思っていたよ！、はっはっは、」と言われたが、実際は明らかに疑っていたため後ろめたさが顔に出ていた。

天下のレベル5に疑いの目を向けていたのだから、もしかしたら、一方通行や垣根帝督、削板軍覇に挑戦した上級生のようになにか報復を受けるのではないか、と若干おびえているようにも見えたのだが、特に何もなかった。

美影は何も気にしていない。

結果的に虚空爆破事件を解決したのは美影自身であったが、彼はそれまで自身が犯人ではないのだから、いずれ解決するだろうという投遣りな考えを持っていた。

そのため、学園の警備員や風紀委員にどれだけ睨まれようが、尋問されようが堂々としていた。  
アンチスキル ジャッジメント

彼は興味がないことにはあまり関わらない。

一方通行ほどではないが、自身の好奇心を掻き立てないこと、面倒だと思ふことには極力自分から首を突っ込まないようにしている。

虚空爆破事件しかり、風紀委員しかり、上級生の挑戦しかり、

「ジャン、ケン、ポン！」

自身の手はグー、対する一方通行の手はパーだ。  
つまり美影の負け。

「んじゃ、さつさと買ってこい。」

「ハイハイ、」

御坂美影は料理が上手だ、しかもかなり。

だが、彼にとって朝は弁当を作る時間ではなく、睡眠を出来るだけとるための貴重な時間だ。

ゆえに彼の昼食は長点上機学園が誇る異常なまでに広い食堂で異常なまでに種類が豊富な学食を食べるか、教室でも食べられる購買のパンやおにぎりを買うかだ。

前者は入学当時に使用していたが、レベル5である美影や一方通行が学園中の生徒が集う食堂に行くとうなるだろうか。

教室にまで見にくるものがあるのに、そのような所へ行けば当然注目を浴びる。彼らの近くの席をせしめようとするものや、食事に関係なく食堂にくるものまでも存在する。

垣根や削板は全く気にしていないため、今も食堂を利用している。特に帝督は食堂にいる女子と昼食をとることを楽しみにしているのだ。それを見る男子からの嫉妬の視線がやはり、絶えない。

美影はそのような状況を快く思わないし、一方通行にとっても好ましくない。

そのため、後者を使用し、屋上でのんびり昼休みを過ごすことに

落ち着いたのだ。

購買は南舎と北舎の間にある、玄関の付近で行われている。おそらく、流通の便のことを考慮してだろう。

そのため最終目的地である屋上からは遠く離れたところにあるため、ジャンケンして負けたほうが買い物係となり、二人分を購入することになっている。

今日は美影の役割となったため、彼は玄関まで来ている。

そこには行列ができていたため、最後尾につき、自身の番が来るまで適当に携帯を弄って携帯専用のサイトを見ている。

携帯電話で見れるものはセキュリティランクはD、つまり最もあまいものだ。

エレクトロマスター

高レベルの電撃使いなら能力を使い、携帯からでもあらゆるサイトにアクセスできる。彼の妹で、その系統の頂点に君臨する美琴はそれを行うことが今までに数回あったが、すべて美影に探知されているのは彼女は知らない。

彼の順番が来たため、並べられているパンやおにぎりから何を買うおうか迷ったのち、適当にしょっぱいパンと甘いパンを選び、お金をだした時、ふと、目の前のある女学生から声をかけられた。

「あ、あの！ これ、よかったですぞ！」

見ると、購買部の学生だ。手にはコーラがある。

おそらく美影に好意をよせているのだろう、顔を少しピンク色に染めている。

「え？、ああ、ありがとう。」

「い、いえ、／／」

彼女の厚意に美影が笑顔で答えるとますます顔を赤くし、恥ずかしくなったのか、奥へと行ってしまった。

美影は某ウ二頭の少年のように鈍感ではない。むしろ鋭すぎて精神系統の能力者ではないかと疑われるほどである。

そのため、彼女の気持ちは十二分に分かるが、特に相手をする気はない。もしそうしていたらきりが無いという理由もあるが。

買うものも買ったので、一方通行が待つ屋上へと足を運ばせるが、ふと駄箱を見ると、自分のところに紙が一枚入っていることに気付いた。

「買ってきたぞお、」

「ン、サンキュ。」

屋上に辿りついたら、大きく欠伸をしていた一方通行に彼の分を投げて渡す。

受け取った一方通行は美影のパンを持っていない方の手を見て不思議に思い、言う。

「お前コーラ飲めねエンじゃなかったか？」

そう、炭酸系統のジュースは好きな美影ではあるのだが、唯一コーラだけは苦手なのだ。

コーラという飲料は某社が調味法が秘密とされていることが有名ではあるが、別に謎な液体だから抵抗がある、というわけではなく、おいと風味が美影には苦痛なのだ。

「なんか貰っちゃってさ、一方通行いる？」

「いらねエ。」

「じゃあ、仕方ないか。」

せつかく貰ったものを流し捨てるわけにはいかないため、ちびちびとだが腹に入れるしかない。

プシュ、という音と共にふたを開け、一口飲む。

「あー、まずっ、」

「じゃあ、ンなもん飲むなよ。」

「せつかく貰ったんだから飲むしかねえだろ。」

「あっそ。」

美影が貰ってきたパンを食べながら話したり、昼休みを利用し部活の練習をしているを眺めたりなど適当に時がたつのを楽しむ二人ふと一方通行が言う。

「今日こそはゲーセンいくぞ。」

「なんだまたかよ？」

「昨日てめエはどっか行きやがっただろオが。」

美影は虚空爆破事件を解決していたのだが、一方通行にとって取るに足りないことであるため、単に逃げられたのと変わらない。彼は美影と別れた後、さみしくひとりでゲームセンターに行ったわけではなく、家でゴロゴロしていた。

今度こそ格闘ゲームで美影と勝負したいようだ。

「いや、俺はいいんだけどさ、」

「何か用事でもあンのか？」

美影はポケットから一枚の紙を取り出し、一方通行に渡す。先ほど自身の下駄箱で見つけたものだ。

一方通行は一見ラブレターとも見えるその紙を受け取り、読む。

御坂美影、お前がレベル5なのに弱いことは分かっている

学園中の生徒の前でお前の醜態をさらしてやるから

放課後、グラウンドで勝負しろ

レベル5倒し隊

「カカカ、こりゃア、また愉快的ラヴレターだなア、おい。」

「まったく、突っ込みどころが多すぎて笑えないよ。」

「なんだア？、この『レベル5倒し隊』ってのは、」

「ギャグとしか思えねえよ、俺には。」

一度も上級生の挑戦を受けない美影を『弱い』と判断したのだろうか。

6位なら勝てるのだと思ったのだろうか。

彼らは『序列』Ⅱ『強さ』と勘違いしているのか、第一位一方通行や垣根帝督に勝てなかった上級生は削板軍覇に挑むという流れが出来てしまっている。

その方程式が遠く間違っているわけではないが、美影は実際、先第四位日麦野沈利に勝利している。それも圧倒的に。

その事実を知る者はほとんどいないが、それを知ったからといってこの『ラヴレター』が来たことに変わりないだろう。

「はぁ、どうしょ、」

「やればいいだろオが、これぐらい。」

弱音のように聞こえるが、彼は上級生の10人ぐらいが一度にかかってきても負ける気は全くない。

だが彼は無駄に争うことを好まない、というより単に面倒くさいのだ。

一方通行もそれは十分それは分かっているが、美影の戦いを面白おかしく見たいのだろう。

「まあ、いいや、後で決めよ。」

出来れば避けたいがこんな紙まで出されるとそうは出来なさそうだ。

放課後のことは放課後に決めることにした。

「あーあ、なんだ数は。」

全ての授業を終え、ホームルームが終わったので、いつもどおり一方通行と帰ろうとしたのだが、やはりグラウンドに多くの生徒が待ち構えていた。

それも10人どころか20人はいる。しかも中には美影と同じ1年生も。

彼らは自身に満ちた顔をして美影が来ることを今か今かと待ち構えている。

「ハハ！、こりゃ面白いことになりそうだなア、美影。」

美影の肩をポン、と叩きながら高らかに笑う一方通行。

「なんだこれは？」

垣根帝督も出てきてこの事態に気づく。  
後ろには削板軍覇もいる。



「こついつことなんだよ。」

美影は『挑戦状<sup>ラフレター</sup>』を二人に見せる。

「はは、モテモテだなあ、美影！」

「うれしくねえよ、全然。」

「大勢で挑むなんて根性がないな！」

「じゃあ根性つてものをたたきこんでやれよ、根性バカ。」

「用があンのはお前だろうが、美影エ、」

他人事のように言う三人。

こうなったらワームホールを使ってここから離れようか、とも思  
ったのだが、挑戦者のひとりが美影に気づく。

「おい！ 第6位が来たぞ！」

「今日こそ化けの皮を剥いでやる！」

「さっさと来い！！！」

「あーあ、気付かれたー。」

「なんだその言い方、」

ものすごく棒読みでわざとらしく困った顔になる美影。  
だが彼らは待つてはくれないようなので、ひとまず玄関から出て、

学園から出るべく、左折する。

「おい！ 逃げんのか！！」

「どうせ本当は弱いんだろ！！」

「怖いのか！！」

（大人数できた癖に何言っただか・・・。）

好き放題言っているのだが相手は超能力者<sup>レベル5</sup>、ひとりでは自信がないから群れをなしているのだとしか美影には思えない。  
少し考える美影だが、

（・・・まあ、いいか、ここなら。）

仕方なく、初めて挑戦を受けることにし、グラウンドへと歩いて行った。

数分後、グラウンドに立っているのはたった一人。  
それ以外は目立った外傷はないのだが膝をついていたり、仰向けになって息を荒くしている者がいる。

「はあ、はあ、」

「くそお、誰だよ弱いつて言ったのは？」

「全然つえーじゃねえかよ」

「あー、終わった、終わった。」

（まア、そオ成るはなア、）

結局、美影の圧勝に終わった。

美影の体には傷ひとつ付いてないどころか服に汚れすらない。彼の力をこの中では一番知っている一方通行の予想通りの結果のようだ。

美影の能力を初めて見れるからなのか、いつの間にか観客も集まっていた。

その一蹴劇をみた美影のファンたちは黄色い声援を送っている。

美影に挑んだものはエリートと呼ぶにふさわしい者たちであったが、所詮レベルは4。軍隊において戦術的価値を得られる程の力と大能力者は呼ばれるが一人で軍隊と対等に戦える程の力と呼ばれる<sup>レベル5</sup>超能力者相手では20人ぐらいではやはり心もとない。

しかも『暗部』で活動している美影にとって、実戦経験は彼らとは天と地ほどの差がある。

（くそお！　せつかくあれも手に入れたっていうのに、レベル5つてのはこんなに遠いものなのか！？）

大勢で挑んだのだが、上級生たちも馬鹿ではない。皆の能力を確かめあい、作戦も練った。

例えば、水流操作で出した水を電撃使いで電気分解して出来た水

素分子と酸素分子を発火能力により爆発させる、グラウンドの土を操作し足を塞ぎ攻撃する、光学操作で体を完全に消し、不意打ちを狙う、念動力で攻撃をあらぬ軌道にして当てるなどがあったが、全て通じなかった。

しかも彼らには勝てる要因がもう一つあったのだ。

だが、重力探知で全てを視ることが出来る美影には不意打ちも出来なければ能力の仕組みは全て分析されてしまう。

しかも美影は本気を出してはいない。ほとんどゲーム感覚だった。

(・・・おかしいな・・・)

勝った美影だが、一つ気がかりなことがあった。

それは挑んできたものがわずかだが能力が強くなっていること。

美影は彼らの力を他のレベル5との戦いで見て、能力や威力など、ひとりひとりすべて覚えていたのだ。

だからこそ彼らを攻略できたのだが、彼らの中で力が美影の記憶と違う、という者がほとんどだったのだ。

レベルが上がるということはめったにない。また、突然強くなるなんてことも普通はない。

だからこそ、学園都市にはレベル0が半数以上を占め、高位能力者を妬むものが絶えないのだ。

(・・・まさか、)

帰ろうとした美影であったが、昨晚見たパソコンの画面を思い出して、振り返る。

そこには力なく倒れている挑戦者たちの姿があつた。

美影は重力探知で彼らの体内を視るが美影の予想通り異常は見当たらない。

(・・・そういうことか、)

美影は納得した表情になる。

彼らが自信に満ちた顔をしていたこと、彼らが強くなっていたこと。

だが戦いを見ていたものは美影がやったとしか思えない。

彼にまた疑念を抱くものが次々と現れる。美影と違い、彼らには情報があまりにも少なすぎて状況が全くともいいいほどつかめていないのだ。

「おい、これはお前がやったのか？」

一方通行が美影に近づき、尋ねる。

周囲ではその状況に驚き、騒ぎになっている。教師も出てきた。

「んなわけないだろ。」

「・・・やっぱりそか。」

美影がこんなところで相手を再起不能な状態にまで持ち込んだりしないことは一方通行も知っているため、それ以上疑いはしない。

だが教師は違う。

「御坂、どういうことだ？」

美影の担任、山口がやってきて、説明を求める。

「倒したのは俺ですけど、これは違います。」

正直に言う。

美影の表情からもそう思われるため、山口は口籠るが、美影がやった以外には彼には考えられない。

「・・・じゃあ、これは・・・」

「御坂君、」

山口の声を遮る声が聞こえてくる。

その声がした方向にいたのは長点上機学園の学園長だ。彼もまた、美影の戦いに興味があったため、ずっと見ていたのだ。

「来なさい。」

手招きするので美影、山口は学園長室へと足を運ぶ。  
どうやら大事になってきたようだ。

「で、これは君がやったのかね？」

「・・・違いますよ。」

美影は学園長と向かい合い、同じ質問をされる。美影の隣には山口もいる。

「やはりそうか、」

学園長は疑ってはいない。

入学式のときから美影に興味を持ち目をつけていたため、美影がそういう人物ではないということは分かっているようだ。

尤も、美影のことは学園長でも分からないことだらけなのだが、沈黙が数秒間あり、

「山口先生、少し席をはずしてもらえないか？」

「分かりました。」

学園長の言うとおり、山口は学園長室から出ていく。残ったのは美影と学園長の二人だ。

学園長が、ふうー、と息を吐き、美影を見て、

「この状況を、君はどう思うかね？」

この問題の答えを美影に委ねる。

美影なら正しい答えが出るだろうと、

「……おそらく、レベルアップ幻想御手……ですね。」

昨晚、美影がハッキングして調べたものは都市伝説にもなっている、使くとレベルが上がるといわれている物だ。

警護員、風紀委員ではまだ何も分かっているかないことなのだが美影はあらゆる情報を入手していた。

「・・・その都市伝説を信じろ、というのか？」

その都市伝説については知っているようだ。

だが、都市伝説は都市伝説、まがいものがほとんどであろうことを信じろということは無理がある。

「学園長なら信じると思いますね、『裏』にも携わっているあなたなら。」

「・・・はっはっは！！、やはり君は4人の中で一番侮れないようだ。で、私のことはどこまで調べたのだ？」

「いろいろ探りましたが、ほとんど分かりませんでしたね。少なくとも生徒は大切にしているようですが。」

美影は興味がないことにはほとんど関わらないが興味があることにはとことん突き詰める人物だ。

入学式の日には学園長が気になったため、その経歴、活動など調べた結果、学園長も美影と同じ『裏』の住人であることに辿りついた。そして、自分ほど深いところには入っていないことも。

「無論だ。私は学生が大好きでね、そのためこうしてここの学園長をやつとるのだよ。・・・少し話がそれだが、君は幻想御手をどこまで調べた？」



話の流れを修正し、再度尋ねる。

美影は調査結果を話す。

「幻想御手の仕組み、作成者、副作用、そんなところでですね。」

彼にとっては物足りないようだがまだ世間では本格捜査にも至っていないことのため、驚くべきことだ。

学園長は再度高らかに笑う。

「はっはっは、もうそこまでいったとは驚きだよ。私でもそこまで  
は知らない。ぬのたは布束君が言った通りだ、君はあらゆることについて  
知りすぎている。」

「布束先輩をご存じで？」

「彼女をこの学園に誘ったのはこの私なのだよ。」

「・・・ならあの実験も知っているようですね。」

「・・・うむ、君も苦勞したようだね。」

ねぎらいの言葉を言われたがそのことはあまり話したくはないと  
いうのが美影の心情だ。

ぬのたはしのぶ布束砥信、というのは長点上機学園の第3学年に在籍している女  
学生だ。幼少の頃から生物学的精神医学の分野で頭角を現し、第  
七薬学研究センターでの研究機関を挟んだ後に、長点上機学園に復  
学した人で、美影とはその実験により知り合ったのだがそれはまた  
別の話。

「で、君はどうするのだ？ 『スペース』としてこれを止めるのかね？」

美影は彼が自身の暗部の名を口にしたことに顔には出さないが驚く。この様子だと『グループ』、『スクール』のことも知っているだろう。

「いえ、そのつもりはありません、依頼もありませんし。それに俺は幻想御手の作成者に会ったことがあります、私利私欲のために作ったとは思えませんので。・あと、副作用ですが、特に問題はないでしょう。」

美影は己の見解を話した。

調べた結果、出てきたおそらく幻想御手の黒幕であろう人物は美影が会い、わずかに話したのだが、学生を犠牲にしてまで何かをしようというような狂科学者<sup>ドクサイエンティスト</sup>とは思えなかった。

そのため、残ったキーワード、『動機』を美影は調べるつもりだ。

「・・・そうか、なら今日はもういいです。学園の教師たちには私から話しておくよ。」

副作用はさほど問題でないと分かったため、倒れた学生たちはさほど心配しなくてもいいと分かり、ここで話は終わった。

美影は一言いい、学園長室のドアを開け、出ようとしたとき、

「・・・あまり子供が危険な真似をしてはいかんよ。」

学園長が言葉を漏らす。

おそらくレベル5全員のことを調べた結果、思ったことだろう。

美影は何も言わず出ていくが、心の中では答えていた。

(・・・もう遅いですよ・・・。)

部屋を出て、数秒立ち止り、思考する。

そして、とあることを決断し、歩きだした。

「よオ、美影、どうだった？」

玄関で一方通行が待っていたようだ。近くには垣根と削板もいる。

「まあ、いろいろあったね。」

「で、先輩たちはどうなってた？」

今度は垣根が尋ねる。

倒れた者たちはあのあと全員病院に搬送された。

美影の予想では何も分からないが何も起こらないだろう。

美影は学園長室のことを言う。

「レベルアップ  
幻想御手だよ。」

新たな事件（後書き）

評価　お願いします

アンケートの詳細は第9部、『秘密』にかいてありますので

## 全力

「幻想御手、か」

美影は学園長室であつたことを話す。

一方通行と垣根は『裏』の住人であり、削板軍覇も過去にかかわっていたこともあるが、もちろん美影ほど情報を入手しているわけではないため、その内容は思いがけないことであつた。

ただ、三人ともその噂ぐらいは聞いていたようだが。

「それを使えば俺も強くなるのか？」

垣根が尋ねる。

レベル5である彼はこれ以上レベルを上げるとはほとんど不可能に近いことではあるが第2位という不完全とも呼べる位置にいるため、幻想御手というものには人一倍興味があるようだ。

だが美影がその幻想を壊す。

「残念だが、俺は強くなるかもしれないが、お前ら3人は無理だ。」

「なんでだ？」

垣根は不服そうな顔をする。

「なんでだと思う？　ちなみにレベル5の中では麦野も無理だろうな。」

クイズ形式のように美影は問い、ヒントを加える。

このままでは足懸かりとなるものは少なすぎて普通のものでは何れも分からないかもしれないが、

「・・・そういうことか。」

「なるほどねエ、」

学園都市一の頭脳を持つ彼らにとっては十分すぎたようだ。  
一人を除き。

「どういうことだ？ さっぱりわからん。」

削板軍覇、レベル5で序列が最も低い第7位である彼には少々難しい問題であつたようだ。

学校で行われているテストで、レベル5のうち、一方通行、垣根、美影は高得点を取り成績優秀者として大きく張り出される紙にも名前が載るほどののだが、彼はぎりぎり平均点を超えるくらいというほどの頭脳なのだ。

削板は人工的な手段に依らず、超能力を発現させた天然の異能者『原石』の頂点に立つ男でレベル5と呼べるほどの強力な力を有していることは確かなのだが、研究者が手をつけられないほどひどく繊細かつ複雑は能力であるため、通常的能力者が必ず行つ『演算』ということを行っているのかさえ分かっていない。

そのため、レベル5と呼ぶにふさわしい力があっても頭脳がいいとは言えないのだ。

彼が理解できないことも美影の想定内だ。

「第1位、第2位、第4位、第7位の共通点は『唯一無二』<sup>オニリーワン</sup>の能力

であることだ。俺が調べた限りでは幻想御手はありふれた能力を持っているやつのほうが効果はある。」

「なんでだ？ 使っやつで効果が変わるのか？？」

「軍覇、お前にも分かりやすく説明するとだな」

美影は自分の調査結果と仮説を話した。

「　　というわけだ。　分かったか？、軍覇」

「うーむ、よくわかったが、よくわからん。」

「じゃあもういいや。」

要するに削板はあまり理解できなかったのだ、と捉え、彼に理解を求めることは諦めた。

美影は出来るだけ分かるようには言ったのだが、正直、内容は難しいもので専門用語もたくさんあったため、いったい百人に話して何人が理解できるものであったのだろうか。

むしろ学生である美影が言えることが不思議なくらいの内容であった。

「・・・それが本当なら学園都市でトンでもねエことが起こるんじゃないのか？」

「しかも幻想御手の黒幕に関しては・・・」

だが、学園都市のトップツウである一方通行と垣根は理解でき、その意味が通じたようだ。

美影は二ツ、と笑みを浮かべ、

「ああ、ものすごい力が手に入るだろうな。だからお前らは使うなよ、絶対に。」

さもないと誰も止められないほど面倒なことになるかもしれない。

「

念を押すように美影は言う。

その顔からはどこか楽しんでいるようにもみえる。

削板もその台詞だけは理解できたため、「お、おう」と返事をする。

理解できた二人にとっては自分が幻想御手を使った際の脅威を十分理解できているため間違いなく使うことはしないだろう。

「ま、俺が入れることはここまでだ、」

美影にとってはこれだけのことを話せても『ここまで』といえるほど物足りないものなのだ。彼を満足させるためにはどれほどの情報があるのかは誰にも、美影自身にも分からない。

話はそこで終わり、彼らはそれぞれの帰路についた。



（ん？ 電話だ。）

美影が家に着いたのとほぼ同時に彼の携帯が鳴りだした。

画面を見ると『白井黒子』と前日に共に行動したものの名が表示されていた。

何の用だ？、と疑問に思い携帯の通話ボタンを押して携帯を左耳に当てる。

「もしもし、どうした白井？」

『・・・お兄様、実は折入って相談がありますの。』

「何？」

聞こえてきた声は思いのほか深刻そうな声のため不思議に思う。

『お兄様、「幻想御手」というものをご存知ですか？』

「・・・噂は聞いたことがあるな。 使えばゲームみたいにレベルアップするって、」

内容は美影が先ほど事細かく友達に説明したものであった。まさか「それを作ったやつもしっているよ」なんて言えない。

美影はようやく風紀委員でも話題になったか、と思い嘘の返事をする。

『ホントですか？ 実は昨日捕まえた犯人の能力の強度に大きな食い違いがありましたの。』

実は今回だけではなくいままでも何度も書庫のデータと違うというケ

「ースがありまして、  
そして辿りついたものがその幻想御手ですの。」

「幻想御手が出回ったせいでこうなったと？」

『ええ、』

美影に比べれば手掛かりをつかむのもかなり遅いことではあるが  
正規のデータベースしか見れない風紀委員である白井にとってはか  
なり早いといえるだろう。

美影は言葉には出さないが賞賛した。

「で、相談つてのは？」

『その幻想御手について情報を入手しましたの。そしてお姉様が  
これから覆面捜査をすることで探りを入れようということになりましたの。』

「はあ？　なんでそんなことに？」

意外な調査法に美影は間抜けな声を出す。

『本当はわたくしがやるべきことだと思いますが、お姉様が私は風  
紀委員だから面が割れているかもしれない、と。』

「ふーん、で、心配だから俺が白井と美琴の近くで待機してろ、と。」

『そついうことですの。』

相変わらず無駄に首を突っ込むやつだなあ、と美影は心の中で思う。  
そついう好奇心満載なところは兄妹として似ているのかもしれない。

「いいよ、引き受けても。」

断る理由も見当たらなかったし、何より少し面白そうだと興味とすこし不安を抱き、返事をする。

『本当ですよ！？ では 』

美影は白井から場所を聞き、家を出た。

数分後、美影は同じく第7学区の Jona Garden、通称『ジヨナG』というファミレスの扉をくぐった。

見渡すといかにも不良といった男たちに話しかけている美琴の姿と不良たちから姿は見えないが声は聞こえる、という絶好のポジションに座っている白井の姿が目に入った。

美影は迷わず白井の正面の席に座り、適当にコーヒーを注文した。

向かい合う白井と美影の姿はカップルとも見えなくはないが二人の心境はそれほど穏やかではなく意識は二人とも向かい合うものではなく少し離れたところにいる美琴に向けられている。

「幻想御手について知ってたあ？」

「ネットで偶然、お兄さんたちの書き込みを見つけてえ、出来たら私にも教えてほしいなあって。」

耳を澄ました先には実の兄である美影でも見たことがないほどのぶりっ子爆発の美琴の姿が会った。

一分後、

「わたしい、そんなにこどもじゃあないよお？」

「ブフツ!!」

美琴の豹変ぶりに飲んでいたメロンクリームソーダを噴き出す美琴信者。

美影はなんとかその飛来物を重力操作で自分に当たらないようにする。

(・・・なにこれおもしろ、)

さらに一分後、

「金もいいが、こついつときゃやっぱり、こつちのほうがねえ、」

「でもそういうのはやっぱり怖いっていうか、私まだあ、よく知らないしい、」

鼻の下を伸ばす不良を軽くあしらいながら自分のペースに持っていこうとする美琴、

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、」

白井は何にぶつけていいか分からない衝動を机に頭をぶつけて消費している。

（人の妹に何言ってくれてんのかなあ？）

またさらに一分後、

「わ、わたし、お父さんとお母さんが『お前は出来る子なんだから』って言葉に応えたくて学園都市に来たのに、結果を残せなくて、」

今にも泣きだしそうな美琴の姿にどうすればいいのかわからなくなる不良。

白井はずっと頭をぶつけている。

（・・・そんな理由じゃねえだろうが、）

美琴の嘘泣きが今まで一度も通じなかった美影は心の中でよくそんな嘘つけるな、とあきれている。

またまたさらに一分後、

「わーっ た、泣くなめんどくせえ、教えてやるよ。」

美琴が来ているのが常盤台中学の制服であることに気付き、金のことでは期待できると思い、不良たちは了承する。

「二ッ、」

（ちよろいもんねえ、）

美琴は不良たちに見えない角度で悪戯な笑みを浮かべる。

（・・・よくやるなあ、ホント、）

白井は頭を打ち続け過ぎたのかピクリとも動かない。  
それほどシヨックだったのだろうか。

美琴が不良たちから情報を得るべく、場所を移動しようとしたとき、  
状況は一変する。

「これこれ、童子<sup>わらし</sup>ども、寄って集って女の子の財布を奪うんじゃありません！」

ツンツン頭の少年が勘違いして不良たちを止めるべく出てきた。

（あれ？、あいつは・・・）

それは美影も面識がある人物だった。

「ええ〜！トイレに集団でゾロゾロは女の子の特権だと思っ  
てましたが　！！」

いきなり出てきた招かれざる少年、上条当麻が不良たちに説教じ  
みたことをして約1分、その対象となるものがトイレからぞろぞろ  
と出てくる。

不良が3人くらいならなんとかできると思っていたのだが実際に  
いたのは9人。

彼らのテーブルを良く見てみるとしっかりと人数分の料理が置い  
てあった。

このままではやられる、と直感し、急いで全力で逃走が始めるが  
この人数相手では逃げ切るのも危うい。

「ああ、お客様！」

上条は代金を払わず店を出たため、定員が声を上げるが届かない。  
上条は食い逃げ犯扱いとなってしまうのだ。

（くっくくく、これは面白いことになってきたなあ、）

美影は上条を、怒り出して彼を追いかけた不良たちを、また計画  
を壊されて腹を立てて彼らを追いかけた美琴の後を追うべく立ち上  
がる。

燃え尽きている白井は無視して、

「あ、これ今出て行ったウニ頭の方も含めて、」

万札を定員に渡し、店を出て、美影は走り出した。

美影が上条を見つけるのは簡単だ。

彼の右手、『イマジンプレイカー幻想殺し』は美影の重力探知には反応しない。

だがそれ以外の空間にある固体、液体、気体は全て探知できるため、美影が探知できないところに上条はいることになる。

そのため、探知した物体をいちいち分析して形状や質量を把握しなくても彼らは見つけれらるのだ。

美影が走る途中、美琴の電撃を食らったのか、ビリビリとしびれている不良達がいた。

その中で先ほど美琴にセクハラ発言をし、いやらしい目で見た不良の顔を美影はご丁寧にも自身の体重を少し増やしてから思いつきり踏みながら走り続ける。

踏まれた不良は不意にも追い打ちを食らったため、顔はひどい有様だ。

美影が辿りついたとき、上条と美琴は以前美影と麦野が対戦した川をまたぐアーチ鉄橋の上にいた。

「せっかく演技までして情報を得ようとしていたってのに、邪魔されるなんて・・・どうしてくれるのよ!」



美琴は生体電気を操り、中学生の少女とは思えない走りをしたため息一つ乱れていない。

対する上条はバテバテだ。

「不良たちが追ってこなくなったのは・・・」

後ろからは不良の野太い声は聞こえてこないため、美琴におそろおそろ尋ねる。

「うん、めんどいから私がやっといた。」

はあ、上条はため息をつき、不良たちに同情する。

彼も美琴の電撃の餌食となりそうになることが今までに何度もあったため、彼女がいかに危険かはよく知っているのだ。

尤も、上条は自身の右手のおかげで直接ダメージを受けることはなかったが、そのせいで美琴に目をつけられ、今までに何度も追いかけられることがあった。

彼にとって、それは一種のトラウマとなっている。

「ねえ、レールガンって知ってる？」

美琴はポケットから一枚のコインを取り出す。

どこかのゲームセンターのものだろうか。

「別名『超電磁砲』。フレミングの運動量を借りて、砲弾を打ち出したりできるモンなんだけど、」

手に持つコインをコイントスをするように打ち上げる。

「こづいつのを言っらしいんだけどね!!」

美琴が自由落下してきたコインを帯電させた指で前方に弾こうとしたとき、

「ストップだ美琴、」

美影が後方から高速で飛んできて、美琴の指に達する前にコインをつかみ、急ブレーキをかけ、上条のそばで止まる。

「な、なにすんのよ!」

「こんなもん、人間に打つなよ。」

「今のは脅しのつもりだったのよ。それにそいつには通用しないし、」

万が一、人間に直撃したら体は吹っ飛ぶどころか消し飛ぶかもしれない。

美琴が生身の人間に当てる気はないことは美影も分かっているが、たとえ近距離でも失敗しないという可能性はないためやはり止めるしかなかったのだ。

「あれ、御坂!??」

「よ、上条。久しぶりって程でもないか。」

「ん? 御坂?? ビリビリも御坂だから、もしかして兄妹!??」

「うん、そうだよ。 いや、俺の妹が迷惑かけているみだいだね。」

「ホントですよ、まったく。 知り合いに見せかけて不良に絡まっていたビリビリを助けようとしたときビリビリにビリビリされそうになったから右手で打ち消してから事あることに電撃を喰らいそうになりました、」

「うちのビリビリの躰がなっていないようで、すいませんねえ、」

美琴を無視し、上条との話が盛り上がっていくと美影も『ビリビリ』と呼ぶようになってしまい、ついに美琴の堪忍袋の緒が切れる。

「二人して、人のことをビリビリビリ言うなー！！！」

怒りのあまり、二人に電撃を飛ばすが、上条の右手によって消え失せる。

「おー、相変わらず不思議な右手しているねえ、」

「はあ、不幸だ。」

「こらビリビリ、上条さんにビリビリするんじゃないやありません！」

「ビリビリ言うなー！！！」

上条が命名したあだ名が気に入ったのか、美影はまたビリビリと呼ぶので、美琴は雷でできた槍を美影に投げるが、美影が右手を前に向けると重力操作により電子は拡散し、槍は消える。

美琴は上条と美影、二人共に電撃を防がれたため、苛立ち、右手の人差し指を前に向け、

「どっちでもいいから私と勝負しなさい!!」

「「やだ。」」

勝負を挑もうとするが同時に即答で拒絶される。

美琴はさらに苛立ち、頭を抱え、どうするべきか考えると、二人とも普通の電撃が効かないことを逆手に取り、普通ならできない行動をとろうとする。

「あー、もう！ ならこうしてやるわ!!」

美琴は突然大人しくなり、演算に集中する。

すると遥か頭上に大きな陰ができ、月が隠れ、さらに暗くなる。

「ん？ なんだあれは？」

上条はそれに気づき、首を上に向け。

なぜだか悪い予感しかなくなり、いやな汗が出てくる。

「あー、こりやまずいかも。」

上条がその胸騒ぎの原因が分からない中、美影は頭上の物体を重力探知で視ると、全体は大きすぎて探知できなかったがそれが何なのかを瞬時に分かった。

積乱雲。別名雷雲で、その名のとおり雷の発生源となり、生み出す電気量は発電所の比にならない。

そのため、先ほどの電撃や雷の槍とは威力も桁違いだろう。

「ずっと心のどこかでブレーキをかけてたのかもしれないわね。」

頭上からゴロゴロと鳴り出し、上条もその言葉の意味が分かる。

「私の全てを出し切った全身全霊の攻撃……人間相手に流石にこれは……とか躊躇するなんて本っ当、私らしくなかったわ」

上条は危険を感じ、逃げるために足を動かそうとするがすでに遅い。

ドガアーーン、と上方から光り輝く一本の線が二人に落ちてきた。

その日の天気

晴れのち雷（一部分）

全力（後書き）

評価 お願いします

## それぞれの決意

美琴による落雷があつた夜、上条と美影は各々の能力を使うことで何とか身を守ることができたため、けが人は奇跡的にいなかった。もし落下地点にいたのが彼らではなかったら死人がいたかもしれない。

物理的にダメージを受けたものはいなかったのだが、美琴の落雷の余波を受けて第7学区では大規模な停電、電子機器の損傷を受けてしまったものが多く、金銭的ダメージを負ってしまったものが多発した。

上条や美影も例外でない。

美影に関してはコンセントを抜いていたため、パソコンは無事ではあつたのだが、家電製品は全滅であつた。

そのため、その晩と翌日の朝は夏の暑さにうなだれることとなつた。

翌日、長点上機学園は夏休み前最後の日である。

つまり、明日から学生が待ちに臨んだ長期休暇となるのだ。

この学園では終業式は午後であり、午前は通常どおり授業を行うため、美影と一方通行はこの日も屋上で昼休みの時間を潰していた。

「そオいやお前の家は大丈夫だったのかア？」

「なにが？」

ふと一方通行から問いかけられ、美影は首を傾げる。

「昨日の夜によオ、いきなり停電したかと思ったら家電全部ぶっこわれたンだが、」

「……、」

やっぱりか、と美影は思う。

一方通行も第7学区に在住しているため同様な被害を受けることは明らかだ。

「それさあ、俺の妹のせいなんだよねえ。」

「第三位のかア？」

「いやあ、いろいろあって全力で雷落とされちゃったんだよ。」

「ンじゃ、お前が弁償しろ。」

「……お前も金なら燃やすほどあるだろ。」



一方通行は学園都市の序列1位、つまり研究価値が最も高いため、学園都市において彼より金銭面で苦勞しないものはいないかもしれない。

そのため、すぐにでも最新の家電製品を購入しようと思っても痛くもかゆくもないはずだ。

「どオセお前が勝負すんの断ったからだろ。」

「はあ、分かったよ、帰りにな。」

一方通行の予想は半分当たっている。

つまり、原因は美影にあるのだと暗に伝えられたため、渋々了承する。

一方通行なら容赦なく最高級品を注文するだろうが奨学金と多額の研究成果により、美影も一生使い切れないほど貯金されているため問題ない。

「そオだ、」

一方通行がなにか思い出したように言う。

「レベルアップ幻想御手の事だが、俺たちが片付けることになった。」

「『グループ』が?」

「あア、」

ついこの間までただの都市伝説になっていた幻想御手だが、日がつたにつれ使用者による事件が多発したため、警護員や風紀委員も認めざるを得ない物体となったのだ。

使用者が学園都市の上層部、統括理事会の一人を襲撃したため、一方通行が所属している暗部組織、『グループ』に解決を要請したのだ。

美影は少し考えるような仕草をし、

「一方通行、その仕事俺に出来ない？」

「『スペース』にか？」

「まあ、俺だけなんだが、だめか？」

「俺はどオでもいいンだが、土御門に聞いてみるよ。」

美影の注文に疑問を持つが、一方通行にとって『暗部』での仕事はあってもなくてもいいような存在であるため美影に変わりにやつてもらうことに問題はない。むしろ楽になって良い。

だが、今回の依頼を受けた『グループ』のリーダー的役割を果たしている土御門元春の承認を得なければいけない。  
つちみかどもとはる

美影はポケットから携帯電話を取り出し、土御門に電話をする。

10回ぐらいコール音がしてからつながった。

『どうした、カゲヤン？ そっちから電話してくるなんてめずらしいにやー。』

猫ボイスでこの上なく軽い口調で話してきた。

『カゲヤン』というのは土御門しか使わない美影のあだ名で始めてあったときに命名された。

第一声から相手を苛立たせそうな男ではあるが、実は彼は魔術サ

イドの人間であり、科学・魔術の狭間で飛び回り、なんとか戦争を回避させ続けている功労者であり、学園都市統括理事長の正体を知っている数少ない人物なのだ。

美影は魔術サイドとの行き来に手を貸している。

一方通行は美影と土御門が面識があるということは知っているがそれ以上のことは何も知らないため、美影と違い『魔術』については何も知らない。

「一方通行から聞いたんだけど幻想御手の処理を任されたんだって？」

『ああ、統括理事に頼まれてな、それがどうしたんだ？』

軽い口調をやめ、シリアスな雰囲気になる。

彼が電話になかなか出なかったのも美影からの電話がおそらく仕事関係だと予想し、人目につかないところへ移動したからなのだ。

「その仕事さあ、俺に譲ってくれない？」

『・・・お前がやるのか？』

「いや、俺じゃない。」

『じゃ、誰が？』

土御門は美影の意図が分からない。

美影は一拍置いてから口を開く。

「御坂美琴、俺の妹だ。」

『!!!・・・なんでだ?』

その言葉に電話の向こうにいる土御門と美影のそばにいる一方通行が驚く。

「この前調べたが、美琴が幻想御手の使用者による事件と何度か関わっていてね。風紀委員に仲の良いやつもいるからおそらく『俺たち』が何もしなかったら事件のど真ん中に飛び込むことになる。」

『根拠は?』

「俺の勘だ。」

美影が“勘”といったときは必ずと言っていいほどその通りになる。暗部での経験、多量の情報により美影は深く思考しなくても大抵のことは予想できる。

『・・・たてえそうだったとして大丈夫なのか?』

美琴は暗部とは直接的になにも関わっていない、レベル意外は普通の少女だ。

そのため、軍隊に勝るとも劣らない力を持っているとしても他のレベルらと比べると『甘い』と言えよう。それこそが彼女の魅力でもあり、白井のような信奉者を生み出す源泉といえよう。

「・・・俺の妹だぜ？」

『！・・・わかった、上には俺が話しておく。』

「サンキュー、土御門。」

短く、簡潔な言葉であるが、土御門にとってはこれ以上ないほど説得力があったようだ。

『だが御坂、兄の役割ってのは“妹を危険な目にあわせないこと”なんだぜ？』

「違うな土御門、兄の役割は“妹に兄を必要とさせないこと”だ。そのためには少しぐらい危険な目にあわせて強くさせるのがちょうどいいんだよ。」

『・・・義理の妹と実の妹の違いだにやー。』

土御門には舞夏という義妹がいてこの上なく大切にしている。少なくともlike以上のloveの感情を抱いて。要するに彼は世に言うシスコンだ。

美影とは見解の相違があると感じ、それ以上追求しなかった。そこで話題が変わり、

『そうだ、カゲヤン。 昨日の停電だがそのカゲヤンの妹が原因か

？』

「ん、そうだけど。」

土御門は第7学区の学校の生徒で、上条当麻と同じ学校に通っていてしかも部屋は上条の隣だ。

つまり、

『そのせいで冷蔵庫もレンジもオーブンも吹っ飛んじまったんだぜい。 どうしてくれんだ、このままでは舞夏の手料理が食べられないんだにゃー！！』

電話越しで見ることはできないのだが、くねくねと体をひねらせながら八つ当たりのように講義する土御門。

そんな彼との会話が面倒になってきたのか、

「わかった、わかった、一方通行と同じやつ買ってやるから電話で騒ぐな。」

『本当にゃー？』

「はいはい、だから大人しく義妹といちゃいちゃしてろ、シスコン軍曹。」

『あ！？、ちよつとカゲy』

何か言いたかったようだが美影に電話を切られてしまったため、一人携帯に向かい大声を上げるといふ惨めな状態になってしまった。

「つー分けた。」

ポケットに携帯を入れた美影は一方通行に言う。

「大丈夫なのか？」

一方通行は心配をしているわけではないが一応美影に尋ねる。

彼は美琴とは以前一度だけ会ったのだがとてもじゃないが『学園都市』と関わる事が出来るような人材とは思えない。美影の妹ということを考慮しても。

だが美影は微笑み、

「まあ、万が一なんかあったら俺が何とかするし、というか美琴なら大丈夫だろう。」

美影は美琴を信じている。

だからこそ美琴に任せることができ、それが土御門を説得できた理由なのだ。

だが、安心はできないため、美影はもしものことを考える。

「ああ、そオ。」

美影が信じているので一方通行はこれ以上口出ししても意味はないと感じる。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、二人は校舎に入っていた。

終業式を終え、長点上機学園も夏休みを迎えた。

ちなみに長点上機学園には夏休みのど真ん中の一日に全校生徒が登校しなくてはならない、というなんとも迷惑なイベントがあるのだ。

美影は一方通行と学校に通うことにいろいろと不安を感じていたのだがこの4カ月は学園内で彼らが問題を起こすことはなかった。レベル5ということもあり、同級生からも先輩達からも必ずと言っていいほど距離を置かれていたが、レベル5が4人もいることもあり、“学園”が彼らになれることも遅くはなかった。

そして美影が夏休みの初めに行ったことは、

家電製品の購入だった。

「で、アクセラ君は何がいるんですかー？」

だるそうに家電量販店内を歩きながら一方通行に尋ねる美影。対する一方通行は美影に奢らせることが出来るからなのか機嫌がよさそうだ。

「あア、そオだな、冷蔵庫と炊飯器と電子レンジと液晶テレビとブルーレイレコーダーと洗濯機と掃除機とパソコンとメモリースティックとクーラーと空気清浄機と加湿器と扇風機とコーヒーメーカーと」



「おい、適当に目についたものを言っな。」

「ソファとテーブルとベッドと、」

「ここにねえし壊れてねえだろ。」

家の中のものを全て取り替えるような勢いで一方通行は次々と浮かんだものを言っていく。しかも彼が求めているものはおそらくどれも最高級品だろう。

だが美影は金には困っていない、というよりありすぎて困るほどであるため、一方通行の非常識な要求には困ってはいないが呆れている。

「けっ、仕方ねエから控えめにしといてやるよ。」

「その『控えめ』って言葉をしっかりと辞書で調べておけよ。」

一方通行は基本料理はしない。

その為よく美影を誘ってファミレスや高級レストランに行ったりする。それが出来ないときは基本冷凍食品を適当に食べるため、食品関係で家電製品で使うのは冷蔵庫とレンジぐらいだ。

彼の能力であるベクトル操作を使えば常人では出来そうにない料理テクが出来るかもしれないがそんなことには能力を使いたくないらしい。

だがあっても困ることはないため、必要以上に美影には買うように『おねだり』をした。

文句を言う美影ではあるが、あの落雷の被害を受けたのは一方通行だけではないため、彼の注文をいくら受けても被害総額には到底及ばないだろう。

さすがの美影もその被害総額を全て払うことが出来るとは限らない。

というより、もともと一方通行の要求も美琴が受けるべきなのだが。

「お、お会計は2749800円になります・・・。」

「カードで一括をお願いします。」

一方通行のものだけではなく土御門のものまで買ったためかなりの額になってしまい、定員は若干引き気味だ。

学生ということもあり、割引されているがどれもこれも学園都市でも最新機能が付いたものばかりなため、他とは文字通り桁が違う。おそらくこれで土御門からは文句ものろけ話も来ないだろう。

購入主が学生であるため代金をしっかり払ってもらえるのかと心配になったが美影は焦ることなく平然とカードを差し出すため一驚を喫してしまった。

一方通行と土御門の家にそれぞれ配達するようにし、二人は店から出て行った。

「で、お前はあれからなんもしてねエのか？」

数日後、美影と一方通行も夏休みになったということもあり、昼間から街を歩いている。

もちろん彼ら以外の学生も見られるがここが第7学区であるため彼らの学園の生徒は見られない。

「直接関わる気はないけど、風紀委員の動向を見たりしてるし、あと」

美影と一方通行は立ち止る。

彼らが辿りついたのは荒れた路地裏。しかも風紀委員も近づけないほどの不良のたまり場だ。

「こいつらの相手しないといけないし。」

二人の周りには約200人の武装無能力者<sup>スキルアウト</sup>集団がいる。というより200人の中へと入って行ったのだ。

美影は土御門に先日頼んだところ、直接関わることはしなくても良いことになったが幻想御手の使用者の暴挙を止めるように頼まれたのだ。

幻想御手を使用したとはいえもとは無能力者<sup>レベル0</sup>。

そのため、レベルが上がったとしてもせいぜい異能力者<sup>レベル2</sup>になるくらいで長点上機学園の生徒のように自然災害並みの力は得られないため美影の敵ではない。

ちなみに一方通行を連れてきたのは、

「んあ？　なんだあいつら？」

「おい、あの白い奴、第1位じゃねえか？」

「いつもはやられてばかりだか、今の俺たちなら、」

「ああ、レベルアップ<sup>2</sup>を手に入れた俺たちなら、」

「おい、なんかうぜエ視線が腐るほどあるンだが、」

「そのためにお前を連れてきたんだから。」

美影は一方通行を不良の避雷針代わりに連れてきたのだ。普段一方通行は学園都市第1位に位置するためその座を狙い、人数や凶器など試行錯誤して奇襲をかけられているのだ。

もちろん相手になるわけはなく、一方通行の能力のデフォルトである“反射”だけで終わってしまったため“とある単語”を一方通行に向かって口にしない場合は気にも止められない。万が一それを言うとき軽く半殺しにされることは武装無能力者集団の一部では噂になっているらしい。

だが、圧倒的な力の差を見せ付けられたとしてもそのような輩は後を絶たない。

しかも今回の場合、彼らは幻想御手を使用したため勝機があると勘違いしているため、さらに始末が悪い。

「・・・お前まさか家電買わせたこと」

「さあ、がんばろう！」

「オイ、」

先日の家電製品を必要以上に買わせたことを根に持っていてうっぷんを晴らすべく一方通行を連れてきたのだ。

美影はそれほど執念深い性格をしているわけではないが何となくムカついたため一方通行に面倒事を押し付けようという結論に至ったというわけだ。

「まア、さつさと終わらすとしますかア、」

「これ終わったら何食べる?」

「ハンバーグステーキ。」

「・・・ここでミンチ作んなよ?」

「さアな、保障できねエな。」

他愛のない（シャレにならない）話をしながら200対2の戦いは始まった。

「本当にお前のシナリオ通りにいくのか?」

不良の山の上に立ちながら一方通行は尋ねる。

結局不良たちは10分とかからずに全員ノックアウトされてしまったため、食事時にもならなかった。もちろん美影と一方通行は無傷だ。

美影は近くにあった自動販売機からしつかりとお金を入れて缶コーヒーを二つ購入し、一本を一方通行に投げる。

「美琴が首謀者を止められるかってことか?」

「それもあるが、お前に助けを求めねエっていう保証はねエンじゃねエのか?」

美影は美琴を強くするためといってこの事件はなおざりにするといった。

が、美影の力を借りていてはそれは達成されない。もし美琴が助けを求めた場合、美影は状況的に断ることは出来ない。そして力を貸せばおそらくすぐに解決してしまうのだ。

「それはないよ。」

「なんでだ？ またお得意の勘か？」

迷うことなく否定する美影に一方通行は首をかしげる。

「いや、これは勘じゃなくてちゃんと根拠もあるよ。」

「どういうことだ？」

「あいつは」

美影と一方通行が不良200人を撃破したのと同時刻、御坂美琴は風紀委員第177支部にいたたまれない気持ちでいた。

佐天が幻想御手により意識不明となり、初春が今現在幻想御手の首謀者の元において危険な目にあっているかもしれない。

「私もでるわ！」

「一般人を巻き込みたくはないけど、超能力者レベル5のあなたが手伝ってくれたら」

美琴の自薦を風紀委員である固法美偉は受け入れる。

学園都市中を巻き込んでいるこの事件を解決するのになりふり構ってられない。

美琴は頷き、支部から出て行くとする。

「お姉様！」

白井は突き進もうとする美琴を引き留める。

非常事態であるが白井は敬愛する美琴を危険な目にあわせたくないのだ。

「初春も風紀委員の端くれですの。いざとなれば自分の力で……たぶん……なんとか、」

初春が独力で解決とまではいかなくても自信を守れる、と言いたいが言いきることが出来ない。

なぜなら彼女は白井や美琴のような戦闘に長けた能力を持っているわけではなく、腕立て伏せが一回も出来ないほど力がないのだ。

バックアップとしては白井のベストパートナーと呼べるが一人では正直心もとない。

なんとなく理解できた美琴も対応に困ってしまう。

「……運が良ければ……」

最終的に宝くじ並みの確率になってしまった。それほど頼れないのかもしれない話だ。

「それにわたくしも」

そこで美琴は白井の肩をたたく。

「ッ!!」

痛みで白井の体が痙攣する。

「そんな体で動こうつての？」

「お姉様、気づかれて・・・」

彼女は幻想御手の使用者が力を試すために起こした蛮行を止めてきたのだ。

美影ほど戦闘慣れしているわけではないのでわずかながら傷を負うことが度重なり、彼女の体はボロボロなのだ。

美琴の目を盗んで治療をしてきたが痛みが普段の仕草に影響したため美琴は気づいていたのだ。

「当たり前でしょ。」

美琴は白井の額に指を当て、ほほ笑み、

「アンタは私の後輩なんだから、こんなときぐらい『お姉様』を頼りなさい。」



ウインクをし、なだめるように言う。

白井は信じ、心から頼れる美琴の力を借りることにするがやはり心配だ。

「でしたら、お兄様にも、」

美琴と同じ、レベル5であり、虚空爆破事件を難なく解決した美影の協力を得ることを提案する。

彼は美琴と同じように信頼できる人物であり、この事件も解決へと導いてくれると信じ、携帯を取り出す。

「それはダメよ。」

「ど、どうしてですか？」

携帯を起動しようとする手をすぐさま止める美琴に戸惑い、尋ねる。

「あいつは、美影はいつも私を助けてくれるのよ。いつしか私は美影を頼ってばかりになっていて・・・、そんな自分が私は許せないのよ。」

美影は昔から自分が困った時は助け舟となってくれてどんな悩みでも解決してくれていた。美影に頼めば必ず解決してくれた。

でも自分は美影には何もしていない。そんな不甲斐ないままではいけない。

努力して超能力者<sup>レベル5</sup>になっても美影の隣に立っているとはいえない。能力ではないことで“強く”ならないと・・・

「私のわがままかもしれないけど私の力で何とかしたいの。」

まっすぐな目を白井に向け、頼み込む。

白井は頷き、

「そうですわね。わたくしもお兄様には何度が助けてもらいましたの。・・今回こそはわたくしたちの力で解決しましょう。」

「ええ、」

白井も美影に頼ってばかりでは彼に追いつくことは出来ないと思い、改める。

また美琴を心の底から信じているからこそその決断だ

そこで美琴と白井は各々の役目を果たすべく、動き始める。

「ケツ、助けてもらってばかりじゃダメだってかア？ そんなところまで考えておいて任せるなんて趣味悪いな、お前は。」

コーヒーを飲みこみ、体が痒そうに一方通行は言う。

美影は飲みほしたコーヒーの缶をゴミ投げ捨て立ち上がる。

「自分でもそう思うよ。それに美琴は優しいからな、俺を危険な目にあわせたくもないんだろうな。」

（まったく、何言っただよ。）

一方通行もコーヒーを飲みほし、缶を消しゴムぐらいのサイズに潰して投げ捨てる。

その顔は呆れ果てているようだ。

（本当に優しいのは、テメエだろオが・・・）

## それぞれの決意（後書き）

アンケートの結果、美影のイメージＣＶは鈴村健一さんに決まりました！

ゲイジさんや他の案を出してくれた方々、ありがとうございました。

また、評価、感想はこれからもお願いします。

## 二つの感情を知る者

(・・・どうなってんのよ)

御坂美琴が着いたときには現場は想像を遥かに上回るほど荒れていた。

場所は高速道路。だが車は一台も走行していない。

車がないわけではないがどれも横倒しにされ、使い物にならなくなっている。

それだけではない。道路は所々挟られ、万全の策を講じていた警<sup>アン</sup>護員<sup>チスキル</sup>は全員倒れている。

その中で立っているのは白衣を着用した女性、木山<sup>きやまはのみ</sup>春生ただ一人。  
以前美影の研究所に訪れた彼女がこの幻想<sup>レベルアップ</sup>御手事件の黒幕だ。

現在も目の下に隈がくつきりとあるが、なぜか左目が真っ赤に充血している。

この状況を作り出したのも彼女だ。

念動力で警護員を操り同じ警護員を所持している銃で撃ち、水流により一般者よりも一回りも二回りも大きな警護員の車を吹き飛ばし、暴風で周囲を吹き飛ばす。

これを彼女はたった一人で行ったのだ。

そんなことは学園都市中を探してもできるものはいない。能力は

一人にひとつ。  
例外はない。

つまり、それができる彼女は

「おー、すごいことになってるよ一方通行。」

不良を撃退した後、まだ昼飯時までは時間があつたため何をしようか考えていたとき、一方通行が先日美影に購入してもらった家電製品が届いていたがまだ整理していないので手伝うように言われたため、二人は今一方通行の家にいる。

その中、美影は幻想御手事件の状況が知りたかったため、ワームホールで自宅からノートパソコンと無線LANを取り出し、ハッキングをし、ジャックメント風紀委員第177支部が見ている映像、つまり木山春生の活劇を見ている。

驚いているような声をあげているが美影の予想通りでもある。

「デュアルスキル多重能力、か。」

つられて一方通行も画面をのぞく。

多重能力というものは文字通り複数の能力を扱うというもの。一方通行が以前放り込まれていた場所、特例能力者多重調整技術研究所を始めとするところで研究がされていたため一方通行はそれにについて少なからず知っている。

そしてそこで出された結論は『多重能力者は実現不可能』という

ものだ。

だが現に彼女は使えている。

それにも関わらず一方通行は表情ひとつ変えない。美影が以前学園で説明したからだ。

むしろこの状況を随分前から予想できた美影に賛嘆すべきか。

「幻想御手の副産物だね。まあ、多重能力とは方式がまったく違うんだけど。」

「どオでもいいけどさっさと手伝えよ。」

まだ箱に入った電子レンジをさっさと開けるといわんばかりに乱暴に美影に投げつける。

美影はそれを片手で受け取り、箱を開けた。

取るときに能力でレンジを運搬の際に商品を保護するための発泡スチロールぐらいの重量に変えたため、美影の腕にもレンジにも衝撃はほとんどない。

「俺としてはけっこう面白いんだけどね。」

なぜ木山が多重能力もどきを使っているのか。言わずもがな幻想御手だ。

幻想御手の正体は共感性性を利用して使用者の脳波に干渉する音声ファイルだ。音を聞いた者の脳波を繋げ、『一つの巨大な脳』状態のネットワークを構成することができ、同系統の能力者の思考パターンを共有する事で一時的に能力が上げられる。

そして幻想御手は木山の脳波パターンを基準として作られたため彼女は使用者の能力全てを扱うことができるのだ。

家電で例えると、温めることしかできない電子レンジ、冷やすこ

としかできない冷蔵庫、風を送ることしかできない扇風機を一つの家に入れることでそれぞれの効果を一箇所で発揮することができる。今の木山はこの『家』になっているとっていい。

美影が対戦した上級生の役割を彼女一人で果たすことができるのだ。

「お前の妹がその何でも屋に勝てるのか？」

「まあ、なんとかなるでしょ。木山は警護員を一人も殺していないんだし、多分死ぬことはないだろ。」

「ひでエ兄貴だな、お前。」

「うらやましいか？」

「うるせエ、さっさとこれ片付けろ。」

実際美琴が木山を止められる保障はどこにもない。

彼女が超能力を使うのが初めてであっても、威力を制限してても、たった一つの能力しか使えない、本当の戦闘をしたことがない美琴が彼女に負けないとは確信できない。

彼女には何を敵に回してもやらねばならないことがあるのだから。

だが、美影は『信じている』。

それだけしかしていないが、それで十分だ。



「驚いたわ、ホントにいくつも能力が使えるのね。多重能力者なんて、楽しませてくれるじゃない！」

今までにない相手に美琴は好奇心に駆られ、笑みがこぼれる。

「私の能力は、理論上不可能とされるあれとは方式が違う。．．い  
わば、多才能力だ」  
マルチスキル

「言い方なんて何でもいいわよ。こっちがやることに変わりはないんだから！」

美琴の手から青白い電撃が放たれ、木山に襲う。

が、木山は念動力で捻じ曲げ、自身を避けるようにした後、反撃に空気を擦り合わせたような風の刃を放つ。美琴が横っ飛びで避けたのを見ると、さらに追い討ちといわんばかりに高速道路そのものに罅<sup>ひび</sup>をいれ、崩し、相手を墜落させる。

（なんてやつ、自分を巻き込むのもお構いなしに能力を振るってくる！）

電磁力で鉄を含む高速道路の足に蜘蛛のように張り付き地面との激突を避ける。

対する木山は念動力を使ったのか、風を使ったのか、紙が落ちるようにゆっくりと白衣を揺らしながら着地した。

「もうやめにしないか？ 私はある事柄について調べたいだけなんだ。それが終われば全員解放する。．．誰も犠牲にはしない。」

落ち着いた口調で美琴に交渉を持ちかける。

どうやら嘘ではないようだ。  
だが、

「ふざけんじゃないわよ！・・誰も犠牲にはしない？あれたけの人間を巻き込んでおいて人の心をもてあそんでおいて！ そんなもの、見過ごせるわけじゃないでしょうが！」

美琴も友人である佐天涙子が幻想御手の使用により現在は昏睡状態だ。

彼女だけではない。学園都市中で約1万人がそのような状態だ。

木山は美琴が間違っていることを言っているとは思わない。  
純粹に真実を、正当なことを言っている。

だが、純粹すぎる。

かつて会った“彼”とは見据えているものがかかけ離れている。

「まったく、同じ超能力者でもここまで違うとは。やはり世間知らずのただのお嬢様か。」

頭に手を当て、呆れたように言葉が漏れる。

「どういう意味よ！」

心外だといわんばかりに磁力で持ち上げた一つのボーリング玉ぐらの瓦礫を木山に投げつけるがやはり能力の一つで遮られ届かない。

「君は第六位の事を知っているかね？」

え？、と木山の言葉で心の中で驚く。

自分が誰よりも知っていると知っている人物だからだ。

「知っているも何も、私の兄よ！」

「！、これは驚いた、まさかレベル5に血縁関係がいたとは。・・だがそれほど近くににいるのに何も分かっていないとは本当に呆れるよ。」

「だからどう意味か聞いてんでしょ！」

「そうだな、彼と同じ質問を君にもしてみようか。」

「・・・、」

「君はこの『学園都市』をどう思う？」

「楽しいところよ、・・アンタみたいなのがいなければね！」

「・・やはり彼とは目が語るものがまったく違うな。・・彼はこう言った、『この街には知らないほうがいいことが多すぎる』とね、」

「・・・？」

美琴は美影の言葉の趣旨が捕らえ切れていない。

そもそも彼がどういう生活を送っているのかを知らないのだ。

思えば不可解な点が多すぎる。中学にはまともに行っていないかったらしいし、彼の学園の寮にも住まない。

ゆえに彼の心情が読めないのだ。

「私は深く共感したよ。この街には君たちのようなものが知るべきではないことが山ほどある。非人道的なことが多すぎる。」

「なかなか面白そうなのが聞けそうね。・・アンタを捕まえたあとでじっくり聞いてあげるわよ！」

美琴は右手を地面に近づけ、帯電させる。すると地面から黒い粉末状のものが湧き上がる。

砂鉄だ。

地中に多く存在する鉄の粉を磁力によりひきつけ、取り出したのだ。

さらに磁力で砂鉄を剣へと形成し、それを何本もつくり、一斉に木山に襲い掛かる。

木山を串刺し、とまではいかなくても身動きを封じるつもりで攻撃したのだが巨大な瓦礫を操り、盾をしたため砂鉄が一粒も当たらない。

「残念だが、まだつかまるわけには行かない！」

木山は後方に存在していたゴミ箱を念動力で持ち上げ、中身を美琴目掛けて投げつける。

「空き缶!？」

中にあつたのはジュースの空き缶。それだけでは打撲すらもたらずことができないが美琴はそれを使った破壊力抜群の能力を知っている。

「重力子！」  
グラビトン

以前虚空爆破事件の元となった素粒子の一つ。  
かいたひはつや  
介旅初矢はそれを使い美影に人的被害は防がれたがデパートのフロアを一つ炭に変えるほどを威力を発動していた。

それもおそらくアルミ製の物体ひとつで。

だが目の前に撒き散らされたのは数え切れないほどの空き缶。<sup>アルミ</sup>全てがそれと同程度の威力であれば美琴は確実に無事では済まない。

「さあ、どうする？」

「全部、吹き飛ばす！！」

美琴からそれまでのものの数倍も大きな電気が<sup>はとばし</sup>迸り、缶を一気に貫く。

粉碎し、跡形もなくなった缶はその効力を発揮しない。

「すごいな、・・・だが、」

缶はまだ残っている、木山の手に。

大量の重力子と結合したアルミ缶は<sup>テレポート</sup>空間移動により手から煙のようになくなる。

美琴が達成感を感じている中、不意をつかれ、後方に缶が出現した。

「しまっ」

気づいたときにはもう遅い。

ドガアーン！！、と音を立て、美琴の後方約2メートルで爆発が起きた。

「のんきだなア、実の妹がドンパチやってるってのに。」

電化製品を全て取り出し、指定の場所に配置した後、二人は腹も減ったのでファストフード店にきていた。

一方通行の前には肉好きの彼にはたまらない巨大なチキン。ただし、真っ赤なパウダーで覆われていていかにも辛そうだ。唐辛子には夏バテ防止作用があるというが彼には関係がない。単に辛味から来る刺激が彼に合っているのだ。

美影の前には夏休み限定のハンバーガーがあり、それに香気にかぶりついている。

学園都市にあるフード店ではまるで実験であるかのように普通ではありえないような組み合わせのものを限定商品を称し学生に売り込むことが多々あるが今回美影が食べているのは正統派を呼べるような十分写真からでも分かるほどお美味しそうなものだった。珍しいものの好きの彼でも流石にゲテモノを口には入れたくはない。

「んなこと言ったって何もしないって決めたんだからしょうがないだろ。っていうかそんな時にお前は部屋の整理させてんじゃねえか。」

「お前のせいだろ。」

「ドンパチやっている美琴のせいだよ。」

「うわァー、妹のせいにいてやんの。」

「・・・顔の粉拭けよ。」

見ると一方通行の顔には赤い粉が付いている。唐辛子をたっぷり含んでいるため、このままではカプサイシンが皮膚に浸透し、ヒリヒリとしそうだ。

食べているため反射はしていない。

だがテーブルの端においてある紙ナプキンを使わず、一方通行はベクトル操作で粉末を全て吹き飛ばした。

定員が驚いた様子を見せるが美影はまったく動じない。

これぐらいで反応していたらおそらく彼の親友なんて務まらないだろう。

「つつても買いかぶりすぎなんじゃねエの？ 俺らと同じ超能力者<sup>レベル5</sup>だっていつても単なる中二のガキだろオが。」

「まあ、そうかもしれないな。」

否定はしない。

彼女には自分たちのように卑劣な行いはできない。

人殺しなんて以ての外。彼女にとってそれはテレビや漫画の中の現象だ。

「でも、」

美影は小さくなった期間限定のハンバーガーをつかむ。

「怒ったあいつは、強いぞ。」

美影はそれを口へと入れた。

「つつかまーえた」

美琴はその場にあつた鉄を含む物体を一瞬でかき集め、即席の盾を形成することで爆発から身を守ったのだ。

擦り傷を負っているが大事に至る怪我はない。

「ゼロ距離からの電撃、・・・あのバカには効かなかったけど、いくらなんでもあんなとんでも能力は持っていないでしょうね！」

あいつとはもちろん上条のことだ。

美琴は彼に勝負を仕掛けたときに手をつかみ電撃を流し込もうとしたのだが右手の力により能力そのものが発動しなかったのだ。そのとき、手をつかんだことに顔を赤くしていたのは内緒だ。万が一、上条が幻想御手を使つたところで木山に能力が行き渡ることはないが、彼女は詳しく知らない。

木山は急いで抵抗しようと周りの土砂を槍状に形成したがすでに木山にしがみついている美琴の攻撃より遙かに遅い。

先ほどまで飛ばしていた青白い電撃がバチバチ！と音を上げ木山を覆う。

それは冬の静電気とはまったく違う本物の“電撃”だ。

痛みで木山が悲鳴を上げ、攻撃が終わったところには美琴に身を任せるように力が抜けている。



「一応手加減はしておいたから、」

だが美琴は鬼にはなれない。

電撃が人体に及ぼす影響を知っている彼女は木山の身体的に問題がない程度の威力を食らわせたため命に別状はない。

だが、

『きやませんせい!』

「え？ なに？」

『せんせい!』

『きやませんせい!』

突然無邪気な、小さな子供の声が聞こえる。

それも耳からではない。直接頭に響いているような感じだ。

「これは、木山春生の記憶・・・？」

声だけではない。彼女の過去であろう光景<sup>ビジョン</sup>が見えてくる。

原因はすぐ分かった。

記憶は脳内で電気信号として刻まれる。

電撃を浴びた木山の状態を診るために彼女に流した美琴の微弱な

電磁波が偶然木山の脳の電磁波と同調<sup>チューニング</sup>したのだ。

見えたのは子供たちの花のような笑顔。

教師の頃の木山春生

彼女が嫌いだった子供との穏やかな、幸せな生活

そして

「え？・・・いまのは？」

美琴は惑乱し、言葉が漏れる。

一気に彼女の昔の記憶が、感情が、頭に叩き込まれた。

最後に見えたのは実験により血まみれとなり、意識不明となった子供たち。

何も知らない美琴に悲劇が脳裏に移しだされ、思考が停止する。

「み、見られたのか？」

木山も意識を取り出す。

だが激しい痛みが体に響く。

それは身体的なものだけではない。美琴により、過去の記憶が彼女にも鮮明に浮かび上がったのだ。

当時の感情が呼び起こされたのだ。

「なんで、・・・なんであんなこと？」

美琴は分からない。

教師として生活を共にしてきた生徒を実験に巻き込んだことが、命の危険にさらさないといけなかったことが。

木山はボロボロの体を起こし、立ち上がる。

「あれは表向き、AIM拡散力場を制御するための実験とされていた。が、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ。AIM拡散力場を刺激して暴走の条件を知るのが本当の目的だったというわけさ。」

「じゃあ、」

「暴走は意図的に仕込まれていたのさ。・・・尤も気づいたのは後になってからだけどね。」

「人体・・・実験・・・」

美琴から一つの言葉が漏れる。

それは明らかに違法行為。人道に反する行為だ。

「あの子達はいまも目覚めることなく今もお眠り続けている。私たちはあの子達を使い捨ての実験材料モルモットしたんだ！」

声に力が入るにつれて彼女の目に涙が浮かぶ。

悲しみが表へと現れる。

「でも、そんなことならアンチスキル警護員に通報して」

「23回。」

木山の何の変哲もない数字によって美琴の声が遮られる。

「あの子達の恢復手段を探るため、そして事故の糾明を行うためにツリーダイアグラム樹形図の設計者の申請をした回数だ。樹形図の設計者の演算能力をもつてすればあの子達を助けられるはずだった。もう一度太陽の下を走らせることもできただろう。」

次第に木山の声が震えてくる。

自分にとっては話したくない過去。それを打ち明けたれた美琴はただ、聴いていることしかできない。

「だが却下された！ 23回とも全て！！」

「ええ！？」

「統括理事会がグルなんだ！ 警護員が動くわけがない！！」

「だからって、こんなやり方」

たとえ子供たちを助けるためだとしても学園都市中の学生を巻き込む方法以外にもあったはずだ。

そう信じたい。

このやり方を否定したい。

「君に何が分かる！！」

だが木山は言葉を遮り、叫ぶ。

何も知らない、たった一人の学生に咎められたくはない。

何も分かっていない者に何も言われたくはない。

木山の慟哭なげなげに美琴はひるむ。彼女は何も言うことができない。

『この街には知らないほうがいいことが多すぎる。』

（アンタ、どんなとこにいるのよ！！）

美影の言葉が少し分かった気がするが、やはり分からない。

彼は自分について、自分の周りについて妹である自分にもほとんど何も言わない。

兄でありながら疑問が多い美影に、無知な己に怒りがこみ上げてくる。

「あの子達を救うためなら、私は何だってする。この街の全てを敵に回しても、やめるわけにはいかないんだ！！」  
「っ！！」

叫んだ木山の様子に異変が起こる。

「あ、ああ、くっ、ああ、・・ね、ネットワークの暴走、これは、」

頭を抑え、唸り声を上げたかと思うと、突然前に倒れた。  
目の前の状況に美琴は茫然としてみると、木山の体から『何か』がでてくる。

白く、細長く、奇怪な『それ』は、上空に飛び出すと形態が変化する。

それはまるで、

「・・・・・胎児・・・・？」

人間のものとは容積も色も形状も違うが、胎児のように見える。  
背中からは青白い、翼のようなものが生え、頭上には赤橙に輝く天使の輪のようなものがある。

その『怪物』は深紅の目を開け、鋸刃のような左右に裂けた口を開き、

『キオオアアアアアア！！！！』

この世の生物<sup>モノ</sup>とは思えない産声を上げた。

「あー、やっぱり出たか。」

「なんだア、ありやア？」

美影と一方通行の二人は現場に来て、状況を目で見ている。

ただし、場所は美琴たちから直線距離で約400メートル離れた地上から50メートル上空。

監視カメラが全部死に、美影のワームホールでここまで来たのだ。衛星をハッキングすればどこからでも見れるが視線は上からしかないため。状況は分かりにくい。

ただ、美琴に見つかるこの状況ほどではないが面倒なことになり兼ねないため、彼女が無意識に発している電磁波によるレーダーに感知されない距離にいる。

そして二人が現在見ているのは木山から出てきた白い『化け物』  
AIMバースト幻想猛獣とでも言ったところか。

幻想御手のネットワークの暴走により出現した、AIM拡散力場で出来た怪物だ。

彼らも見るのは初めてだが、美影は心当たりがあるようだ。

「ハッ、おめでたかア？」

「そんな幸せの結晶みたいなモンならいいんだが、あれは憎悪の結晶だよ。」

冗談を言っている一方通行に対し、美影の表情は少し真剣だ。

「誰に対してのだ？」

「俺たち超能力者<sup>レベル5</sup>に対して、かな。」

「・・・身に覚えがねエな。」

「俺もそう言いたいけど、努力でもどうにもならないやつは自然と『俺たち』に嫉妬することくらいよくわかってんだろ。」

「ハッ、迷惑な話だ。」

鼻で笑っているが一方通行も彼らの気持ちは分かっている。  
いつも自分に襲撃してくる武装無能力集団がこういう気持ちか、  
学園で勝負を挑んできた上級生がなにを求めているのか。

「だが、何も分かっていないな幻想御手の使用者も。俺たちのことが。」

「その感じだと文句があるみてエだなア。」

「お前はないのか？ レベル5になって不満に思ったことが、」

「ンなもん、」

そこで一方通行は一拍置き、口をあける。



「何度だつてあるに決まつてンだろオが。」

「だよな・・・」

超能力者が己の力を恨むことはおそらく全員にあるだろう。  
もしかしたらその気持ちは無能力者の高位能力者に対する嫉妬よりも強いかもしれない。

頂点だからこそ誰よりも苦しんでいるのかもしれない。  
重苦しい雰囲気になつた中、美影が口を開く。

「だからこそ、これは美琴が解決するべきなんだよね。」

彼女は低能力者から超能力者<sup>レベル5</sup>になつたという230万人の中で唯一の実例だ。

底辺と頂点を経験した彼女だからこそその二つの感情を『知っている』。だからこそ、彼らの気持ちを『分かつてやれる』。学園都市の学生の心意を汲取つたといつてもいいこの事件を無下に扱つてはいけない。

それが幻想御手事件を細部まで調べた美影が美琴に事件の解決を任せた理由だ。

彼女は厳しい現実にあたきつけられるかもしれない。苦しみのあまり泣き出すかもしれない。だが、それを乗り越えてこそ『強くなる』。

それができると彼は信じているのだ。

木山から聞き、幻想猛獣の対処方法ははっきりと分かった。

幻想御手ワクチンソフトの『音』を学園都市中に流すことで使用者の脳波ネットワークを破壊すること。それにより幻想猛獣を構成しているAIM拡散力場が壊れ、怪物は弱体化するはずだ。

それで解決するという保証はないがそれしかない。

ソフトを手にした初春は警護員の元へ音を流してもらったため走る。

彼女にも強い思いがある。

だが彼女の進路に幻想猛獣の攻撃の流れ弾が飛んでくる。それと対戦している美琴が止めきれず、光り輝く一本の線が初春が上る階段に直撃する。

初春には運よく当たらなかったがその衝撃でひるみ、倒れてしまう。

「急がないと、皆手遅れに、．．佐天さんも」

風紀委員として、親友として、守るべき者がいる。

チカラ  
能力の小さな自分でも出来ることがある。

体が痛むが、歯を食いしばって立ち上がり、前進する。

だが、さらにもう一発、流れ弾が飛来してくる。

ドバァーーン！！と破裂音が聞こえ、初春は思わず目を閉じてしまう。

だが、音が響くだけで痛みが来ない。

おそろおそろ目を開けるとそこには警護員の二人が盾で攻撃を防いでくれたのだ。

対能力者用に作られた盾は幻想御手の使用者の能力を使う幻想御手の攻撃で傷一つ付かない。

「大丈夫？」

「まったく、最近の若い奴は無茶するじゃん！」

気が弱そうなメガネをかけた鉄装綴里てつそうづりに“じゃん”という口調が特徴的な黄泉川愛穂よみかわあいほがつづいて言う。

「治療プログラムは？」

「あ、無事です！」

初春は手に持っている小さなマイクロSDをみると問題はないようで安心した。

だが、止まってはもらえない。

さらに進もうとするが幻想猛獣の触手に先ほどよりも巨大な光の塊が現れる。

その規模は自分たちが防げる範疇を超えているだろう。

万事休すか、と思うと突如幻想猛獣の手が吹き飛ぶ。

「シカトしてんじゃないわよ。アンタの相手はこの私だって言ったでしょ。みつともなく泣き叫んでないで、まっすぐ私に向ってきなさい——！」

学園都市第三位、超電磁砲の御坂美琴が正面から怪物へと向かっていった。

「おー、黄泉川さんもがんばってるねえ、」

「あのうるせエババアか。」

二人は何度も深夜に出歩いているところを補導されそうになっているため彼女の顔はよく覚えている。ちなみに彼女はけっしてババアという年ではない。

「結構面白いことになってきたな。」

「何度も再生しているみてエだが、あれは止まるのか？」

空中で漂いながら美琴の電撃を何度も受けても再生する幻想猛獣に疑念を抱き、一方通行が尋ねると美影はとあるものをポケットから取り出した。

「ちなみにこのワクチンソフトを使えば再生能力ぐらいはなくなるだろうね。」

取り出したものは初春が持っているものと同じもの。彼が幻想御手を解析したときに万が一のことを考えて自作したものだ。そんなものを作る美影は正直異常と言えるかもしれない。

「あア、あの花瓶が大事そうに持っていたやつか。」

「もういらないだろうけど。」

「お前が助けたからな。」

「・・・やつばれてた？」

「当たり前だ。」

実は先ほどの初春への幻想猛獣の攻撃は美影が強引に捻じ曲げたのだ。遠距離であったため軌道をわずかしこせなかったが十分だったため、美影は先ほど顔には出さなしていなかったがほっとしていたのだ。

だが、通常のベクトルとは違っていたため一方通行には気づかれていたようだが、問題はない。

「前言撤回するなんて俺らしくなかったか？」

何もしないと言ったが実際は美影は手を出してしまった。  
だが、もちろん罪悪感はない。

「助けねエほうがお前らしくねエよ。」

「それはよかった。」

美影がほほ笑んでいるとボォーンという籠っているような音質が悪い音楽のような音が学園都市中に響いた。

「おっ、やっとか。」

「ああ？　これがワクチンソフトってやつかア？」

「ああ、じきに使用者全員が元に戻るだろうな。」

彼らに聞こえるほど学園都市中のあらゆるスピーカーを使い、意識不明者に一人残らず聞こえるように黄泉川が強引に警護員本部に命令したのだ。

音の意味が分からないものも多くいるだろうが一万人にとっては救命の目覚ましとなっている。

（ラストスパートだよ、美琴）

「これで、ゲームオーバーよ！！」

右手から放たれた電撃が幻想猛獣に直撃する。

しかし威力が足りないのか致命傷と呼べるものは与えられていない。

ネットワークの破壊には成功したようだが幻想猛獣はAIM拡散力場から生まれた1万人の思念の塊。

普通の生物の常識は通用しない。

だが、内部にある力場を固定している核を壊せば全ては終わる。

（やはり、彼女の力では・・・）

木山は彼女を見て思う。

自分に向けていたものと同じでは絶対に勝てないと。  
彼女では力不足ではないのかと。

だが、その疑念はすぐにかき消される。

美琴の電撃が何倍にも膨れ上がり、怪物を覆う。

直接あたっているわけではない。

強引にねじ込んだ電気抵抗の熱により怪物の表面が消し飛んでいくのだ。

木山に向けていたのが本気ではない。

人間にむけて本気を出したのは上条と美影の一件以外に一度もない。

『私だって』

『能力者に』

『なりたかった』

『でも私なんて』

『幻想御手に』

『頼るしかなかった』

幻想猛獣から『声』が聞こえる。

それは紛れもなく使用者の胸中だ。

美琴が超能力者<sup>レベル5</sup>になって長いこと忘れていた気持ちだ。

「ごめんね。」

幻想猛獣の触手を先ほどまでとは比べ物にならないほどの量の砂鉄で切断すると氷の塊が飛来してくる。だがそれも砂鉄によりひとつ残らず粉碎する。

「気づいてあげられなくて。」

幻想御手を使うなんて馬鹿げたことだと思っていた。  
でもレベル5になったことで『分かっていたなかった』。

「頑張りたかったんだよね。」

低能力者<sup>レベル1</sup>だったころ、超能力者<sup>レベル5</sup>に憧れ、美影<sup>兄</sup>に憧れ、彼らのようになりたかった気持ち。

『なんの力もない自分が』

『嫌で』



『でも』

『どうしても憧れが捨てられなくて』

「うん、でももう一度頑張ってみよう。」

なんとかして少しでもレベルを上げたいという純粹な気持ち。満たされたことで気づかなくなってしまった気持ち。それを彼女は『思い出した』。

美琴はタングステン製のコインを取り出し、垂直にはじく。

「こんなところでよくよしないで、自分に嘘つかないで、もう一度！」

指で弾き、超電磁砲レールガンとなったコインが音速の3倍の速さで飛ぶ。一本の線が幻想猛獣を貫き、核と思われる三角柱の物体を怪物の中から外へと飛び出し、砕け散る。

「これが、・・・超能力者レベル5・・・！」

木山はその強大な力に息を飲み、言葉が漏れる。学園都市の最大戦力、軍隊に匹敵するチカラ、学園都市中の学生が羨望するチカラ、それを改めて思い知らされた。

幻想猛獣は弾孔から腐食されるように黒く焦げ、灰となり、煙のようになくなっていった。

その後、黒幕である木山は警護員に搬送された。  
もちろん子どもたちを助けることを諦めているわけではない。  
何年かかってもどこにいても諦めない。

それが彼女の信念だ。

「終わったみてエだな、美影。 お前の妹もやるじゃねエか。」

今だ上空にいる一方通行が称賛の声を美影にかける。  
だが美影はなにか考えているようだ。

(・・・AIM・・・虚数学区・・・あれはやっぱり)

「おい美影！」

腕を組み、どこともたれない空中を見ながら思考している美影に  
少し大きな声を出し、我に返させる。

「ん？ ああ、ごめんごめん。」

「どうしたんだ？ お前らしくねエな。」

「いやあ、ちょっと考えごととしていて、」

「何をだ？」

「んー、まだ何とも言えない。」

美影は確証がないこと、曖昧なことを口にはしない。  
そうでないことも言わないことが多いが今回のことは本当に彼にも分かっていないことのようなのである。

「ああ、そオ。」

「んじゃ、俺らも帰るか。」

「さっさと通路作りやがりな」

「はいはい」

幕間・一目(ひとめ)・(前書き)

7人目です

幻想御手事件が解決して数日後、夏休みということもあり美影には『暗部』としての仕事は何日も続いて存在していた。

宿題という学生の自由との関所も存在するがレベル5の頭脳をもつ彼は夏休みになって3日で開けた。

つまり彼は自由の身となっている。

彼の暗部、つまり『スペース』としての仕事は大きく分けて二つある。

一つ目はレベル5としての強大な戦闘能力を利用した研究者及びマッドサイエンティストスキルアウト武装無能力集団の『抑制』もしくは『処分』。

これについては他の暗部でも行われていることである。

二つ目は彼の能力無限重力の応用の一つ、ワームホールを利用した『案内人』としての仕事。  
ブラックホール

特に彼は空間能力者とは違い、距離を制限されないため学園都市内部にいない人物でも『窓のないビル』へと導くことが出来るため、アレイスターには重宝されている。

また、その利便性のため、『魔術』の存在も彼が暗部に入るようになったところから知らされている。

それほど詳細までは美影は知らないのだが、少なくとも他のレベル5よりは近い所にいると言っていていいだろう。

彼の仕事の中にはもちろん幻想御手事件よりも非人道的といえるものも存在している。

だが、彼は断ったことは今まで一度もない。  
それには理由があるのだがもちろん誰にも話したことはない。話  
すわけにはいかない。

P M 2 0 : 0 0

美影は現在普通の学生が訪れないような裏路地へと足を運ばせて  
いる。

今回の依頼は武装無能力集団への『警告』。

武装無能力集団の小組織のひとつが今回の対象だ。

リーダーの名は鬼束おにたばと呼ばれる男で彼の指示で最近行動が活発に  
なってきたらしい。なぜか数を増やすことに力を入れている  
だとか。

『武装無能力集団』というが本当に『武装』と呼べることをして  
いるのは彼らの中でも1%にも満たない。

今回の対象も所持しているのはせいぜい金属バットかスタンガン  
くらいだ。

ならば警備員アンチスキルにでも任せればいいのではないか、と思ったのだが  
何か別件で最近騒いでいるらしい。だが正直そこらへんの諸事情は  
興味がない。ゆえに彼にとって調べるに値しない。

そして鬼束率いる不良たちが根城としている廃ビルが見えてきた。

（どうしよっかなー・・・）

彼は悩んでいる。

どうやって彼らと戦うかについて。

美影には少し物事をゲーム感覚で行う癖がある。

先日の幻想御手についてもほとんど全てを妹に任せ、高みの見物をする事によってその展開を楽しんでいた。

悪い癖ではあるが、万が一の時には然るべき対処をするためあまり意識していない。

（よし、）

決めた。

能力を使わずに彼らを倒すことに。

少人数、武器も少ないため、さほど問題はないだろう、と見当をつける。

そして廃ビルへと入っていった。

とある少女が夜の町を歩いている。

服装はかの有名な常盤台中学の制服。持ち物はバッグをひとつ下げている。

常盤台中学の門限は20時20分であり、現在は20時10分。

夏休みでも変わらない。

急がないと間に合わなくなってしまっただが彼女はまったく気にしていないようだ。特別に許可を取っているわけではない。

ばれても『なんとかなる』のだ。

「ふんふふーん、ふんふふーん、ふん、ふん、ふーん」

そして鼻歌交じりに彼女は路地裏へと入っていった。

女子一人、しかも中学生。明らかに危険でもし入っていくところを警護員に見られたら明らかに止められてしまうだろう。

だが、彼女は気にしない。

というよりわざと危険なところへと足を運ばせているのだ。

彼女にはいい趣味とはいえないものがある。

不良に絡まれたら自身の能力でその不良を滅茶苦茶にするという極悪非道とも取れる趣味。その状況を風紀委員ジャッジメントにでも見られたらこの少女が捕まってしまうだろう。

今までにそうなったことはないが万が一そうなったらその風紀委員も能力で押さえつけるため、やはり彼女には問題とはならない。世間的にはかなり問題といえることではあるのだが。

とにかく、彼女は不良で楽しむことがある。

そして今日も不良がいそうなところへと進んでいる。

「ふんふふーん、ふんふふーん、ふん、ふん？」

立ち止まった。

状況が普通の不良たちとは違う。

まず、何人も倒れていて、おそらく気絶している。

目立った外傷は見られないがとにかく倒れているものが多い。

そして立っているのはただ一人。



後姿しか見えなかったが、こちらの存在に気づいたようで振り向いた。

そしてその顔を見て少女は驚いた。  
なぜなら・・

（あー終わった、終わった。）

美影は廃ビルの外に立っている。

本来ならビル内で全員に『警告』をするはずだったが、今回能力を使わないというルールを作ったため2、3人外に逃がしてしまったのだ。

すぐに追いかけて、追いつき、気絶へと追い込んだので仕事は無事終了した。何度か武装無能力集団の攻撃があたりそうになったがなんとか全て交わしたため、美影には傷はない。

そして撃破した武装無能力者にも後遺症が残るほどの怪我はない。彼は無闇に人を傷つけることはしない。

彼は人体についても知識が豊富なため、血を流させなくても強烈な痛みを与える方法を知っている。そのため怪我がない者も激しい痛みを与えられているため、倒れてしまっているというわけだ。

美影は一方通行のように能力に頼ってばかりではない。

体を鍛えることもあり、体術も心得ている。武器の扱いにも長けている。レベル5という軍隊にも匹敵する力を持つて入るが所詮は脳を弄られてできたもの。万が一能力がまったく使えなくなったときに何もできないでは話にならない。

『闇』に携わっている彼にとってその状況はありえないわけではない。

したがって、能力以外にも力はあったほうがいい。今回の仕事におけるルールもそのためでもある。

鬼束にもしっかりとたつぷりと『警告』<sup>警し</sup>をしたため仕事はもうない。

そしてその場から立ち去ろうとしたとき、背後に人の気配を感じた。

（あ・・・）

まずい、と感じた。

状況は好ましくない。

立っているのは自分だけ。他は気絶している。

どう説明しても仕切れないかもしれない。

能力を使っていなかったため、彼が頻繁に使う重力探知も使っていなかったため、部外者の存在を感知できなかった。

「あはは、見られちゃったかな？・・・」

とりあえず振り向き、愛想笑いを浮かべ、頭に手を当て、悩めますす的な仕草をする。実際悩んではいるのだが意識しないと彼はそのような感情は表には出ない。

最悪、精神系<sup>メンタル</sup>の能力者に頼んで記憶の改竄でもしようかなと思ったとき、

（あれ？ こいつ確か・・・）

背後にいた少女には見覚えがあった。

直接会ったことは一度もなかったが、資料でその顔を見たことが美影にはあった。

星の入った瞳に背に伸びるほどの長い金髪に、常盤台中学の制服を着用している他に、レース入りのハイソックスにレース入りの手袋を着用している。また、レースは蜘蛛の巣を連想させる模様となっている。そして、垣根が喜びそうなほど巨乳だ。

美影はそんなことには決して見とれてはいなかったが彼女は彼にとって無視できない存在であった。

（この人・・・）

その少女は美影を見たことはない。

彼は己の資料は極力誰にも見られないようにするため、レベル5といっても彼の顔を見たことがあるものは学園都市にはほとんどいない。

ゆえに、どこかであったっけなー、という心持ではない。

（この人・・・）

だが、美影からは目が離せなくなっていたのだ。

「あはは、見られちゃったかな？・・・」

そして目の前の人物から声がかけられた。

その声と同時に胸の中で何かが動いた。

（この人・・・）

顔、身長、体型、服装、仕草、そして声。

それら全てが彼女にとって理想の男性像のど真ん中の中の的の中していたのだ。

（かつこいい　！！）

おそらく自分の顔は赤くなっているだろう。

そして声をかけようとした瞬間、

その男は凄まじいスピードで立ち去ったのだ。

どんな能力を使ったかは分からないがこれでおそらく高位能力者に位置するとも分かり、ますます心惹かれ、感情は強まる。

「あの人・・・欲しい　！」

その少女は世に言う一目ぼれをしたのだ。

（あいつ・・・間違いないな・・・）

美影は絶賛逃走中だ。壁を走り、建物を飛び越えている。  
一瞬見ただけで彼女から離れたい衝動に駆られたのだ。

彼女が嫌いなわけではない。彼女に恨みを持たれているわけではない。彼女に恨みを持っているわけではない。

会うのは初めてだ。

あの場で会ってしまったことはまったくの偶然ではあるが、今までに会ったことがないことは偶然ではない。

美影自身が接触をできるだけ避けていたからだ。

その理由は単純明快、恐れていたからだ。

（俺と同じレベル5の一人、食蜂操祈だ・・・）

超能力者<sup>レベル5</sup>、序列は第5位、美琴と同じ常盤台中学に所属している少女。

名は『食蜂操祈』

そして所持する能力は『心理掌握』

学園都市最高の精神系能力。

記憶の読心・人格の洗脳・念話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植などなど 精神に関する事ならなんでもできる十徳ナイフのような能力。

そして美影が学園都市において最も恐れている能力だ。

（ふー、随分離れたな・・・）

美影が逃げることに約1分、あの場から3キロ程離れたところに着いた。

やりすぎではないかと思われるが彼にはちょうどいいくらいだ。追いつかれることはなんとしても避けたい。というより、今後、接触も避けたい。

それだけ彼は食蜂の能力を自分に使用されることを恐れているのだ。つまり、誰にも見られたくない記憶が彼の脳に刻まれているということだ。

もう帰ろうかな、と思っていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ちょっと、待ちなさいよ!!」

「誰が待つものですか！　かわいいんだからビリビリしながら男を追いかけるんじゃないやありません!!」

「え！？　な、にやに言ってるのよ！　いいから待ちなさい!!」  
／

（・・・）

美影はその鬼ごっこもとれる状況をただ見ていた。

逃走者は買い物袋を持った上条当麻、鬼は先ほど会った少女と同

じ常盤台中学の制服を着た少女、美影も良く知る御坂美琴だ。

そして上条の『かわいい』という言葉に過剰に反応し、顔を真っ赤にし、言葉もおかしくなっている。

ごまかそうと電撃を放ちながら上条を襲う。

「ああー！！ タマゴが、お肉が、貴重なタンパク源がー！！」

その電撃が上条のスーパーの袋に当たったせいでその中の食材がこんがりを越えて炭へと化してしまったようだ。

上条は半分以上本気の涙目になり、叫ぶ。

「不幸ーだー！！」

(・・・照れ隠しで電撃ヒリヒリかよ・・・)

美影は歩き出した。

上条と美琴がいるところと反対方向へ。

何となく、見ただけで関わりたくなかった。とりあえず美琴は門限が大丈夫なのは気になったがああ雰囲気ですれをもち出すのも気が引けた。

いろいろと面白いことになっていると思うが面倒に感じ、離れた。

そんなことより食蜂のことが頭にあった。

自分のことを調べる方法によっては美影には防げない。彼女の能力はハッキングでは止められない。

美琴の脳はおそらく電磁バリアによって干渉できないだろう。

だが問題は白井だ。

彼女は空間移動能力者であるため食蜂の能力は防げない。白井の脳内には自分の情報は少ないだろうが入っている。美琴の兄とは一番に分かる。

「はあ、・・・」

小さいが感情が強い、ため息を突く。

（まあ、いいか・・・）

レベル5とは分かっててもそれほど深く探ってこないだろう、と半ば諦めながら思う。

所詮自分は第六位。

つまり彼女の一つ下に位置する。とるに足りない存在だろう、と少々自虐的な考えを持つ。

それに元々自分が美琴の兄ということは白井以外には常盤台に知る者はいないのだから美琴から探ることにもしないかもしれない。

美影はいつもより浅い考えしかしていなかった。

彼はフラグを立ててしまったことに気づいていないのだから。





幕間・一目(ひとめ)・(後書き)

評価、感想、お願いします

## 青天の霹靂

夏休みになつて、約半分が経過した。

宿題をすすめた者、遊んばかりいた者、暑さにやられ何をやったのかさえ正確に覚えていないもの、とにかく生活は十人十色だろ  
う。

この日は長点上機学園は夏休みであるにも関わらず登校日となつて  
いる。しばらく会わないでいると驚くほど黒く肌が焼けている者が  
少なからずいることは夏において定番だ。

主な目的は9月19日から行われる大覇星祭の打ち合わせ。

この学園は前年度の優勝校であり、今年も期待されている。しか  
も今年度は超能力者<sup>レベル5</sup>を4人も獲得したため、ほぼ確実とさえ言われ  
ている。

もちろん油断は出来ないのだが。

そしてその4人が大活躍するであろうと思われるため、それを嫉  
視する上級生が敵対心を燃やし、なんとかして彼らよりも目立とう  
とする者が多発していた。

登校日の午後は種目との適性を図り、誰がどの競技に参加するか  
を決定することとなっている。

一芸がある生徒を入学させている長点上機学園においてはこの選  
択が重視され、間違えれば雲泥の泥にもなり兼ねないだろう。

「お前って本当にコーヒーばかりだな」

午前が終わり、生徒は昼休みを迎えている。

一方通行はいつもは屋上でのんびり過ごしているのだがこの日は購買が行われていないため無駄に広い食堂にいる。

だが同席しているのは美影ではなく彼よりも少し髪が長い垣根だ。誘われたため、一方通行は彼の正面に座っている。だが少し鬱陶しそうだ。

「てめエだって紅茶ばかりじゃねエか」

彼らがテーブルに置いているものは似ても似つかないものばかりだ。

片や肉料理とコーヒー、片や魚料理と紅茶。とてもじゃないが、二人は仲良しとは見えない。

ちなみに二人の横で、特盛のカツ丼と格闘している削板がいる。

そこへ突然、来訪者が来た。

「「突撃！ レベル5にインタビューー！！」」

「あア？」

「なんだ？」

「はんふおふあわふいふあ（なんの騒ぎだ）？」

男女の二人組が彼らの元へ来た。女のほうはカメラを持ち、男のほうは学校のものとは思えないほど大きなカメラを持っている。

新聞部のものだろうか。とにかくレベル5に取材しに来たようだ。

女子インタビュアーのほうが自分の口にマイクを当て、

「えー、御坂君がいないようですが、ここでレベル5の皆さんにインタビュー - と思いたいと思いまーす！」

ハイテンションな高めの声に一方通行はだるそうな表情になり、垣根は興味深そうに笑みを浮かべ、削板はハムスターのように膨らませた口の中身を飲みこもうとする。

男子生徒が持つカメラはその3人をとらえていた。その映像は生リアルタイム放送で食堂に品えつけられているテレビにも移し出されている。

そして、

「ではまず、3人の好みの女性をどうぞ！」

それから出るのも不自然とも取れなくはないが、学園の女子生徒にとっては一番気になることだろう。 実際、彼らのせい（知らないうちに）で別れたカップルはいくつもあった。

別れてまで告白しても断られることばかりなのだが。

一人ひとりにマイクを当て、

「あア、フツーのやつ」

「可愛い子かな、」

「根性があるやつだ！」

曖昧だがそれぞれの答えが返ってきた。

最後のは女子に求めるべきではないと思うが、気にしない。

「では次に、好きな食べ物を教えてください！」

この質問もおそらく女子生徒には無視できない内容だ。

彼らの分まで弁当を作ってくる女子生徒が多発しているのも事実。また料理は女性にとって重要な技能<sup>スキル</sup>だ。上手いに越したことはない。

また同じ順番で一方通行から言おうとしたが、

「お前はモヤシにきまっているよな」

垣根がいらぬ茶々を入れる。

一方通行は何を言おうか決め手はいなかったが、それは明らかに違う。しかもそれは言っではいけないことだ。

「はア？ なにふざけたこと言っただア、第二位」

「あつ、それじゃ共食いか！」

ポン、と左の手の平に右手の拳をあて、さらに調子にのったことを言う。垣根は火に油どころかガソリンを注いでいる。

それに怒り、バン！と手で机を叩き、立ち上がる。

「てめエ、ぶつ殺されてエのか！？」

「へー、お前に出来るのか？」

「当たり前だ、きめエ羽つけてるメルヘンなんかに負けるわけねエだろオが！！」

その言葉に垣根も逆上し、

「はあ！？ 真っ白なモヤシに言われたくねえな！ 何だ、コーヒーでも飲めば黒くなるともおもってんのか！？」

「ハッ！ てめエはそんなエセホストみてエなナリしてるくせに紅茶飲んで英国紳士でも気取ってんのかア！？」

学園都市のトップツイーを誇る彼らではあるが、今は単なる子供にしか見えない。

二人のインタビューはこの状況に戸惑い、マイクを二人の間に固定し、カメラは二人を撮っているままだ。

すなわち、この喧嘩は学園中に流れているというわけだ。

啞然とする者、面白がるもの、なぜかビクビクと振るえている者が見られるが二人は構わず口げんかする。ちなみに削板はカツ井とのケンカを再開していた。

そして第1位と第2位がたどり着いた結論が、

「「表に出るコラア！！」」

二人が子供のケンカをしているとは露知らず、美影は学園長室にいた。

もちろん学園長室に呼ばれたからである。

「レベルアップ幻想御手の件だが、君の妹が解決してくれたようだね？」

「ええ、」

幻想御手の被害者は長点上機学園では43人にも上っていた。その半数が美影に挑戦状を送った者であるが、美影にとっては正直どうでもよかった。ものすごく鬱陶しかったが。

とにかく、幻想御手の事件を解決したことで美琴の名は今までも広く知られることとなった。

「聞いたところによると君が任せたようだが、」

「まあ、本人には何も言いませんでしたけどやってくれたようですね」

それも知られていたか、と美影は思う。

それを知ることが出来るほど学園長は『裏』に関わっているということになる。

「で、そのことで俺を呼んだんですか？」

妹に対するねぎらいの声をかけるために呼んだというのはあまりにも不自然といえよう。

美影は腹も減っているということもあり、本題を求めた。

「ああ、君を呼んだのは」

伝えるべきことを伝えようとしたとき、外からドオーン！という爆発音が聞こえてきた。

穏やかな昼休みには不自然な音であったため、美影はすぐさま重力探知で学園全体を見る。

グラウンドに視えたのは空気の渦による翼で飛行する者と体積と



質量がこの世のものではありえないほど噛み合っていない物質により構成された翼で飛行するものだ。

つまり、

「あー、第1位と第2位が外で戦っていますね」

「ほお、それは面白そうだな、」

どこか他人事のように言う美影の言葉に子供のような好奇心をもつ学園長が反応する。

だが、それは『面白そう』では済まない。

「・・・このままだとこの学校が平坦な土地になってしまいますね、」

「・・・、」

「いや、下手をすれば第18学区ごと・・・」

「・・・止めてきなさい」

出来るかどうかかわからないが超能力者<sup>レベル5</sup>を止められる可能性を持つのは特例を除き同じ超能力者<sup>レベル5</sup>ぐらいだ。

運良く？目の前にいる超能力者に若干焦りながら止めるように指示する。

正直彼らならやり兼ねない。確実に出来る力は持っているのだから。

「はい、」

軽く返事をし、美影は外へと歩いていった。

美影は目の前の光景を見て、困るのでも怒るのでも悲しむのでも喜ぶのでも笑うのでもなく、ただただ呆れていた。はあ、と思わず生温かいたため息も出てしまう。

グラウンドは隕石が落ちたように深く抉れ、大地震でもあったように地割れがあり、嵐があったように備品が転がっている。

もちろんこの状況を作り出したのは美影の後ろで今だ睨みあっている一方通行と垣根帝督の二人だ。

「おい、」

「「はいつ!」「」

美影の呼びかけに飛び上がりように反応する二人。その状況はあまりにも不自然だ。

だが、<sup>第一位</sup>実際一方通行と<sup>第二位</sup>垣根帝督のケン力を止めたのは<sup>第六位</sup>御坂美影だ。その止め方は殴ったわけでも能力を使ったわけでもない。

（やっぱりあの写真もってやがったかア・・・）

（・・・どこであんな画像手にいれたんだ？、こいつ）

要するに美影は言葉で脅したのだ。彼の携帯に入っている2枚の写真と共に。

一方通行は心当たりがあったようだが、垣根はまったくのノーマークのものだ。いつどこでどうやって手に入れたのかは分からない。彼らは彼の情報網を強く呪って同じことを思う。

（（やばい、こいつ早く何とかしないと！！））

そこでピンポンパンポン　と放送の前触れとなるリズムが聞こえてきた。

『一方通行君、垣根帝督君、御坂美影君、削板軍霸君、至急学園長室まで来てください』

スピーカーから女性教師の声が聞こえてきた。おそらく学園長が命令したんだろう。

あれ？、と美影は思う。

3人までならまだ分かるが削板はいらない気がする。おそらくこの状況の收拾をつけるための放送だろうが彼はこの場にいない。

とにかく呼ばれたので外の三人プラスカツ井に勝った一人は学園長室へと足を運ばせた。

「まあ、とにかく御坂君は止めてくれたことに感謝するよ」

自身の学園が荒野へと化すことはなくなったため心の底から安心する。

美影は、どうも、と適当に返事をする。

「それで、この件の処分についてだが、」

当然罰は与えられる。

だが今は夏休み。停学は出来ない。学校の破壊は普段は決してあり得ないことだが退学になってもおかしくはないレベルだ。

でもレベル5を失うのは正直学園側としては痛い。

そこで提案されたことは、

「4人には明日から一週間、ジャッジメント風紀委員をやってもらう」

数秒の沈黙、

「は!？」

垣根が意味を理解し、声を上げる。他の三人も同じ気持ちを抱く。だが美影はもう一つ思う。

「なんで俺もなんですか？」

彼は先ほど学園を二人の悪魔から守った英雄だ（二人にとって美影が悪魔に見えるが）。

褒められても罰せられるべきではない。削板も同じだ。

「まあ、連帯責任だよ」

なんの連帯だ、と激しく問いたくなかったが、超能力者レベル5のだ、といわれるのが目に見えていたためあえて聞かなかった。

「俺もか!？」

削板も声をあげるが、その通りだ、としか言いようがない。理不尽ではあるがなぜか彼はすんなりと受け入れられた。前向きというか、バカというか。

「まあ、詳細は今日の夜にでも連絡するから、今日はもういいぞ」

4人のアドレスは入学して間もないころ、学園長に教えるように言われたため知られている。

それぞれの勤務先の支部でも決めるのだろう。ここでの話はそこで終わったため、4人は学園長室から出て行った。

(・・・?)

美影はそんな学園長を不審に思ったが、聞くことはしなかった。何を言っても変わらないだろう、と諦めつつ。

「あつはつは、残念だったなあ、美影！」

パン、と肩をたたき、笑いながら言う垣根。止めにいつて巻き込まれた美影が可笑しく思えたのだろう。

美影はそんな垣根にイラツと感じ、携帯をポケットから取り出し、とある画像を画面に映す。

「ちよつ、まじでそれは無しだ！」

不自然に光る手で携帯に触れようとする垣根だが美影に軽く躲さる。

画面に見えるのはもちろん先ほど脅しにつかったものだ。

「あー、今日の夜にでもうつかり手が滑って麦野にでも送信しちゃいそーだなー、気をつけねーとなー」

棒読みで無表情に言うが垣根には悪魔の囁きと笑みにしか思えない。

削板は何のことか分からないため頭にクエスチョンマークを浮かべている。

一方通行に関しては自分も下手に言えば同じことに駆り兼ねないため、ずっと黙っている。

「そ、それだけは勘弁してくれ！！ それをあいつが持ってたら何されるか、」

顔を真つ青にしてなんとか携帯を破壊しようとするが紙一重で避けられ、一向に手が当たらない。代わりに当たった壁や窓が分解してしまっている。

そして美影は畳み掛けるように、

「もちろんバックアップはしっかりしているから。あとお前のやつはこれだけじゃないので悪しからず。」

どう考えても『悪しからず』ではなく『最悪』だ。

そして『お前の』ということは他のレベル5のものも持っているのか、もし麦野のものがあれば是非欲しい、と言いたかったが言えそうにない。

逆に渡される危険が高まるだけだ。貰えるとも思えない。

とにかく彼はそのまま諦めるしかなかった。

そして主導権を握られてしまった。それも絶対的な。

その日の晩、美影を含めた4人は学園長から勤務先をメールで送られ、『風紀委員の心得』と書かれた教科書ぐらいの本が届いた。それを一晩で覚えるというのか、と思ったが美影には問題はない。おそらく4人のうち、3人がペラペラと捲りながら覚えることが出来るだろう。

そして風紀委員としての一週間が幕を開けた。

ジャッジメント  
風紀委員

生徒によつて形成され、基本的に校内の治安維持にあたる組織だ。だが、その活動は郊外にもおよび、夏休みとなった現在はそのうちの仕事はほとんどだ。メンバーは各学校から選出されるが、正式に風紀委員になるには、九枚の契約書にサインして、十三種の適正試験と4ヶ月に及ぶ研修を突破しなければならない。のだが、今回長点上機学園の4人は特別に免除されている。

そして美影がこの一週間所属することとなった支部は、

(ここがよ・・)

彼がメールに添付されていた地図に従って辿りついたのはとあるビルの一角にある支部。

そして入口には『風紀委員活動第一七七支部、JUDGMENT 177 BRANCH OFFICE』と表記されている。  
すなわち白井と初春の所属しているところだ。

「どオやらここみてエだなア、美影」

そして美影の後ろには一方通行もいる。

バラバラにするよりはまとめておいたほうが何かと便利だろう、という理由で一方通行も美影と同じ第177支部に所属することになった。

つまり、第7学区に住む二人がここに勤務することになったというわけだ。

ちなみに垣根と削板は第18学区の同じ支部に行くことになったらしい。

美影と一方通行の二人がビルへと入って行こうとしたとき、中から一人の少女が出てきた。

「あ、お兄様。　いらっしやいましたの。ささ、どうぞ中へ」

ツインテールの風紀委員、白井黒子がビルから出てきて手招きをする。

美影が今回風紀委員として活動することがうれしいのか、笑顔だ。

「美影、あのツインテも妹だったのか？」

一方通行は虚空爆破事件のときに美影が容疑者として連れ去られたときに白井を見た覚えがあったが、その呼び方に首をかしげる。

「いや、違っよ」

「ンじゃ、なんでお兄様なんだア？」



「あー、まあ、簡単に言つと、美琴を溺愛するあまりにあいつを『お姉様』って呼ぶようになったから俺は『お兄様』なんだって。やめるように言つたんだが」

「あいつのせいでここに配属されたンじゃねエの？」

「さあな、もうどーでもいいや」

「ンじゃ、行くとしますかお兄様」

「黙れ、バラすぞ」

「おい、それはマジでやめろオ！」

二人は第177支部へと入って行った。

「じゃ、これがこの一週間君たちが使う腕章よ。くれぐれも失くさないように。」

メガネをかけた女子高生の風紀委員、固法美偉このりみいに一通り説明を受けた後、美影と一方通行は風紀委員の証である緑と白の盾をモチーフとした腕章を受け取る。

この一週間の二人のお世話係となったようだ。  
そして横には白井と初春がニコニコとした笑顔で立っている。

美影はこんな形でまたここに来るとは夢にも思っていなかった。

事務室や学校の職員室のように机が並び、部屋の端には資料が所せましと並べられたスチール製の棚が置かれている。

美影は基本、堅苦しいことが好きではない。したがって学園長室も正直入りたくはないのだが、なぜかレベル5の中では一番呼ばれている気がする。

超能力者<sup>レベル5</sup>が一時的だが風紀委員となることで、治安は良くなるだろう。しかも同じ支部で活動するのだからうれしくないわけがない。

「じゃあ、二人はこれから巡回<sup>パトロール</sup>をしてもらうわ。もちろん教育係として白井さんと初春さんが同行してもらうけど」

「はい」

「ヘーイ」

「シャキッとしなさい！」

二人にやる気はあるわけではないので返事にメリハリがない。そんな二人に見兼ねて固法は大きな声で注意する。

なんともないような光景に見えるが一方通行に忌憚なく注意するなんて、見る者によっては目を見張ってしまうような光景だ。

そのため二人は新鮮味を感じる。

そして白井と初春、美影と一方通行は4人とも腕に腕章をつけ治安維持へと向かった。

「では今日はわたくしたちがいつも使う巡回ルートを行いますの」

外に出てから白井を先頭にし、4人は歩きだした。

どうやらレベル5が風紀委員をやることは噂になっているようで、すれ違う者から視線を向けられる。

美影はともかく、一方通行はどちらかというと治安を乱すほうの住人だ。というより乱したせいでこのような状態になってしまったのだが。

「はあ、まさかこんなことになるとは・・・」

美影のその気持ちが表に出てしまう。

彼は完全に巻き込まれただけなので不満はある。

「これを期に正式に風紀委員になられたらどうですか?」

何気なく白井はそういう顔は本気だ。

半年前の件や虚空爆破事件のことを踏まえても美影は風紀委員に向いていると白井は感じていた。

というよりなってほしいという願望がある。

「面倒くさいし、俺には向いてないだろ」

だが美影は白井のようには思わない。

どちらかといえば面倒くさいという気持ちが強い。9対1ぐらいで。

「いえいえ、そんなことはありませんの。それに正式に風紀委員となつてくだされば治安はもっとよくなりますの」

「なら美琴に勧めたらどうだ？　俺より有名だし、序列も三位なんだから」

「以前、勧めてみましたところ、断られましたの」

「なら俺もこれつきりにしたいね」

そう言ったところで前方に青い楕円状の物体が飛んで行くのが見えた。

風船だ。

その下で小学生低学年ぐらいの小さな女の子が飛ばしてしまったらしく、今にも泣きそうになっている。

そこで美影は自分にかかる重力を小さくし、約5メートルの垂直飛びをし、風船のひもをつかむ。そして紙のようにゆっくりと降りてきてその子供に笑顔で風船を渡した。

「もう離すんじゃないぞ」

「うん！、ありがとうジャッジメントのおにいちゃん！」

その子は笑顔になり、風船のひもを握り、元気に走って行った。美影は優しい笑顔で手を振っている。

そんな光景を見て、白井は改めて確信する。

「絶対に向いてますの」

風紀委員の仕事というのは決して強盗などの悪を捕まえるものではない。

そのような危険なことは基本警護員アンチスキルによって行われる。美影と一方通行は裏ではそれよりも遥かに危険な仕事を行っているがもちろんそれは白井や初春などの光が当たる表の住人には言えない。

そして風紀委員が普段行うことは正直地味だ。

ゴミが落ちていればその場に留まり掃除をする。

道に迷っている者がいれば案内する。

不良がいれば注意する。

美影は嫌そうにしてもきちんとしているので問題はない。

だが、一方通行にとってはどれもイライラさせるようなものばかりだ。

ゴミが落ちていれば風のベクトル操作で吹きとばす。

道に迷っている者は一方通行が怖くてとてもじゃないが道なんて聞けない。

不良に至っては一方通行を見ただけで逃げてしまう。

とにかく、一方通行は風紀委員には向いていないのだ。

白井からも何度も注意を受けてしまっている。

「では、ここでしばらく休憩としますの」

一通り歩き回った後、4人は広場に辿りついた。

夏休みということもあり、真昼間からでも私服姿の学生が多く見られる。

こんなときに制服でいるのは風紀委員くらいだ。つまり、今広場にいる制服姿の学生は美影、一方通行、白井、初春の4人だけだ。

美影は慣れないことに精神的に疲れて、ベンチに座っている。

そのベンチはカップルが使うような二人用のものではなく、真中に足があるほど大きく、6人ぐらいが座れるようなものだ。

彼は現在それを一人で占拠している。

一方通行は近くにあった自動販売機でコーヒーを購入しているようだ。

「お疲れ様です、美影さん」

初春が笑顔で声をかける。

彼女も美影が風紀委員になってくれてうれしそうだ。

そんなのは美影にとってどうでもよく、早くこの一週間が過ぎてほしいことを願うばかりなのだ。

その時、初春の背後に何者かが近づき、

「うっ！はる！！」

盛大に初春のスカートをめくった。

当然、初春は美琴のように短パンをはいているわけではないのでスカートの下は広場の何人かに見られてしまった。

「さ、さ、佐天さん！ 何しているんですか！」

急いでスカートを押さえるが、周りからは「今の見た？」なんていう声が聞こえてくる。

「あ、美影さん！こんにちは。本当に風紀委員やっているんですね！」

朝起きて歯磨きをするように日常茶飯事になってしまっているの  
だろうが、初春へしたセクハラをまったく気に留めず、美影に元気  
よく挨拶をした。

美影はリアクションに困ってしまっ

なぜなら、

「・・・見たんですか？」

涙目になりながらおそろおそろ初春は美影に尋ねる。

美影も男だ。それもかなりのイケメンの。

しかもそれなりに知り合いであるので、もちろん見られたくはな  
い。誰であつてもだが。

「ふうー、・・・一方通行、俺にもコーヒーちょうだ  
い」

「ン、」

一方通行が飲むために開けようとした缶をそのまま開けずに美影  
に投げ、それを美影はキャッチした。

話をそらしたところを見ると、要するに彼は、

「見たんですか？」

「・・・、」

「見たんですか!？」

「・・・・・・淡い水玉・・・、」

「見たんですねー!!」

ボソツといった一言を初春は逃さず聞き、見てはいけないものを見てしまっていたことが分かり、顔を赤くしポカポカと何度もパンチを美影に打つ。

だが力はないため、コーヒーを飲むのを妨害するだけで全く痛くはない。場所によってはマッサージになるぐらいだ。

「・・・俺に怒るなよ」

「あれー？美影さん初春のパンツみてもまったく動揺しないなんてすごいですね！」

「そうですよ！少しは何か反応してくださいよ！」

表情を変えずベンチに座っている美影を見て、佐天はなぜか感心し、初春に至っては動揺で冷静さを失い発言がかなりずれてしまっている。

「お前はこんなところで俺に反応していかかわしい目を向けてもらいたいのか？」

当然美影が騒げばより目立つ。

なんの反応もないのは初春に失礼な気もするがはあと思を乱し鼻の下を伸ばすほうが失礼な気がする。

飽くまでも冷静な美影に初春はよりいっそう顔を赤くし、手を止めない。

そんな力オスな光景を白井は少し離れた所から呆れながら見ていて、一方通行は新たに自販機に小銭を投入する。

そして一方通行が再びコーヒーのボタンを押そうとした瞬間、



ドガアーーン!!!

と、美影と一方通行がいるところで爆発が起きた。

**青天の霹靂（後書き）**

お気に入り登録、感想、評価お願いします

## 安価な標的

「よし、あそこに二人いるぞ」

とあるビルの上屋に二人の男が身を潜めている。

一人は大柄で鍛え抜かれたカラダが服の上からでもうかがえ、も

う一人は金髪に染め、ワックスで立てられた髪型が特徴的だ。

そしてその二人には共通点がある。

それは二人とも携帯式対戦車噴進弾発射機バスーカを持っていること。

ずばらな彼らであってもあまりにも不似合いだ。

だがそれは使用対象には物足りないくらいだ。

ターゲットは二人、一人はベンチに座り、女の子と何やら騒いでいるようで、もう一人は自動販売機の正面に立っている。

ここからの距離は約400メートル。

その武器の射程範囲には入っているが二人は初めて使用する。ゆ

えに二人にとっては遠すぎると言ってもいい。

だが、弱音は言っていない。

情報が入ってから数時間待機していたのだ。このチャンスが無

駄には出来ない。してはいけない。

「いち、にの、さん、でいくぞ」

「おう、」

金髪の男の言葉に賛同し、合図を決める。

一度深呼吸をし、肩それを乗せ、長方形の照準器を覗き、反動で動かないように固定する。

そして、

「「いち、にの、さん！！」」

二人の手から、人間を灰へと変える全長60センチメートル、直径8・8センチメートルの先端に火薬を含んだ金属棒が発射された。発射から約3秒、視線の先にある広場の二か所で爆発が起きた。このバズーカは広範囲に爆発するものではなく、軌道上に直進に衝撃を与えるものであるため、広場全体が吹き飛んだわけではない。それでもおそらく標的の付近にいたものは巻き込まれただろう。だが、そんなことは気にしていられない。目的のためなら大した問題ではない。

視線の先には大きく爆発により風塵が舞っている。

「お、おい、これ大丈夫なのか!？」

「だがこれぐらいがちょうどいいんじゃないのか？」

二人の顔には次第に焦りが表れてくる。

もしかしたら死んでしまっているのではないのか、とつろたえてしまう。

殺しは目的ではない。また、不良であつてもそのようなことは一度もしたことがない。

そして次第に土煙がはれ、状況が視認できるようになってくる。

「な、なんだ!？」

「突然爆破したぞ!!」

「まだ爆発するんじゃないか!!?」

(いったい、どういうことですか?!)

白井は目の前の変動が理解できない。

突然鼓膜を破るほどの爆発音が聞こえてきたと思えば美影と一方通行がいた場所が爆発しているのだ。理解しろというほうが無茶である。

周りにはその事態に驚き、とにかく急いで逃げようとする者が見られる。避難誘導は必要なさそうだが論点はそこではない。

とにかく、美影の近くには初春と佐天の二人もいた。あの紅蓮の炎と黒煙の中にいる。

もしかしたら・・・

立ち止っているとベンチがあつた場所の爆煙が晴れてきた。そこにあつたのは、

初春と佐天を抱き寄せながら立っている美影の姿だった。

爆煙とは違う黒い流動する物体が彼らを守っているように見えた。

「?・・・?!」

「え?!・・・何なの?」

佐天と初春は状況がつかめていない。

気づいたら美影の懷に押さえつけられていたのだ。そして黒い何かに包まれていた。

その黒い何かにより熱と衝撃が身に届くのを防いでくれた。

(・・・まさか街中で撃つてくるとはな、・・・だが・・・?)

美影は一人その出来事を理解しているようだ。だが一つ、彼にも分からない事があるのだが。

彼はバズーカが発射されたのと同時に立ち上がり、すぐさま初春と佐天を能力で自分に引き寄せ、ブラックホールで身を守ったのだ。よってこのような体勢となっている。

彼は険しい表情をしている。

「二人とも、大丈夫か?」

けがは見られないが一応安否を確認する。

「あ、はい・・・」

「え、あ、大丈夫です」

とにかく二人は少し分かった。なぜか爆発が起こり、美影に助けもらったのだと。

だが、今だ分かっているのはそれだけだ。

「一方通行、大丈夫か・っってお前が大丈夫じゃないわけがないか」

一方通行がいた自動販売機のほうも煙が晴れてきた。

そこにあつたのはボタンを押す大勢で固まっている一方通行の姿だがその指の先にはボタンはない。

直撃したのか、自動販売機の上半分は吹っ飛んでいた。そのせいで爆煙が多かったのかもしれない。

「あー、まずいな・」

その一方通行の表情を見た美影は少し焦る。

これは危険だ、と。

爆発が危険というわけではない。一方通行がコーヒーの一服を妨げられたことが危険なのだ。

そして一方通行の手がゆっくりと下ろされ、口が開く。

「美影、・・・どこだ？」

その声は落ち着いていているが美影は確信する。

絶対怒っているなこいつ、と。

こうなったら止められないので仕方なくスナイパーの場所を教える。

「あの赤い看板があるビルの屋上、」

「そオカ、」

一方通行はそれだけ言い、下半身だけの自動販売機を軽く蹴る。すると、ベクトル操作により自販機と地面の接合部分が離れた。

そして一方通行は美影に言われた場所と自販機を結んだ線の延長

線上に立ち、拳を構え、

「テメーらのせいでコーヒーが飲めねエじゃねエか!!」

右手で自販機をガン！と殴った。

ベクトル操作をされた自販機は音速でそのビルへと飛んで行った。見るとその屋上では小さく爆発が起きてしまっている。

そして自動販売機を追いかけるかのように一方通行自身も音速とは言わないがものすごいスピードで飛行していく。

（自販機飛ばしちゃだめだろ・・・）

「おい、白井！」

「え、あ、はい！なんですかお兄様!？」

美琴よりもひどい自販機の扱いをする一方通行に若干引きながら、口を開けながら固まっていた白井を我に返らせる。

「お前一方通行を追ってくれ、このままだと死体ができるから」

慣れない風紀委員活動によりおそらく一方通行にはストレスがたまっているだろう。

普段はやらないように美影が何度も忠告しているがもしかしたら殺ってしまうかもしれない。いやまじで、冗談抜きで本当に。

「お兄様は!？」

美影が行けばすむと思うが彼には別の仕事が発生してしまった。

「俺は・・・こいつらの相手かな」



広場の周辺の建造物と建造物の間から、明らかに武装無能力集団と思われる不良たちが出てきた。  
しかも数が多い。

（・・・20、30、・・・37人が・・・）

重力探知で出てきた者、まだ出てきていない者の数を数える。  
その数は異常だ。

しかも数人が拳銃や機関銃を手に持っている。それ以外の者もスタンガンやサバイバルナイフを所有している。

「初春は警護員に連絡してすぐ逃げろ、佐天もだ」

「あ、はい！」

「え！？」

武装無能力集団の数に驚嘆していた初春にすべきことを冷静に命令すると、初春は慌てて携帯を取り出す。

佐天はまだ混乱しているようだが、逃げろという言葉は理解できたようだ。

「・・・お兄様、気をつけて下さい」

「あ、そうだ。これ持っていくといいよ」

とある物を白井に投げ渡し、それを受け取った白井は急いで空間移動の演算を開始し、その場から消えた。

「おい、一人飛んでいったぞ」

「だがこっちにも一人残っている」

「この数なんだ、確実にやるぞ」

武装している奴らからそんな声が聞こえてくる。

その中には何やら紙のようなものを数枚所持している者も見られる。

(?.....まさか、)

「.....お前ら誰の組織のだ？ 駒場か？ 黒妻か？ 鬼束か？ 峰野・

じゃあないな.....」

とあることに疑問に思いながら、美影は目の前の不良たちに思い当たる武装無能力集団の名前を言っていくがそれらに反応する者はいない。そこから一つの結論を出す。

(寄せ集めか？)

一つの組織の者たちではなく、そこら辺の不良たちに武器を持たせただけのようだ。

とにかく、自分や一方通行のようなレベル5が狙われていることは分かった。

なら出来るだけ自分に注意を向けさせるようにしなければならぬ。人質を作らせないためにも。

(だが、.....)

相手は飛び道具を持っている。しかもおそらく全員が扱うのは初めてだ。

使い方を誤り、暴発されて流れ弾が初春や佐天や一般人に当たっ

ては一大事だ。

望ましいのは周辺の者が誰も傷を負わないこと。たとえ自分に弾が当たっても。

（仕方ないな、・・・久しぶりにあれやるか）

この緊急事態を確実に打破する方法が美影にはある。

それはワームホールやブラックホールよりも演算は難しいものだが、一瞬で全てが終わり、不良たちにも、もちろん一般人にも傷を負わせることはない。

「おい、さつさとやるぞ」

「ああ、これだけ銃があれば確実に当たるからな」

「へへ、これで俺たちは・・・」

数もあり、武器もある。不良たちは勝利を確信する。

そして余裕を感じ、拳銃、機関銃、スタンガン、ナイフ、それぞれ凶器をを構え、全員で攻撃しようとしたとき・・・

「・・・ああ？」

「はあ！？ どういうことだ？」

「何が起こった？！」

「消えたぞ！」

目の前から一瞬で、蒸発したように消えた。

美影ではない。彼らがしっかりと構えていた武器がだ。

どこにいったか首を、体をあらゆる方向に動かし、探したら見つかった。美影がいるところのすぐ横に山になって置いてある。

そして美影はやり終えたような顔をして、

「ふう、なんとかなったな・・・」

もちろん銃を奪い、山積みにしたのは美影だ。

だが彼の能力は重力操作。アポートやムーブポイントのような離れたところにある物体を手元に引き付ける能力はない。

ワームホールを使えば空間を跨ぐことはできるがそれではこの状況を作り出せない。

だが現に武器を一つ残らず奪ったのだ。

彼が行った演算は『時間』の操作。

強い重力場にいる観測者は、それより弱い重力場にいる観測者よりも時計の進み方が遅いと言われる。

美影は自身の重力場を変えつつ、自身にかかる重力を一定にする

ことで不良たちよりも何千何万倍ものスピードでこの世界を駆け巡ったのだ。

つまり、彼は『相対性理論』を自身の演算公式に当てはめたのだ。超高速移動で武器を奪い、不良たちの手に届かないところに固めて置いた、という正直地味な事を行ったのだ。

ちなみに美影はこれを多用しないのだが、その理由も数秒老けるから、という地味な理由だったりする。

とにかく、不良たちは武器を奪われ、丸腰の状態となったのだが、

「おい！ あれ使え！」

一人が叫ぶ。

どうやら彼らにも最終手段があったようだ。表情を見るに、まだ打開できると言えるような。

そして他の一人が近くにあったワゴン車に近づく。

美影は不審に思い、その者がたどり着くまでに先ほどまで違法駐車としか思っていなかった車を重力探知で視る。

そこにあっただのは美影も知る、対能力者の一品だ。

（あれは・・・まさか！）

心の中で焦り、急いで山になっていた凶器の中から拳銃を一つ拾い、構える。

距離は約30メートル。

一般の人には銃を扱うにしては遠いといえるが美影は一般ではない。銃の扱いにも長けている。

拾い上げてから5秒と経たずに狙いを定め、引き金を引く。

バン！と放たれた弾は正確にワゴン車に積まれていた機器から飛び出ているコードの一つを貫いた。

「あ！？」

機器を作動させようとした男は拳銃によりそれが使用できなくなったことに慌て、声を上げる。

何度もスイッチを押すが何の反応も見せない。

回数に従い、嫌な汗が37人の不良たちから浮き出てくる。

「さーて、俺を襲おうとするなんて、覚悟はできてんだろうなあ？」

美影は拳銃を再び山に捨て、手をポケットに入れ、笑みを浮かべる。

その声にビクッ、と体が震え、さらに慌てる哀れな男たち。

「お、おい、やばいんじゃないかねえのか？」

「あいつ、バズーカも効かなかったんだぞ」

「だ、だが、たったひとりだ！」

武器はないが、目の前にいるのは一人。

袋叩きにすれば勝てる、かもしれないと思ったのがそのわずかに過ぎった驕傲はおおきな勘違い。

美影は超能力者<sup>レベル5</sup>、自分たちはとある理由で無能力者<sup>レベル0</sup>で統一されている。

これでは裸でエベレストを登頂するようなもの。

「はあ、・・・面倒だな」

美影は飛びかかった不良たちを一人一人相手にするのも時間がかかり、手間がかかりすぎる、と思ったので彼らにかかる重力を上げ、一気に地面に押しつけようとする。

「があー!!」

「かはっ!!」

「くそあー!!」

走る、という重心を前方にずらす行動をとっていた男たちがいきなり体重が増えたことで体勢を保てるわけがない。

そのため、盛大に転び、地面に激しいキスをすることとなった。しかも美影は倒れたのを見ると男たちにかかる重力を約5倍にする。体重が70キログラムの者は350キログラムとなり、立ち上がれるわけがない。

立てても歩けず、体を再度打ち付けることとなるだろう。

美影は不良たちに演算をしたまま、先ほどのワゴン車へと歩いていく。

そして、機械いじりが特技でもある美影はそこに積まれている自分が壊した巨大な機器のあちこちを触り、確信する。

（キャパシティダウンだな、間違いない。）

別名AIMジャマ。

AIM拡散力場を乱反射させ自分で自分の能力に干渉させる事により、能力使用を妨害する装置。能力を打ち消すというよりは、『照準を狂わせて暴走を誘発させる』代物らしい。つまり、能力者が自由に演算をすることを出来なくするものだ。なお、使用には大量の電力や演算能力が必要らしく、少年院などの限られた施設でしか使われていない。そして学生どころか学校が所有できるような

ものでもない。

だが現物が目の前にある。

「おい、これどこで手に入れた？あとなんで俺を襲った？」

一番近くに倒れていた不良に顔を向け問う。

「へっ、誰が言うかよ！」

「・・・へえ、そうかあ」

だが口を割らないため、美影はその男のところに歩き、目線を合わせるように屈み、頭を掴む。

「ならこつちにも考えがある。知り合いの精神系メンタルの能力者に頼んでデメエの頭の中全部覗こうかな。それならいろいろとわかるし」

「わ、わかった。話す！、話すから」

脅しに対し、記憶の中に後ろめたいことでもあったのだろうか、嫌な汗をかき、動揺し、全てを話した。

「一方通行さん！ やめてください！死んでしまいます・・・その方が」

白井は急いで空間移動し、一方通行の元に辿りついた。



自販機は当たらなかつたらしく、脇に粉々となつた残骸レムナントがあつた。だが一方通行は金髪の男のの襟元を掴み、今にもベクトル操作したパンチを打とうとしているところだった。もう一人の大柄な男は体格に見合わず横でビクビクと怯えている。

「ああ！？ うるせエぞオセロ！！ こいつは俺のコーヒーをふっ飛ばしやがったんだよ、ぶっ殺すに決まってんだろオが」

「お、オセロ！？ と、とにかく、コーヒーはありますの！」

予想外なあだ名に面食らうがとにかく落ち着かせようと先ほど美影から受け取った一方通行が一本目として買った缶コーヒーを差し出す。

一方通行は金髪を離し、それを分捕り、グビグビとコーヒーを飲んだ。まるで中毒者のように。

「ふう、さて、……ぶっ殺すか」

「ダメですよ！ 今、一方通行は風紀委員……じゃなくてもですがそんなことされてはいけませんの！」

「……チツ、仕方ねエなア、さつさと戻るぞ、オセロ」

「オセロっていうな……！ですよの！」

コーヒーを飲んで満足したのか拳はおさめた。が、変なあだ名は止めないため、白井は本気で叫ぶ。

が、その声は届いていないのか元の場所に飛び立とうとする。

「あ、待つてほしいですよ。わたくしでは空間移動の重量オーバー

ですので一人運んでください」

白井の空間移動が可能な質量は130・7kgまでだ。そのため、男二人と自分を運ぶのは不可能だ。美影が彼らの体重を操作すれば可能かもしれないがこの場にはいない。ゆえに不安ではあるが一方通行の手を借りなければならぬのだ。

「使えねエなア、オセロは」

フー、ヤレヤレといったジェスチャーをし、気にいったのかあだ名を再度言う。

「オセロではありませんの!!!」

「美影さ〜ん、大丈夫ですか〜?」

近くに隠れていた初春と佐天が出てきた。  
倒れている不良を避けるように走り、美影に近づく。

「ん、大丈夫だよ。 あいつらも戻ってきたみたいだね」

白井と一方通行も近づいてきた。見ると、一方通行が狙撃手と思われる男二人の腕を掴みながら飛んできた。そのため男二人は目を回している。目立った外傷はないようだ。

警護員も初春の連絡を聞き、サイレンを鳴らしながら接近してく

るのが伺える。

だが、連絡してからはまだ5分も経っていない。早いに越したことはないのだが、まるで待機していたかのようなスピードだ。その仕事振りに美影は、

(・・・そういうことか)

「超能力者一人につき1000万!!?」

「あア、ありえねエだろ」

第177支部に戻り、一方通行は金髪と大柄の二人から聞き出した事を述べ、驚いた佐天が声を上げる。

今、支部の中にいるのは、固法、白井、初春、佐天、一方通行、そして美琴だ。

美影が武装無能力集団の標的がレベル5と分かったので、一応ここに呼び出したのだ。

だが、美影は支部の外で電話をしている。

「ああ、・・・うん・・・やっぱりか・・・麦野は?・・・そうか・・・ならそっちも気をつけろよ」

話は終わり、携帯を閉じ、ポケットにしまう。

電話をしていたのは第18学区で美影と同じように風紀委員をしている垣根だ。

話は終わったため入口のドアを開け、入室した。

「で、どうだった？」

「ああ、やっぱり帝督と軍覇のほうも襲撃されたい。しかもあつちもキャパシティダウンつきでな。まあ、あいつらも大丈夫だったらしいから心配はいらない。」

「心配なンざしてねエがな。そのまま死んでくれればいいんだが」

「あと、麦野のほうにもスキルアウトが来たらしいが、四の五の言われる前に能力使ったからこれもまた無傷だ。キャパシティダウンも木端微塵」

つまり、風紀委員をしているレベル5以外も襲撃されたというわけだ。

食蜂のほうはまだ分からないが。

「でも、なんでこんなことに？」

固法はあごに手を当て、悩み、テーブルの上を見る。

そこにあるのは7枚の写真。

第一位 一方通行、<sup>第二位</sup>垣根帝督、<sup>第三位</sup>御坂美琴、<sup>第四位</sup>麦野沈利、<sup>第五位</sup>食蜂操祈、<sup>第六位</sup>御坂美影、<sup>第七位</sup>削板軍覇、と超能力者の顔写真だ。美影が捕まえた武装無能力集団の一人から没収したもので、その写真をもとにターゲットを探したようだ。

「事情聴取では、レベル5を欲しがった研究者に捕まえるように依頼された、とおっしゃっていましたの」

白井の言つとおり、あの不良たちはそう依頼された。その為に武器やA I M ジャマーを渡されたというわけだ。

「だが、たぶんそれは嘘だろうな」

「どうしてよ？」

美影の言葉に美琴が首をかしげる。

「スキルアウトが嘘をついているということ？」

「そつちじゃなく、俺たちを研究者が欲しがっているってことが、だ」

「どうしてそう思いますの？」

美影は一拍置き、

「まず、ひとり1000万って話だが・・・」

「高すぎますよね！」

佐天はその話題になるとテンションが上がる。  
どうやら金には困っているようだ。

「逆だよ、安すぎる」

「まったくだ、ありえねエ」

「え！？ そうなんですか？」

美影に一方通行は賛同する。そういう意味での『ありえない』だったようだ。

「俺らレベル5の研究成果は何と言っても金になる。それこそ億単位で。だからこそ俺たちを欲しがるつてのは分らないが、本当にそうならもっと出してもいいくらいだ。それに俺たちの家に押しかけたほうがいいのにそれはやられていない。それにあの不良たちは俺たちの能力については何も聞かされていなかったのは、不自然だ。全部は知らなくても少しぐらい教えたほうが捕まえられる可能性はかなり上がる」

レベル5の能力により、自然や機械では再現不可能な現象のデータが取れるため、レベル5のあるなしでは成果に大きな差が生まれる。

そのため、レベル5を所有している研究所は他より頭一つ出ているのだ。

「あ！それもそうですね」

美影の説明に初春は納得し、声に出る。

他の者もその矛盾に気づき、頷く。

「しかも、あの不良たちはスキルアウトの組織じゃなく、単なる寄せ集めだった。当然仲間意識の強い集団に依頼したほうが全然いいのに、だ」

「と、いうことは・・・」

「目的は全く別だろうね。不良たちは利用されただけ。これで終わると思えない」

分かることが増えてきたが、分からないことも増えてしまったため、全員が頭を抱える。

佐天は目の前に3000万があると感じ、少し目の色が違う。

「・・・お兄様はずいぶんと冷静に対応できたようですが、どうしても最初の砲弾を防げましたの？」

白井は思う。

美影はあの時まるで予期していたかのようにバズーカに対応していた。

「ああ、あれ。　なんか視線を感じていたからずっと警戒してたんだよ」

「うぜエほど見られていたな」

一方通行も視線には気づいていた。そのため、白井の注意だけでなくそれもいらさせる要因となっていたようだ。8対2ぐらいで。

「・・・いつからですか？」

「『では今日はわたくしたちがいつも使う巡回ルートを行いますの』から」

「ここを出てからではありませんの！」

美影は視線を感じてからずっと半径500メートルの範囲を視ながら風紀委員の活動をしていたため、全てを視ていたのだ。狙撃手も、隠れていた不良たちも。

「まさかあんなところで撃ってくるとはな」

「どうして言わなかったのですか!？」

「まあ、なんとなく」

「お兄様！」

危険を察知していても何も言わなかった美影に白井は叫ぶが、

「うるさいなあ、風紀委員ならあれくらい気づけよ」

その言葉に何も言えなくなってしまった。

数時間外にいてもまったく視線に気づかなかったからだ。

「とにかく、この一週間の実習については上が判断するわ。今日はもう終わりだから一方通行君と御坂君、あと御坂さんはおとなく家に帰るように」

固法が注意し、お開きにしようとする。

このままでは風紀委員の実習でさらに風紀が乱れてしまったため、もしかしたら中止になるかもしれない。

だが、美影は止めないだろうと思っていた。勘ではなく。



そこで一方通行と美影は支部から出て行き、ビルの階段を下りていった。途中、「それでは、お姉さまは黒子が肌身離さずお供しますの」「余計なことはいしなくていい!!」「ビリビリ、と聞こえてきたが気にしない。

「そういえば美影さん、スキルアウトにくわしそうだったね、駒場とか黒妻とか」

(え?)

「ええ、名前をいろいろと聞いていましたね」

佐天と初春は美琴の台詞を思い出しながら話す。二人にはこの誰だかわからないがこの中の一人は驚いていた。

(・・・御坂君が黒妻を・・・知ってる!?)

眼鏡をかけた風紀委員、固法美偉は耳を疑っていた。

「面倒なことになったなア、オイ」

「お前のせいでこうなったんだろ。・・・あ、そうだ。もう一本電話かけるわ」

「ああ？どこに？」

「奇天烈じいさんに」

美影は携帯をポケットからまた取り出し、電話帳から一人の番号を選択し、耳に当てる。

コール音が数回なった後、相手は出た。

『おお！。御坂君か、どうだ風紀委員をやってみて？』

「・・・もう情報はつたわっていますよね？学園長」

美影がかけたのは学園長の携帯電話。  
気になることがあったからだ。

『・・・うむ、少々危険な目にあったようだね』

「あなたはそれを分かっている風紀委員をやらせたんでしょう？」

『わっはっは！、やはりわかったか。実はね、最近妙な機械を使って能力者を襲撃するという事件が多発していてね。君たちを目立つようにするともしかしたら、と思ってるね。』

「学生大好き学園長はどこいったんですか？」

『君たちを信用しているからだよ。現に傷一つ付かなかつたらしいじゃないか』

「・・・そうですか。で、この一週間はどうなりますか？」

『もちろん続けたまえ。AIMジャマ だかなんだか知らないが大丈夫そうだからね』

「・・・そうですか。では失礼します」

そこで美影は電話を切った。

何を言っても変わらないだろうと感じたからだ。それだけでも十分だったこともあるが。

「やっぱ学園長が分かっているこんなことやらせたいだよ」

美影は不審に思っていた。あの時、可笑しな程警護員の到着は早かった。警護員は最近、能力者襲撃事件というものがあつたため、通報には敏感だったのだろう。また、その事件があつたため先日美影に簡単な依頼が来たのだ。鬼束がAIMジャマ を所有していたとしたら話は別だが。

おそらく、超能力者をとらえるために武装無能力集団が行った模<sup>デモ</sup>擬実験<sup>シミュレーション</sup>だったのだろう。

そして装置が本物と分かり、本来の標的であるレベル5が偶然風紀委員という活動を行っていた。

つまり、

「俺らを売りやがったなア、あのジジイ」

「これをやる理由なんてどうでもよかったんだろうな。たまたまお前らが暴れたが」

「ンで、これからどうすんだ？」

「そうだな、とりあえず情報収集かな。恒例の」

「またキーボードと格闘かア？」

「いや、違う方法で」

「どうやってだ？」

「スキルアウトのことはスキルアウトに聞くのが一番だろ」

美影の誘導に従い、寄り道をしつつ移動すること約15分、二人はとあるビルとビルの間にある、人が使わないような通路に来ていた。

「なんなんだア？ここは」

何も聞かされていない一方通行は美影に尋ねる。  
てつきり不良を捕まえて尋問すると思っていたのだが違うようだ。

「俺はね、武装無能力集団にもお友達がいるんだよ」

暗い通路にある、薄汚れた小さめの扉を開け、美影は中に入る。

「峰野<sup>みねの</sup>、いるか？」

「んん？ああ、御坂か……。フウアゝあ、ああ、ねむ、」

美影の呼びかけにあくびと共に返事が来た。

中はドアがあつた建物とは全く別の場所であるかのように壁に囲まれ、音も聞こえない。そこにいたのは一人の男。

染め直したかのように真っ黒なジャージに包まれ、髪もボサボサの美影と年齢は変わらないように見える男だ。

身だしなみには気を使っていないようだが部屋は奇麗にされており、冷蔵庫やソファが置かれ、ここで生活しているようだ。

「なんだ寝てたのか？」

「ああ。・・・そっちは第一位か？」

「ああ、」

「美影、何だこいつは？」

美影と知り合いのようであるが一方通行は見たことがない。だが相手は自分のことを知っているようだ。

「こいつは峰野哲弥<sup>てつや</sup>。俺が何年か前に捕まえたスキルアウトの一人だが、使えそうだから警護員には渡さなかった奴だ。けっこうそっちの方では情報通でね。だからここにきた」

「で、キャパシティダウンのことか？ さっきレベル5の襲撃に失敗したっていう情報がはいったが」

「ああ、それぞれ。で、誰があんなおもちゃ渡したんだよ？」

先ほどまで寝ていたというのにそのことを知っているということ  
は襲撃と同じくらいの時間に知ったということ。美影の言うことも

間違っではないなさそうだ。

「……、」

質問に答えず、無言で峰野は手を差し出す。

その手は今までに何回か見たことが美影にはあった。

「……いくらだ？」

「今日は一つでいいや」

「チツ、ぼったくりが」

文句をいいながら、先ほど銀行に寄ったときにおろした札束を峰野の手に乗せる。

束が1つ。100万だ。

「まいどありー。で、依頼したのは第19学区のAIM特殊解析科学研究所。デコイかもしれないねえが直接不良たちに渡したのはそこだ。全部で五つ」

「ずいぶん多いな。お前にもまわってきたんじゃないのか？」

「貰えたが、断った。お前がいるから金にも困らねえし」

「……依頼についてだが、レベル5への襲撃だけか？」

「相変わらず察しがいいな。……残りの2機を渡したところには命令が違っていた。内容は『誰でもいいから能力者を襲え』だ。今日でその被害者は40人にのぼった。まあ、あと二つ、壊さない限り

止まらないだろうな」

「ふーん、そういうことか。目的は実験か？」

「ああ、キャパシティダウンの実践データが目的だ」

「そいつらに見返りはあったのか？」

レベル5の懸賞金を告げられていないのでは命令通り動いてもらえる保証はない。

だが、

「んなもんキャパシティダウンそのものに決まってるんだろ」

能力者から能力を奪う代物。

武装無能力集団にとってこれほど欲しいものはないだろう。

美影は納得したような表情をするがなにかよからぬことを企んでいるようにも見える。

2秒ほど黙り、口をあける。

「じゃあ、レベル5の懸賞金についてはなくなった、ってデマ情報ながしておいて。今日見たいにやられたら風紀委員ごっこも出来やしない」

「それはいいが、どうする気だ？」

「とりあえず一方通行とこれからその研究所壊しに行く。まあ、無駄かもしれないが警告ぐらいにはなるだろ、多分」

「・・・どこにキャパシティダウンが渡されたかは聞かなくていいの

か？」

「少しぐらい風紀委員どもに解決させないとかわいそうたる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうか」

峰野は何かを察したようで口の端がつりあがる。もう何も言わなくてもいいだろう。

だが一言彼は付け加えた。

「あいつが言ってた女のことだが、お前が配属された支部にいる奴だぞ」

「・・・そうだったか。ならなおさら何もしないほうがいいかもな・

」

そこで美影はドアを開け、部屋から出て行った。

情報をいくつか聞いた美影だが何か一つ、引っかかっていた。表情からは読めないことが多い美影ではあるが、一方通行は今回それには気づいていた。

「・・・・・・・・写真のことか？」

「ああ、」

武装無能力集団にはレベル5全員の写真が渡されていた。情報操作で自分のことを知られることを避けていた美影のも、だ。

「あの写真な、もっている奴はかなり限られるから、大体黒幕の見当はつく。でもなあ・・・」



美影は口ごもり、顔をしかめる。

その見慣れない仕草で一方通行はとある者が脳裏をよぎる。

「お前、まさか・・・」

「多分、『木原』の一人だ。AIMジャマを作ったのもその一人だからな」

『木原一族』。学園都市における研究者の中でも、一部では有名な一族だ。そのほとんどが研究者であることに加え、「実験に際し一切のブレーキを掛けず、実験体の限界を無視して壊す」ことを信条とする。学園都市でも群を抜いてイカレタ人間達だ。

「そうだったら俺でもアレイスターの許可なしじゃ手は出せない。だからとりあえずAIM特殊解析科学研究所だけにしておく」

「そんなやつらは皆殺しが一番なんだがな」

一方通行も昔は木原の名を持つ者にモルモットとされていたためもし目の前にいたら真っ先に殺しているだろう。

二人は歩きだし、一つの研究所を地図から消しに行った。



## 安価な標的（後書き）

お気に入り登録、感想、評価お願いします

## 未知による苦悩

夏休みのとある日。

太陽が真上に到達してから約5時間経った時間にとある少女が男たちに囲まれている。

人目のつかない薄暗い通り。

それぞれ違う意味を含んだほほ笑みを少女と男たちは浮かべている。

「あなた方、わたくしを常盤台の婚后光子こうごみつと知っての狼藉ろうじやくですの？」

この上なく堂々と名乗った少女は抹茶色の豪華な扇子を開き、傲慢な態度で相対する。

それに対し、男は鼻で笑い、

「ロウゼキ？ 流石はお嬢様は俺たちと違う、お言葉をお使いだ。なあ！」

横の男に顔を向け、共に高らかに笑う。

間接的に中傷するように言うが、少女には虫の寝言としか届いて

いない。

「どうやら日本語が通じない方のようなねえ」

こちらも見下すような視線を向け、先ほどまで顔を覆っていた扇子をずらし、わざとつりあがった口の端を見せる。

言葉が通じないと呆れ果て、

「ならば、お相手いたしましたしょう」

彼女の能力は大能力者の空力使用<sup>レベル4</sup>エアロハンド

本気を出せば車をも吹き飛ばせる。相手はたかが無能力者が数人<sup>レベル0</sup>と高を括っていると突然、視覚からではない脅威が襲ってきた。

「?! あ、ぐっ・・・」

激しい頭痛。

プロセスは分からないが響く甲高い音が原因とは感じ取れた。

「どうした？ 頭がいてえのか？」

もちろん男たちの悪事によるものだ。

彼らに痛みはない。ただの聴覚を刺激する振動としか影響していない。

「う、・・・これは・・・？」

婚后は男たちを除去するのに不可欠な演算が行えない。

このような現象は未体験だった。

痛みで大切な扇子を落とし、しゃがみ込んでしまう。動けなくな

ってしまう。

能力者が足元に見えることに男たちは笑みが止まらない。見下し、侮蔑してきた者が崩れ落ちている。

さらに笑みを強めたとき、

「おいおい、女の子にちょっかい出すってのは、いただけねえな」

Gパンに黒いライダースジャケット、燃え上がるような紅い髪をしつつ、涼しい声をかける男が現れた。

「おい花瓶、さっさとコーヒーをいれやがれ」

「私は花瓶ではありませんー！」

ソファーに足を投げ出し、どこかの独裁者のようにでかい態度で一方通行は見た目花瓶の少女、初春に苦い飲料を求める。

処罰となっている風紀委員活動5日目。

巡回から帰ってきて一方通行はわざとらしくお疲れモードになっていた。

初日から行った仕事はほとんどが向こうからやってきたガラの悪い者の相手。初春たちは知らないが峰野に1000万の懸賞金が消滅したと情報が流されたのだがその手のものは絶えない。

目立つ髪をした第1位が街を毎日義務的に一周しているのだ。こ

のチャンスは彼らには逃せない。

自然と彼らを護送車に詰めることが一方通行と美影の仕事となつてしまったのだ。

ブンブンと頬を膨らませ、仕方なく用意する初春。

二日目ぐらいからこの呼び方で相手にされるようになってしまった。

「そついうなつて一方通行」

なだめるように美影は言うが、

「お前はあれ見て思わなかったのかア？花瓶つて」

「え？ 思つたけど」

「えー！！美影さんまで！」

内心想っていた美影が意外だったのかフリーズドライのインスタントコーヒーを入れたマグカップに熱湯を注ぎながら大声を出す。すぐに我に返り、なんとか熱湯がこぼれないように立て直すがシヨックは抜けない。

「お兄様まで、・・・まあ、あれは正直そつお思いになつても仕方がないとおもいますが・・・」

小さく同意する白井。

彼女もあの花については謎のままで、手入れや購入先については知らない。

初春の栄養分を吸い取つて成長しているという説もある。

「オーオー、オセロもそう思うか？」

「ムキー！オセロって言うな～ですの！！」

こちらも定着してしまった愛称を述べられ、ツインテールを未知の原理で逆立て、怒りをあらわにする。

このやり取りはこの数日で2ケタに及ぶ。

鉄槍でも体内に空間移動してやりたいが彼は第1位。それは通用しなく、演算の無駄になるだけだ。

「お前は白井黒子だよなア？略して白黒、やっぱりオセロで～すの」

悪ふざけに口調の真似が導入され、さらに腹を立てる白井。

「美影もおもうよなア？」

「え？ 思ったけど」

「ガン！！ お兄様まで・・・」

感嘆や驚嘆を表現する擬態語を口に出してしまうほど心外なコメントだったようだ。

白井は床に手をつき、背後に雨が見えるのではないかというほど落ち込んでしまっている。

「はいはい！、いじめはそこまでよ一方通行君、御坂君も」

そこに仲裁に固法が入り、一方通行は初春が入れたコーヒーを口に含む。どうやら意趣返しとして同系色の異物は入れられてはいな



いようだ。

ちなみに固法も少し笑ってしまったのは内緒だ。美影は見逃さなかったが。

「今日で5日間終わって、あと2日よ。くれぐれも逮捕に重傷者を出さないように」

一方通行は機嫌が悪い時、襲撃者は取調室よりも先に病室に送られないといけないことになったことがこの4日間で三回あった。もちろん最初は一日目のスナイパーだ。正当防衛とされたので問題視されてはいない。

対して美影はほとんどを無傷でとらえていたため、白井たちを始め、警護員も驚かせていた。その技量により、白井の勧誘も絶えなくなってしまったが。

「はア、まだ2日あんのかよ。めんどくせエ」

「どうせ暇だろ？ 夏休みなんて」

「わかってねエなア、美影。暑い夏はダラダラと過ごすことで忙しいんじゃないかよ」

「わかりたくねえな、そんなダメ人間まっしぐらな生活は」

多くのニートやフリーターが激しく同意しそうな発言に美影は呆れ、目の前のコーヒーを口に含む。

多分これが終わったらその生活になるだろうなコイツ、と心の中で自信を持って宣言する。

「お前宿題は？」

「あんなもん二日で終わった」

真面目な人間なのか怠惰な人間なのか、という葛藤が心の中で一瞬起こった。

おそらく、というより九分九厘後者だろうが。

(・・・、)

その会話の脇で固法は美影を見る。

その眼鏡の奥に感情を映し出さないようにするが気づいた美影は目を合わせ、

「どうした？」

「いえ、御坂君は真面目そうだって」

誤魔化すために適当に言葉を発する。  
できるだけ自然なことを。

「俺も風紀委員なんてやる気がないんだけどね」

「お兄様、そう言わずに是非、正式な風紀委員に・・・」

やはりその話題には白井が突っかかり、無駄と分かっているにもかかわらず誘ってしまう。

それもこの4日間で何度あっただろうか。

とにかく、美影はタダ働きを進んでやるような正義感は兼ね備えていない。

「帰るか、一方通行」

「無視しないでほしいですの！」

無言の拒絶を繰り返し、腕章をポケットに押し込んだ美影は支部から出て行った。

その対応が無駄な労力を使わず、かつ迅速で適切な（自分だけに）対応だと美影は学んだのだ。

（もし、黒妻を知っているとしたら・・・）

固法はこの一週間の初日にあっただけの美影の発言が頭から離れなかった。

思い切って尋ねれば少しはスッキリするのだがそれでは自身の秘密も知られてしまったため、実行できないでいた。

そこでピピピ、と通報を告げるアラーム音が鳴り、固法は白井と初春とその現場に向かった。

「まさか婚后光子を狙うとは・・・。このところ頻発していたスキルアウトによる能力者狩りもどうやらこれで打ち止めですわねえ」

目の前の光景を眺め、白井は思う。

普段いがみ合っているが同中学に所属している彼女の实力は認め

ている。一方通行や美影のほどではないが卓越したものといえよう。  
スキルアウトが相手をするのは無謀だ。  
レベル0

「それが、違うのよ。彼女が言うには自分は能力がうまく使えなくなつて、そこに謎の人物がやってきて・・・」

「それって・・・」

白井は心当たりがあつた。能力が使えなくなるということに。  
数日前、美影が説明してくれたことだ。

そしてさらに情報を聞き出そうと、初春が事情聴取をしている。

「何と申しましょうか・・・あの皮で出来た、・・・自動二輪車にのる  
殿方が着ていらつしやる・・・」

「皮ジャン？」

おでこに指を当て、あと少しでのどから出てきそうな重要単語を、  
初春が推測し、述べる。  
キーワード

どうやら明察だったようだ。

「そう！それですわ。黒い、カワじゃん、それと、それを持った  
殿方の背中に黒い大きな蜘蛛の刺青をみたような・・・」

なれない言葉にイントネーションをずらしながらも当時の状況を  
言葉で表現する婚后。

その言葉に過剰に反応したのは目の前の初春ではない。

「！・・・、」

「固法先輩？」

婚后の言葉に不思議と反応した固法に白井は首をかしげる。

「どうかなさいまして？ 先ほどから何か、」

「うつん、なんでもない、」

気づかれたことに焦り、静かに必死に茶を濁そうをする。  
それで白井は言葉通りとらえたのか、追及しなかった。  
だが、固法はさらに心中で頭を抱える。

（・・・万が一、・・・でも・・・御坂君が・・・）

その時、固法はどこともとれない空中を見ながら誰も知らないこと  
とで苦々しく感じていた。

（このあとなにしようかな）

美影は一人夜の街を歩いていて。時間は19時ジャスト。夏なの  
でまだ街灯がなくても周囲は見渡せる。

一方通行に強引に焼き肉屋に連れられたため、満腹状態だ。帰っ  
てパソコンでも弄るか、適当な店に入るか、悩んでいた時・・・

「あのおゝ、道を聞きたいんですけどお」

不意に背後から声をかけられる。  
ん？、と美影は疑問に思う。

今は風紀委員の腕章は付けていない。  
自分に道を尋ねた理由が見つからない。周りには少ないが人もいる。

なんとなく自分が近くにいたから尋ねたのか。  
別に自分は学園都市の地理は裏路地を含め大体頭に入っているため道案内には困らない。

だから多分質問には答えられるだろう。

ここまでの思考に

かかった時間、0・3秒

そして美影は後ろに振り向く。その所要時間 0・5秒

声の主を見て硬直すること・・・・・・  
・・・2・5秒

「やっぱり美影さんだあ」

その発言を聞き、逃亡初めの一步をするのにかかった時間、0・6秒

声をかけた者が発声から美影の腕をつかむのにかかった時間、0・4秒

つまり美影は捕まったのだ。

美影の高速移動は自身にかかる重力を下げることで可能になる。  
一方通行のように脚力そのものを飛躍させたわけではなく、美影の体重を軽くしての行動のため、簡単に動きを止められるのだ。たとえ女性でも。

「……なんだ、食蜂？」

「やっぱり私のこと知っていたんだねえ！」

声の主は先日一目見ただけで美影が逃亡を開始した少女である、

美影と同じレベル5の食蜂操（しほくほうさみさき）祈だ。

彼が欲する行動は今回も変わらない。

「……どこで俺の名前を知ったかはあえて聞かないが、とにかく離してくれないか？」

「どうして逃げるんですかあ？」

「記憶を見られたくないから」

率直に正直に心情を述べた。

美影がそうすることはほとんどないが相手は学園都市最高の精神系能力者。

彼女にとって言葉は鼓膜を震わせるものであつて情報を得る手段としてはほんの一部にしか過ぎない。

言葉に表そうが表わさまいが関係ないだろう。それが美影の考えであつた。

もしかしたらすでに脳内にハッキングをかけているかもしれない。それは避けたい。

「私はあ、美影さんに能力は使わないよ」

だが、返ってきた言葉は意外なものだった。

もしそれが本当ならこの上なくありがたい。本当なら、だ。

美影は食蜂の顔を見る。

「・・・・・・」

「やだあ、そんなに見つめないで　／＼」

異性としての感情を含まないジト目に彼女はなぜか照れている。  
好かれるようなことはした覚えがない。それどころか言葉を交わしたこと自体これが初だ。

なぜか分からないがフラグを立ててしまったことに美影はこの瞬間気づいた。

そして先ほどの言葉も嘘とは捉えなかった。

もしかしたらこの感情も食蜂によりインプットされたものかもしれないが、とにかく信用できた。

美影は知らないが、食蜂は自分が好きになった者には決して能力を使わないようにしている。それは自分を知ってもらいたいからだ。ちなみにその対象となったのは美影が一人目だ。

「・・・・とにかく離してくれない？」

これでもか！というくらい力強く腕に抱きつかれている。

彼女の美琴にはない豊かな胸も押しつけられているということだ。

「もしかしてえ、ムラムラしてます？」

自覚はあったのか、わざとなのか、さらに力を強め、美影より頭一つ分低い食蜂は上目づかいで誘うように言う。

「イライラする」

マイペースすぎる食蜂に若干嫌気が指していた。



食蜂がというような感情は米粒ほど抱いていない。とにかく離れてほしい。

「まあ、照れちゃってえ」

照れているのはそつちだ、という言葉はのどから出てこなかった。何も言わずにこの場から離れたくなった。

振りほどこうにも腕は完全にロックされている。  
どうしたものか・・・

「美影さん！どこかで食事でもどうですか？」

「さつき食べた」

「じゃあどこ行きますかあ？」

「帰りたい」

「なら私も一緒に・・・キャ！」

そつけない態度で覇気のない返事を淡々と述べる美影。食蜂は美影の家への同行を提案したが頭の中でなにやら妄想が暴走してしまつて頬をピンクに染めている。

精神系の能力を所有していない美影もその妄想は読み取れるがそうは絶対にならない。

家の扉もくぐらせたくもない。

遺伝子レベルで彼女を苦手としてしまっている。

以前あったレベル5の襲撃について安否の確認なんてしたらどうなるだろうか。『心配』なんてしたらそれこそ面倒な反応をされてしまつだろう。

見るからに何もなかったようなので聞かないが。

「・・・、」

「どうやってこれを撒こうか、と思索していると二人に暑苦しい声がかけられた。」

「キミ、かわいいねえ、」

「俺たちと遊ばない？」

「そんな男よりもたのしいよー！」

ナンパだ。

美影にとって吐き気がするほど煩わしく感じる。

男が3人、食蜂を連れて行こうとし、美影を邪魔者扱いしている。正直、彼女を同道してくれると美影にとってありがたいが、先ほどの食蜂から推測するにそうはならないだろう。

それ以前にそうするのはまず、男として不名誉だ。美影としても許せない。

さつさとこいつらも食蜂も追い払おう、と決断し、行動に移そうとしたとき、

「ねえ、今、私はこの人と夜のデートに行くところなんだけど・・・」

美影よりも先に食蜂が男たちに反応を示した。

（違うからな）

美影が心の中で全否定しつつ、腕を掴む食蜂に怒りが感じられた。男たちの身に危険を感じる。

食蜂は美影から手を離し、肩から下げている星ガラのバックの中

からとあるモノを取り出した。

(・・・リモコン?)

テレビのかエアコンのか分からないが機械の遠隔操作に使われるであろう四角形の小さな箱だ。

ますます彼女のことか痛い子に思えてくる中、彼女はピツ、とボタンを一つ押した。

するとどうだろうか、まさしくリモコンによって操られた機械のそれに等しく男たちはスイッチが切られたように顔から表情が消えた。

リモコンは自分<sup>パーソナルリアリティ</sup>だけの真実を最適化するためのものか?、と美影は考察する。

「私たちのを邪魔するとお、ゆるさないから」

男たちは何の行動をインプットされたかは知らないが、ロボットのようにたどたどしく韋駄天走りを開始した。信号も無視し、いつか車にはねられるかもしれない。

「じゃあ、美影さん!このあと」

リモコンをバッグにいれ、この後の楽しい楽しい二人だけの夜を持ちかけようとし、振り向いたとき、

その場には誰もいなかった。

手を離され、食蜂の能力を一通り見たところで音もなく逃亡を達成したようだ。

「・・・もお！」

食蜂は地団駄を踏み、恋心をメラメラを燃やし、決意を改めて固めた。

「絶対、私の恋愛力で虜にしてみせるんだからあー！」

（へんなやつに好かれたなあ・・・）

精神的に全力で逃走（飛行を含む）をした美影は、先ほどの少女を通してくない自身の家の玄関に入り、帰宅を見事に達成した。

好意をもたれることは悪くはない。学園でも慣れている。しかも彼女は美影には能力を使わないと言っていた。保証はないが。

自分を一人の女として認めてもらおうとする努力は感嘆に値するが、なんとなくあのまま行動を共にしたらいろいろと危ない予感があった。

美影が現在いるところを知っているのは学生では美琴と一方通行の二人だけだ。おそらく二人には食蜂の能力は通じない。それは彼

にとってかなりの救いとなっていた。食蜂に家に押しかけられたら敵わない。

何度も携帯を壊された経験があるが、美琴が電撃使用であることに初めて感謝した美影であった。

エレクトロマスター

（とにかく、あのことは・・・な・・・）

美影はパソコンの電源を入れ、起動するまでにコーヒーを一杯作り、腰をおろし画面に向かった。

最近は何日こうして風紀委員の操作状況を研修では分らないとこまで探ってる。

初日以外に個人の行動はしていない。

残り二台のキャパシティダウンの破壊もしていない。

命令が違っていたため、レベル5である美影や一方通行にはなんの危害も加えていない。どこにでもいうような能力者だけだ。

（・・・あいつ・・・）

目の前の画面にはこう映し出された。

『某中学の女子生徒が能力者狩りの対象となった。そこへ一人の男が乱入し、スキルアウトを一蹴。』

その男の特徴は革製のジャンパーを着用。背中には大きな蜘蛛の刺青。いまだ特定できず。』

それを見た美影は脇に置かれた携帯電話を手に取り、電話をかけた。

コールは二回、野太い声が聞こえてきた。

『よー、御坂か。ひさしぶりだなあ！』

「・・・黒妻、お前今なにしてる？」

くるづまわたる  
黒妻綿流。

峰野よりは後であるが彼と同じく美影が仕事で関わった武装無能力集団の一人だ。

『牛乳買っているだけだが。やっぱり牛乳はむさ』

「お前、今日の夕方ちよつと暴れたみたいだな」

決め台詞とも口癖ともとれるフレーズの途中で美影は本題に入つた。

美影が風紀委員の活動を終えてから通報があつた事件についてだ。

『・・・ああ、お前の耳にも入つたのか、それ』

耳ではなく目からだが、ここでは割愛しよう。

「革ジャンに蜘蛛のタトゥーなんてお前ぐらいだろ。つーか、なんでお前は服脱いでやるんだよ？露出魔か」

服の下を見られるなんて服があつてはありえない。

男の背中なら尚のこと。

『あつはつは！、わりいな。女の子守ろうとしてつい本気になつて』

反省は声に現れていない。

というかそれが反省すべき点とも考えていないだろう。

彼には本気になると服を脱ぐという癖がある。美影は詳しく知ら

ないことだが。

「・・・言うの遅いかもしれないけど、俺今お前が言っていたやつ  
の元で仮だけど風紀委員やってるから」

『！、美偉とか？』

陽気な声色が一変し、低い声がさらに低く聞こえた。  
それだけ彼には気がかりなことだという証拠だ。  
それを案じての報告である。

「ああ、もうすぐ風紀委員ってこはやめるけど。どうする？この番  
号でも教えておこつか？」

『いや、それはやめておいてくれ』

それは美影が予想した返答であった。

「まあ、どうせいつか会うことにはなるだろうけど。で、元子分た  
ちには会ったのか？」

『いやまだだ。明日顔を見に行こうと考えていたところだ』

「あー、そう。・・・一応言っておくけどあまり派手に動くなよ。ま  
た捕まるから」

『考えておくよ。で、用件はそれだけか？』

「・・・いや、それだけだ。じゃ、」

最後に不自然な沈黙があつたがそこで電話は切られたため、黒妻はそれ以上何も問うことができなかった。それ以上聞く必要性も感じられなかったが。

閉じた携帯を見ながら美影は思う。

(・・・・・・・・あいつ・・、)



## 未知による苦悩（後書き）

お気に入り登録、感想、評価お願いします

## 無知による苦痛

とある洋服筆笥<sup>タンズ</sup>がある。

中にあるのは清楚なシャツやこの時期には着用されない防寒用のコート。

どれも所有者の人柄を映し出している。一つを除いて。

その中にたった一着、色も形状も材質も隣り合っている衣服とは全く違う、場違いとも呼べるものがあつた。

赤い、レザージャケット。

猪突猛進を連想させそうな、情熱の緋色。

否、その色が表わしている者は情熱に意味は近いが与える印象が異なる『情』かもしれない。

扉に手をかけながら、固法美偉は感慨にひたっている。

視線は一か所から動かない。

その先にあるのは異端者。

現在はその空間に収まったままであり、現在の日常からはかけ離れた存在であるが、最も思い出深い一着。かつての日常の物。

忘れかけていた日常。  
忘れたくもある日常。

だが、呼び起されつつある日常だ。  
自分が今はない笑顔をさらけ出していた日々。  
今のような平穩はないが、毎日が胸躍っていた。純粹に楽しみに満ちていた。

そして一瞬で崩れ落ちた日常だ。

(・・・、)

己の世界に入っていた固法にふと、声がかけられた。

「あ、美偉。 もう行くの？」

声をかけたのはルームメイトである柳迫碧美。やなぎさちこあのみ 固法と同じく風紀委員ではあるが彼女ほど熱心に活動しているわけではない。ジャッ

「ええ、世話のやける研修生がいるからね。 アンタこそ偶には支部に顔を出しなさいよ」

「校内だけで十分よ。 私は恋に青春に忙しいの」

風紀委員になったのも出会いが豊富である仕事であるからなのか  
もしれない。

彼女は腕章をカバンに入れっぱなしにしているなど、あまりやる気はないようだ。

「そうだ、今支部に来ているっていう第六位。 写真は出回っていな

いけど、けっこうかつこいって噂なんだけどどうなの？」

支部には来ないのにそんなことには敏感なのね、と内心固法は呆れる。

確かに美影の顔はかなりいいと思う。

運動神経も人柄もいい、とこの5日間で分かった。

白井や初春からの信頼も厚い。少なくとも一方通行よりは世間で言う『良い男』なのだろう。

だが、それ以上に不思議な、謎が多い人、という印象が強かった。

「いいと思うけど、アンタとは合わないわよ」

「ええー！残念、噂ではファンクラブも出来ているらしいのに、」

「・・・、」

意外だった。

そこまで彼に人気があったなんて。

非の打ちどころがない、といえるかもしれないがそこまでなのは予想外だ。

少なくとも、彼はそういうことに熱心とは思えない。おそらく本人公認ではないだろう。

「・・・ねえ、なにかあった？」

「！ツ・・・」

凶星だった。

自分でも言葉に表すことは今は出来ないが『なにか』はここ数日胸の奥にあった。

柳迫とは長い付き合いなため、隠し事は出来ないのかもしれない。  
だが、

「なんにもないわよ、」

「・・・ふうん」

これは完全に自分の問題だ。  
巻き込める理由も道理もない。それ以前に自分で解決したいという  
気持ちが強い。

「じゃ、第六位くんの顔写真ぐらいは撮ってきてね」

「え？、ちよつと碧美！」

そんなことは頼める気がしない。

とれば自分が変な気があると思われるかもしれない。

だが、心中の濁りを作り出した張本人は彼だ。彼に自覚はないだ  
ろうが。

声を上げた時には柳迫はすでに出かけてしまった。撮ることに困  
つてはいるが、一番の悩みは別だ。

固法は再度紅い一着を見る。

そして箆笥の戸をパタン、と閉じた。

「・・・なんか今日はスキルアウトの能力者狩りが多くないか？」

「そうですねえ・・・」

美影は目の前の自分が先ほどのした武装無能力集団をみて思う。後ろに隠れていた初春も同感だ。これで本日3回目、14人目だ。美影の技術により、倒れている男どもに傷はない。首元に鮮やかに手刀を入れ、意識を奪ったのだ。

襲われていた女子学生は美影に見とれているようだが、美影は気にしない。この一週間で何度もあった。メールアドレスを聞く者もいたが丁重に断った。今回も同じだ。

「はぁー、めんどくさ、」

「でも何だかんだで美影さんはしっかりしていますね」

初春は美影に感心している。尊敬ともいえる。

4日目からは美影は初春と、一方通行は白井と、二手に分かれての巡回を行っている。

なぜ、その組み合わせになったかというと、初春では一方通行を止められないだろう、という固法の判断だ。白井が出来るかどうかは何とも言えないのだが。

そう決まった時、初春は安堵を、白井は不満を露わにしていた。それもそうだ。方や身随、片や誠実。よほどの世話好きでなければ望ましいのは明らかに後者だ。

だが、白井も大人（自称）だ。

一方通行を扱えるように粉骨碎身しているようだ。

「さすがの俺も飽きてきたよ。こいつらの相手は」

「あと二日ですよ。頑張ってください」

初春は優しく励ます。

だが彼女も正直美影には正式に風紀委員になってほしいのだ。白井は毎日薦めるが無視が返事となってしまうため言葉には表わさない。

「はいはい。分かりましたよ、先輩」

「……」

風紀委員として『先輩』と呼ばれたことがうれしかったのか、初春はより笑顔が晴れやかになり、無理に背伸びするように活動に励みだした。

その様子を見て、美影は心の中で口を三日月型にし、呟く。

（ちよろいな、初春も、）

「おい、花瓶。さつさとコーヒー入れろ」

「なんで名前で呼んでくれないんですかー!?」

一方通行はお決まりとなった初春いじりでコーヒーを注文する。美影はそう呼んだりはいしないがそのほほえましい?、光景を見て面白く感じている。

白井はなぜかいる美琴とパソコンの画面で最近の能力者狩りの情報を見ている。

「またビッグスパイダー？」

「今週で3件目、お兄様と一方通行さんの活躍により被害者は減っていますけど・・・」

最近能力者狩りを行っている武装無能力集団の組織の一つ、『ビッグスパイダー』についてだ。

人数は不明。本拠地も今だ分からず。  
唯一つ、分かることは

「リーダーの名前は黒妻綿流。どうせいけ好かない高慢ちきに決まっていますわ」

顔を見たこともない男を遠慮なく批判する白井。  
彼女にはよく知らない者を侮蔑する傾向があるかもしれない。

「やっぱここは一発ドカンと」

「美琴、お前は風紀委員じゃないんだから大人しくしてろよ」

ドカンが洒落にならない美琴に兄として一応忠告しておく美影。  
だが彼はそんな言葉で妹が止まらないことは重々承知している。  
『勝負』を申し込まれたとき、何度も静止の声をかけても止まらず、  
一晩中追いかけまわされるといふ彼が求めない珍事があった。  
今は上条がその役を無意識に買ってしまったことは先日知った。

「その通りですの」



白井も同感だ。

溺愛しているが美琴の暴走は白井にも止められない。

「あー!」

そこで初春が声を上げた。

手にあるのはインスタントコーヒーの瓶だが、セピア色の粉末はなく、透明のガラスしかないとため、瓶の向こう側からくる光の妨げとなるものはない。

「コーヒー、一人分しかありません」

「じゃあ俺はいいよ」

そこで辞退したのは美影。

一方通行にラスト一杯を譲るといつのだ。  
だが、明日の分は一滴もないため、

「じゃあ、これから買い出しにでもいくわ」

固法がすすんで調達を申し出た。律義な彼女はそれを手間とは捉えていない。

「じゃあ、わたしも」

一人で行かせるのは申し訳ないため、初春も同行を求める。

「初春さんはいいわ。そうねえ、御坂君、一緒に行ってくれない?」

「荷物持ち?」

その提案を美影は男性の役割と捉えた発言をする。

表情から意識している女子がなんとかして男子に近づこうとするような考えは少しも伺えない。

「ええ、冷蔵庫の中に切れていたものがけっこうあったから。お願いできる？」

「いいよ、別に」

断る理由はない。

一方通行と違ってそれくらいの要望にはこたえられる。  
準備することは財布ぐらいなため、すぐに支部から出て行った。

「『ビッグスパイダー』の根城は第10学区、通称『ストレンジ』  
というところらしいですの」

見るからにロマンチックな展開は期待できないため、出て行った二人のことは気にせず白井は画面に映し出された情報を読み上げる。  
野蛮な武装無能力集団には『ストレンジ』という本拠地はお似合いだ、と白井は見立てる。

あごに手をあて、今後の行動について思考する。

「いくの？」

美琴が尋ねる。

白井の表情からはそう伺えた。

「管轄外ではありますが、第7学区内で発生した事件の調査だと言えば筋は通りますの」

風紀委員が管轄外で不用意に活動すればその先には始末書が待っている。

白井はたびたび書かされることになるが、懲りないようだ。

「じゃあ、行こっか！」

右手の拳を左手の平に打ち、張り切る美琴。

明らかに行く気満々であることを主張しているようである。

「え、ちょ、ちょっとお姉様!？」

「固法先輩のピンチヒッターよ！」

美琴は白井の手を強引に引っ張っていくが、白井は抵抗もせず、喜々とした感情が顔ににじみ出てしまっている。

それを見ながら初春は何事もないことを願うのみ、だ。

一方通行は勤務が終わったため、コーヒーを飲んだら何も言わずに出て行った。

「ええと、一方通行君のコーヒーと、・・・ジュースもなかったわね」

固法と美影は近くのコンビニに来ていた。

レジ係の店員は直立不動で寝てしまっているようだが、レジに行ったときに起こせばいいだろう。

美影は役割を果たすべくカゴを片手に固法が取っていく商品を次

々を流れ作業のように入れていく。

(・・・、)

だが固法の目的は買い出しなんかではない。もちろん写真でもない。

ただ、美影と二人で話す機会を作りたかったのだ。

確証はないが、自分が知りたいことを美影は知っている。

そして固法がそのことを切りだそうとしたとき、

「本当の黒妻のことか？」

美影から持ち出してきた。

固法は思いもよらない、突然の発言に驚きを隠せない。

「知っていたの？」

無理に冷静を保とうとする。

美影はあるものを手に取り、わざと固法から見える様に手に持つカゴに入れた。

「・・・ムサシノ牛乳・・・」

それは彼が好きだったもの。

そして彼に釣られ、自分も好きになったもの。

そこで美影が黒妻のことを知っていると固法は確信した。

「ああ、まあ、アンタが『ビッグスパイダー』の一員だったことは最近知ったんだけどね」

固法が知られなくなかったこと、それは自分が武装無能力集団の一人であったこと。

レベルが中々上がらなかった時期に見つけた居場所。壁を越えられず、暗い気持ちを持って余したとき、自分が自分でいられた居場所、それが『ビッグスパイダー』だった。

「彼は、・・・黒妻は!？」

場違いな音量でのを張り上げ、問い詰めようとする固法。対する美影は眉一つ動かさないほど冷静だ。

「・・・結論から言うと、アイツは生きている。二年前に死んじやない」

「二年前のこと、知っていたの!？」

その時期はビッグスパイダーの大きな転機となった時。そして固法が武装無能力集団を辞めた時だ。

「詳しくは言えないが、その時に俺はアイツと知り合ったからな」

「・・・どうして詳しく言えないの?」

「黒妻が言っなって言ったからだ」

「!・・・」

生きていることを知り、少しはほっとしたが、まだ心は完全には落ち着かない。

もしかしたら目の前にいる者が彼をあ的事件へと巻き込んだかも

知れないからだ。

言えないのも黒妻の口止めではなく、本当は自己防衛のためかもしれない。

「・・・以前、あなたは木山春生に『この街には知らないほうがいいことが多すぎる』って言ったそうね」

「美琴から聞いたのか？」

「ええ、」

固法は話題を一転させた。

その言葉は彼女も美琴から聞いたときから気にかかっていた。裏を返せばそれは『知るべきでないことも知っている』ということになる。その一つとしてビッグスパイダーを知ったのかもしれない。

レベル5である以上、通常では知りえない情報も得ることは出来ると思う。

だが、美影は、一方通行は、美琴とは『異質』と感じられた。風紀委員をやっている彼女にもあったことのない『違和感』があった。

まるで、

「あなた達、不思議と何でも知っているような感じがするわ」

「まあ、今回の能力者狩りについてもけっこう知っているからね」

「どんなことを知っているのかしら？」

挑発的に固法は言うが、自分には『余裕』がない様だった。

この場から退きたいとも思った。

「キャパシティダウンがあと二つ、スキルアウトの手に渡っていること。」

スキルアウトにそれを渡した研究所、・・・は前に潰したけど」

「！！、どうしてそれを言わなかったの！？

それに何て危ないことするの！？」

さらに声を膨らませ、投げかける。

もし、それを知っていればどれだけ被害が低下していたか。長点上機学園の4人への危険が激減していたか。

そしてなぜ学生である美影が『破壊』なんてしたのか。自分には到底理解できないことだった。

「危ないこと？・・・またおかしいこというね、アンタは」

「え？・・・」

真剣に是正させようとしたが、なぜかあざけ笑い、首を傾げられたことの意味が分からず、困惑してしまう。

「少しでも俺たちの身を案じてくれるなら、どうして風紀委員を続けさせたんだ？」

「っ！・・・」

確かにその通りだ。

初日で彼らに危険が迫っていることは明らかだった。彼らを懸念していたなら抗議してやめさせるべきだった。

だがそれはしなかった。

彼らなら大丈夫だと。街を守ってくれるのだと。

もしかしたら彼らの甚大な能力に、自分<sup>ちから</sup>は甘えていたのかもしれない。

仮に、そうではないのか？と問われたら否定できない。

「別に俺は今回のことが『危険』だなんて思っていはいない。

俺や一方通行は白井や初春よりも小さいころから不意打ちでバズーカ力打たれることより危険な目にはあっている。・・・美琴はないが」

淡々と美影は語る。

今回、自分が苦悩していることが何事でもないかのように。

危険の軌道のほとんどが彼らに向けられているのにも関わらず。

「でも、少しは風紀委員や警護員に頼つても・・・」

だが反論したかった。

自分が、自分たちが無力とは思いたくなかった。

「俺はその腕章が通じないところにいたんだ。

・・・何も知らないくせに、勝手なこと言ってるじゃねえよ」

その言葉に思わず退いてしまう。

彼の目を直視できなくなってしまう。

今まで信じた『正義』が、全否定されているような感じがした。右腕にある盾をモチーフとした腕章を掴む。強く、ただ強く。



「・・・ま、俺は説教できるような立場じゃないんだけどね」

彼は急におどけたようになる。

だが彼女の気は治まらない。

彼と自分の間に線を引きたくなかった。別世界にいたいくなかった。

「黒妻のことだが」

急に話が元に戻った。

彼の手によって。

「アイツを警護員に引き渡したのは俺だ。で、半年前ぐらいにアイツは出てきた」

いきなりの供述だった。

目の前に彼を束縛したものがいる。

自分から彼を奪ったものが手の届くところにいる。

「あとアイツ、今日ビッグスパイダーのところに行くって言うてた」

「え？」

彼の今いるかもしれない場所が知らされた。

今すぐにでも足を運びたい。

一秒でも早く、彼に会いたい。

「かつての仲間として行きたければいい。

そこにはキャパシティダウンがあるから風紀委員として行くのも

いい」

自分が強く望んでいるのは明らかに前者だ。  
それは美影も分かっている。

「あと、今日中にビッグスパイダーじゃない方のキャパシティダウンは壊しておくから、そっちは任せる。それに風紀委員も今日で止めるよう上には俺から言っておくから」

だが美影は後者としての役割を仄めかすような言い方をした。  
それは固法には憎く感じた。

「・・・あなた、風紀委員にはふさわしくないわね」

「俺も同感だ」

ふさわしくない、それははたしてどちらの意味での言葉であったのか。

固法は美影を置いて、かつての居場所へと向かった。

残された美影は左手に持つカゴを見る。

そこにはコーヒーや、ジュース、ムサシの牛乳、遅くまで仕事をする人のための食料などが入っている。

（・・・俺が払うのか？）

特に気にすることなく、自費で購入し、美影もコンビニから出て行った。

そこには美影が良く知る、同じ制服を着た白い髪をした人物がいた。

「いたのか？一方通行」

「あア、まったく慣れないこととしてンなア、お前は」

外からで言葉は聞こえなかったが固法の表情の変化で大体の流れは読み取れた。

『説教』じみたことなんて美影がするべきではない。

一度、自分がその対象となったが、心に訴えかけることが大きすぎる。

精神的に追い込まれてしまう。

「風紀委員」ごつこだが、今日でやめるように言っておくわ」

「ああ、そオ。ま、退屈しのぎにはなったがな」

一方通行に残念がる様子はない。

彼も今回の騒動はそれぐらいのことだったのだ。

「とりあえず、これ支部においてくるけど、お前どうする？」

手に持つ通常のコンビにのものより重いビニール袋を揺らしつつ、今後の予定を尋ねる。

「俺は帰るわ、これ以上関わるのは御免だからな」

「そうか、んじゃまた」

そこで彼らはそれぞれ正反対の方向へ進みだした。  
一方通行はあるべき夏休みへ。

美影は残業へと。

「あれ？、初春ひとり？」

おそらくここに来るのは最後であろう。

第177支部に入った美影は初春の姿しか見られないことに気づく。

「ええ、一方通行さんは先ほど帰られて、白井さんは御坂さんと出かけました。ところで固法先輩はどうされたんですか？」

初春も一人しか帰ってこないことに気づき、首を傾げる。

「ああ、用事が出来たってどっかに行った」

初春はまだ固法がスキルアウトの一人であったことを知らない。もし知ればどのような反応を見せるか、おそらくそれは美影は見れないだろう。

「で、白井と美琴はどこに行ったの？」

購入した飲料や食料を支部に備え付けられた冷蔵庫に入れながら美影は尋ねる。

「スキルアウトの『ビッグスパイダー』が根城としている、第10学区の『ストレンジ』というところにです」

その言葉にムサシノ牛乳を入れようとした美影の手が止まった。  
そこには対能力者用の兵器があるのだから。

（・・・多分、大丈夫だろ）

不良を10人ぐらい相手に出来る本物の黒妻がいるのだからおそろく問題はない。

美影はそう思った。

固法が向かっているのだから自分は足を運べない。

こっそり視ることは出来るが。

『ストレンジ』

学園都市の中でも表では特に荒れている地域で、武装無能力集団の巣窟となっている。

落書きされた廃ビルに囲まれ、風力発電のプロペラは折れ、掃除ロボは倒され、稼働不能となっている。

風紀委員も易々と入ることさえできない。

そんな腐食されたビルの一つの屋上に一人の男がいた。

（・・・どうやら大丈夫みたいだな）

美影はすぐに支部を出てワームホールにより固法よりも早く『ストレンジ』に到達していた。

約100メートル離れたところにいるのはキャパシティダウンに

より怯んだ美琴と白井、二人を囲んでいた『ビッグスパイダー』を撃退した黒妻綿流の姿だ。

現在黒妻を名乗る男は本物の登場に焦り、怯え、倒された仲間を追いてき、一目散に逃げてしまった。

一騒動終えたところに固法の姿が現れた。

「・・・久しぶりだな、美偉」

「先輩、本当に生きてたんですね」

目の前に黒妻の姿があることに驚きはしない。被害者の証言、そして先ほどの美影の言葉で分かっている。だが、納得がいかない。

「みたいだな」

黒妻はまるで他人事のように言う。

（・・・？）

美琴と白井は二人の関係性が分からず、顔を見合わせる。

「なんで、なんの連絡もくれなかったんです!？」

生きているなら、一言ぐらいかけてくれれば、『生きている』ということだけでも知らせてくれれば、これほど苦しむことはなかったのに。

黒妻は言い渋る。

そしてふと、固法の右腕に目をやると、そこには2年前にはなかったものが装着されていた。

盾をモチーフとした腕章。

武装無能力集団と対をなす存在である風紀委員である証。

それは一種の『裏切り』を表しているかのように感じられ、固法は咄嗟に左手で隠してしまう。

「安心しろ、」

黒妻は歩きだす。

固法のすぐ横を、

「すぐに消えるさ・・・」

黒妻はどこか安心していているようだった。

彼女が新しい居場所を見つけたことに。自分が不要であることに。そして、自分が共にいてはいけない存在であると捉え、歩き続ける。

「先輩！」

固法は振り向き、名前を呼ぶ。

だが返事はなく、その背中小さくなっていくばかりだ。やがて、見えなくなってしまう。

「・・・先輩・・・」

今度は誰にも聞こえないほど小さな声で。自分に言い聞かせるように、呟いた。

（あーあ、泣きそうだよあの人）

美影は遠距離からただ視ているだけだった。

彼は全てを知っている。全てを語ることが出来る。

だが、言わない。

自己防衛なんかではない。

ただ、黒妻に『言うな』と二年前に言われたからだ。

（さて、一つ壊しに行きますか）

美影の仕事はあと一つ。

ビッグスパイダーが所有しているものではない側のキャパシティ  
ダウンの破壊。

正直、いつでもできた。

でもしなかった。

自分勝手かもしれないが、見て見ぬふりをした。

単なる『気まぐれ』だ。

今回壊すことにしたのも『気まぐれ』だ。

もし、初日で壊せばどれだけの被害が消滅していたか。

それは十分分かっている。

だが、『学園都市』を知る彼にとって、そう考えだしたら切りが  
ない。

やはり『気まぐれ』だと、美影は自覚した。



2年前、

「先輩、行かないください！」

固法がまだ『ビッグスパイダー』の一員であつた頃、紅いレザージャケットを着ていた頃、突然事件は起きた。

「つつても、蛇谷を見捨てるわけにはいかねえだろ」

携帯を見ながら言う。

画面には『蛇谷のバカは預かった 返して欲しけりゃ一人で来いや』の文字。

人質だ。

武装無能力集団であるにも関わらず節度や誇りを持った集団ということを小癪に感じたものが、一人を人質として捕え、黒妻に一人で来るよう要求しているのだ。

「そんなの、罨に決まっているじゃないですか！！」

何人いるかわからない。

何を武器として所持しているか分からない。

そんな所に一人で行くのは蟻が蟻地獄に行くようなもの。

「そついやこの間も話したけど、やっぱりここはお前の名前を刻む場所じゃないと、俺は思うぜ」

固法が駆け付けた時には全てが終わっていた。

呼び出された場所は呼びだした者によるものだろうか、爆発でほとんどもが吹っ飛んでいた。

残ったのは呼びだした武装無能力者集団たち。

人質となっていた蛇谷。

そして、黒妻がいつも着ていた黒いライダーズジャケット。

彼のであろう血が付着している。

黒妻の姿はない。

死体ひとつ、腕一つなかった。

警護員の捜査が行われてもそこに彼の姿はなかった。

「・・・うつ、う・・・せ、先輩・・・」

固法はただ、彼のジャケットを握り、涙を流していた。

そこに彼の姿はない。

御坂美影という登場人物もまた、なかった。

「どういふことなの・・・」

自宅で固法は一人、呟いた。  
誰も、何も教えてくれない。

何も分からない。

2年前、黒妻がどうなったのか、

2年前、御坂美影が何をしたのか、

彼女はただ、分からない。

そこに一通のメールが届いた。

『警護員本部は、武装無能力集団の能力者狩りに対抗し、明朝10時より、第10学区エリアG、通称「ストレンジ」の一斉摘発を行う』

無知による苦痛（後書き）

アンケート、評価お願いします。

## 最後の気まぐれ

19時47分

「ふんふふーん、ふんふふーん、ふん、ふん、ふーん」

とある少女が鼻歌を歌いながら夜の街を歩いていた。

星の入った瞳に背に伸びるほどの長い金髪<sup>ブロード</sup>、学園都市の五本指の一つ、常盤台中学の制服を着用し、レース入りのハイソックスにレース入りの手袋を着用している。

すれ違う者が振り向くような美少女だ。

学園都市、超能力者<sup>レベル5</sup>、序列第5位、食蜂操祈<sup>しょくほうみさき</sup>。

つい先日、恋する乙女となった少女だ。

昨日も思いを寄せている人物に出くわした（見つけた）が、少し目を離れたら<sup>逃げられて</sup>いなくなってしまったのだ。

だがそんなことで挫折する食蜂操祈ではない。

今日もまた、彼を探しているところだ。

（美影さん、いないわねえ・・・）

昨日出会った場所に来てみたが彼の姿はない。  
最終下校時刻も過ぎているのでそもそも学生の姿さえあまり見られない。

常盤台中学には『派閥』というものがある。

基本的にはお遊びグループのようなものだが、同じ目的を持った者達が集まって学校から設備を借りたり資金を調達し、研究分野などで名を残すという部活のような性質を持つ。

食蜂はそこで、常盤台中学最大派閥を率いている。

彼女にとって、それは単なる遊びとしか思っていない。

だが、彼女にとって、派閥は自身の目であり、耳であり、労働力だ。

とある経路で『御坂美影』という名を知ってからメンバーに調べさせたのだ。

同中学に所属する御坂美琴の兄であること。今年度、長点上機学園に入学したこと。第1位、第2位、第7位を友人としていること。最近ファンクラブなるものができていること。

だが、彼女が求める、住所はなぜか手に入らない。

というより、個人情報そのものが少なすぎる。

彼女自身、美影の知り合いの脳内を気づかれないように能力で視た（能力を使わないのは美影本人だけ）が、これといって重視する記憶が視付からない。

風紀委員として活動するカッコいい美影の姿は視れた時には興奮していたが。

とにかく、御坂美影は他人には『自分』を見せない人だと分かった。

男は何でもさらけ出すよりは隠している方が良い。

それが彼女の考えでもあった。  
だが、隠しすぎだ。

彼女は調べれば調べるほどどこかしく感じてしまい、彼に対する  
独占力も強まってしまふ。

（・・・初めて会ったところに行こうかなあ・・・）

やみくもに探すよりはまだ確率が高い、かもしれない。  
美影がいそうなところもまた、調べられていない。

夜であることに加え、さらに建物に囲まれていることで一層暗い。  
前方に何があるのかぐらいいしか見えない。

だが、彼女には問題はない。  
第5位の能力、心理掌握<sup>メンタルアウト</sup>は戦闘用の能力ではないが、対人間には  
最強とも言える様な力だ。

一瞬で相手の動きを封じ、意のままに操れる。  
学園都市には例外はあるが、武装無能力者集団に例外はないだろ  
う。

食蜂は迷わず、躊躇わず、一步一步進む。  
そこにいたのは美影、・・・ではなく不良達。夜の路地裏に群れて  
いる。

「おい、アイツ・・・」

気づかれ、目が合った。

求めている人物とは違う、汚らしい目が数個こちらに向けられる。  
立ち上がり、こちらに向かい、歩いてくる。

(・・・、)

食蜂は動じない。動じる価値もない。

このような状況はよくある。というより、望んで飛び込み、近づいてきたものを能力で弄り倒すことをよくやっている。

「へへへ、」

「なかなか良い女じゃねえか」

耳障りな音が鼓膜を刺激する。

やはり、彼のような声を発しない。

「あれえ、ちょっと危ない状況かなあ？」

食蜂にとって、少しも危なくない。

レベル5である彼女は数十人を一度に操ることができる。  
困んでいるのは5人。

朝飯前だ。

肩から下げているバッグからリモコンを取り出す。  
能力を最大限に引き出すには必要だ。

そして演算を開始しようとしたとき、



「っ！？、何・・・これ？」

激しい頭痛が食蜂を襲った。甲高い音がそれを齎していた。痛みでリモコンが手から離れてしまう。

『うゝゝ－ゝヤー－イゝゝ効ゝゝ－ゝ－ゝゝゝゝ』

（能力が、使えない！？）

脳内を視ようとしても、ろくに読み取れない。圧倒するはずだったのに、手も足も出せない。

「へへへ、能力が使えないだろ」

「そういうモノらしいからなあ、」

苦しむ食蜂に対し、男たちは笑ったままだ。

さらに近づき、絶体絶命のピンチだ。

能力者狩りに合うのは何回があった。だが、能力そのものが使えなくなるのは初めて。

能力さえ使えればこんな奴ら一秒で倒せるのだが。

「痛くしねえから、大人しく」

一人の男が手を伸ばす。

食蜂が思わず目を閉じてしまったとき、

「ぐほおア!!」

その男が何者かに殴られ吹っ飛ばされた。  
悲痛な声を聞き、食蜂は目を開ける。  
そこにいたのは、

「風紀委員でーす、ってもうやめるけど。  
あとすでに頭痛いんでそれやめてくださーい」

自分が捜し求めた、御坂美影の姿が目の前にあった。腕には風紀委員の腕章がつけられている。

彼にもこの音が聞いているようで頭を押さえている。  
だが、彼は動じない。

「デメエ!!」

他の男が美影に飛びかかろうとしたが、

「あ？」

美影の頭を押さえていないほうの手で、黒い物体を額に押し付けられた。

能力で生み出したものではない。

拳銃だ。

キヤパシティダウンがあるということで、万が一能力が使えなくなったときのために一応持ってきたものだ。

「ひ、ひい!!」

それには拳で立ち向かえないと察し、先ほどとは違う間抜けな、怯えた声を出す男。

突きつけられていない者は退散しようと走り出す。

逃げる方向にはワゴン車が一台、停まっていた。

それは美影が探していたもの。

今、美影と食蜂を苦しめているものだ。

それを美影は握っている拳銃で打ち抜く。

今回は一部を壊すのではなく、ガソリンのタンクを狙った。

バゴォーーン!!と爆音を出し、車もろとも吹っ飛んだ。車に近づこうとした者は慌てて逃げる。それと同時に音はやみ、頭痛も治まる。

(あと一つか・・・)

残るキャパシティダウンは『ビッグスパイダー』が所持するものだけ。

先ほど明朝に『ストレンジ』を一斉摘発するという情報が入った。おそらくそれで没収、もしくは破壊されるだろう。

美影の『仕事』は今終わった。

「おい、大丈夫」

襲われそうであった者に声をかけようとする

「美影さーん!!!!」

勢い良く胸にダイブされた。

いきなりの出来事に美影は飲みこめないが、その者の顔を見て、  
気づく。

（え、食蜂！？・・・うわー面倒くさ）

美影はその被害者が暗いせいで誰か気づかなかったのだ。

万が一、食蜂と気づいていたら遠距離からキャパシティダウンを  
打ち抜いていたのだが。

誰かが危ないと気付き、迷わず接近したことが個人的に仇となっ  
た。

「こわかったあゝ」

顔を美影の胸に押し付け、かわいい声で言う。

やっぱり食蜂もまだ中学生なんだな、と思い、彼女の頭をやさし  
く撫でてしまったことが間違いだったのか、

「ふ、ふふふふふふふふ・・・」

（あー、美影さん良い匂いだなあ、抱き心地もいいしい、ますます・  
・・・、今度は逃がさないわあ）

三度目の正直を誓いつつ、食蜂操祈の脳内にある美影のいい所り  
ストに、『匂い』と『感触』が追加された。

（やばい、コイツ白井と同類か？）

打って変わって謎の『ふ』に美影は彼女が気味悪く感じてしまっ  
逃げたいが、しっかりと今度はからだ全体をロックされてしまっ  
ている。

「食蜂さん、離れてくれませんか？」

「・・・いやあ」

駄々を捏ね、さらに腕に力を加え、顔を左右に動かし美影の胸に押し付ける。

美影が引き剥がそうとしてもビクともしない。

「・・・どうしたら離れてくれる？」

一応条件をおそろおそろ聞く。

食蜂が求める、五感はあと一つ、

「キスして／＼」

「えー・・・」

思わず絶句してしまう。予想外な要望ではない。予想通り過ぎて、出来れば違うことであってほしかった。

さらに食蜂は力を入れ、上目遣いで豊満な胸を押し付ける。

（・・・、）

美影も男だ。

ここまでされて、何も感じないわけではない。

食蜂の女子特有の甘い香りが鼻腔をくすぐってもいる。

彼女の上目づかいも可愛いと思う。

性的な興奮を覚えないわけではない。食蜂のように表にはださな  
いが。

「よし、じゃあ、目をつぶって」

「ん、／＼／」

肩を押さえ、目を閉じた食蜂の顔と少し距離をとる。食蜂の顎に優しく手を添える。

そして少し前に出された唇に自分のそれを近づけていく。

近づき、体温が感じられていくにつれ、食蜂の顔が紅くなっている、鼓動が聞こえるほどに早く、大きくなる。

今か今かと待ち望み、あと数センチで二つの顔が一つになる。食蜂の望みが一つ叶う。

そして、

「風紀委員です！怪我はありませんか！？」

爆音を聞きつけ、一人の風紀委員の少女があと少し、というところまで駆けつけてきた。

その声に反応し、食蜂は目を開けたとき、

美影の姿はなかった。

一人でキスするという無様な恰好になっていたのだ。

「え？・・・ええ！？」

（ふー、危なかった・・・いろんな意味で）

美影は食蜂から数百メートル離れた位置にいる。

なぜ、一瞬でここまで来れたかというと、風紀委員活動の初日に使った『時間操作』によるものだ。

どうやって逃げようと考量するため、とりあえず重力探知で半径1キロメートルを視渡したところ、風紀委員が近づいてくるのは視えていたので、それにあわせるように顔をゆっくりと近づけ、近づいて来た者に食蜂が動揺し手を緩める一瞬を見計らい、能力を発動させ、彼女の腕から抜け出したのだ。

万が一、誰も来なかった場合、どうなっていたかは美影にも分からない。

もしかしたら・・・

（まったく、もう少し自分の精神<sup>メンタル</sup>押さええて欲しいよな）

積極的過ぎる食蜂に心の底から思う。

今日はもう大人しく家に帰ろうと決心した。

翌日の朝、9時。

固法は前日と同じく、洋服筆筒を開けたまま立ち止まっていた。視線の先にあるのは2年間一度も着ていない紅いジャケット。

『ビッグスパイダー』をやめてから封印していたものだ。

それを固法は迷わず手に取る。

今日は風紀委員としてではなく、元『スキルアウト』としての、自分のための行動だ。

腕には何もつけていない。

「美偉、忘れ物、」



ルームメイトの柳迫が声をかける。  
手荷物のは“風紀委員”としての忘れ物だ。今の自分には必要でない。

彼と共にするには邪魔なものだ。  
つけるわけにはいかない。

美影によりその存在価値をも見出せなくなりつつもある。

彼は間違ったことを言っただとは思わない。

だが、肯定したくなかった。

『自分』を見失いたくなかった。

“それ”は受け取らず、固法は紅い思い出の品を着た姿で行った。

9時30分

『ビッグスパイダー』が根城としている『ストレンジ』への入り口に固法は近づいていた。

警護員に來られる前に全てを終わらせたかった。  
そこに、とある男の姿があった。

「それ、似合ってるね」

「・・・どうしてここにいるのかしら？」

御坂美影が壁にもたれかかっていた。  
腕には一週間つけていた腕章はない。制服でもない。彼らが風紀  
委員をやめる、ということは昨日連絡が入っていた。  
ゆえにつけているほうが間違いだで、これが“正常”だ。  
この場にいることを除いては。

「まあ、一週間お世話になった先輩にお礼でもしようかね」

「あなたの力を借りる気はないわ」

固法は歩みを止めない。

言葉を交わしつつも彼は眼中にない。

あれだけ言っておいていまさら手を貸そうとする彼が厚かましく  
感じる。

「30分」

時間が惜しい固法にとある時間が美影から告げられた。

「30分だけ、警護員がそっちに行かないように命令しとくから」

その言葉に固法は立ち止まる。

まったく予想外の申し出であった。

彼の権力に驚いているわけではない。彼がそのような形で手を貸  
すことが意外だった。

もう自分には何もしなれなかった。

固法は顰めつ面を解き、笑みを小さく浮かべ、

「・・・あなた、やっぱり風紀委員にはふさわしくないわね」

「もうやりたくないね、あんな面倒な仕事」

固法の言葉は前回とは正反対での意味だった。

再び歩き出し、ビッグスパイダーに、自分に、『けじめ』をつけに行った。

二年前、御坂美影は『裏』の住人としてひとつの依頼が入っていた。

危険な武器を所持しているということで武装無能力集団からそれらを没収すること。

生死は問わない。

もちろん、その頃から美影は無駄に命を奪うような真似はしていなかった。

(・・・あそこか・・・)

どこの誰かは知らないが、男の声で詳細は聞かされていた。

余談だが、その男は美影により、約一週間で特定されたため、すぐにまた誰かに引き継がれた。

重力探知で中を探っていると、

ドカアアーーン！！と突然爆破した。

（えー、どうすんのこれ？）

何かする前に没収するはずのものが使われたため、おそらく仕事  
が失敗した。

爆破から数秒、その建物からぞろぞろと武装無能力者集団共が出  
てきた。

怪我をしつつ、必死に逃げている。彼らの怪我が爆発の脅威を表  
している。

建物には死人もいるかもしれない。

（・・・、）

とにかく、中に入ることに決めた。

荒れ狂う場に、美影の姿に気づく者はいなかったため、そのビル  
に入ることに支障はなかった。

「コホッ、コホッ、ああ、ひでえなこれは」

爆風により、壁は吹き飛び、煙が待っていた。

美影は目を閉じ、重力探知で視ながら進む。

（・・・一人か）

煙を吹き飛ばし、視認できる状況になると、見えたのは一人の倒  
れた男。紅い髪をし、なぜか上半身裸だ。

爆発に巻き込まれ、出血は少くない。

このままでは死ぬだろう。

「おい、大丈夫か？」

呼びかけ、意識があるか確かめる。

返事の声が思いのほか小さかったため、美影は耳を近づける。

「くっ・・・あ・・・へ、蛇谷は？」

何とか口を動かし、一つの名前を喉から搾り出す。

「蛇谷つてのがだれか知らないけど、ここにはもう誰もいないぞ。死体もないみたいだし、逃げたんじゃないのか？」

少し大きな声で美影は言う。

相手の声が小さいと自然と大きくなってしまふものだ。

「へっ、・・・そうか・・・それは、よか・・・っ・・・」

その男はほほ笑みながら気を失った。自分のことよりも仲間の安否が気になるのだろう。

美影は重力探知でその男の体内を視る。

心臓は止まっていけない。だが肺の動きが荒れている。爆発により、異物が混入したか、熱風が入ったか。

すぐに治療しないと命が危ない。

「はあ、・・・」

美影は携帯を取り出す。

この男がどうなろうと美影には構わないが目の前で死なれるのは後味が悪い。

そして、自分とどこか、似ていると感じた。

「もしもし、冥土<sup>ヘブン</sup>帰し？　今から死にかけの男連れていくんで、お願いできますか？」

(・・・ん、・・・)

男は目を覚ましたが、そこは見覚えのない場所。  
薬品の匂いがする。

おそらく病院だろう。

左手に冷涼な感覚がある。

点滴だ。

体の至る所にあつた痛みも嘘のように消えている。

「起きたか？」

声をかけられた。

その声は聞き覚えがあつた。

顔を向けると横の椅子に男が携帯を操作しながら座っている。

「お前は・・・ずっとここにいたのか？」

「男の寝顔をずっと見ている趣味はないよ。ここの医者が今日目覚めるって言つからさつき来た」

今日目覚める、そう言つたということは、

「俺は・・・何日寝ていた？」

「二日だ。もう体に問題はないだろ？」

「ああ、」

二日というのは長く感じるが怪我は重く、生きているのが不思議なくらいだったはずだ。

男はとりあえず自分が生きていることに安堵の息を漏らす。

「で、」

座っている男が携帯をポケットに入れる。

「あの子のことだが、『ビッグスパイダー』のこととお前のこと、どっちから聞きたい？」

その言葉で次第に記憶が鮮明に浮かび上がった。

あの時、自分は仲間を救おうとしていた。

だが、爆発により、

「あいつは！？、あいつらはどうなっ・・・っ！！」

身を乗り出したせいで痛みが湧き出てくる。

だが、そんなことに構っている場合ではない。

「落ち着け、ちゃんと話すから。」

で、あの後警護員が駆け付けたが、あの爆発を起こした奴等は捕まったが『ビッグスパイダー』は全員事情聴取だけで終わった。解散命令は出たけどお前が言っていた蛇谷ってやつが『ビッグスパイ

ダー』のメンバーを何人が集めてまた群れているらしい」

「そうか・・・、良かった、」

その男は今度は心から安心し、ベッドにもたれかけたが、

「その中に女はいなかったか？」

「女？ いなかったと思うが・・・、お前の女か？」

「・・・いや、いいんだ」

彼女は武装無能力集団に在るべきではない。路地裏ではなく、大通りを歩くべきだ。

薄暗いところではなく、太陽が見える場所に在るべきだ。

彼女があるべき日常に戻ったことに、大怪我を負った男は胸を撫で下ろした。

「そうか」

美影はその男の言葉で追及をやめた。

彼の気持ちは大まかだが理解し、共感できた。

「で、お前のことだが、これからどうする？ 警護員に行くのも元に戻るのもいいし。」

今回の事件をなかったことにしてもいいけど」

「いや、警護員に自首するわ。けじめはつけねえと」



男に迷いはない。

不満も表れていない。

目の前の男の権力に疑問もない。

「そうか、じゃあ警護員には俺から言っておく。・・なんか欲しいものがあつたら手配するけど、なんかいるか？」

美影は最低限何か力を貸そうと思った。

この男をどこか気に入ったからだ。

大抵の望みは問題ない。

「・・・・ムサシノ牛乳」

病床にっている男、黒妻綿流はお気に入りの飲料を要求した。

「つーわけだ」

固法は黒妻から2年前のことを彼が知り得る範囲で聞いた。

黒妻の手には手錠が掛かっている。自分が掛けたものだ。そして、彼が望んだ結果でもあった。

「あいつにはけっこう世話になったからな。まあ、あいつ自身の

ことはほとんど聞かなかったが」

固法は思う。

彼が自分に言ったことは決して間違いではない。  
だが、わざと自分が不利になるような言い方をしていた。

感謝を求められる言い方も彼には出来た。だが、それを彼はしなかった。

もし、彼がそうしていたら現在も彼の力を借りていたかもしれない。  
い。また、彼が黒妻を助けていたかもしれない。

自分に悔いが残っていたかも知れない。

自分に正面から立ち向かえなかったかも知れない。

彼はまるで自分の過去への闘争心を掻き立てる役割を担ったようだった。

(・・・?)

美琴と白井はこのことに美影が携わっていたことを知らなかったため、よく状況がつかめていない。

なんとなく、美影が黒妻を助けたとしか分からなかった。

そしてまた、美影に対する疑念も増えた。

(まったく、彼は・・・)

固法は彼に言いたいことが次々と浮かび上がってきた。  
でもそれらは言うべきではないと自重した。

「似合ってるぜ、」

黒妻の言葉で固法は自分の右腕を見る。

彼女の右腕には先ほどなかった風紀委員の腕章がある。

横にいる美琴と白井が届けたものだ。自分でもあった方がしっくりくると改めて感じた。

「でもよう、その皮ジャン、流石に胸きつくねえか？」

固法の胸を凝視しながら言う。彼には下心が全く感じられない。

その皮ジャンは2年前に購入したものだ。胸が成長した固法には遠目でも快適そうには思えない。

「そりゃあ、毎日あれ、飲んでいたから」

目の前の者に影響して、自分も好きになったもの。

飲むたびに何か感じられたもの。

他の銘柄では、満足できず、決まって購入するのはそれだった。

「「やっぱり牛乳は、ムサシノ牛乳！」」

## 最後の気まぐれ（後書き）

お気に入り登録、感想、評価お願いします

## 幕間 - 美影の部屋 - (前書き)

誠に申し訳ありませんが、作者の都合上、インデックスの一件ですが美影がアレイスターの命令で関わり、力を貸したという設定でお願いします。

竜の殺息は美影のブラックホールによって吸い込まれたということとで上条の記憶喪失もない、ということをお願いします。

また、ステイルや神裂にいたっては美影と顔見知りだったという設定です。

美影の一蹴劇になりそうだったので読者様がたも楽しくないだろうと思い、カットさせていただきました。

もう一度言います。

誠に申し訳ありませんでした

幕間 - 美影の部屋 -

10時45分

(ええと、何がなかったかなあ・・・)

只今、御坂美影はスーパーマーケットで絶賛買い出し中だ。

なぜ、このような所にいるかというと、本日、朝からセールを開催するというわけで足を運ばせたというわけだ。

セールといいこともあり、普段、金銭面で悩まされる学生も多く見られる。

本来、美影は金には困っていない。毎月、他の学生の何倍もの奨学金を支給されている。

だが、夏休みになって一方通行や土御門の家電製品の購入や能力者狩りの情報収集に大金を叩いてしまったため、他事に極力金を使いたくないという強迫観念に襲われた、というのは全くの嘘で、本当は休みということもあるので「こんなにちは」の時間まで睡眠を続けるつもりであったのだがなぜか9時ぐらいに目が覚め、二度寝も実行できないほど目と頭が冴えてしまったため、適当に朝食でもとろうとしたが冷蔵庫の中にはほとんど食材が蓄えられていなかったために朝から食材調達に出かけたというわけだ。

自炊を基本とする美影にとって空の冷蔵庫は今後にも差し支える。外食は一方通行や垣根に誘われない限り選択肢にはない。夏ということもあり昼に出かけるのは地獄だ。

そして偶然近くの食品販売店で割引セールが行われていた。朝に買い物に行かないわけにはいかない。

買い物かごに入れられたものの品目は豊富だ。

肉、魚介類、野菜、果物、牛乳（なんとムサシノゝにした）、乳製品、調味料、エトセトラ・・

インスタント製品や惣菜は見られない。

それらを美影は『自炊』とは認めていないということもある。

パンや麺は作れるがそこは面倒、と感ずるため、市販のものを普通に購入する。

学園都市の科学力により、世界中の食品が一年中、同じ味で食べられるため、ここの学生は何の食材がいつ旬なのか良く知らないかもしれない。

よって、テレビで、「この時期にしか採れない○○」なんてコメントがたまに見られるがここに来ればいつでも食べられるため、逆にカルチャーショックを受ける者もいるかもしれない。

だからといって、存在する食材は外と同じもの。異様なまでに色がカラフルな野菜やでかすぎる肉、なんてモノはさすがにない、かもしれない。

（あと・・・卵か、）

美影が求める食材は卵のみ。

この店は偶に来るため卵売り場の位置は頭に入っているため迷わず歩む。

（あつたあつた、）

卵が見えてくると残っているのはあと二パック。

セールで卵は半額以下になっていたため早期購入した者が多いの  
だろう。

残り少ないと何となく運がいいと感じる。

二つのうち、片方に手を伸ばすと、もう片方にちょうど同時に手  
をつける者がいた。

それぞれ入手できたため、口論にはならないが何となく隣に来た  
者を見ると、その人物は美影も良く知る人物だった。

「お、当麻じゃん」

「ん？、美影も来ていたのか」

ツンツン頭の同年、世界一と言っても過言ではないほどの不幸  
少年、上条当麻が買い物が片手に立っていた。

10時50分

「そーなんですよ、あなたの妹さんが毎度毎度会った時にビリビリ  
ビリビリと」

「はは、悪いねえ、家の騒がなくなってなくて」



無事、レジを通した後、二人は冷房が行き届いている店の出口付近で世間話をしていた。

主に美琴関連の。

上条が言うには会うたびに「勝負しなさい！」と言われ、余裕で致死量に到達するほどの電撃をぶつけられ、右手で打ち消すという工程が行われるらしい。

もともとその生贄は美影の役割で、以前その現場を見て見ぬふりをしたということは口が裂けても言えない。

「そう言えば禁書目録はまだいるのか？」  
インデックス

「ああ、いつも元気に冷蔵庫を空にしてくれますよ、トホホ・・・」

美影とは違う原理で体内にブラックホールを発生させているシスターの少女に途方に暮れているようだ。

そのため今日もセールで戦ってきたのだろう。

余談だが、美影は一方通行に強引に大量に食べさせられた時には本当に胃内にブラックホールを作り出し、こっそり食べた物を消し去っているのは内緒だ。

「お前も苦勞してんな、ホイ、これやるよ」

渡したのは牛肉300グラムのパック。

美影にとって何ともないようなものなのだが、

「え！？このわたくしに牛肉なんというものを与えてくれるんですか！？」

上条にとっては高級食材のようで本気で感謝している。

暗くなりかけていた表情を消し去り、愉悦と美影に対する敬意を

前面に表し、その賜物を戦利品が入ったビニールに加えた。

「まあ、妹が迷惑かけているみたいだからね、償いとして」

「ありがとうございます美影さん、いや、美影様！」

「やめろその言い方は」

大げさすぎる称呼を美影は止めさせる。

本気で敬われるのは面映ゆい。

上条のオーバーアクションに通りがかった者が若干顔を引き攣らせている。

「これであの暴食シスターも少しは満足してくれますよ、はい」

「それは良かったな、まあ、困った時は言ってくれよ、出来るだけ力になるからさ」

10時30分

常盤台中学には寮が二つある。

第七学区南西端に存在する、5つのお嬢様学校が作る共用地帯、  
学舎の園の内と外に一つずつ存在している。

同然ながらどちらも女子寮だ。

その外にある女子寮に超能力者、序列第三位、超電磁砲が異名の  
中学2年生、御坂美琴は入寮している。

お嬢様学校ということもあり、気品にあふれた行動に慎むよう教育されているが、現在とはある事情により、少々慌しくなっている。どちらにせよ、通常の中学校とは違う、特異の雰囲気をかもし出しているのだが。

「お姉様、折り入って相談がありますの」

御坂美琴は良く知る後輩に声をかけられた。

「どうしたのよ、黒子」

突然の白井の申し出に美琴は首を傾げる。

「お兄様の住所を教えて欲しいですの」

「美影の？何で？」

「実は、お兄様から風紀委員の腕章を返却してもらっていないので、固法先輩から返してもらうように言われましたの」

本来は風紀委員実習の最終日に返す予定であったのだが、美影が6日目で中止するよう指示したため、予定通りにいかなかったのだ。白井は事情を知らないため、なぜか最終日は行われなかったため都合よく『ビッグスパイダー』の件に身を置くことができたのだが、彼らに限ってないだろうが腕章を乱用されては一大事だ。早期回収が望ましい。

「かといってお兄様の手を煩わせるわけにもいきませんので、このように、」

本当は別の目的で美影の家に興味があるのだがそれは目の前にいる者には決していえない。

そのためこうして律儀に事を運ぼうとしている。

「いいわよ、このあと用事もないし、久しぶりに美影の家にも行ってみたいからね」

美琴は暇つぶしができたので、快く承知した。

10時40分

美琴と白井が寮を出発し、歩くこと数分、前方に見慣れた二人がいた。

「あ！御坂さん、白井さんも」

セミロングの黒髪に白梅の花を模した髪飾りをつけている少女、佐天涙子が美琴と白井に気づき、声をかける。隣には頭に花をかたどった髪飾りを大量にしている少女、初春飾利もいる。

「佐天さん、初春さん、どうしたの？朝から」

美琴は朝から出かけている二人に尋ねる。

「今から佐天さんとセブンスミストに買い物に行くんですよ。二人はこれからどこへ？」

初春が予定を述べた後に二人に同様に尋ねる。

「これから美影の家に行くのよ」

「え！？美影さんの？」

予想以上に喰らい付いたのは佐天だ。

レベル5の家というモノに大いに興味があるらしい。

常盤台中学女子寮の美琴と白井の部屋に訪れたときにも目を輝かせていたがそれと同等の様子だ。

「もしかして腕章のことですか？」

「そうです。それでお姉様に案内を」

数日美影と風紀委員活動を共にしていた初春には心当たりがあったため、理由はすぐに分かった。

「初春！、私たちも行かない？」

「えー？迷惑じゃありませんか？」

興味深深の佐天に対し、初春は大勢での訪問は失礼だと感じる。だが、彼女も美影の部屋に行きたいという希望は少なからずあるので、

「大丈夫よ、美影の家なんてそんなに気にしないで」

美琴の軽い了承で二人も同行することになった。  
この時、本人が出かけていることも知らず。

10時50分

「ここが美影の住んでいるマンションよ」

「ここつて、第7学区でも有名な高級マンションじゃないですか！」

4人になり、歩くこと約5分、たどり着いたのは第7学区のとある高級マンション。

11階まで聳り立ち、見上げていると首も疲れてきそうだ。

入り口はパスワードを入力しないと中に入れないようになってい  
る。セキュリティは万全だ。

家賃も通常とは桁が違うかもしれない。

本来学生が住居とすることなどできないのだが美影は学園都市が  
誇るレベル5。

問題はない。

あるとすれば広すぎるということだろう。

驚愕と納得から佐天は声をあげる。白井と初春も口を開けてしま  
っている。

「さ、入るわよ」

美琴は入るためのパスワードを以前美影から聞いていたため、簡単に最初の扉を開けることができる。

中の掃除が行き届いた廊下を歩き、エレベーターに乗る。

押すボタンは8階。

学園都市製の音も振動もない15人は入れる箱に乗ることわずか5秒。チン、という音と共に扉が開き、一回とは違う色の絨毯が引かれた廊下を進む。

美琴が立ち止まったのは『807号室』という札があるが、表札はない。

防犯のため、と思われるが、実際は面倒くさいという果てしなくどうでもいい理由によるものだ。

美琴はインターフォンを押す。

しっかり押せたか分かるようピーンポーンという音は外からでも小さくだが聞こえる。

待つこと15秒。応答はない。

「留守ですか？」

「いや、寝てるかもしれないわね」

初春の推測に美琴は違う推測を出す。

兄には休みの日には昼間で寝るという習慣があることは妹である美琴はよく知っている。

それほど深い眠りにについているわけではないがインターフォンぐらいでは起きないかもしれない。

かといって、ここで声を出してもこのマンションは完全防音。近所迷惑にもならず廊下に空しく響くだけだ。

そこで美琴が選んだのは、

「鍵、開けちゃいましょ」

白昼堂々と不法侵入。

美琴はレベル5。電子錠を開けることなど造作もない。

住人が兄ということもあり、まったく気にしない。焦げ目が付いても。

いきなりの行動に3人は声をかける間もなく扉は開いた。

「ここがお兄様のお部屋ですか」

「広いですね」

「なんか面白いものないかなあ」

中に入った3人はそれぞれ言葉を漏らす。玄関だけでも広いと分かる。このマンションでは狭いほうである3LDKだが、学生の人暮らしには十分すぎる。

最初に見えたのは靴箱。

黒を基調としたものが多く、きれいに並べられている。

進んで開けた扉の先にあったのはリビング。

いかにも高そうなソファがあり、中央にはテーブル。テーブルを挟んで大型のテレビがある。窓際にはあまり場所を取らない程度の大きさの観葉植物が置いてある。

ホコリが溜まっていることも、脱ぎ捨てられた靴下も、カップ麺の容器が置いてあることもない。まして焼きそばパンなんてものも当然ない。

男臭さもまったくくない。

「うわあ、これフツカフカだよ、初春！」



思わずソファで跳ね上がるようにすわり、感想を述べる佐天。男の部屋ということもあるのだが、遠慮はなく満喫している。そもそも美琴以外の3人にとっても美影は兄のような存在であるため、女子だけで押しかけることに抵抗はなかったようだ。

「本当に出かけているみたいね、」

寝室に行った美琴は蛻<sup>もぬ</sup>けの殻であったことを確かめてリビングに戻ってきた。

白井はなにやらあちこち動き回っている。

「さて、」

佐天が立ち上がり、何か意気込もうとする。

「美影さんといえど男！エロ本の一つや二つ、でてこないかなあ？」

「うわっ、さ、佐天さん何を！？」

いやらしい笑みを浮かべ、家宅搜索を始めた。

初春も戸惑いながらあちこち見る。

リビングから見えたのはキッチン。

同色にまとめられた家電製品が並んでいる。どれか一つ、安売りの関係で違う色をし、目立っているものもない。

きれいに使われているようで、汚れもカビも見られない。

とりあえず佐天が入ったのは寝室。そういう系統のものに関しては一番確率が高いといえよう。

ベッドの下、押し入れ、キャビネット、挙句の果てにはマットレ

スの下までも見てみるが希望の品は見付からない。

「うーん、ないなあ」

11時15分

美影は買い出しを終え、自宅に帰ろうとしていた。

食材が入った袋を片手にいつも通りマンションに入り、廊下を歩き、エレベーターに入り、待つこと5秒、部屋を借りている8階に辿りついた。

ポケットから鍵を取り出しながら再び廊下を歩き、自分の部屋の前に着いた。

(・・・?)

鍵を開けようとしたとき、ふと異変に気づいた。

学園都市のほとんどのマンション、アパートには電子式の鍵が採用されている。どれも『外』で使用されているものより遥かに高性能だ。しかも美影は自分のものには大家さんに内緒で少し改造してしまっているため合鍵は存在しない。オートロックなので鍵はドアを閉めると同時にかけられる。

異変というのは開けられた形跡があることだ。ただ、金属バットやハンマーで強引に開けたような跡ではない。明らかに『焦げ』が付いている、ということだ。

高性能のため、水が入ってもこうはならない。というより水なん

て入る場所ではない。

つまり、誰かが電子的に手を加えたということになる。

しかも美影には見覚えがあった。一度それをやられたことがある。そのときはもう少し『焦げ』が大きかった。そんなことをするのは一人しか考えられない。その気になれば形跡一つ残さず出来るのだろうがどうも美影のものととなると、とりあえず警報がならない程度であればいいのだろう。

美影は自身の部屋を重力探知で視る。

(・・・)

1秒とかからず内部を確認した後、美影は別の演算を開始した。

「うーん、ないなあ」

美影のベッドに座りながら一人萎えていた。

いくら寝室を探しても美影の衣料品はたくさん見つかったが佐天の好奇心を向上させるような品は見付からない。

彼女は、『ない』という結論には至らず、『巧妙に隠している』という思考にしか至らないため、美影の気持ちになって考え、どこに隠すだろうと一人頭の中で論究している。

だが、彼女にも美影の考えは読めない。

美影は前を見ていても上にある事を考えているような、異次元の思考(オタクではないモノ)の持ち主。表情からも仕草からも声色からも心情が覗えない。意表を突こうとしても彼の掌の上にいる、

そんな感じだ。

「よし！、違うところを探そう！」

とにかく、部屋中を隈なく探せば何か出てくるだろう、そう意気込んだ時、

「何を探すの？」

「それは勿論、美影さんの秘蔵」

佐天は発言を止めた。

今、自分は誰と話した？

というより、この部屋に自分以外の誰かいたわけ？

美琴はリビングで初春と勝手に紅茶を入れて寛くわいでいる。白井は別の場所で何か探している。

自分は一人で面白エロ本いものを探している。

寝室にいるのは自分一人のはずだ。

今聞こえた声には聞き覚えがあった。

そして、ギギギ、と首を180度回し、そこにいたのは、

「人の家で楽しそうだね、佐天さん」

先ほど自分が座っていたベッドに足を組み、目、以外が笑っている表情の美影が座っていた。

「き、」

「き？」

「キヤーーーーー!!!!!!」

幽霊のように現れた美影に、佐天は腹から派手に悲鳴を上げた。

「「「佐天さん!?!?!」」」

その声を聞き、美琴、初春、白井は急いで駆け付ける。

「お兄様!?!」

「美影さん!?!」

「いたの!?!」

散々好き放題やっていた3人も部屋の住人の存在に気付いた。  
美影はワームホールを作り、とりあえず佐天の後方に音もなく現れたのだが、5人にとっては怨霊にしか見えなかった。

11時30分

「はい、腕章。一方通行でもあるから」

美影は一週間使っていた風紀委員の腕章を初春に渡した。昨日一方通行に返すように自分のを渡されたので二つある。

「確かに。すいません、勝手に家に入ってしまった」

初春は律儀に謝罪する。

本来なら警護員にでも通報するほどのことであるのだが面倒なことに特に問題はないだろうという美影の考えにより却下された。本当は警護員に自分の家を知られたくないという理由なのだが。そのため、いいいよいよ別に、と適当に受け流された。

なぜ、初春に渡すのかというと白井は佐天と今だ何か詮索している。厚かましいと思うが美影は本当に見られたくないものはどうやっても見つからないようにするため問題はない。ちなみに佐天が望むものは本当じゃない。

「あと白井、アルバムはないよ」

白井の性格から察するにそこにたどり着いた。

「お兄様！？ どうしてですの！？」

本棚を重点的に漁っていた白井は痛恨の叫びを上げた。

「黒子、やっぱりそれが目的だったのね」

美琴は白井を取り押さえようとしたが美影がないと言ったので自制した。

「……一冊しか」

だが、美琴の期待を裏切り、白井の期待に答えるかの様に美影の手にはいつの間にか一冊の本が納まっていた。

茶色の表紙に大きく、分厚い、まさしくアルバム、といったものの学園都市には珍しい、電子式ではない型だ。少し表紙がボロボロに

なっている。

「流石、お兄様！」

白井は空間移動を2回した。

一回目で美影の下に現れ、2回目で美影が手に持つアルバムと自身を空間移動させ、リビングのテーブルの上に置いて、開いた。

「美影！、何てモノ出してんのよ！」

「これが昔の美影さんですかあ、」

「御坂さん、美影さんにベツタリだね」

美琴は美影の行動に難色を示すが佐天と初春もアルバムに夢中だ。もう止められない。

見ると、美琴が美影にくつつきながら笑顔で写っているものが多い。

仲良し兄妹としか見えない。

当時はそのように兄と接していたが今となっては恥ずかしい過去だ。

出来れば知られたくなかったため、美琴は顔を真っ赤にしている。

「お兄様、これらをどうか、黒子に分けてほしいですの！」

自分が知らない美琴の姿に白井は興奮で悶絶しそうな勢いで交渉する。

なんとしてもコレクションに加えたいのだろう。

「やだ」

だが、美影にとっても大切なものであるため一部でも引渡すわけにはいかない。

2文字で拒否された白井はショックを受けるが諦めきれない。そこで彼女が提案したのは、

「で、では、コピーするというのはいかがでしょう?」

「ならいい」

「よくなーーい!!」

美影の許可を美琴が全力で阻止する。

白井とは違う興奮で美琴の前髪からバチバチと電撃が走りかけた。あまりここで美琴が能力を使うと学園都市にとっても損害となる破損が起きてしまったため、渋々、止めた。

「そつえば、お兄様、」

虚脱感によりソファに寝そべってしまった白井がとあることを思い出す。

「固法先輩がお兄様に『ありがとっ』とお伝えするようおっしゃってましたの」

おそらく、というより確実に黒妻のことだろう。

別に感謝されたくてした事ではないため、適当に聞き流した。

白井はその言葉の意味を十分に把握していないようだ。

「・・・じゃあ、俺からも伝言、」



「なんですの？」

美影も白井を通して彼女に伝えたいことがあるようなので白井は耳を澄ます。

「『アンタの後輩に不法侵入されたからどうにかして下さい』って」

「申し訳ありませんでしたの」

白井は一瞬でソファの上で土下座した。

万が一知られたら固法先輩の怒りの鉄槌どころか風紀委員の権限を剥奪されてしまう。

初春も他人事ではないため、何も言い返すことが出来ない。

「そういえば、」

全力で頭を下げている白井の横で佐天が何かに気づいた。

「もうお昼ご飯の時間ですね」

リビングの壁に掛けられた時計を見ると長針と短針が重なっていた。

おなかも空く頃である。

「そうねえ。 美影、アンタなんか作りなさいよ」

美琴が兄に食事を要求した。  
本来なら女子である美琴がやるべきなのではないか、と思われる

が美影も気にしない。

「いいよー」

「え？悪いですよ」

軽い返事に初春は戸惑う。

味に不安があるわけではない。突然押しかけたのに加え、食事を作ってもらうことに申し訳なさがあるからだ。

だが、美影にとっては料理は手間ではないため5人分くらい何てこともない。

「いいのよ、美影にやらせておけば」

それを言うのはお前の役割じゃないだろ、と美影はツツコミたくなつたがどうせ自分でも言おうとしたため何も言わず清潔なキッチンへと入った。

食材は先ほど大量に手に入れたため大抵のものは作れる。

だが時間をかけるのは望ましくない。長時間待たせるわけにはいかないし、長時間調理することに詫言を言われるのも避けたい。

とりあえず買い物袋の中身を冷蔵庫に入れながら見る。

目に入っただのは上条と同時に手に入れた卵だ。

「オムライスでいいかー？」

まだアルバムを見ながらなにやらガールズトークを繰り広げている4人に少し大きな声で呼びかける。

「いいわよー」

帰ってきた声は美琴のもの。

他の3人は口出しすべきでないと感じたのだろう。

だが、美影の料理ぶりには興味があつたのか、キッチンを覗きに  
来た。

「さてと、」

彼は料理が好きではあるがエプロンはつけない。

万が一、何か飛んできたとしたら能力で弾くからだ。

取り出したのは、卵、御飯、鶏肉、玉葱、ピーマン、人参、ケチ  
ヤップ、バター、etc・・

特に捻くれたモノを作る気も食べさせる気もない。というか、自  
分も食べたくない。

とにかく、普通のオムライスの調理を開始した。

隣のコンロで市販のデミグラスソースを温めながら、フライパン  
にバターを引き、温めている間に包丁で野菜や鶏肉を目にも止まら  
ぬ速さで均等な大きさに切り分ける。フライパンが温まったとこで  
切った玉ねぎ、人参、鶏肉、ピーマンを入れたあとに御飯を加え、  
素早く炒める。そこにケチャップをいれ、御飯を潰さないよう、や  
さしく且、丁寧な、フライ返しを織り交ぜつつ炒め、一粒一粒をコ  
ーティングしていき、チキンライスが完成したら5つの皿に均等に  
分ける。

続いては卵。ボールに片手に一つずつ、一度に2つ割り、牛乳を  
少々加え、菜箸でかき混ぜる。5人いるため一パック全部を使った。  
温めたフライパンに再びバターを入れ、溶かした後、卵を一人分流  
しこむ。そして素早く菜箸でかき混ぜ、フライパンを少し傾けつつ、  
小刻みにフライ返しをすることで半熟卵をつつんだオムライスの出  
来上がり。それをチキンライスの上にそっと置き、包丁で切れ込み

を入れると、卵の重みで両側に広がり、とろとろ卵がライスを包んだ。その肯定を5回繰り返した後、温めたデミグラスソースをかけて完成。

「出来たぞー」

オムライスを5つ、多いので2往復してテーブルへと運んだ。

「……、」

白井、初春、佐天はそのオムライスを見て固まった。

てつきり、卵でライスを包む形式のものを作ってくると思っていたのだが、目の前のものは違う。

レストランでも出せるような、所謂タンポポオムライスが出てきたのだ。正直、自分たちより遥かに料理スキルがあると認めざるを得ない。

「どうした？冷めるぞ」

「……は、はい、いただきます！」「」

美影としては大したことがないようだ。ますます彼がすごい意味で変な人に見えてくる。

3人はおそろおそろ（悪い意味ではない）スプーンを口に運んだ。

「……おいしい！」「」

ふわふわでとろとろな卵とそれに包まれた味にムラのないチキンライスと絶妙なハーモニーを醸し出していた。

そこら辺のレストランより遥かに美味だ。

「それはよかった」

安心した美影も、自分の分到手をつけ始めた。  
因みに美琴は遠慮なく食べている。これが彼女にとって普通なのだろうか。少なくとも彼女の口にはあっている。言葉には出さないが。

「「「「ごちそうさまでした」「」」」」

「お粗末さまでした」

数分後、五人は食事を終えた。

4人ともきれいに食べたようで御飯粒ひとつ残っていない。

美影は5人分の皿を運び、流し台へと入れた。

「そついえばお兄様。お渡ししたいものがありましたの」

「ん、何？」

食器を洗淨機に入れようとした美影に白井が声を掛けたので手を止め、リビングへと戻る。

渡されたのは白い長方形の紙。

そこにはこう書かれていた。

「『常盤台中学女子寮 盛夏祭 招待状』?」

「はい、明後日わたくしたちの寮で行われる催しですので是非、お兄様にも」

「私たちも先ほどいただきました」

そういつて初春は美影が受け取ったものと同じものを取り出す。

「んじゃ一緒に行くか？」

「え？、一方通行さんとは行かないんですか？」

普通ならこのようなイベントは同級生と行くものだ。彼女、ということも考えられるが美影に彼女がいるという形跡が先ほどの家宅捜査では見つからなかった。

いてもおかしくはないのだが、美影を見ていると釣り合う女性が少なく見えてくる。

初春はとある少女が美影に熱烈アタックをしていることは知らない。

「あいつはこういうのは誘っても来ないよ」

一方通行の性格は風紀委員活動の一週間で大体分かったなのでその言葉で納得した。

「でしたら他のレベル5の方は？」

かといって知り合いが一方通行だけなはずがない。

「俺はいいけど、ナンパ好きの女タラシと暑苦しい根性バカだよ？」

「・・・一緒に行きましょう、美影さん」

真顔でそういうところを見ると事実であるようだ。

女子中学校の催しにいろいろと害を与えてしまいそうだ。

長点上機のレベル5に普通の人はいないのではないかと思わされた。美影はいい意味で、だが。

美影はその招待状を見てふと思う。

「美琴は何かやったりするのか？」

「え！？、いや、その・・・えっと・・・」

なぜかその問いに美琴はスムーズに答えることが出来なかった。

幕間 - 美影の部屋 - (後書き)

お気に入り登録、感想、評価お願いします



## 盛夏祭（前書き）

遅いですが、あけましておめでとつございます！

## 盛夏祭

### 常盤台中学女子寮盛夏祭

一般には開放されていない常盤台中学学生寮が、年に一度、外部に開放されるお祭りや文化祭的なイベントだ。

といっても学校の後悔ではなく、寮で開催されるイベントであるため紹介されるのはほんの一部だ。

いずれにせよ、学園都市の5本指に入る名門校であり、同時に世界有数のお嬢様学校である常盤台中学校の施設を見学できるため、この日を待ち焦がれている招待客もいるかもしれない。

否、いるに違いない。

「あ、美影さん！ こっちです！」

佐天に呼ばれ、美影は声がした方向へと歩く。

待ち合わせは現地集合、寮の前だ。

二人は、特に佐天の隣にいる初春は美影が早く来るよう催促するように手招きしているところを見るとこの日を心待ちにしていたようだ。

「初春、テンション高すぎじゃない？」

一秒でも早く中に入りたいと言わんばかりに目を輝かせている初春に無理だと分かりつつも感情表現を押さえるように一言かける。

「なに言っているんですか美影さん！ 盛夏祭ですよ！？ 常盤台中学ですよ！？ きっと中はすごいことになっているに決まっているじゃないですか！」

「あー、はいはいわかったから、中に入りましょーねー」

彼女の小躍りを諫めるのを諦め、美影は棒読みで言葉を受け流し、前進を試みた。

入り口には警護員の黄泉川と鉄装の二人が警備を固めていた。警備を学園都市の警察的組織に依頼するところは流石常盤台と言ったところか。

入り口付近には常盤台中学の学生と思われる生徒が全員メイド服を着用しながらパンフレットを配布している。

一部受け取り、美影は行われている、行われる催しを確認する。

「あーいましたよ、美影さん、佐天さん」

初春の声でパンフレットに向けていた視線を前方に向けると見慣れた二人がいた。

片方はツインテールの少女。『記録係』と書かれた腕章をつけ、

首からカメラを下げている。メイド服ではなく、常盤台の制服姿だ。もう片方は言わずと知れた常盤台中学のエースがメイド服姿でいる。そしてパンフレットを脇に挟みながら・・・・・・・・その記録係の頬を左右に思いつきりひっばっていた。

つまり、御坂美琴が白井黒子に体罰を与えている。

「こんにちはー！」

初春は臆することなく声を掛ける。

このような光景は見慣れているからだ。電撃がないだけマシなほうかもしれない。

「ああ？、あ！」

チンピラのように声を太くし、不機嫌ですと言わんばかりの返しをする美琴。

メイド服姿でその発言はあまりにも不自然だ。

だが、振り向くと同時に表情は晴れやかになった。

「相変わらずやってますねー」

「美琴、メイドでそれは何か危ないぞ」

彼女たちの招待客の3人の姿がそこにあった。

美影は呆れ気味でパンフレットを持っていないほうの手を腰に当てている。

「うわぁ！、白井さん、ご招待ありがとうございます、盛夏祭！」

飾りつけられた建物を見渡して感想を述べる初春。

先ほどよりも目のカラットが大きくなっている。

「なんといつても常盤台中学の寮祭ですからね、これはきつと！、私たちの想像を遥かに超えたものが待ち受けているに違いありません！」

（お前のはしゃぎぶりが想像を遥かに超えているよ、花瓶）

「どういたしまして。その期待に違わぬすばらしい催しがございますから、どうぞ楽しんでいって下さいな」

（なんで記録係のお前が偉そうにしてんだよ、オセロ）

美影が心の中で言葉に出したら失礼なツツコミを入れつつ二人の会話を聞いている。

白井の誇らしげな発言の途中、横目で美琴を見ているところを見るとやはり彼女は何かしらするらしい。それを美影は見逃さなかった。

彼も去年はとある事情により美琴の招待を断ったため、中に入ったことは実はない。

少なくとも彼にとっても楽しみではある。

「では、早速ご案内を」

「ちょっと待てー、」

白井が3人を連れて行こうとしたとき、横槍を入れられた。そこにいたのはカチューシャでおでこを全開にし、美琴とは違う型のメイド服に包まれた少女がいた。

「白井ー、ビュッフェの手伝いはどうするつもりだー？」

「あ、ああー、忘れてましたの」

重要な仕事を無視していたことに気づき、たじろぐ白井。

「あのー？」

初春は見知らぬものが出てきたことに戸惑う。

「あー、紹介するわ」

それに気づいた美琴がそのメイドに近づき、互いの橋渡しを買って出た。

「こちら、繚乱家政女学校の土御門舞夏<sup>りょうらんかせいじょがっこう　つちみかどまいか</sup>。今回の寮祭の料理も彼女の彼女の学校に指導してもらったのよ」

「繚乱って、あのメイドスペシャリストを育成するっていう？」

初春は知っているようだ。

彼女は何か、普通とは違う学校に憧れを抱いているのかもしれない。

「土御門舞夏であるー」

スカートの両端を少し持ち上げるようにしながら頭を下げ、丁寧に挨拶する土御門。

「で、こちらは私のお友達の初春飾利さんに、佐天淚子さん、それ

と  
」

「もしかして御坂の兄かー？」

もう一人、背が高く、頭が飛び出ている男を美琴が紹介しようとしたとき、土御門舞夏が口を開く。

「ああ、アイツの妹か」

以前、彼女の兄、土御門元春の部屋に訪れた時にすれ違った記憶が美影にはあった。

「そうだぞー、兄貴がいつもお世話になっている」

「美影、知っているの？」

何かしらの接点を持っている二人に美琴は首を傾げる。

「ああ、コイツの兄とちよつとね」

土御門元春は美影と知り合いだが、詳しくは言えない仲（変な意味ではない）だ。

丁寧に初春と佐天に困ったことがあれば寄与することを告げた後、土御門妹は白井の襟元を掴み、

「さあ白井、来るのだ」

お構いなしに手伝いを要求し、引っ張っていく。

「ちょ、っえ、ま、っ待って下さいまし、初春たちを放り出しては

」

「仕事は放り出してもいいのか？」

「いえ、決してそんなことは・・・」

この上ない正論を返され、何も言い返せなくなった白井は大人しく引きずり回されることとなった。

「変わりに私が案内するわ」

メイド美琴が引率者に自薦した。

随分経ったことで、パンフレットの配布時間も終わったのだろう。

「さてと、どこから回ろうか、」

寮内といっても見学場所は多い。種類も様々。美琴が勝手に決めるわけにもいかないと判断し、3人に任せている。

初春と佐天はパンフレットの隅から隅まで読み、目的地を決めている。

美影はどこからでもいいので、パンフレットは閉じ、辺り一面を適当に見渡している。

常盤台は改めて他の学校と違うと見せ付けられた。

テーブルやイス一つにつけても通常のものとは素材も形状も違うと思われる。販売されているケーキも作りが丁寧で、高級店で取り扱われているものと差がない。



「言ってみたいところか」

「はい！、はいはい！、あります。行きたいところ、あります！！」

美琴の質問に初春が全力で挙手し、自分の要望を訴える。

「このこと、このことこのこと、このこと・・・あと、ここからここまで！」

美琴に見えないくらいパンフレットを近づけ、指で辿りながら説明する。

要するに彼女が行きたいところとは、

「初春、それ全部だぞ」

「美影さん、私、今だけはいつもの初春飾利ではありません」

（さっきからおかしいぞ）

「もう宣言しておきます。リミッター、解除です！！」

「あーそお」

ババーン！という効果音が付きそうなくらい意気揚々と言い張り、燃えるように熱くなった花瓶に美影は関心が薄い反応をした。

「まあ、じゃあ順番に回って行きましょ」

盛夏祭を楽しんでくれている初春に嬉しさ半分、戸惑い半分で美琴は案内を開始した。

「うわあ、こんな展示があるなんて、さすがお嬢様学校ですよ、ね、佐天さん」

初めに訪れたのはシュガークラフトの展示。

よくクリスマスケーキにサンタさんの形をしたものが乗っているがそれとはレベルがまったく違っていた。

初春はあらゆる角度から凝視し、その完成度を隣にいる佐天と共感しようとするが、

「これ本当にお砂糖で出来ているの？よく出来ているなあ、」

佐天が見ているのは薔薇。

葉っぱ一枚、花びら一枚まで細部まで精巧に作られているため、本物と言われても疑われないかもしれない。

「どれ、あーん、」

本当に砂糖製なのかという疑念から、佐天はなんと花弁を一枚引き剥がし、口へと入れた。

丈夫に作られているらしく、一枚綺麗に外れたが、万が一その衝撃で全壊したら申し訳ない、ではすまなかっただろう。

だが作品に手をつけたため、初春が凄惨だと訴えかけるかのよう

に手を振り回しながら騒いでいる。

それに構わず、花弁を味わった結果、

「うーん、果てしなく砂糖だね」

甘味しか伝わってこなかったそれが、『シュガー』クラフトであることを確信した。

「当たり前だ」

美影は呆れるようにため息をつく。

「食べちゃだめですよ！これ、展示品なんですから。ね！、御坂さん、」

自分の作品であるかのように非難する気持ちを美琴にも伝えようと、振り向くが、

「宜しければ、御坂さまも一ついかがですか？」

そこにはおそらく製作者である学生たちに囲まれながら甘い甘い人形を薦められている常盤台のエースがいた。

美琴の常盤台での人気は美影の長点上機でのそれと同じぐらい高い。

レベル5というのはどこにいてもそういうものだ。

「あー、ありがと。でも私は遠慮しとくわ、」

だが、美琴はそれには慣れていない。

彼女は特別視されることが苦手であり、嫌っていることは美影も知っている。

「人気だね、御坂様」

人気者の妹に美影が茶々を入れる。

「アンタも『御坂』でしょうが」

その言葉の『意味』を理解しながら美琴は言い返し、その台詞に美影の表情が凍結した。

口止めておいた秘密をさらつとばらされてしまった。

「え！？、もしかして、・・・御坂様のお兄さん・・・ですか？」

美琴を囲んでいた女子学生の一人がおそろおそろ尋ねる。  
そのような事実は聞いたことがなかった。

「あー、うん、そうだよ」

嘘をついても仕方がないと諦めた美影は正直に答えた。  
今後の展開を予想しながら。

「本当ですか！？」

「御坂様にこれほどカッコいいお兄様がいたなんて、」

「お名前は何ですか？」

驚愕の事実で美影に対する興味が一気に高まり、美影に詰め寄り、騒ぎ出すお嬢様たち。

美影はなるべく笑顔で相手をする。

いずれ知られるだろうと思っではいたのだが、いざ現実になるとこつも波風が立つのか、と美琴パワーに舌を巻く。

それもあるが、実際はそれに加え、美影の容姿が端麗であることからお嬢様方は美影に釘付けとなっている。

「・・・何かすごいことになっているね、初春」

「はい、流石美影さんですね・・・」

その光景を見ていた二人はなぜか、疎外感を覚えた。

(・・・来なければ良かった)

誰もがうらやむ光景のど真ん中で、美影は激しく後悔した。

「へえー、すごい細かいなあ」

次に訪れたのはステッチの展示。

廊下には大きな額縁に入れられたこれまた学生が作ったとは思えないほど完成度が高いものが壁に並んで飾られていた。

美影は先ほど貰った人形のシュガークラフトをポリポリ齧<sup>かじ</sup>りながら眺めている。

そこで初春がとあるものに気づく。

「佐天さん、佐天さん、体験できるみたいですよぉ」

部屋の前には『ステッチ教室』と書かれた宣伝ボードが置かれていた。

初心者でも常盤台の者が教えてくれるそうだ。

「わかった、わかった、わかったから、」

おもちゃを目の前に駄々をこねる子供のような初春に佐天が賛意を表する。

「御坂さんと美影さんも一緒にどうですか？」

「え？、私はいいわ、」

「男の俺がステッチってどうなんだ」

「はい！決まりです、4名お願いしまーす！」

初春はドアの前で待機していたメイドに大きく手を上げて注文する。

リミッターを解除した初春はどうやら人の意見に耳を貸さないらしい、と美影は考察した。

一人でうろろしているのもある意味危険と感じた美影は仕方なく中へと入っていく。

「ふう〜、これは中々の出来ですよ〜」

糸を白い布に縫っていくこと数分、初春は針を置く。

彼が作ったのは向日葵。向日葵のつくりは大きく分けて二つ、外輪に黄色い花びらをつけた花を舌状花、内側の花びらが筒状花を筒

状花というが、初春の向日葵は舌状花では花弁は大きさがバラバラ、筒状花に至っては茶色の糸を網目状に縫うだけ、とスカスカの状態だ。

それでも彼女にとっては上出来らしい。

「ほら！佐天さん、うつ、・・・」

右隣に座っている佐天に見せようとするが、彼女を見て表情が固まった。

そこに描かれていたのは水色のスポーツカー。

歪みもなければズレもない、どこから見ても傑作と言えよう。

「うーん、弟の鞆の時より、腕が落ちているかなあ」

彼女にとつては物足りないところがあるらしい。

初春は自分のと見比べる。ジャンルは違えど差は歴然。素直に身を引き、体を90度左回転。左にいる美琴のステッチを見る。

美琴が描いたのは彼女が大好きなマスコットであるゲコ太。

ゲコ太はケロヨンの隣に住んでいるおじさんで乗り物に弱くゲコゲコしてしまうからゲコ太と呼ばれていると言うキャラ設定であるらしいが、そんなことは今はどうでもいい。

とにかく、彼女も初春より遥かに上手い。しかもゲコ太がきれいなピンク色の紫陽花あじさいに囲まれていて、その手の趣味の者が見たら欲しがりそうな出来栄だ。

「どう？、そっちは」

美琴は純粹に初春の出来具合が気になり、尋ねるが、

「え！？、あ、あはははは、」

比べられることが恥ずかしくなり、咄嗟に背に隠してしまった。  
ならば美影さんはどうだ！？、と前方で足を組み、優雅に見せつつもなぜか見苦しくない姿勢で針を動かしている彼のを見るため、机に身を乗り出す。

そこにあつたのは、鮮やかなお花畑。

青、赤、黄、白、緑など、多数の色を巧みに扱い、一輪一輪丁寧に施されていた。

自分と同じく経験がないとはとても思えない。

「お兄様、素晴らしいですわ」

「本当、お上手です」

「初めてとは思えせんわ、」

「そう？、ありがとう」

いつも間にか美影の後ろにはメイドのハーレムが形成されていた。おそらく先ほどのシュガークラフトの常盤台の生徒が広めたのだろう。入口の近くにも自分の学校のエースの兄を見に来たを思われる者がいる。

彼女たちは白井と同じく『お兄様』と呼びながら、美影の出来に関心している。

彼は笑顔で応えると、顔を赤らめる者も見られる。

だが、彼の心情はというと、

(・・・帰りたい)



ステッチ体験を終えてから、次は生け花でも見に行こうと進んでいると、声をかけられた。

「御坂、御坂ー。白井を見なかったかー？」

声の主は先ほど別れた土御門舞夏。

立場上、落ち着いた雰囲気を出しているが、どこか慌てていると見受けられる。

「黒子？ アンタがさっき連れて行っただじゃない」

美琴が言う様に、白井は土御門がビュッフェの手伝いのため、拘<sup>こ</sup>引<sup>いん</sup>したはずだ。

だが、彼女は現在白井を探しているようだ。

「それが厨房にもいない。逃げられたみたいなんだ。悪いが御坂ー、お前が手伝ってくれないか？ まだ全然出来あがっていないんだぞー」

「私？ あー・・・でも、」

美琴は後ろの3人を見る。

料理は自身があるが、今、自分には仕事があるため、そちらに手を貸せない。

それに気づいた土御門は、

「なら料理が得意なやついないかー？」

「料理が、・・・得意なやつ・・・？」

美琴、初春、佐天はとある人物を見る。

今、この場において料理が疑い無く上手な者。手際良くオムライス5つを作り上げた者。

美影は後ろを向く。

通行人しかいない。

右に動く。

3人の視線が付いてくる。

ならば、と左に動く。

やはり付いてくる。

そして一言、

「・・・なんでこつちを見る・・・？」

6つの目が向けられた料理人（違います）、御坂美影はジト目になる。

3人の視線は彼で交わっている。

そこにもう一人が加わり、

「お兄ちゃん手伝ってくれるかー？」

なぜか美影を『お兄ちゃん』と呼び、土御門は目を輝かせる。

もしかしたら彼女は年上の男性なら誰でも『お兄ちゃん』と呼ぶのかもしれない。

土御門元春とは全く違う枠組みにいる美影をそう呼ぶことに歓喜しているように見える。

「お兄ちゃんいうな、あといきなり常盤台の料理が作れるわけないだろ」

一言、某スコンの妹に忠告し、却下の意を4人に伝える。  
ここは常盤台。料理は全て本格的。飛び入り参加が力になれるとは思えない。

「アンタ私が『フランス料理作れ』って言ったらすぐに本格的なやつ作ったじゃない」

美琴が要らぬ情報を言うため、

「何時の話だよ、それ」

美影はこの場から逃れられる言葉を出せなくなってしまった。

確かにそのような事実は存在する。そのときは兄妹の母親もいたが。他にも中華やイタリアンなどの注文に応えたことがあるがそれを言うとならに不都合になる。もう充分追い込まれていることは重々承知だが。

（（御坂さん、そんな無茶ぶりするんだ・・・））

初春と佐天は自分勝手な美琴とそれに完璧に応える美影に啞然としている。

彼女がいう『本格的』というのは本当に『本格的』なのだろう。先日食べたオムライスよりも息を飲む（唾を飲む）ものに違いない。出来れば今度作ってもらいたいと他人事のように思う二人であった。

「じゃあ、お兄ちゃん、仕事はいっぱいあるぞ」

「お兄ちゃん言うな、ていうか引つ張るな、っておい！土御門妹」

助っ人が決まり、土御門は美影を引っ張っていく。  
マイペースすぎる彼女に美影は為す術がなかった。  
『お兄ちゃん』という呼び方も外せないらしい。

「さ、次行きましょ」

（（美影さん、頑張ってください））

美琴は拉致された（させた）兄のことを気にすることなく次の目的地へと進んだ。

連れて行かれたのは厨房。

やはり常盤台のものとあって広い。長点上機の食堂にあるものより遙かに。

中では土御門と同じメイド服を着た繚乱家政女学校の生徒が美琴と同じメイド服を着ている常盤台中学の生徒に指導しながら調理をしているようだ。

「土御門さん、白井さんは？・・・ってそちらの方は？」

白井を連れてくるはずだったのだが、共に来たのは高身長で整った顔立ちをした男。

声をかけた常盤台中学の生徒が首をかしげるのも当然だ。

「こいつは御坂のお兄ちゃんだぞ」

「え！？御坂様のお兄様！？」

「あー・・・、妹がお世話になっています」

この展開に対して何を言えいいのか分からなくなった美影は礼儀正しくありきたりな事を言う。

そして改めてここに来たことを後悔した。

「お兄ちゃんは料理が上手だから白井の代わりに手伝ってくれるんだー」

「本当ですか！？」

「御坂様のお兄様なら、」

「きつとお上手に違いありませんわ」

「宜しく願います！」

美琴の兄、というレッテルだけでこうも尊敬と信頼を向けられるのか、と美影は感服する。

「・・・お手伝いさせていただきます・・・」

ここまで言われては引き返せなくなったため、引き受けることを決断した。

土御門からエプロン（もちろん男性用。なぜここにあるのか分からないが）を受け取り、着用する。

サイズはなぜかピッタリ。繚乱のメイドにはそういう眼のスキルもあるのかもしれない。

その姿を厨房のメイド達に絶賛されながら土御門に頼まれたのはケーキ。

スポンジは焼きあがっていたため、やることはデコレーションだけだ。

「じゃあお兄ちゃんこれ頼むぞー」

「はいはい」

完成品が横にあったため、迷わず美影はスポンジだけのケーキを完成へと近づけていった。

「はーあ、もう帰りたくありません！いつそこに住みたいーい？」

お昼時となり、3人は常盤台女子寮の食堂に来ていた。レストランといっても差し支えないほどの広さだ。

初春はバターロールを取りながら歓喜に震える。

盛夏祭を満喫するにつれ、常盤台に魅せられ、気にいったようだ。

「私、先行くね」

「あ、はい」

美琴はなにやら気がかりになっている事柄があるようで席に着いた。何かは分からないが美影のことではないのは確かだ。

初春は次に何を取るか考えていると佐天がトングをカチカチと動かしながら苦慮していることに気付いた。

「佐天さん？取らないんですか？」

彼女の目の前にあったのは一つのケーキ。中央に『盛夏祭』と描かれ、おそらくシュガークラフト、の花で飾り付けられていた。それを食べるということはその『作品』を壊すことになる。そのため彼女は手が出せないでいるのだ。

「じゃあ、私が、」

初春はそれに構わずナイフを手に取り、一刀両断、どころかきれいに八等分し、自分の皿に盛り付けた。

「こんなきれいなケーキになんてことを！！」

「それ、シュガークラフトを食べた人が言うことじゃないです」

どちらかといえば初春が正言だ。

展示物よりは食堂に並べられたものを口に入れるべきなのは間違いない。

「そんなにたくさん食べられるのぉ？」

佐天がそう言うのは無理もない。

彼女が盛り付けた数は5切れ。ワンホールの半分以上。それだけで満腹になってしまいかもしれない。それ以前に通常なら飽きてしまう。

「甘いものは別腹なんです！」

初春は佐天の問いに大手を振って言いきる。

確かに、『別腹』というものは科学的に証明されている。しかし、それは胃の中に少し空間が開くだけ。大量に食すことが可能になるわけではない。

「ならこつちも食べるか？」

不意に二人に聞き覚えのある声が聞こえた。  
振り返るとメイドを数人引き連れた美影の姿があった。

「美影さん！……ってこれ、もしかして美影さんが作ったんですか？」

佐天が美影の手にあるトレーを覗くとフルーツとウェーブを描くチョコレートでデコレーションされた小さめのケーキが並べられていた。他にもフルーツで色鮮やかに輝くものや、クリームで絵が描かれているものがある。

「うん、そうだよ」

ケーキのスポンジのように軽く返事をされるが正直信じられない、という気持ちが芽生えたが、美影ならなぜか出来ても不思議ではないという気持ちが勝った。

といっても、前者の気持ちが皆無なわけではない。

「まあ、けっこう難しかったけどこの子達が優しく教えてくれたし、手伝ってくれたから」

トレーを指定の位置に置きながら先ほどから大名行列を構成しているメイド達に感謝の言葉をかける。



初春と佐天はやはり驚きを隠せないままで、目を白黒させている。

「いえ、御坂様のお兄様がほとんどなさったのですよ」

「そうですね、教える、と言いましてもほんの少しです」

「本当に飲み込みが早くて、」

彼女達が言うことは謙遜でも過大評価でもなく、全て事実だ。

美影はほとんどの器具の使い方を熟知しているに加え、それらを自在に操り、助言もないに等しく、繚乱家政女学校の生徒が指導を求めるほどの実力だった。

美影に頼み（押し付けて）正解だった、と佐天と初春の二人は謝意と共に感じた。

「じゃあお兄ちゃん、まだまだ仕事はあるぞー」

土御門に催促され、厨房に戻る美影。もう逃げられないと観念している。

彼の後をアイドルの追っかけのようにメイド達が付いていく様はなぜかユーモアが溢れていた。

それをただ見ているだけだった初春と佐天は彼が作ったというケーキを取る。

どこからどう見ても飛び入り少年作、には見えない出来だ。彼にこのような趣味があると言われても疑われない、寧ろそちらとしか考えられないほどの。

（あー、やっと終わった）

あの後、土御門が悪乗りし、ブリュレ、グラタン、タルト、ローストビーフなど、幅広く、本来なら自分の仕事であるものも押し付けられたため、かなりの時間を浪費させられてしまった。

厨房にいた者のなかにはメモしながら美影の料理を観察している者もいた。

すでに初春や佐天の食事は終了していたため、重力探知で探したところ、中庭にあることが判明。

数人の噂を聞いた常盤台の生徒に声を掛けられたり、握手をせがまれつつ、何とか美影も建物から抜け出すことが出来た。

中庭に出たと同時に、頭に赤いリボンをし、『婚合』と書かれた絵馬のような札を胸につけた、巫女服ともとれる衣装に身を包むという奇妙な姿（コスプレ？）の少女とすれ違った。

彼女に白井の呆れ混じりの視線が向けられた処を見ると、おそらく彼女の知り合いだろう。

美影は自分を厨房に立たせる元凶を作り出した少女に近づく。

文句を言いたかったが、奇抜すぎる少女が印象に残りすぎたため、そちらを優先し、

「・・・今の巫女さん、何？」

「彼女が言うには純イギリス、純和風、とのことですよ」

「・・・？」

矛盾しすぎた説明のあまり、美影でさえも理解不能だった。

常盤台には色々な変人がいるのか？、と思っただがもちろんその台詞を喉を通すことは押さえる。

目の前にいかにもお嬢様、といえる雰囲気醸し出している二人がいた。

「・・・白井さん、そちらの殿方は・・・？」

婚活と共にいた二人の少女、わんないきぬほ湾内絹保、あわつきまめや泡浮万彬は、クラスメイ  
トである白井が親しく話す見知らぬ男性に首を傾げる。

「御坂美琴の兄の御坂美影です。よろしく」

白井が紹介しようとしたところ、美影自身から切り出した。  
もう寮内で広まってしまっていることでもあるため、隠す必要も  
ない。ならば自分から言い出すほうが社交的だろうと感じ、丁寧に  
名乗った。

もちろん、それは彼女達にとっては核並みの爆弾発言なため、

「え！？、み、御坂様のお兄様ですか！？」

「よ、よろしく願いします！」

急に二人はぎこちなくなってしまう。

男性との接触を遮断されてしまう学舎の園で暮らす彼女達は目の  
前の『男』にもわずかだが恐怖というものを抱いてしまっていたが、  
自分達が尊敬する人の兄、と分かり、それは一気に吹き飛んだ。

そして美影を頭の前から足の先まで見る。

顔には若干彼女と似ているところがあるかもしれない。

どこをとつても好青年ととれる容姿だ。以前絡まれたガラの悪い  
男達とはまったく違う。

何度もされた反応のため、美影は微笑むという行為が一番だと学  
んだ。

白井も別の意味で微笑む。

白井により、美影関連の話が進んだ時（美影もレベル5というこ  
とがばれたときはやはり驚かれた）、湾内から一つの疑問が投げか

けられた。

「ところで、御坂様はどちらに？」

そっぴえばそっぴだな、と美影も気づく。

食堂では初春たちと一緒にいたが、この場にはいない。

美影は気づいたが、彼女たちのように疑点はない。

「そっぴだった、さっきお手洗いにいくつて言つたつきり、」

佐天が思い出したように言う。

だが、事情が分かっている美影はそれが嘘だとすぐに分かった。

「あら、今日のステージ楽しみにしていますとお伝えしたかったのに」

顔に手をあて、困っている仕草をする湾内。そこにはどこか上品さが根差している。

彼女が言う様に、美琴はステージで余興を行うのだ。

美影は先ほど土御門に詳細を聞いたのだ。

「え！？サプライズですか！？」

初耳であるため、初春は再び高揚する。

これ、何度目だろう、と美影は心の中で失笑する。

「はっ！！そうですわ、こんなことをしている場合じゃありませんの！良い席を確保してお姉様のステージをカメラに収めねば！」

白井も本来の仕事に気づくがおそらく『記録係』というのも自分

が美琴の写真を好き放題撮り、自分のコレクションに収めるためだろう。

美琴関連になると白井は公私混同の『私』が大部分を占めてしまうことは明白だ。

より一層彼女の話題で盛り上がる少女たち。

その集団を話題である美琴は寮の中からこっそり覗いていた。

(・・・、)

だが、さらに美影はその美琴の視線に気づいていた。

彼は美琴を誰よりも知っている。そのためこの状況での彼女の心情も見透かしている。

自信家であるが不安と緊張に耐えられなくなることがある。

今回がそれに当てはまるだろう。今、この場にいらないことがその証拠。目の前で期待されるとさらにそれらの感情が高まる。

頭よりも先に手が出るが、感情が行動に影響しないわけではもちろんない。

(・・・、)

微笑みながら、美影は白井たちとは逆方向に歩きだした。

「やばー、何か胸がときどきしてきた、」

白を基調としたドレスに着替えた美琴はステージ裏にいる。

先ほどまでチャリティーオークションを開催していた庭は美琴の話題で持ちきりだ。

会場はほぼ満席。

中央には白井など見慣れた顔ぶれがある。

「あー、もう！すっかりしろお！」

顔を両手で叩き、気持ちを入れ替えようとする。

今のままではいけない。

何か為差えるかもしれない気がしてならない。

そこに思いがけない声かけられた。

「へえ、似合ってるじゃん、美琴」

美影だ。

ステージの裏なんて迷ってこれる場所ではない。

というか、彼が迷うなんてことが考えられない。

つまり、

「なによあんた！？私を茶化しに来たわけ！？」

「まあ、いいだろ。妹の舞台なんだから」

その気持ちは分からなくはない。もし、立場が逆であつたなら自分も同じことをしているかもしれない。

やはり美影も自分に期待しているのだ、と思い、振り払おうとし

た気持ち離れてくれなくなる。

美影はステージからこっそり覗く。

今か今かと待ち望む人で溢れている。

「美琴、」

「なによ？」

途端に美影は真剣な顔つきになる。

大勢の人が待っているのだ。戒められるのか、と思う。

が、今はそれはされたくない。逆効果で益々不安になってしまふ。そして、美影はゆっくりと口を開き、

「その下にも短パン履いているのか？」

空間が凍ったような感覚がした後、

「こんな時に何いってんだコラア！！！」

シリアスな空気が流れた中で彼はこの上なくどうでもいい、コミカルな事を言い出した。

何を言われるのかのか真剣に考えていた自分が馬鹿らしく思えるほどに。

前髪に電流をバチバチ鳴らしながら美影に詰め寄る。  
今にも殴りかからん、という時、

「それだけ元気があれば大丈夫だな」

美影は美琴の頭に手をそつと置き、安心した表情で語りかける。  
食って掛かるうとした美琴だが、とあることに気づいた。

震えが、止まった。

押さえようと苦労していたことが、一瞬に消失した。

美影は手を離し、今回美琴が使うバイオリンを手に取る。

「もう少しお前は盛夏祭を楽しめ。もう少し笑顔になれ。

お前なら間違いなく出来るから自信を持てよ」

優しい口調でなだめながらバイオリンを主役に渡す。



美影は元々心配なんてしていない。必ず成功すると初めから分かっているような顔つきだ。

「・・・何を根拠に・・・」

愚痴を言いながら美琴は受け取る。

気づけば悩んでいた自分は地平線の彼方まで飛んでいってしまった。  
ていた。

「誰がお前にそれ、教えたと思っているんだよ」

それは紛れもなく目の前にいる人物だ。

幼い頃、彼が作り出す美しい音色に魅かれ、興味を持ち、バイオリンを始めたのだ。

彼より上手に弾けるとは思えない。

彼ほど上手に弾けるとは思えない。

だが、彼が弾けない音は奏でられる。

自分を信じ、自分を出し切りさえすればいい。

もう彼女に迷いはない。

「早く行けよ、皆待っているぞ」

「アンタは行かないの？」

「あそこじゃなくても十分聞こえるよ」

「・・・そう」

そして美影は立ち去り、美琴はステージへと歩き出した。  
二人とも同じ笑みを浮かべながら、



## 盛夏祭（後書き）

第2回アンケートは終了です。

結果は本編で明かされます。

それ以外のものも違うところで使うつもりです。

評価、感想はこれからもお願いします

## 御坂に恋する者

幽玄な風景が広がっていた。

西の空は紅に染まり、東の空では光り輝く星が顔を出してくる。

二人の男女はどちらの美観にも目もくれず、互いの顔しか視界に  
いれない。

「美影さん……」

少女の口から名が漏れる。

彼女の顔は夕焼けに彩られたかのように染まっている。

「操祈……」

一方の少年も、同様に少女の名前を口にしながら近付いた。

彼もまた、頬を染めている。

お互いに手を取り合う。

二人の心情は晴れやかで、艶やか。

少年は優しく、少女を包み込むようにそっと抱きしめる。

ふと、少女から笑みが零れる。

世界で一番、幸せだと言わんばかりの頬笑。

どれくらい経っただろうか。

この時が永遠であることをただ、願う。

二人は同時に顔を見合わせ、目をつぶり、顔を近づける。  
鼓動が鳴り止まない。  
体中が熱くなる。

そしてその唇がまさに今、重なり合おうという瞬間

《ピピピピピピピピピ》

無機質な甲高い機械音が部屋中に響いた。  
幻想をにべもなくぶち壊す、悪魔の囁きのように聞こえる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう、」

一息入れ、

「あー！！、もう！！なんで！？途中なのに！！いいところだったのに！！！！」

食蜂操祈はベッドの上で渾身の叫びを上げながら拳をマットレスに何度も打ち付ける。

寝起きだと言つのに真昼間の運動会並みの活力だ。

ガン！、と壊れてしまうのではないかと思うぐらいの力で騒音を止める。この場合は壊れてしまったほうが清々するだろう。

「女王！？どうかなさいましたか！？」

「え！？、い、いや、なんでもないわ」

ドア越しに廊下から自身の派閥の者の倉皇そうこうとした声が聞こえてくる。朝から理解不能な不穏な叫びが上がっているのだ、無理もない。流石に夢に対していきり立っているなんてバツが悪い。なんとか誤魔化し、呼吸を整え、気持ちを入れ替える。

時間は午前7時。

常盤台中学は夏休みと言えど生活のリズムは崩さない。

30分後には食堂で朝食を摂る。

それまでに『見苦しくない程度』に身だしなみと整えないといけない。

鏡を見る。

全身がすっぽり収まり、近距離でも全身を見ることが出来るほどの大きさだ。

彼女は自分の容姿には自信がある。長身瘦躯であり、中学生と思えないほどのプロポーション。同級生にも何度も羨ましがられている。

そしておまけに超能力者<sup>レベル5</sup>。

それを知らないとしても、街ですれ違う者に度々振り向かれる。数え切れないほど声を掛けられたことがある。

だが、満足させてくれる者は一人もいなかった。何かが足りない。

完璧と言っても過言ではない自分にこれ以上何かを与えてくれるような人は現れなかった。

『彼』と出会ったまでは

性が違えど、彼は自分より遥かに美しい。比べられれば自分が見劣りするくらいに。

一瞬、ほんの一瞬見ただけで胸が熱くなった。

それが『恋』だと思い知らされた。

一目惚れしてから必死に彼について調べた。少しでも近づきたかった。

蓋を開けてみれば自分と同じ超能力者<sup>レベル5</sup>。

それを知ったときはさらに心が震えた。

歓喜に満ちた。

ついに見つけた

己の全てを捧げてでも構わない。むしろそれを望んでいる。

人生最高のパートナー。

彼に振り向いて欲しい。彼の全てを知りたい。

決して能力を使うことなく彼に認めて貰いたい。自分を彼のモノにしたい。

彼を自分のモノにしたい

だが彼は言った。

『記憶を見られたくない』と。

彼の過去に何があるのか。何が起こったのか。決して他人に知られたくない秘密。

それゆえ彼は自分を『恐れている』

自分の『ルール』を伝えたが、自分にとって言葉とは音。単なる

振動。

意味や感情は能力で自由自在。

だからこそ彼は3度も『逃げた』。

しかし彼に限って疚しいことがあるはずがない。

調べるだけ調べた。そこには彼の“非”になるものは一つもなかった。全てが彼の“是”となっていた。

そして彼が情報操作に長けていることも知った。

あなたはなにを隠しているの？

烈々として問いたくなった。

許されない行為と分かっている。

何としても知りたい。

だが、分からない。

知るには彼の頭を視ることしか方法はない。

だが、それは出来ない。己の意に反する。

彼に本当の意味で認めてもらえなくなる。

（盛夏祭、行けばよかったなあ、）

彼はここではない、常盤台女子寮で行われたという催しに姿を現したらしい。

自分に行かなかった。

彼の妹、御坂美琴が寮生代表で何かやると聞き、面白くない、と無頓着になってしまったからだ。

少し考えれば分かる。

妹の舞台、それを見に来ない兄はいない。楽しみにするものだ。

正確には行かなかった、というわけではない。



彼の姿を見た、という自身の派閥の者の連絡により、足を運んだ。でもすでに遅く、彼の姿はなかった。残っていたのは彼の話題で持ちきりの生徒達。

たった一日、いや、たった半日で彼は常盤台の人気者。

何人もファンになっていた。彼に恋した者もいるに違いない。

それを恐れて、彼の存在に関することは自身の派閥の一部に押さえていた。誰にも自分と同じになって欲しくなかった。

彼の学園でも同じだろう。彼を誰も気にしない、何てことはありえない。何度も告白を受けているに違いない。何度も迫られたに違いない。

聞いたところによると、御坂美琴の親しい後輩の代わりに厨房に立つたらしい。

彼が作ったというケーキが残っていたので一つ食べた。

とても美味しく、優しい味がした。

彼の性質を表しているかのような感じがした。一生忘れられない味だ。

ますます彼が好きになった。想いが強まった。

だが、彼に近づけないままだ

まだ距離は縮まらない

「・・・」

早起きした。目覚まし時計もなく。

御坂美影は凄い夢を見た。

否、物つ凄い夢を見た。ラブストーリーの一部のようなものを空想の世界で体験した。

「・・・」

別に彼女が嫌いなわけではない。

もしかしたらいつか彼女が好きになり、このような体験をするかもしれない。

飽く迄、『かもしれない』だが。

彼女の能力を恐れてはいる。使われることは何としても避けたい。出来れば自分に関係する者にも、だ。

彼女は自分に能力は使わないと言った。それが事実とも何となく分かった。

だが、『逃げてしまう』。

先日の盛夏祭でももしかしたら会つかもしれない、と予期して常に警戒はしていた。

姿を現さなかったのはある意味運がよかったと呼べるのかもしれない。

万が一、あの場で共にいたら妙な噂が流れていたのかもしれない。飽く迄、『かもしれない』、だ。

ベッドの脇に置いてあるデジタル時計を見る。

午前7時。

平日並みの起床時間だ。彼にとっては“希少”時間かもしれない。明日から新学期到来のため、昼まで寝る、という美影にとって心嬉しい行動が出来るのは今日で最後だ。

二度寝もしようと思えば出来る。だが、その続きを実行することになるかもしれないという心理的恐慌状態になったため、ベッドから素直(?)に出た。

8時00分

常盤台中学女子寮前

御坂美琴はコンビニへと足を運ばせていた。

本日は月曜日。

毎週月曜日と水曜日はコンビニで立ち読みする日としている。

お嬢様学校に在籍する者としてその習慣は如何なものか、と思われるが常盤台は飽く迄『中学校』。娯楽を好む学生だってもちろんいる。尤も、彼女ほどは滅多にいない、というかない。

石造り三階建ての洋館じみた建物である女子寮の前には24時間営業のコンビニがある。

ギャップがありすぎてそのコンビニから出てくるものは劣等感を抱いてしまう者もいるかもしれない。

彼女が歩道へ足を踏み入れたとき、横から男に声をかけられた。

「あつ、御坂さんじゃないですか。これからどちらへ？自分もよろしければご一緒しても構いませんか？」

美琴より1つ年上の爽やかな男が立っていた。

彼の名は海原<sup>うなばら</sup>光貴<sup>みつぎ</sup>。

常盤台中学の理事長の孫だったりする。美琴は美影とは違う意味で苦手とする人物だ。

彼は自分の立場が絶大な影響力を持っていると分かっているがそれを表に出さない『大人』な性格をしている。

美琴はそのような『大人』な対応をされることが肌に合わない。

どこかの2世タレントのような親の権力を使われるほうが相手を嫌悪することは間違いない。

だが、反<sup>かえ</sup>ってお人好し抜群な処置を施されると某ツンツン頭の少年のように電撃で追い払うわけにはいかない。

（おつかしいわね！。最近はずかほとんど毎日こうして・・・）

ほんの一週間前までは街で会ったら挨拶程度で済ましていたのがここ数日は違っていた。

こう、積極的になってきたというか、

「御坂さん？」

不意に下から覗き込むように顔を近づけられながら声を掛けられ、美琴は仰け反る。

彼の表情は本気で心配しているようだ。

「あの、考え事をしているようですがどこかへ出かけるのでしょうか？」

「え、ええ」

質問の答えはイエスだ。

だが、内容が問題だ。

不快ながら変な偶像をもたれている自分がコンビニで立ち読みをしている処なんて見られたくない。しかも自分は容赦なく笑い出してしまふこともある。白井や美影なら構わない（どうでもいい）のだが。

美琴は考える。

どうやってこの男から離れようか。

出かけると宣言してしまったため寮に戻ることは出来ない。ならば、

「そ、そう！これからデパートの下着売り場に行こうとしていたの。男の人は行きにくいところでしょう？」

「ご一緒しますよ」

完璧な言い訳と思っていたのだが、爽やかに笑顔で即答された。もし、目の前の人物が暑苦しいデブなら変態確定だが運悪く今回は違う。

こうなったら誰か適当に捕まえて約束があつたということにしよう、と思いついたが今日は8月31日。

学生が8割を占める学園都市にとって、ほとんどの人が残った宿題をやる日だ。

ああ〜！と美琴は心の中で頭を抱えたその瞬間、神からの贈り物のように通りの角から二人の少年が現れた。

「いや、カゲやんが贈ってくれた家電のおかげで舞夏の料理がまた更に上手くなったぜい」

この不思議口調が土御門元春の台詞。

「そんなに料理上手いのか？お前の妹」

シスコン気味の土御門に美影は毎回若干威圧される。

「ふふふ、カゲヤン、舞夏を甘く見てもらっては困るぜよ。和洋中何でもいけるにゃ〜。出来ればお前にも食べさせてやりたいぐらいだぜい」

「まあ、実は盛夏祭で食べたんだけどな」

「ほほう、どうだったかにゃ〜？うちの舞夏の腕前は」

「料理以前に俺のこと『お兄ちゃん』って呼ばれたのは勘弁してほしかったが」

すると土御門の表情が固まった。

「そ、そんなわけないぜよ！うちの妹が俺以外を『お兄ちゃん』と呼ぶなんて・・・」

「やめるようにいったんだが別れるまで言われたのは事実だ。一応言っておくが俺には『妹萌え』なんてさっぱり分らん」

「カゲヤン、実の妹がいながらそれはないぜよ」

「俺にとっては義妹に手を出すお前のほうが理解不能だっつーの」

あいつ使える、と美琴は確信する。

隣になんか金髪でサングラスの怪しい男がいるが大した問題ではない。

美影は察しがいいため、「ごめ〜ん、待ったあ？」の一言だけで当意即妙の返しをしてくれるに違いない。

兄ということもあり、不自然でもない。

「あつ、ちよつと御坂さんどちらへ！？」

目をつぶり、美琴は走り出した。

距離は約20メートル。

そして今出来る最高の笑顔を強引に作り、

「ごめん、待ったあ？」

計画を実行すべく、背後から声をかける。

「で、土御門、何で今日俺を呼び出したんだ？偶然朝から起きていたからいいものの」

「そうだったにやー、話というのは」

無視だ。

いや、聞こえていないのかもしれない。

どちらにせよ笑顔で固まっている美琴の姿は滑稽に見えるに違いない。

背後で海原も純粹に困っている。

「待ったー？って言うてんでしょうが無視すんなこらー！！」

「え？」

美影の背後、腰の辺りからドゴオ、と聞こえるくらい壮大にタツクルをする。

咄嗟に大声に反応して美影は振り向いたため、美琴は美影の腹と胸の間ぐらいにダイブしたようにも見える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ？美琴」

なぜか冷静に眉間に若干皺をよせつつ冷たい目で説明を求める。

「（・・・お願いだから話を合わせて！）」

は？と目を点にしながら辺りを見る。横では土御門が「むむ！？  
ついにカゲヤンも仲間入りかにゃー？」なんて寝言を発している。  
約20メートル先には見覚えのある爽やかさらさらヘアの少年の  
姿。

大体把握したところでバン！と常盤台中学女子寮のたくさんある  
窓が一気に開けられた。

「あ！あれは御坂様のお兄様よ！」

「このようなところでまたお目にかかれるなんて」

「御兄妹で仲が宜しいですね！」

先日美影が見たような見ていないような顔ぶれがある。中には「  
お兄様！羨ましい！！」なんて悶絶しているツインテールもいる。  
すると一人、寮監と思われる大人が出てきて、

「ほほう、あれが今寮内で噂の御坂の兄か。なかなかの美青年じゃ  
ないか」

勝手に品定めをされた。どうでもいいことだが。

・・・状況をお浚いしよう。

土御門と話していた。そして本題に入ろうとしたその瞬間に美琴  
に抱きつかれた。

そう、“抱きつかれた”のだ。美影が体勢を変えたから正面から。  
どこから誰がどう見ても『仲良し兄妹』だ。これもどうでもいいこ  
とだが。



腹の上にいる妹を見る。案の定、完熟リンゴのように真っ赤になり、

「あ、あはははは、うわーん!!」

ヤケクソ気味に笑い出し、美影の腕を引っ張りながら物凄いスピードで走り出した。

美影は抵抗することもなく引きずられていった。

残されたのは金髪サングラスの男と超絶清潔感あふれる男。どこからどう見ても釣り合わないが、

「どうしてお前がここにいるのかにゃー？海原」

かくして、学園都市最強の兄妹は小1時間街を走る羽目になった。

「なあ、美琴」

走るのを止め、一休みといったところで美影が声をかける。言いたいことはたくさんある。

何から言うべきか、悩んでいる中、最初に出てきたのが、

「……なんて言って欲しい？」

相手に委ねる質問だった。

「うるさい！黙って！黙って！とにかく気持ちの整理をさせてー！  
」

頭を抱えながら叫ぶ。

それほど大声を出してはいないんだが、という台詞は止めた。  
辺りを見渡す。

どこかの路地裏だろうか、高いビルに囲まれ自分達は影に入っている。

美琴は大きく深呼吸して、ようやく落ち着いたようだ。

「ふー、ごめん。ちょっと取り乱していたみたい」

（ちょっとじゃねえよ）

「いろいろと話したいからどこか座れる場所に行きましょう」

「……はあ、」

わざとらしくため息をする。

こうなった妹は止められないと知っている美影はまたも抵抗することなく付いていった。

午前10時15分

美琴と美影はベンチに座っている。

二人の手にはホットドッグ。美琴が食べることを提案したのだが買ったのは美影だ。

一個2000円。英世さん二人分の価値があるらしい細長いパンに切れ目を入れ、温めたソーセージをはさんだものも美琴は遠慮なく兄に買わせた。

いつからこんなにブルジョワになったんだ？と妹の金銭感覚について問いたくなったが美影も人のことは言えないほどの金持ち。

何も言わず一口かじる。

普通にうまい。

そして一言、

「スニーカー？」

「そうなのよ。最近ほとんど毎日付きまとわれて。うちの理事長の孫っていうから無下にも扱えないでしょ？アンター一応私の兄なんだから何とかしなさいよ」

「何とか、ねえ・・・」

その心遣いを少しは上条に分けてやれ、と思ったが無駄だろう。それ以前に気になることが彼にはあった。

「・・・俺のこと、学校の奴らに何か言っていないだろうな」

先ほど見ただけで殆どの常盤台中学女子寮のほとんどが自分のことを知っていた。寮監らしき女性も無視できない発言（前半に）をしていた。

生徒には大きく手を振られた気もする。

返事をする前に目の前の者に拉致されたが。

「アンタ、あれから結構人気あがってんのよ？アンタのファンクラブがうちの学校にも出来ているみたいだし」

「・・・、」

うちにもという言葉はあえて逃避する。というか逃避したい。

「お前、本当に何もしていないだろうな・・・？」

あまりの進展ぶりに再度おそろおそろ尋ねる。

美琴が何か余分に話していたらそれは美影にとって地獄だ。

「何もしないわよ。アンタのことなんてどうでもいいんだから」

美影のことについて知らないことが多すぎる、ということについては触れないで置く。

彼は無意味なこととはしない。いろいろと隠すにも何かわけがあるのだろうか。

「どうでもいいって・・・」大きくなったらおにいちゃんのおよめさんになるー』って言ってた奴の台詞とは思えないな」

その言葉に美琴は噴出した。異物が出るのをなんとか押さえよう

としたが少々・・・。

服に飛んでいないか確認した後、

「あ、アンタなんてこと思い出させてくれんのよー!」

ずっと昔、確かにそういうことを言った記憶が美琴にはあった。

あの頃は少々、いやかなりブロンズ気味だった。

学園都市に来てからはなくなったが、

顔を真っ赤にする美琴に対し、美影はというと、

(・・・冗談で言ってみたんだが・・・)

彼は実はそのような事実を明確に覚えていない。

ただ、適当にお兄ちゃん大好きな妹が言いそうな台詞を言ってみただけだったのだ。

「そういえば、」

顔の色を何とか戻した美琴が何か思い出したようにホットドックから口を離す。

「アンタ、食蜂操祈と知り合いらしいわね」

今度は美影が思わず噴出しそうになったが何とかポーカーフェイスを保つ。

その名は本日、限りなく直接的な間接的に早起きする原因となった者だ。

「まあ、一応。美琴も知り合いか？レベル5同士で」

「知り合いだけど、そんな穏やかな仲じゃないわ」

「なんか言われたのか？」

「・・・『私のことはお姉さんって呼びなさい』って言われたけど、  
アンタあいつとそういう関係なの？」

予想通り過ぎる回答に美影は逆に困惑する。  
眉をひそめ、

「俺はアイツみたいなのがタイプだと思うのか？」

美影は質問で返した。

美琴は自分の兄の理想の女性像が何なのかまったく見当も付かないのだが、

「そうは思わないけど・・・」

「まあ、お前よりはスタイルいいけどな」

「なっ、なってこと言ってるのよ！妹に」

美影の顔に下心は微塵も感じられないが、それは実は気にしている。

本当に彼女が中学生なのか聞きたいくらいだ。

「そ、そんなことより海原光貴のほうはどうなのよ？なにするのよ？」

強引に話題を戻す。美影相手の雑談はいろいろな意味で不利な気

がする。

そちらの方が今は重要だ。

「そーだなあ・・・、とりあえず鼻についているマスタードは拭いとけよ」

え！？と顔を真っ赤にし、食べかけのホットドッグを紙ナプキンで包みベンチに置き、背を向けて鼻についている汚れをハンカチで拭きとろうとするが、

「ひ！、~~~~ツ！！」

一部が鼻の内部の粘膜に触れたのか足をバタバタと動かしている。

「・・・はい、チーンして」

「鼻水じゃないっていうか子供扱いすんな！！」

顔をひきつらせながら無言でポケットから取り出し、一枚抜き取り揶揄するように近づける。

美琴は涙目になりながら楯突きつつも余裕がないため鼻を押さえながら一瞬で分捕り、急いで拭きとる。

ゼーゼー言いながら比較的落ち着き、振り向いた。

先ほどの全力疾走よりも疲れた顔をしている。

「・・・大丈夫か？いろんな意味で」

「だ、大丈夫よ」

絞り出すように言う。ホットドッグの残りを食べきり、立ち上が

り、

「のど乾いたからジュースかってくるわ」

「お小遣いあげようか？」

「だから子供扱いすんな！」

からかつてくる兄に精一杯の反駁はんぱくをし、周囲を見渡す。近くに自動販売機は無いようで、少し離れたコンビニに行くしかない。

（はは、まだ子供だなあ）

微笑ましい表情で兄は妹を見送る。

そして改めて周囲を見渡した。夏休み最終日ということもあり、宿題と格闘している学生がほとんどだろう。食事時でもないこの時間にいとすれば宿題を計画的に終えた者、あっという間に終わった者、諦めた者、もしくは美琴のように元々宿題がない者ぐらいだろう。

と、適当に思考を巡らせていると目の前を散歩用の手綱をつけた犬が横切ってきた。飼い主が手を離してしまったのだろう。

美影が数秒間、何気ない顔をして眺めていると見覚えのある爽やかな顔をした少年が追いかけ、あっという間に追いつき、手綱を掴んだ。それよりだいぶ遅くに息切れながら走ってきた、おそらく飼い主であろう小学生ぐらいの少年に返し、海原は一言一言告げている。

（・・・・・・・・・・）

やはり何の感慨にも耽ていない顔で見ていると海原と目があつた。



彼も見覚えがあるようで、少し驚いたような顔をし、苦笑したのち、美影の前まで歩いてきた。

「はじめまして、あなたは御坂のお兄さん、でよろしいですよね？」

丁寧な口調で話しかけてくる。

盛夏祭により常盤台で有名人になったため、その理事長の孫である海原が知っていても不思議ではないが・・

「御坂美影だ。そっちは海原光貴さんでいいですね？」

「御坂さんに聞いたのですか？」

驚いた様子もなく返してきた。

「で、俺に何か用か？」

これといって表情を変えず、名乗ったのち、尋ねる。

「ええ、一度お会いしたかったですよ。御坂さんのお兄さん、に」

「好きなのか？あいつの事」

「ええ、ですから一度、貴方にお話をと」

ふうん、と美影は海原の顔を見る。とても真っ直ぐに言われた。妹の恋愛関係については口を出さない。誰であろうと美琴が認めたならそれでいい。そもそもそれを決める権利がそもそも自分にあるのか、と問われればノーと答えるが。

今までここまで真正面から来る経験がなかった（兄の存在自体を

隠していたからだ) ため、ポーカーフェイスに変わりはないがこの状況は少し困ったりする。

「ですから、御坂さんはもう少し人に対して『好き』とか『嫌い』とか言うべきだと思うんですよ」

「まあ、あいつは昔から自分を打ち明けられないところがあるからな。・・・一つ聞いていいか？」

美琴に対する意見に同感し、これまでの彼の主張から気になったことを言いだそうとする。

「はい、なんなりと」

首をかしげつつも重要なものと感じ取り、精神的に身を構える。

「万が一、美琴が好きな男と目の前を歩いていたら、・・・お前どうする？ その関係を壊してでも自分に振り向いて貰おうとするか？」

「いえ、そのようなことはしませんよ」

海原は一秒と開けず答える。

「彼女の幸せを踏み躪るようなことは決してしません。彼女が幸せにならなければ、何の意味もないですから」

「・・・そうか」

対する美影は2秒ほど開けた。

今のは紛れもなく、『兄』としての質問だ。肯定されていたら躊躇うことなく立ち去っていただろう。

次の言葉を考えていると、ふと、足音が聞こえた。

両手に一つずつ、二つペットボトルのジュースを持っている美琴が立っていた。

「アンタ、」

打開策を考えていた中で、美影が海原と話していたことに文句を言おうとしたが、

「美琴、俺コイツとしばらく話しているから、お前どこかに行つてこい」

何か言う前に美影に遮られ、口籠る。

本来の目的について何か思いついたのか、ジュースの一つを美影の横に置き、素直に立ち去った。

「よかったですか？」

形上、二人は用事があるかのように演技していたので、海原は礼儀として尋ねる。

別にいい、と切り捨て、

「もうひとつ聞いていいか？」

「ええ、どうぞ」

手を前に差し出す動作を加え、許可する。

「お前は誰だ？」

傍から見れば明らかに矛盾している質問。  
だが、聞き手である海原、と呼ばれていた者は俯き、先ほどまでとは違う黒い笑みを浮かべる。

「フッフ、気づかれましたか・・・」

自身が偽物だという事を認め、正体を明かす。

「改めて。私は本名はエツアリと申します。この顔は偽物です。」

「その顔、メタモルフォーゼ肉体変化とは思えないが、」

肉体変化はその名の通り肉体そのものを變形させるのだが、彼の顔を重力探知で視ると、本来の顔面と思われるモノの上にコーティングするように一枚の皮が覆いかぶさっているようだった。

「ええ、私は魔術師です。とある人物の捜査を私の組織から受けたので私は今学園都市にいます」

口調が変わっていないが、声の質は明らかに変わっていた。暗く、冷たく、美影が『裏』にいるときに会った色だ。

「上条当麻か？」

「ええ、あともう一人、あなたを、です」

「俺を？なんで」

美影は警戒している仕草も見せず、この状況をどこか楽しんでいような表情を浮かべる。

「あなたは、学園都市の超能力者<sup>レベル5</sup>で唯一、他の超能力者<sup>レベル5</sup>と面識がある。しかもどれも悪いつながりではない。学園都市の戦力を自由に使えると言ってもいいでしょう。そして魔術とも少なからず関わっている。これを無視する理由はありませんよ」

当たり前のように“海原”は言う。

先ほど、『魔術』という科学の街では都市伝説でしかない単語をすんなり受け入れたのがその証拠。

そしてその為に二人と関わっている美琴に近づいてきた。

「オーバーな、」

肩の力を極端に抜き、あざけ笑う仕草をする。

「俺が他のレベル5を暴れさせるとでも？魔術に首突っ込む事を避けている俺に？」

「そうですが、上の命令です」

彼はその言葉につきるようで、逆らえないようだ。  
だが、美影はなお、無防備でいる。

「で、俺をどうする気だ？殺すか？それとも俺の顔でも使うか？」

「・・・いえ、あなたの相手をするのはやめておきます」

「なんで？」

打って変わり、海原は弱音ともとれる発言をする。  
そしてわずかに表情を美琴がいた時のものに戻し、

「あなたには絶対に敵わない、と言われてしまいました」

「誰に？」

「一方通行さんと土御門さんに、です」

「・・・最近『グループ』に入ってたって奴、お前だったか」

疑問文が多かった美影が納得した様子になる。  
その情報は入っていたが個人名までは調べていなかったのだ。お

そらく土御門の話、という者も彼に関係する事だったのだろう。

「ええ、実は先ほど私が言った任務はすでに終わっているのです。上条当麻とも直接会ってはいません。それ以前にあなたの調査、なんて仕事はありませんでした。そして彼の調査後、私は『グループ』の一員となりました」

海原の発言にはおかしなことが多かった。  
科学に関して詳しくすぎる。

美影がレベル5全員と関わっていることなど、普通は知り得ない。

「じゃあなんで俺に会いに来たんだ？」

彼が言うことが真実ならその必要性は感じられない。  
考えられるとしたら、

「私は、本当にあなたの妹さんのことが好きになったのですよ」

そちらが本来の目的のようだ。

「ああ、そお。悪いが美琴は好きなやつがいるから、手遅れだ。さつき言ったことが本当、ならな」

彼も美影が言う男が誰なのかは分かっているに違いない。  
それでもなお、それを口にするということはそれだけ本気、ということだ。

「それでも私が彼女のことを思っていることには変わりはありません」

「ストーカーはやめろよ。美琴も困っているし。あまり表の犯罪行為をしていると、お前が敵わない相手が怒ることになるから」

「・・・そうですね、彼女とのコミュニケーションもやめます」

少し残念そうに海原は言う。

「それでは、最後に一つ、あなたに聞いてもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

逆からの質問を美影は目の前の人物と皮肉を込めるように同じ言葉で引き受ける。

「いつから私が海原光貴でないと分かっていたのですか？」

彼の言動から察するに美琴がジューズを持ってくる前からなのは確かだ。

「・・・はじめからだ」

美影は曖昧な返事をする。

「私がここに来てからですか？」

海原はそう捉えるが、美影はいいや、と否定し、

「お前がその顔を手に入れてから、本物の海原はどうした？」

彼の変装の原理は皮膚を剥いでそれを着る、というもの。



瓜二つのものがあれば当然不自然。始末するのが定石。

だが、殺そうとしたが、本物の海原の能力である念動力で分子レベルで体をガチガチに固めてしまったため刺し殺すこともできず、手足を縛って監禁しておいたのだ。

そのあと、彼がどうなったかは偽物は知らない。

「俺が助けた」

「！・・・そういうことでしたか」

「この街のトップに頼まれてな、見つけて運んで治療してもらった。その手の精神系メンタルに頼んだから記憶はない。気づいたら腕に包帯巻いていたって感じだ」

初めから、というのは常盤台女子寮前に顔を見てからということになる。

「なら、私はずっとあなたの手の平の上にいた、ということになりますね」

海原は悔しがった様子ではない。

むしろ、奇麗に処理してくれたことに感謝しているのかもしれない。

「ま、そういうことだ。・・・これいるか？ちょっとぬるくなっているが」

手にしているのは先ほど美琴が買ってきたモノ。

コーラだ。

美影がそれを飲めないことは知っているにきまっている。明らか

な嫌がらせだ。

「ええ、ありがたく受け取っておきます。それと、一つ貴方にお願  
いがあるのですが」

まぶくなったコーラを受け取り、海原は今までにない真剣な顔を  
する。

「何？」

立ち上がった美影は興味が無いように聞く。

「お兄さん、と呼んでもよろしいですか？」

「失せろ」

御坂に恋する者（後書き）

お気に入り登録、感想、評価お願いします

## 夏休み最後の仕事

午後6時00分

夕食時だ。

夏休み最終日となるこの日でも生物に不可欠な食事をとるために学生がちらほら見えてくる。

腹が減っては戦は出来ぬ、とは正にこの事。

学生にとって最大の敵とも呼べる『勉強』との戦争で勝利するためには栄養分、特に糖分が必要である。

中には日が出ている内に勝利した者が自分への褒美として外食を選択する者のいれば、宿題関係のモノで溢れた部屋の中から出て気持ちの入れ替えをするという口実で好物に有り付こうとする者もあるだろう。

もしくは、食事を用意する時間さえ惜しいという理由も存在する。

「とうま、とうま。一体何の感想文を書くの？」

インデックスは日替わりランチAを頼んだのだがメニュー表を凝視しながら、原稿用紙に向かう上条当麻に尋ねる。彼女の頭の上には彼らが飼っている猫、スフィックスがいる。

「今年のテーマは『桃太郎』」

「・・・・・・・・、うあー」

幼稚園児で知るとような童話が対象であつたことに思わず間抜けな声をあげる。

「当麻、それって本文が感想文より短くないか？」

インデックスの長方形のテーブルを挟んで向かい、上条の右斜め前に座りながら先ほど日替わりランチBを頼んで上条の宿題を手伝っている美影が率直な疑問を投げる。

なぜ、このような状況になったかと言うと、美影が食材調達に出かけたら偶々ファミレスに入ろうとしていた上条とインデックスに出くわし、宿題に追われていた上条が夏のアスファルトの上で、「美影さん！、いえ、美影様！どうかわたくしの宿題を手伝ってください！」と土下座を噛ましながら頼み込まれたからだ。

『出来るだけ力になる』とは言ったが、まさか宿題相手の共闘を申し込まれるとは夢にも思わなかったが、言ってしまったので仕方ない。

買出しをスケジュールから省き、ファミレスでついでに夕食をとることにした美影だった。

今、彼が手伝っているのは理科と社会。

数学と国語に関しては『間違え方』というモノが十人十色なため、これらを引き受けた。因みにインデックスは彼女でも出来る英語を渋々行うことになったが、ペンよりも箸を手にしてしまう傾向があるだろう。

「ふふふ美影はともかく外国人小女には分からないだろうが桃太郎は日本が誇る世界の名作童話なんですよほら夏休みの読書感想文にもピッタリ」

焦りからか上条はこれを息継ぎなしで言い切る。

「とうま、とうま」

「あんだよ？」

「本当は怖い昔話って知ってる？」

「やめろ、俺は普通の桃太郎の感想文を書くんだ。変な情報を加えようとするな」

その後の発言に待ったをかけるがインデックスは容赦なく口を開き続け、

「そもそも川というのは私岸（このよ）と彼岸（あのよ）を分ける境界線で川から流れてきた桃、というのは生と死を超越した禁断の果実なんだよ。原作の桃太郎の冒頭は『桃を食べたおじいさんとおばあさんが若返って・・』が本当なんだよ」

「で、若返ったおじいさんとおばあさんの間に生まれた子供、というのが『桃太郎』。二人に大切に育てられた桃太郎がある時、『いんな村で暴れている鬼を退治してくれ』と頼まれたら力を手に入れるっていう理由でその禁断の果実を食べたおじいさんとおばあさんの肉を喰らうから二人に『死んでくれ』って頼む話があるぞ、まじで」

彼女に続き、美影が紙芝居ではお目にかかれまいであろうホラー情報を補足する。

「やめる二人とも！俺はポピュラーな桃太郎で書きたいんだ。普通に宿題やらせる！」

「じゃ、帰るわ俺」

「止めて下さい！もう文句言いませんから！」

9割くらいの冗談で立ち上がった美影を上条が思いとどまらせる。必死な彼に対し、ニヤニヤしながら美影は着席し、ペンを走らせる。

彼にかかれば一般の高校の宿題など簡単。宿題に追い込まれた者がよく答えと解答欄を隣り合わせにしているが彼はそんな卑怯な手は使わない。しっかりと『上条のレベル』で筆跡を真似て記入している。

「つーか上条、宿題残しすぎじゃねえのか？」

美影が思うように彼はほとんど手をつけていないのではないかと考えるほど残っている。

一ヶ月寝ていたのではないか、というぐらいの量だ。

「美影には分からないだろうが毎日毎日某暴食シスターの世話で大変だったんだよ。しかもなあ、聞いて驚け！俺は右腕をぶった切られてまで魔術師と戦ったんだよ！」

愚痴と武勇伝を語りだした上条であるが、

「へえ、大変だね」

「とうま、そのシスターってもしかして私のこと？」



冷たい反応と冷たい視線が向けられた。後者は今にも噛み付きそうな勢いだ。

上条の奮闘記についてはとある情報網から美影に情報が回っているため驚きはしない。知ったときは違ったが。

「美影、普通なら嘘だろ！？、ぐらい言ってくれないと上条さんは悲しいぞ」

冷たい視線は無視しつつ、プリントから目を離さない美影に不満を漏らす。

「俺だってなあ、この夏休みは大変だったんだぞ」

「ほほう、そちらは何があったのでせう？」

対抗してか、美影もこの一ヶ月を語りだした。

「スキルアウト200人相手にしたり、学園都市最強の二人を押さえ込んだり、いきなりバズーカ打ち込まれたり、スタイル抜群の女の子に抱きつかれたり、キスセがまれたり、メイドハーレムがいつの間にか俺の周りに出来ていたり」

信じられない出来事ばかりだが、これらは全て事実だ。

最後に『紳士の仮面を被った変態ロリコンストーカーを追いつづけるがあるがここでは割愛。』

「後半羨ましすぎるじゃねえか！！できれば美影さんに憑依したいこと限りなし！」

自分とは異世界の住人と感じたのか、上条は魂の叫びをあげる。

「そういう能力があってもお前の右手で打ち消しまうだろうな」

興奮した上条に対し、美影は冷静に分析する。

二人の温度差は激しい。

「妄想ですらも不可能なんて、・・・不幸だ」

上条が意気消沈しているとインデックスが待ち構えていたウェイトレスさんがやってきた。

「大変お待たせしましたー。コーヒーと日替わりランチAと日替わりランチBとランチ猫Cのお客様」

恐るべきことにこのファミレスにはペット用のランチが存在しているようだ。他にも犬や亀のものがある。

やっときたか、と美影と上条がテーブル上のプリントを片付けようとしていると、

何の前触れもなく、ウェイトレスさんが盛大にずっこけた。

「な!？」

不幸にもスープやらハンバーグやら御飯やら熱々の料理が上条の頭へと飛来して来そうになり、思わず目をつぶり、手で頭を覆ったところ、

「・・・はあ、俺の日替わりランチBが・・・」

美影の能力により、それらは浮遊し、浴びることは免れた。  
その声と何も襲ってこないことでおそろおそろ目を開ける。

「はは、美影さんありがとう」

零れることはなくてもこれはお客様に出せない、と目を点にして  
いたウェイトレスさんが手を伸ばしたところ、さらに不幸にも手を  
滑らし、熱々ハンバーグの鉄板を弾き、上条に直撃した。

その熱により、絶叫と共に飛び上がった直後、右手があらゆる料  
理に当たり、美影の能力が打ち消されたため、全てが地球の通常の  
重力により落下し、さらに被害は拡大した。

「ふふふふふふふふふ、」

ついに思考回路が壊滅したのか、以前の食蜂とはまったく違う『  
ふ』が連呼される。

上条が下手人（半分くらいは自分かもしれないが）の方を見ると、  
そこには、あー、と情けない声をあげて床に突っ伏している巨乳  
ウェイトレスさんがいる。

「ふざけんなこの牛女！巴投げ地獄を見せてやる！！」

「まあまあとうま、・・・あれ、原稿用紙はどうしたの？」

え！？とテーブルの上を見る。  
ない。

出来ればこの湯気を上げた白いホカホカ御飯に埋まっ  
ていて欲しい。  
くない。

「あー、腹減ったなあ」

自分の担当教科は死守した美影は、他人事のように空腹を訴える。

「くそー、せつかく書いたのに・・・」

結局、見つかった原稿用紙は美味しい液体と個体により、破れはしないものの原稿用紙の純白は失われていた。さすがにこの手で持つことにも抵抗がある汚物を提出するわけにはいかない。美影だったら『桃太郎』の感想文なんて提出するぐらいなら未提出で済ませるが。

とにかく、再びシャーペンのマラソンを開始しなければならないを思うと鬱になる。

キーボードを使えばいいのだが、と思うがもちろん出来ない。

腕の疲労は蓄積される一方だ。

「お前、腕取れたままのほうが良かったんじゃないか？」

美影はそんな意気消沈している上条に半分冗談、半分本気の言葉をかける。

そーかもしれませんねー、と薄い反応が返ってきたため、もうダメだこりゃ、と内心慰めることを諦める。

あーあ、と上条は何気なく窓を見る。上条の席の正面にガラスの板はある。

自分の疲れている顔でも見えるのじゃないか、と思ったが違った。そこに見えたのは黒いスーツ、黒いネクタイ、と喪服ともとれる格好で自分達を見ているゴツイ男の姿があった。日が暮れたと言っ

てもまだ8月。暑苦しいなと同時に、

（何だコイツ？）

不審に思っていると、その男が腕に装着している弓矢のようなものを向けた。

「!？」

上条が立ち上がった瞬間、その弓から何かが放たれた。

空を切っただけのように見えるが違う。何かがガラスを打ち割り、上条を襲う。圧縮空気の斬撃が禁書目録と美影の鼻先を掠める。鼻先、で済んだのは美影が自分と禁書目録を咄嗟に互いの背の方向へと動かしたからだ。

近くの客が悲鳴をあげようとし、即座に逃げ出そうと試みる。そして、ドン！！、と上条の右手によりその空を斬る矢は打ち消された。

「透魔の弦」

腕に弓を装着した男は予想外の出来事に驚きつつも次なる一手を施行する。

上条が睨み付けようと思ったが、男の姿は見えない。

「こちらだ」

声が出た方向に見えるのは、インデックスを背後から抱きしめた男の姿。なぜかインデックスは金縛りにでもあったかのように固まっている。

どうやらこの男は禁書目録が目的のようだ。10万3000冊の

魔道図書館なんて悪用の源のようなものだから。

「お前、魔術師か」

魔術。科学とは対に位置する能力。チカラ

いかにも、と大男は一言で肯定した後、

「透魔の弦」

一言つぶやき、姿をくらます。

「あ！ちよつと待て！！」

上条は急いで捕らえようとインデックスがいた場所に手を伸ばす。すると、何も見えない空間に小さくてやわらかいものが掴めた。

「うひゃあ！と、ととうま、一体どこを触っているんだよ！？」

インデックスの悲鳴にあれ？と思考が停止しているとチツ、と男の舌打ちが聞こえたと同時に弓が付いている右腕だけが現れた。今度は、断魔の弦、と低い弦音が聞こえたと同時に逃げ口となる窓が粉碎される。

その攻撃に思わず手を離してしまった上条は逃がした！と思ったが、

「なーに英語担当を誘拐してんだ、テメエ」

重力探知で全てが視えている美影は迷うことなく見えない大男の体重を軽減させた後にと同時に掴み、床に叩き付ける。インデック

スを引き離れた後の行動のため彼女には傷一つ付いていない。

衝撃により肺から空気が搾り取られたような感覚により大男は苦しむ。

が、すぐに立て直し、自分を倒した美影に槍を向ける。

「断魔の弦！」

捕獲と逃亡の成功を確信していたが難なく取り押さえられた事による焦りからか、その言葉には力が籠っていた。

無益な殺生は好まないのだが、目的のためには仕方ない、と硬度が高い窓ガラスをいとも簡単に割った空気の槍を１メートルにも満たない超至近距離からぶつける。

「ムダムダ」

が、美影は顔の前方数十センチにブラックホールを発生させ、刃を吸い込む。

そして盾となった漆黒の物体が一瞬で最強の矛となり、男の右腕を襲う。だが、美影は彼以上に無益な殺生を好まない。例えば命を狙われたとしても。

美影が狙ったのはその男の弓。

腕には傷一つ付けることなく弓を崩壊させ、魔術を完全に発動不能にさせた。

「・・・悪いのか」

武器を失った右腕を床につき、目的を達成できなかった己を憎み、心情を訴えようとする。

「あ？」

「たとえば、この命を引き換えにしても、誰かを守りたいのと思うのは、悪い事なのか」

「悪いに決まってるだろ。なあ、当麻」

ため息交じりに美影は上条に共感を求める。

「ああ、当たり前だ」

上条は歩み寄り、言い切る。上条は知っている。自分が入院した時に周りの人が悲しんでいたことを。

自分が自己満足で助けたとしても意味がないことを。  
そして美影も・・・

「アンタ、知ってるんだろ。大切な人を失う痛みが。なら、その痛みを誰かに押しつけちゃいけないに決まっている」

「だが、禁書目録が無くては彼女を救えない。呪いが解けない」

その言葉に二人が反応する。

「呪い、だってさ当麻。どうする?」

美影が持ちかけたのは質問ではあるが返事は分かり切っている。  
超が付くほどのお人よしの上条であるならば、

「ああ、決まったな」

二人が笑みを浮かべるようになったことに挫折した男が首をかし



げる。

「な、何が決まったのだ？」

「俺の右手は幻想殺イマジンブレイカーしているんだが、この右手は『異能の力』なら触れただけで壊れちゃうんだ。呪い、なんていう分けわかんねえものでも例外じゃねえはずだ」

「何を言っているのだ」

目の前の少年が言っていることが分からない。  
いや、言葉の意味は理解できるがそれが示唆していることが掴みきれていない。

「だから、俺がこの右手でその呪いってやつを奇麗に消してやるっていつてんだよ。・・・あ、でも宿題が・・・」

「はあ、・・・俺が全部やっておくから、行ってこい」

「え！？ホントですか美影様！？」

「だあかあら、その言い方やめろって言ってるんだろ。ああ、もうとにかくさっさと行けよ」

左手で追い払うように美影は言う。

「よし、じゃあ行くぞ。出来れば始業式が始まる前に戻れるように」

「え・・・あ・・・」

その言葉に魔術師の顔がぐしゃぐしゃと歪み、涙があふれる。そして二人は歩みだした。ひとつの幻想を壊すために。

「インデックス、じゃ、違うところでアイツの宿題再会するよ」

「でも私お腹すいた」

ぐうぐう、と腹が悲鳴を上げている。

このままでは美影に噛みつきかねない。

「他のファミレス行くからで好きな頼め」

美影も空腹なため気持ちは同じ。

暴食ではあるが彼女の一食ぐらい払える。

その言葉にインデックスは顔を明るくし、

「ほんと！？・・・あれ、みかげ、右腕に傷がついているよ」

ん？と言われたところを見る。

腕にペンで引いたように10センチほどの赤い線が出来ている。

血が滴り落ちるほどではないがあの魔術師の第一撃のときガラスでも切ったのだろう。

「ああ、・・・まあいいや」

浅かったため、あの騒ぎのなかでは気付かなかったのだろうか。傷口を能力で引き合わせ、塞ぐ。表面に付いた血はポケットティッシュで拭きとり、跡は完全に消えた。

彼は能力の応用を考えることに長けているため、これくらいのアクシデントは問題ない。

「さてと、」

「・・・お客様？」

ここから出ようとしたときに聞こえてきた図太い声の方向を見ると、筋肉ムキムキの店長が満面の笑みを浮かべやってきた。

美影は店内を見渡す。

先ほどまで自分たちが使用していたテーブルは真つ二つ。

ガラスは2枚破損し、前向きに考えると空気の入れ替えがしやすい。もちろんそんな穏やか過ぎる考えで終わるわけもなく店の奥から次々と店員が出てきた。

「あー、弁償します。全部」

午後6時50分

時と場所が変わった。

先ほどファミレスは使用不可になったため、数百万支払った後、インデックスと共に違うファミレスに二人は訪れていた。

「みかげ、みかげ、本当に何でも頼んでいいの？」

「ああ、いいよ。それやってくれるなら」

美影が出した条件は英語を手伝う代わりに好きなだけ食べていい、

というもの。夏休み初日、中間地点、そして最終日である本日、とほとんど自分とは関係のないことになりの金額をすり減らしてしまった。

そのため、夏休みの美影のエンゲル係数はかなり低い。1%に届くかさえ疑問だ。

目の前の暴食シスターにあげてもらおう、とやけくそ気味になっている。

インデックスは上条と比べ物にならないほど太っ腹な美影に先ほどの店長とは違う笑みを爆発させ、注文を開始する。

美影の2、3日分ともとれる量を躊躇なく店員に言う。

(何にしようかなあ・・・)

美影が選んでいるのは読書感想文の本。

もちろん桃太郎でも浦島太郎でも金太郎でもない。

5、6秒悩んだ末、夏目漱石の『こころ』に決定。インデックスのように一字一句覚えているためこの場に本が無くても問題はない。ちなみに先ほどの理科と社会は上条が御飯を被る前に終えてしまったため、残りは数学と国語、インデックスの英語。

彼女は右手にペン、左手にフォークを持ち、並列作業を行っている。

美影は食事と取りながら三十五分ほどで感想文は終え、続いては数学。

高い演算能力を所有している美影にとって一番簡単な教科だ。

問題を見て、数秒すれば暗算で答えを導き出せる。

回答は証明問題以外は最終的な答えしか書かれていないため、答えを写したようにも見えるかもしれないがもうどうでもいい。

十五分ほどで終え、続いては読書感想文以外の国語。

現代文、古文、漢文、と三つに分けられるが彼にかかれれば難易度はどれも変わらない。

これも十五分ほどで終えた。インデックスも英語の宿題を汚しながらも終えたようだ。

「はあ、やっと終わった・・」

「ひさしぶりにお腹いっぱいになったかも」

インデックスはなんとずっと食べながら宿題をやっていたのだ。出費は軽く5ケタを超える。美影には取るに足らないことだが。

「んじゃ、これ持って帰ろよ」

ぐったりしながら終えた宿題をインデックスに渡し、伝票を手に取り、帰ろうとした時、

一本の電話が美影にかかってきた。

## 夏休み最後の仕事（後書き）

お気に入り登録、感想、評価 お願いします

## First Contact

8月31日 0時00分

暗闇が広がる路地裏は穏やか、とは呼べない空気に包まれていた。7人の少年が武器を手に、血走った眼球を向け、一人の少年を取り囲んでいた。

だが、取り囲まれている少年は動じない。むしろ、周りの出来事に気づいていないかのように悠々と歩いている。彼が手にしているのは武器ではなくコンビニの袋。中には袋の形が変わるほどの量の缶コーヒ―。

彼は気にいった銘柄のものを一度に大量購入し、飽きれば別のものを探す、というサイクルを永続している。

少年は暗闇と補色である白い印象を持つ。そして瞳は人とは思えないほど緋色。

その眼球に映るのは天に広がる夜空。

ただ、何気なく、この夏休みを思い返していた。

「あん？」

自身を中心とした喧騒が止んだことに気づき、見渡す。

取り囲んでいた凶人達は勝手に自滅し、地に伏している。血も流

れているようだが少なくとも死者はいないようだ。

止めを刺そうという気は起こらない。

殺そうと思えばいつでも殺せる。今、ムキになるのさえ馬鹿馬鹿しく感じる。

（チツ、俺も丸くなっちまったもんだなア）

思えばあの風紀委員騒動でも自分が死者を出さなかったことが奇跡のようだ。

不意打ち、武器、集団・

何度も何度も襲撃にあい、何度も殺意が沸いた。だが、沸いただけだ。怪我人だけだ。その先はゼロだ。

美影<sup>友</sup>に注意されたからか、白井<sup>風紀委員</sup>にうるさく言われたからか・

彼に言われ、始めた学校生活。また、明日から始まる。

先輩という年上の奴等にまた勝負を挑まれるかもしれない。負ける、とは考える気にもなれないが、殺してしまう、という考えにも至らない。不思議と至らない。

学園都市でも一番『異質』と呼べる自分でも『普通』に学園生活が送れていることが不思議でならなかった。多少の騒動は起こったものの、良い思い出で終わるものばかりだ。

昔の自分は違った。気まぐれで実験を行い、気まぐれで街を歩く。問題となった事は全て誰かが揉消してくれた。だからこそ、気にも留めなかった。

学園都市第一位の座を狙う馬鹿どもは夜空に見える星の数ほどいた。数え切れないほど殴りかかりに、蹴りかかりに、刺しかかりに来た。

風紀委員騒動で写真が出回ってから少し増えた。美影の方にもこのような不良が偶に現れるらしい。



「ア？」

遙か上方、7階か8階からか、少女の声が聞こえてきた。

少年の大声も聞こえてくる。

痴話ゲンカか、と自身の『反射』に空気の振動、音を追加した。何も聞こえない。聞く気にも慣れない。

『反射』は学園内ではほとんど使っていないかった。

偶然ぶつかり、それで大怪我、なんて笑い話にもならない事にならないためだ。尤も、音だけの反射は授業中に使い、寝ていたはあった。

『反射』だけで不良どもの相手は事足りていた。

視界に無かるうが攻撃は跳ね返す。無能力者相手に戦闘<sup>レベル</sup>、なんて

大それたことは存在しない。『虐殺』か『遊戯』。苦慮なんて無い。

長点上機学園の奴等相手でも存在しない。

垣根が相手なら分らないが、すぐに止められた。『戦闘』は無い。

数も兵器も関係ない。背後からでも変わらない。

だが、たった一度、たった一人で自分に立ち向かった者がいた。

本気の『怒り』と本気の『敵対心』を向け、正面に立ちはだかった、一方通行が唯一戦闘と呼べるものがあつた。

否、あれは『戦闘』ではない。

あれは

「ああ？」

一方通行は気づいた。

何者かが彼の後ろに張り付きながらのどを鳴らして何かを叫んでいることに。

奇妙な人間だった。まず恰好がおかしい。一方通行の腹くらいしかない背丈で頭から毛布のような布切れをかぶっているだけだった。

「――！……！……！……！……！……！……！」

（何言ってるんだ？この怪人チビ毛布）

音の反射により、何も聞こえない。そのチビ毛布の存在に気づくのと自身の能力に気づく間に数秒タイムラグがあった。

試しにそれを切ってみる。

甲高い、しかしどこか平淡な少女の声が入ってきた。

「いやーなんというかここまで完全無反応だとむしろ清々しいというか、でも悪意もって無視しているにしては、歩くペースも普通っぽいし、これはもしかして究極の天然さんなのかなって、ミサカはミサカは首を傾げてみたり」

その少女は一方通行と数十センチの距離を保っている。

彼の反射は触れなければ働かない。

害意がないものには牙をむけない。

「……くっだらねエ」

「さっきからミサカはミサカは自己の存在を激しくアピールしているのに存在全否定？」

「待て。……、ミサカだと？」

先ほどから連呼されている言葉に反応し、立ち止る。  
何がうれしいのか、それだけでその毛布少女は小走りで追いついてきた。

「おおーようやくミサカ存在を認められたよわーって、ミサカはミサカは自画自賛してみたり」

「おい、お前、その毛布取っ払ってよく顔見せてみる」

「・・・って、まさか往来で服を脱げというのは些か大胆というか、無茶というかわあぁ!!」

最後だけ平淡な声色ではなかったが構わず毛布を引き剥がす。

最初に見えてきたのは顔。

次に見えてきたのは肩。

さらに見えてきたのは裸の胸。

そして見えてきたのは裸の腹。

最後に見えてきたのは裸の足。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・アア？」

毛布を掴んだままの一方通行の顔が思わず引き攣った。

詰まる所、完全無欠に素っ裸の少女がそこにいた。

レベル6ソフト  
絶対能力進化

樹形図の設計者の算出したプランに従い、最強の超能力者一方

通行を絶対能力者<sup>レベル6</sup>へ進化させる実験。超能力者<sup>レベル5</sup>を人工的に作り出すために第3位超電磁砲<sup>レールガン</sup>の遺伝子を利用し、クローンを量産した実験。だが、出来たのは妹達<sup>シスターズ</sup>とよばれるレベルが2や3などの欠陥品。不要となったクローンを利用したのが絶対能力進化だ。実験内容は「20000通りの戦闘環境で量産能力者を20000回殺害する」というとても正気の沙汰とは思えない内容。だが、その実験は第00001実験で完全凍結された。

毛布を返して、と涙目で言う少女に一方通行は毛布を投げつけた。モソモソと全身に身を包み、勝手に説明を開始した。

「ミサカの検体番号<sup>シリアルナンバー</sup>は二〇〇〇一<sup>シスターズ</sup>で妹達の最終ロットとして製造されたんだけど、コードもまんま『打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>』で実験に使用されるはずだったんだけどってミサカはミサカは愚痴ってみたり」

やっぱりか、と一方通行は思った。

その少女の顔は御坂美琴と同じモノ。だが、顔つきは10歳前後でしかない。あの実験は半年前に終わったはずだ。

まだ生み出されているのか、だとしたらこのガキは製造途中か。とにかく、

(……美影がいたら、殺されていたな)

彼は紛れもなくこの少女の兄だ。妹を往來で裸にしたと知ったら……少なくとも社会的に殺される。アレをばらされるかもしれない。

そんな事を考えながら、怯えた感情を出さずに、ああそオ、と相槌を打つ。

「ところがミサカは培養機から放り出されて何だかチンマリしているってミサカはミサカは・・・って聞いているの？」

「それで俺にどうしろってんだ」

「あなたは研究者さんとのつながりもあるから、コンタクトをとってもらえないかなあって、ミサカはミサカは考えるわけ」

「他ア当たれ」

「いえーい即答速攻大否定！、ってミサカはミサカはやけくそ気味に叫んでみたり」

何なんだコイツは、と一方通行はため息をつく。

妹達は脳波リンクで記憶を共有しているはずだ。ならば自分がしたこと、しようとしたこと、全てを知っている。だが、警戒心というものは微塵も感じられない。

しかもこの少女はどこか人懐っこい感じがする。

自分が会った妹達は感情がなく、ただ言われた通りに動く、といったロボットのようなものだった。

一方通行は五階建ての学生寮に住んでいる。正確に言うと学生向けのマンションのような建物だ。

美影のように高級住宅ではない。

彼ほど防犯にも気を使っていない。一方通行が一方通行である限り必要性も感じられない。

「お世話になりまーす、ってミサカはミサカはミサカは先手必勝。あなたのお部屋は何号室？ってミサカはミサカは質問してみたり」

研究者たちと連絡がつくまでずっと一方通行の下に居座るつもりか。

打ち止めは階段を登り切ったところで一方通行を追いぬき、振り向いて部屋番号を言うのを待つ。

「304号室」

「おじやましまーす、ってミサカはミサカは一応礼儀なので」

そんなことを言いながら告げられた番号の部屋に駆け足で近付き、ドアを開ける。

一方通行は完全無視で本当の『自分の部屋』へと進む。

打ち止めが開けたドアの奥にいたのは深夜番組を見ている『304号室の住人』。

明らかに彼の部屋ではない。

急いでドアを閉め、歩くスピードが変わらない一方通行に追いつく。

「全然違う人のお部屋だったっばいんだけどアレ、ってミサカはミサカは憤慨してみたり。今後こそアナタのお部屋は何号室？ってミサカはミサカは聞いてみる」

「307号室」

再び勢いよくドアを開けて入ろうとする打ち止めであるが、やはり彼の部屋ではなかった。

どうやら、前方に見える番号を適当に口にただけらしい。

「うう、なんでこんなひどいことするのってミサカはミサカは肩を落として尋ねてみたり」

完全無視をつきとおし、一方通行は自分の部屋である『311号室』まで歩いて、ピタ、っと足を止めた。

「あア？」

何かがおかしい。

まず、ドアが無い。いや、あるにはあるのだが外され、落書きされ、曲げられ、通路に捨ててある。

不審な状況ではあるが、恐れることなく部屋の中へと進む。

「おいおい、何だアこりゃあ」

中はずっと酷い。

床には土足の押し跡が無数にあり、壁紙や床板は剥がされ、家具などはメチャクチャに破壊されていた。美影に買わせた家電製品も全滅。制服はズタズタに引き裂かれている。

火がつけられ、黒焦げになっているモノもある。

おそらく、コンビニにコーヒーを買いに行ったときにでも襲撃されたのだろう。

「……くっだらねエ」

土足のまま部屋に入り、一通り見渡し、率直な感想を吐き捨てる。役割は果たせそうなテーブルに缶コーヒーが入ったコンビニの袋を置き、形は保っていたソファにの転がった。

「えーと、これって警護員とか風紀委員とかに通報しなくってもいいの？ってミサカはミサカはいらぬ世話を焼いてみるんだけど」

『一方通行』を本質を見せられた打ち止めは気を吞まれている。一応脳にインプットされた通常の対処法を言ってみるが、彼にとつては何も意味もない。この犯人が捕まったとしても別の人間が同じことをするだけ。

「お前はどうすんだア？ここで寝るよりも路上で寝泊まりした方が安全かもしれねエぞ」

「うーん。それでもミサカはやっぱりお世話になりたいかな、ってミサカはミサカは頼み込んでみた」

「あん？何でだよ」

「誰かと一緒にいたいからってミサカはミサカは・・・」

「・・・、」

美影にでも連絡するか、と脳裏に浮かんだが明日にでもこのガキを研究所に放り込んだらいいだろう、と突然襲ってきた眠気に負ける。

「・・・勝手にしろオ」



しゅんとした表情を掻き消した打ち止めはモソモソと破れてはいるが寝具としては使用可であるベッドに潜り込む。

「一応宣告しておくけど、寝込みを襲うのはNGなんだからねってミサカはミサ」

「寝ろ」

無気力な命令が帰ってきたため、打ち止めはおとなしく毛布の上から一枚布団を追加する。

その少女を好きにさせた一方通行は目を閉じ、想起する。

（　　　　考えてみりゃ、何年振りだ。邪気のねエ声をかけられるのなンざ）

今の自分に不自然さを感じる。

研究所でも学校でも一度は警戒される第一位。力あるものでも必ずと言っていいほど淀みや戒めを備えていた。距離をとろうが、力メラ越しても変わらなかった。

だが、すぐ横にいる打ち止めは純粹に、ただ純粹に“無邪気”だった。

（・・・アイツ以来じゃねエのか）

ぼんやりと回想しつつ、眠気に身を委ねた。

『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup> というのは彼が所有する能力名だ。もちろん彼の本名ではない。

勿論彼にも歴<sup>れっき</sup>とした日本人の名前がある。

苗字は二文字、名前は三文字。どこにでもありそうな普通の名前だったはずだ。

最初から学園都市最強として君臨していたわけではない。

周りより、少し有能だったとしか捉えていなかった。だが、それは大きな間違い。『頭一つ』という表現は到底使えない、誰よりも遙か上空の存在だった。

災いは彼が能力を手にしてからすぐにやってきた。

彼の白い髪を嘲弄しようとした同年代の少年たちが彼に触つただけで腕が折れた。もちろん殊更にやったことではない。だが周りは彼が手にした能力を試したとしか思わない。

それを止めようとした大人たちも骨を折った。

警護員が、武装兵が、彼を取り押さえようとしたが全滅した。

彼はただ怖かった。

自分がなぜ、これほど大きな力を手に入れたのか。

気づけば周りにいるのは白衣に身を包む研究者たち。自分を裏で取り合い、我が物にしようとする企む者ばかり。

鬼ごっこやかくれんぼなどの年相応の遊びなんて皆無。

あるのは研究。

数式と機器が取り巻く世界。

休憩時間、というものはあった。そこは彼を『人間』として扱っていたのか、彼を恐れての処置なのか。

それを利用し、同年代が集う公園へと走った。

ただ、彼らの中に加わりたかった。

遊びたかった。

だが、彼が行けばだれも見えて見ぬふりをする。声をかける者などいない。声をかけられそうな者などいない。

気づけば皆、いなくなっていた。彼を見た大人たちが強制的に帰らせた。

そして彼らは言う、『化け物』と。

公園のベンチに座り、一人、頭を抱える。

彼はただ、悲しかった。『普通』がうらやましかった。

なぜ、自分は違うのか。なぜこれほどまでに強大な力を手にしてしまったのか。

だが、それを問う相手すらもない。

涙腺が緩む。

感情を吐露するかのようにな一粒の雫が落ちた。

そこに現れたのが、『アイツ』だった。

「なんで泣いてんの？」

一人座っていた少年を不思議に思った少年が平淡な声をかける。

同年代、同い年だろうか。栗色の髪をした、顔は整っているようだがどこにでもいそうな、小学生ぐらいの少年だ。

彼は急いで目に浮かんだ涙を急いで拭き取る。

「泣いてねエよ」

隠せているとは思わなかったが、自分の弱さを見せたくはなかった。学園都市最強だからではない。ただ、一人の少年としての感情だ。

鋭い目で隣に立つ少年を睨む。

「そう？ならいいけど」

二人とも幼いとも呼べる年なのだが、どこか大人びているようだった。

口調にも童心のようなものは伺えない。

「お前俺が怖くねエのか？」

自分は学園都市の頂点。

意味を為さないとしても何も持たずに隣に立つのは無謀とも言えよう。

「怖い？なんで？」

本当に意味が分からない、と首をかしげる。

「俺のこと知らねエのか？」

「お前って有名人なの？俺、最近この学園都市に来たばかりだからあまり知らないんだよね。能力開発つてのもまだやってないし」

有名人。

間違ってはいない。

だが、彼が思い浮かべるものとは正反対だろう。

世間知らずの新人、と呑込み、素性を明かす。

「俺はこの学園都市のトップ。超能力者最強の能力者だ」  
レベル5

それを聞いて大抵の人は恐れるか妬む。

「え？噂には聞いたけど、それってお前だったのか」

話には聞いていたようだ。

おそらく自分が何をしたかも。ならばおそらく前者だろう。

「凄いね、うらやましいよ」

だが、違った。

彼が表情に浮かべているのは『敬意』。

言葉通りとしか思えない。

「！」

その言葉に驚嘆した。

そのように言われたことが無かった。

目の前の者は何も知らないからそう言えるのだ、と想っていても嬉しかった。

気づけば『会話』が成立していた。

自分を見た者は必ずと言っていいほど言葉をかけず、手を出す。言葉が通じない猛獣のように扱う。

ただ、嬉しくなり、笑みが零れた。

「お前、名前は何だ？」

「俺は御坂美影。みさかみかげ お前は？」

「俺は一方通行だ。アクセラレータ」

「あくせられーた？それって本名？」

人名とは思えないその単語に御坂は首を傾げる。

「いや、能力名だ。俺のことはそオ呼べばいい」

「えー？名前教えてくれよ」

不満と言わんばかりにブーたれる。

これほど正直に愚痴を言われたのも初めての気がした。

「はア・・・」

思わずため息が出る。それは自分に対してのものだ。

先ほどの自分の考えが馬鹿馬鹿しく思える。自分と共にいるものは誰でも萎縮してしまうと思っていた。

目の前の者が誰よりも羨ましく感じた。

そして笑みを浮かべる。

これほど微笑むことも何時振りだろうか。

「俺の名前は」

「

**F i r s t   C o n t a c t   ( 後 書 き )**

お気に入り登録、感想、評価    お願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6696y/>

---

とある六位の無限重力<ブラックホール>

2012年1月12日21時36分発行